

大峰ヶ台遺跡Ⅱ

— 9次調査 —

1998

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

大峰ヶ台遺跡Ⅱ

正誤表

ページ	行	誤	正
ii	21	構成	校正
4	表1 10	南江戸6丁目古墳	南江戸6丁目
6	4	4月1日	7月1日
37	13	塼	脚台付坏
37	13	土師器塼	脚台付坏
37	13	10世紀代	8世紀代
37	13	塼	坏
146	10	結果であった	結果朱であった

大峰ヶ台遺跡Ⅱ

— 9次調査 —



1998

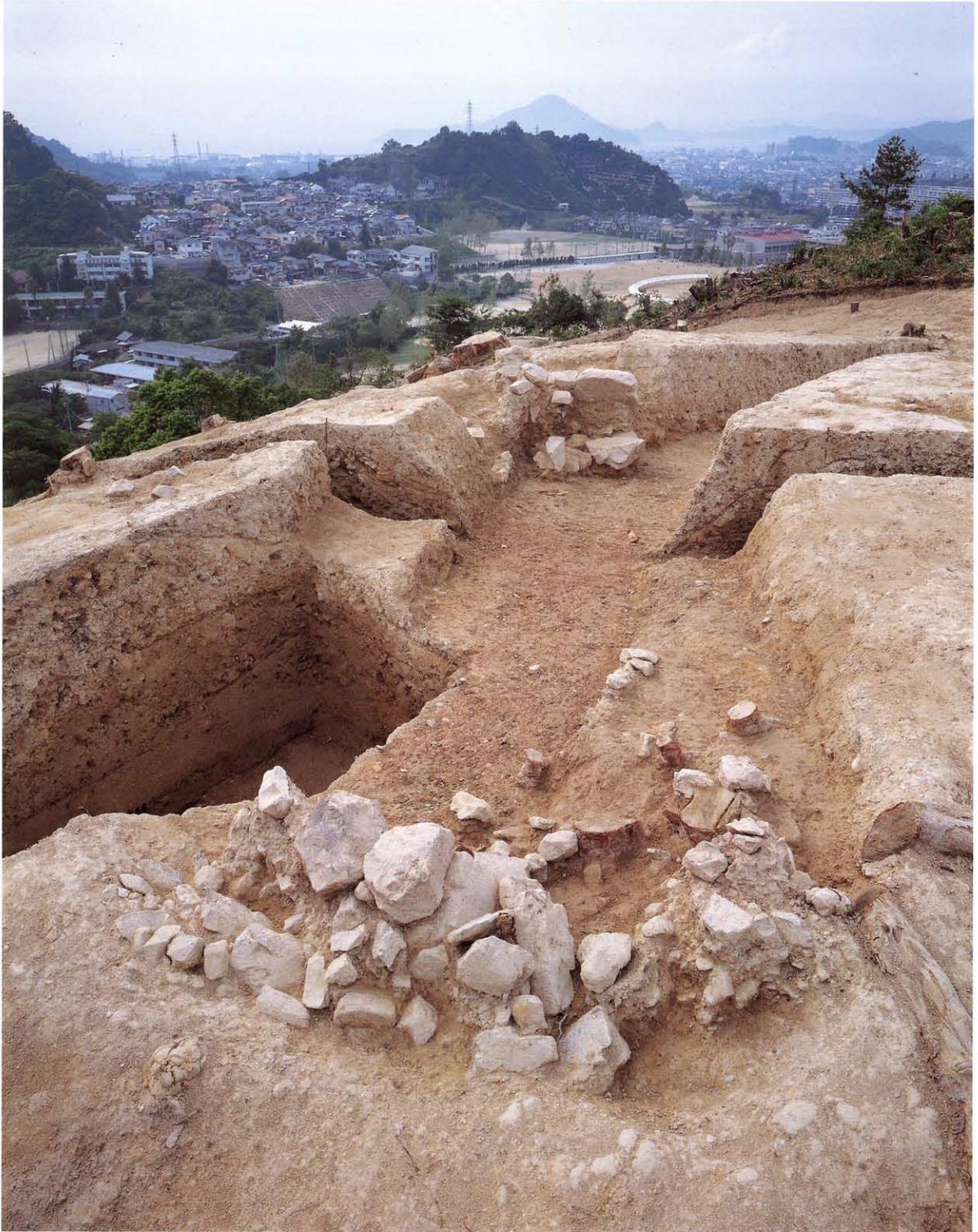
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版1 大池東古墳と大池東3号・4号墳出土遺物



巻頭図版 2 大池東 5 号墳主体部

序

本書は、平成6～8年度の3ヵ年間に渡って調査した、大峰ヶ台丘陵の松山総合公園整備事業に伴う発掘調査報告書です。これまでの発掘調査により、県内では最古級の古墳のひとつとされ、古墳発生期のカギを握るといわれる朝日谷2号墳、また、古墳時代後期の群集墳である客谷古墳群などが、築造されていたことが明らかになっています。

今回報告します古墳は、大池東1～5号墳・客谷10号墳の6基です。特に、大池東5号墳は前述の朝日谷2号墳とともに、古墳築造開始時期の埋葬方法などを知る上で貴重な資料となるものです。また、1号墳は奥壁や側壁に大型の石を用い排水施設を備えるなど、松山平野では珍しい横穴式石室の築造方法を採用した古墳として、最近注目を浴びています。

こうした成果は、関係各位の埋蔵文化財に対するご協力とご理解のたまものであり、厚くお礼申し上げます。今後とも、埋蔵文化財の発掘調査に対する一層のご協力をお願い申し上げます。

本書が、古墳研究をはじめ、広くご活用いただければ幸いです。

平成10年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 田中誠一

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成6年4月～平成9年3月の間に実施した松山総合公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、担当調査員の責任のもと、愛媛大学・松山大学学生ほかの援助を受けた。遺構の撮影は担当調査員と大西朋子が行った。
3. 石室の測量及び航空写真は国際興業(株)、(株)パスコと委託契約を行った。
4. 本書にかかる図面の作成は、宮内慎一、高尾和長、相原浩二、水本完児の責任のもと白石公信、勝本将基、森田利恵、宮内真弓、田崎真理、中村紫、林優子、仙波千秋、仙波ミリコ、宮田里美、金子育代、高尾久子が行った。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 本書に使用した方位はすべて座標北である。
7. 写真図版は、担当調査員の指導のもと、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。
8. 調査及び報告書作成においては、愛媛大学下條信行、田崎博之、村上恭通、京都造形大学内田俊秀の諸先生方には御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 自然科学分析では、別府大学本田光子先生、(財)元興寺文化財研究所渡辺智恵美氏、(株)古環境研究所に分析及び寄稿して頂いた。記して感謝申し上げます。
10. 本書の執筆は、高尾和長、宮内慎一、相原浩二、水本完児が分担執筆した。執筆者名は本文目次に記載した。関連資料の調査は高尾和長、白石公信、勝本将基が行った。浄書は、高尾和長の指導のもと白石公信と中村紫が担当した。
11. 本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
12. 本書の編集は高尾和長が担当し、編集・構成においては梅木謙一の協力を得た。

本文目次

第1章	はじめに	〔高尾〕	… 1
	1. 調査に至る経緯 2. 調査・刊行組織 3. 環境		
第2章	調査の経緯	〔高尾〕	… 6
第3章	1区の調査		
	1. 調査の経緯 2. 層位	〔水本〕	… 9
	3. 遺構と遺物		
	(1) 大池東1号墳		
	1) 調査の経緯	〔高尾〕	… 13
	2) 墳丘・周溝	〔宮内〕	… 15
	3) 墓道 4) 羨道部	〔高尾〕	… 21
	5) 1号石室主体部 6) 2号石室 7) 石室以外の出土遺物	〔水本〕	… 22
	4. 小結	〔 〃 〕	… 36
第4章	2区の調査	〔相原〕	… 43
	1. 調査の経緯 2. 層位 3. 遺構と遺物 4. 小結		
第5章	4A区の調査	〔宮内〕	… 49
	1. 調査の経緯 2. 遺構と遺物 3. 小結		
第6章	4B区の調査		
	1. 調査の経緯 2. 層位	〔水本〕	… 65
	3. 遺構と遺物		
	[1] 4B①区の調査	〔水本〕	… 71
	(1) 大池東2号墳		
	[2] 4B②区の調査	〔相原〕	… 81
	(1) 大池東3号墳・(2) 大池東4号墳		
第7章	4C区の調査	〔高尾〕	…133
	1. 調査の経緯 2. 遺構と遺物 3. 小結		
第8章	6区の調査	〔高尾〕	…147
	1. 調査の経緯 2. 層位 3. 小結		
第9章	自然科学分析		
	1. 大池東古墳における植物珪酸体分析	〔古環境研究所〕	…151
	2. 大池東1号墳2号石室から出土した炭化材の樹種同定	〔 〃 〕	…162
	3. 大池東1号墳における放射性炭素年代測定結果	〔 〃 〕	…163
	4. 大池東1・2号墳出土耳環の自然科学的調査	〔元興寺文化財研究所〕	…164
	5. 大池東5号墳出土の赤色顔料	〔本田光子〕	…186
第10章	まとめ	〔高尾〕	…188

挿図目次

第2章 調査の経緯

第1図 周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）	3
第2図 大峰ヶ台遺跡調査地位置図（縮尺1/4,000）	5

第3章 1区の調査

第3図 調査区区割図（縮尺1/1,000）	10
第4図 トレンチ土層柱状図（縮尺1/40）	11
第5図 調査区測量図（縮尺1/300）	13
第6図 トレンチ位置図（縮尺1/300）	14
第7図 墳丘遺存状況図（縮尺1/300）	15
第8図 地山整形状況図（縮尺1/300）	16
第9図 墳丘土層断面図（縮尺1/80）	17
第10図 盛土及び整地状況図（縮尺1/300）	19
第11図 T13土層断面図（縮尺1/60）	
第12図 墳丘盛土状況図（縮尺1/300）	20
第13図 大池東1号墳1号石室墓道測量図（縮尺1/40）	21
第14図 大池東1号墳1号石室墓道出土遺物実測図（縮尺1/2、1/4）	
第15図 大池東1号墳1号石室測量図（縮尺1/80）	23
第16図 大池東1号墳1号石室羨道部展開図（縮尺1/40）	24
第17図 大池東1号墳1号石室閉塞石・排水溝測量図（縮尺1/40）	25
第18図 大池東1号墳羨道出土遺物実測図（縮尺1/4）	
第19図 大池東1号墳1号石室内地形測量図（縮尺1/80）	26
第20図 大池東1号墳1号石室展開図（縮尺1/40）	27
第21図 大池東1号墳1号石室遺物測量図（縮尺1/40）	29
第22図 大池東1号墳1号石室出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）	31
第23図 大池東1号墳1号石室出土遺物実測図(2)（縮尺1/2、1/3）	32
第24図 大池東1号墳1号石室出土遺物実測図(3)（縮尺1/1、1/2）	33
第25図 大池東1号墳2号石室測量図(1)（縮尺1/20）	34
第26図 大池東1号墳2号石室出土遺物実測図（縮尺1/3）	
第27図 大池東1号墳2号石室測量図(2)（縮尺1/20）	35
第28図 大池東1号墳墳丘出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）	
第29図 大池東1号墳墳丘出土遺物実測図(2)（縮尺1/2、1/3、1/4）	36

第4章 2区の調査

第30図 調査区測量図（縮尺1/500）	46
第31図 トレンチ土層柱状図(1)（縮尺1/30）	47
第32図 トレンチ土層柱状図(2)（縮尺1/30）	48

第5章 4A区の調査

第33図 調査区位置図（縮尺1/3,000）	51
第34図 調査区測量図・トレンチ位置図（縮尺1/800）	52
第35図 トレンチ土層柱状図(1)（縮尺1/40）	53

第36図	トレンチ土層柱状図(2) (縮尺 1/40)	54
第37図	トレンチ土層柱状図(3) (縮尺 1/40)	55
第38図	S D 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/100、1/200)	56
第39図	S X 1・S X 2 測量図 (縮尺 1/800)	57
第40図	S X 3 測量図 (縮尺 1/80)	58
第41図	客谷10号墳位置図 (縮尺 1/800)	59
第42図	客谷10号墳石室測量図 (縮尺 1/30)	60
第43図	客谷10号墳出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3)	61

第6章 4B区の調査

第44図	4B区遺構配置図及びトレンチ位置図 (縮尺 1/1,000)	67
第45図	トレンチ土層柱状図(1) (縮尺 1/40)	68
第46図	トレンチ土層柱状図(2) (縮尺 1/40)	69
第47図	大池東2号墳調査前地形測量図 (縮尺 1/200)	71
第48図	大池東2号墳遺構配置図及び調査後地形測量図 (縮尺 1/200)	72
第49図	大池東2号墳土層測量図 (縮尺 1/100)	73
第50図	大池東2号墳石室展開図 (縮尺 1/40)	74
第51図	大池東2号墳遺物測量図 (縮尺 1/40)	75
第52図	大池東2号墳石室出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3)	77
第53図	S K 1 測量図 (縮尺 1/40)	78
第54図	大池東2号墳墳丘出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	79
第55図	4B②区調査前測量図・トレンチ位置図 (縮尺 1/200)	82
第56図	4B②区遺構配置図 (縮尺 1/200)	83
第57図	4B②区調査後測量図 (縮尺 1/200)	84
第58図	大池東3号墳・4号墳トレンチ土層図 (縮尺 1/80)	85
第59図	大池東3号墳・4号墳出土遺物配置図	87
第60図	大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)	89
第61図	大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3、1/6)	90
第62図	大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(3) (縮尺 1/3)	91
第63図	大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(4) (縮尺 1/4)	92
第64図	大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(5) (縮尺 1/4)	93
第65図	大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(6) (縮尺 1/4)	94
第66図	大池東3号墳周溝内鋤先出土測量図・実測図 (縮尺 1/2、1/20)	
第67図	S K 1 測量図 (縮尺 1/20)	95
第68図	S K 1 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)	96
第69図	S K 1 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3)	97
第70図	S K 2・S K 3 測量図 (縮尺 1/20)	98
第71図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/8)	99
第72図	S K 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	100
第73図	S K 4 測量図 (縮尺 1/20)	101
第74図	S K 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	
第75図	S K 5 測量図 (縮尺 1/20)	102

第76図	S D 1 測量図 (縮尺 1 / 60)	
第77図	S D 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	103
第78図	S K 6 測量図 (縮尺 1 / 40)	
第79図	表採遺物実測図 (縮尺 2 / 3)	
第80図	周溝内出土化石図 (縮尺 1 / 2)	
第81図	大池東 4 号墳太刀出土状況図 (縮尺 1 / 40)	104
第82図	大池東 4 号墳墳丘出土遺物実測図 (縮尺 1 / 5)	105
第83図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 3)	106
第84図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3)	107
第85図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(3) (縮尺 1 / 3)	108
第86図	大池東 4 号墳墳丘埴輪出土状況図及び実測図 (縮尺 1 / 4、1 / 20)	
第87図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(4) (縮尺 1 / 4)	109
第88図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(5) (縮尺 1 / 4)	110
第89図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(6) (縮尺 1 / 4)	111
第90図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(7) (縮尺 1 / 4)	112
第91図	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(8) (縮尺 1 / 4)	113
第92図	大池東 4 号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 4)	114
第93図	大池東 4 号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 4)	115
第94図	大池東 4 号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(3) (縮尺 1 / 4)	116
第95図	大池東 4 号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(4) (縮尺 1 / 4)	117
第96図	大池東 4 号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(5) (縮尺 1 / 4)	118
第97図	大池東 4 号墳上石積遺構出土遺物実測図 (縮尺 1 / 1)	119
第 7 章 4 C 区の調査		
第98図	大池東 5 号墳調査前地形測量図 (縮尺 1 / 150)	136
第99図	大池東 5 号墳盛土測量図 (縮尺 1 / 150)	137
第100図	大池東 5 号墳調査後地形測量図 (縮尺 1 / 150)	138
第101図	大池東 5 号墳墳丘土層図 (縮尺 1 / 80)	139
第102図	大池東 5 号墳主体部測量図(1) (縮尺 1 / 20)	141
第103図	大池東 5 号墳主体部測量図(2) (縮尺 1 / 20)	143
第104図	大池東 5 号墳出土遺物実測図 (縮尺 1 / 1、1 / 2)	145
第 8 章 6 区の調査		
第105図	トレンチ位置図 (縮尺 1 / 300)	149
第106図	トレンチ土層柱状図 (縮尺 1 / 40)	150
第 9 章 自然科学分析		
第107図	植物珪酸体の顕微鏡写真(1)	158
第108図	植物珪酸体の顕微鏡写真(2)	159
第109図	植物珪酸体の顕微鏡写真(3)	160
第110図	植物珪酸体の顕微鏡写真(4)	161
第111図	大池東1号墳2号石室出土炭化材の顕微鏡写真	162
第112図	耳環顕微鏡写真(1)	169
第113図	耳環顕微鏡写真(2)	170

第114図	耳環顕微鏡写真(3)	171
第115図	耳環顕微鏡写真(4)	172
第116図	耳環顕微鏡写真(5)	173
第117図	耳環顕微鏡写真(6)	174
第118図	耳環顕微鏡写真(7)	175
第119図	耳環顕微鏡写真(8)	176
第120図	耳環顕微鏡写真(9)	177
第121図	耳環顕微鏡写真(10)	178
第122図	耳環顕微鏡写真(11)	179
第123図	耳環顕微鏡写真(12)	180
第124図	耳環顕微鏡写真(13)	181
第125図	耳環顕微鏡写真(14)	182
第126図	耳環顕微鏡写真(15)	183
第127図	耳環顕微鏡写真(16)	184
第128図	耳環顕微鏡写真(17)	185

表 目 次

第2章 調査の経緯

表1	大峰ヶ台遺跡調査一覧	4
----	------------	---

第3章 1区の調査

表2	大池東1号墳1号石室墓道出土遺物観察表(土製品)	38
表3	大池東1号墳1号石室墓道出土遺物観察表(金属製品)	
表4	大池東1号墳1号石室羨道出土遺物観察表(土製品)	
表5	大池東1号墳1号石室内出土遺物観察表(土製品)	39
表6	大池東1号墳1号石室内出土遺物観察表(金属製品)	40
表7	大池東1号墳1号石室内出土遺物観察表(装飾品)	
表8	大池東1号墳2号石室内出土遺物観察表(土製品)	42
表9	大池東1号墳墳丘出土遺物観察表(土製品)	
表10	大池東1号墳墳丘出土遺物観察表(装飾品)	

第5章 4A区の調査

表11	SD1出土遺物観察表(土製品)	62
表12	客谷10号墳出土遺物観察表(土製品)	
表13	客谷10号墳出土遺物観察表(金属製品)	

第6章 4B区の調査

表14	大池東2号墳石室内出土遺物観察表(土製品)	80
表15	大池東2号墳石室内出土遺物観察表(金属製品)	
表16	大池東2号墳石室内出土遺物観察表(装飾品)	
表17	大池東2号墳墳丘出土遺物観察表(土製品)	
表18	大池東3号墳墳丘・周溝内出土遺物観察表(土製品)	122
表19	大池東3号墳周溝内出土遺物観察表(金属製品)	124

表20	S K 1 出土遺物観察表 (土製品)	
表21	S K 2 出土遺物観察表 (土製品)	125
表22	S K 3 出土遺物観察表 (土製品)	
表23	S K 4 出土遺物観察表 (土製品)	
表24	S D 1 出土遺物観察表 (土製品)	
表25	大池東 3 号墳出土遺物観察表 (石製品)	126
表26	大池東 4 号墳墳丘出土遺物観察表 (金属製品)	
表27	大池東 4 号墳墳丘・周溝出土遺物観察表 (土製品)	
表28	大池東 4 号墳墳丘・周溝外出土遺物観察表 (土製品)	129
表29	大池東 4 号墳上石積遺構出土遺物観察表 (石製品)	132
表30	大池東 4 号墳上石積遺構出土遺物観察表 (銭貨)	
第 7 章 4 C 区の調査		
表31	大池東 5 号墳主体部出土遺物観察表 (金属製品)	146
表32	大池東 5 号墳主体部出土遺物観察表 (装飾品)	
第 9 章 自然科学分析		
表33	大峰ヶ台遺跡 9 次調査における植物珪酸体分析結果	153
表34	大池東 1 号墳東西主軸東側における植物珪酸体分析結果	154
表35	大池東 5 号墳東西主軸南壁における植物珪酸体分析結果	155
表36	大池東 3 号墳周溝内 S K 1 における植物珪酸体分析結果	156
表37	植物珪酸体の顕微鏡写真	157
表38	蛍光 X 線分析表(1)	167
表39	蛍光 X 線分析表(2)	168
表40	試料一覧と分析結果	187
表41	大峰ヶ台丘陵の発掘調査古墳一覧表	190

図版目次

巻頭図版 1 大池東古墳と大池東 3 号・4 号墳出土遺物

巻頭図版 2 大池東 5 号墳主体部

第 3 章 1 区の調査

図版 1 1 1 区調査前① (南西より)

2 1 区調査前② (西より)

図版 2 1 大池東 1 号墳調査前 (北西より)

2 大池東 1 号墳表土剥状況 (南西より)

図版 3 1 大池東 1 号墳 1 号石室完掘状況 (南より)

2 大池東 1 号墳東側盛土状況 (南より)

図版 4 1 大池東 1 号墳西側盛土状況 (南西より)

2 大池東 1 号墳 1 号石室墓道検出状況 (南より)

図版 5 1 大池東 1 号墳 1 号石室閉塞石① (南上より)

2 大池東 1 号墳 1 号石室閉塞石② (玄室より)

図版 6 1 大池東 1 号墳 1 号石室排水溝① (南より)

- 図版7 1 大池東1号墳1号石室排水溝②(南上より)
 図版8 1 大池東1号墳1号石室遺物出土状況①(南より)
 2 大池東1号墳1号石室遺物出土状況②(北より)
 図版9 1 大池東1号墳1号石室奥壁状況(南より)
 2 大池東1号墳2号石室完掘状況(南より)
 図版10 1 大池東1号墳測量作業状況
 図版11 1 大池東1号墳1号石室出土遺物

第4章 2区の調査

- 図版12 1 2区調査地全景(南より)
 2 2区T3土層状況(東より)
 図版13 1 2区T3作業状況(東より)
 2 2区調査後全景(南より)

第5章 4A区の調査

- 図版14 1 調査前全景(東より)
 2 伐採後全景(東より)
 図版15 1 T1掘削状況(南より)
 2 SX1検出状況(東より)
 図版16 1 SD1検出状況(北より)
 2 SD1遺物出土状況(北より)
 図版17 1 SD1完掘状況(北より)
 2 SX2検出状況(南より)
 図版18 1 石室検出状況①(北より)
 2 石室検出状況②(北より)
 図版19 1 石室検出状況③(東より)
 2 石室検出状況④(東より)
 図版20 1 出土遺物

第6章 4B区の調査

- 図版21 1 4B①区調査区①(北東より)
 2 4B①区調査区②(南東より)
 図版22 1 大池東2号墳完掘状況(南より)
 2 大池東2号墳遺物出土状況(南より)
 図版23 1 大池東2号墳床面状況(南より)
 2 大池東2号墳奥壁状況(南より)
 図版24 1 大池東2号墳左側壁状況(東より)
 2 大池東2号墳右側壁状況(西より)
 図版25 1 大池東2号墳石室内出土遺物
 図版26 1 4B②区調査前遠景(東より)
 2 大池東3号墳・4号墳調査前全景(東より)
 図版27 1 大池東3号墳盛土遺存状況(西より)
 2 大池東3号墳北西周溝遺物出土状況(南より)
 図版28 1 大池東3号墳SK1遺物出土状況(北より)
 2 大池東3号墳SK2・3遺物出土状況(西より)

- 図版29 1 大池東 3号墳完掘状況 (北西より)
- 2 大池東 3号墳完掘状況 (東より)
- 図版30 1 大池東 4号墳盛土遺存状況 (西より)
- 2 大池東 4号墳盛土遺存状況 (東より)
- 図版31 1 大池東 4号墳太刀出土状況 (北東より)
- 図版32 1 大池東 4号墳南東周溝検出状況 (南西より)
- 図版33 1 大池東 4号墳南東周溝遺物出土状況 (南西より)
- 2 大池東 4号墳墳丘部埴輪出土状況 (西より)
- 図版34 1 大池東 4号墳完掘状況 (南東より)
- 2 大池東 3号墳・4号墳完掘状況 (東より)
- 図版35 1 大池東 3号墳出土遺物①
- 図版36 1 大池東 3号墳出土遺物②
- 図版37 1 大池東 3号墳出土遺物③
- 図版38 1 大池東 3号墳 S K 1 出土遺物
- 図版39 1 大池東 3号墳 S K 2 出土遺物
- 図版40 1 大池東 3号墳 S K 3 出土遺物
- 2 大池東 4号墳出土遺物①
- 図版41 1 大池東 4号墳出土遺物②
- 図版42 1 大池東 4号墳出土太刀①
- 図版43 1 大池東 4号墳出土太刀②
- 図版44 1 大池東 3号墳・4号墳出土埴輪①
- 図版45 1 大池東 3号墳・4号墳出土埴輪②
- 図版46 1 大池東 3号墳・4号墳出土埴輪③
- 図版47 1 大池東 3号墳・4号墳出土埴輪④
- 図版48 1 大池東 3号墳・4号墳出土埴輪⑤
- 図版49 1 大池東 3号墳・4号墳出土埴輪⑥

第7章 4 C区の調査

- 図版50 1 大池東 5号墳盛土状況① (北より)
- 2 大池東 5号墳盛土状況② (南より)
- 図版51 1 大池東 5号墳主体部 (南より)
- 2 大池東 5号墳主体部排水溝 (南より)
- 図版52 1 大池東 5号墳東西土層 (南より)
- 2 大池東 5号墳南側土層 (西より)
- 図版53 1 大池東 5号墳南北側土層 (西より)
- 2 大池東 5号墳地山状況 (北より)
- 図版54 1 大池東 5号墳主体部出土遺物①
- 図版55 1 大池東 5号墳主体部出土遺物②

第8章 6区の調査

- 図版56 1 6区調査区 (西より)
- 図版57 1 T 4土層 (西より)
- 2 T 7土層 (東より)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

1993（平成5）年6月、松山市公園緑地建設課より、大峰ヶ台丘陵内にある松山市総合公園の整備にあたって、埋蔵文化財の確認調査願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『NO32・33大峰ヶ台弥生遺跡・大峰ヶ台古墳群』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内では、これまでに8回の調査が行われ、特に1985（昭和61）年の大峰ヶ台遺跡3次調査では、古墳8基と多数の遺物が検出されている。近年、大峰ヶ台丘陵の主陵を拠点とした松山市総合公園の整備が行われることになり、文化教育課は事前の分布調査を行い古墳を確認した。調査結果をうけ文化教育課、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）ならびに松山市公園緑地課の三者は遺跡の取扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺跡について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳の範囲と構築方法の解明を目的とし、埋蔵文化財センターが主体となり、平成6年4月に開始した。

2. 刊行組織（平成10年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	三好俊彦
	次長	丹下正勝
文化教育課	課長	松平泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	池田秀雄
	事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	担当	梅木謙一
		宮内慎一
		高尾和長
		相原浩二
		水本完児
		大西朋子

3. 環境

県下最大の松山平野は、西部瀬戸内の伊予灘と中部瀬戸内の燧灘とを二分するように北に突出した高縄半島の付け根部分に位置する。高縄半島には、東三方ヶ森、北三方ヶ森、伊予子山、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山地に源を発した河川によって形成された沖積平野が松山平野である。

大峰ヶ台丘陵は平野の西部にあって、西方の伊予灘からは約3.5kmに位置する独立丘陵である。本調査地は、大峰ヶ台の西側丘陵部に位置する。

縄文時代

本調査地周辺には、これまでに明確な縄文時代の遺跡は確認されていない。大峰ヶ台東裾部の朝美澤遺跡からは後・晩期の土器が出土している。また、古照遺跡の砂礫堆積層からは、前期末から晩期までの土器が出土している。

弥生時代

前期 朝美澤遺跡2次調査地からは前期前半の包含層が確認されている。また、弁天山丘陵から東に突出した小丘陵に位置する斉院烏山遺跡からは前期末の環溝集落があり、同丘陵東麓の宮前川左岸の後背湿地には前期末～中期初頭の土器や朝鮮系無文土器などが出土した宮前川別府遺跡がある。

中期 大峰ヶ台丘陵の山頂部には、高地性集落（中期中葉）の大峰ヶ台遺跡4次調査地がある。同丘陵東裾部の朝美澤遺跡、朝美辻遺跡からも中期中葉の土器が出土している。

後期 後期になると遺跡数は増える。朝美澤遺跡には壺棺墓や竪穴式住居址などがあり、朝美辻遺跡では丘陵鞍部に投棄された状態で、器台を多く含む後期後葉の土器群が出土している。弁天山丘陵の東麓緩斜面に位置する津田鳥越遺跡では竪穴式住居址群が検出され、後期後半～庄内段階の土器と共に土錘、石錘などの漁撈具が出土している。古照遺跡の東方の古照ゴウラ遺跡からは後期末の土器が出土している。

古墳時代

本調査地の南東に位置する古照遺跡からは、大規模な灌漑用井堰3基が検出されている。この堰を構成する杭の部材には、高床倉庫の建築部材を転用したものが含まれ、建物の復元にもおおいに貢献した遺跡である。宮前川北斉院遺跡からは、古墳時代初頭～前期の焼失住居址を含む竪穴式住居址群や堰堤状遺構が検出されている。このほかには、クスノキの巨木の根株があり、その周辺には約20mの範囲に古墳時代初頭の土器が多量に出土している。これら多数の土器に混じり骨角器やト占に使用された鹿の肩胛骨、注口土器、動物型土製品、絵画土器などもある。また、土器には山陰系土器や畿内系土器等の外来系土器もあり、当時の流通・交易の経路を考える上で貴重な遺物が出土している。

古墳は、本調査地が所在する大峰ヶ台をはじめとして、周辺の岩子山、弁天山等の丘陵上に多く分布している。まず、大峰ヶ台丘陵北西面には、前期の前方後円墳朝日谷2号墳があり、主体部からは2面の舶載鏡、60本を越える銅鏃、鉄鏃、鉄剣、ガラス玉等が出土している。その他、大峰ヶ台丘陵には横穴式石室を主体部にもつ後期古墳が多く分布している。これらのうち朝日谷1号墳や丘陵南部



- | | | |
|------------|------------|-----------|
| ① 朝日谷古墳 | ⑦ 朝美澤遺跡 2次 | ⑬ 南江戸關目遺跡 |
| ② 客谷B地区古墳群 | ⑧ 南江戸桑田遺跡 | ⑭ 古照遺跡 |
| ③ 客谷A地区古墳群 | ⑨ 辻町遺跡 | ⑮ 岩子山古墳 |
| ④ 朝美辻遺跡 | ⑩ 辻町遺跡 2次 | ⑯ 齊院茶臼山古墳 |
| ⑤ 辻遺跡 2次 | ⑪ 古照ゴウラ遺跡 | ⑰ 北齊院地内遺跡 |
| ⑥ 朝美澤遺跡 | ⑫ 松環古照遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

遺跡の概要

麓の客谷古墳群は調査の結果6世紀後半の円墳であることが分かっている。齊院茶臼山古墳は岩子山丘陵西面に所在する6世紀前葉の円墳である。石室内からは、馬具、鉄鏃等の鉄製品類が出土し、特に玉類が多く出土している。周溝からは円筒埴輪、朝顔型埴輪が出土している。

古代～中世

近年、調査地周辺の沖積低地部では、古代～中・近世の遺構や遺物が多数検出されている。松山西部環状線建設に伴う調査が(財)愛媛県埋蔵文化財調査センターによって、1985年度から1994年度まで実施されている。このうち1988年度に実施された大峰ヶ台丘陵北東麓部の調査では、平安時代の寺院の一部が検出され、澤庵寺と命名された。また、水田址・集落・墓等が、この一連の調査や南江戸鬮目遺跡、古照遺跡で検出されており、多量の土師器・瓦器・須恵器も出土している。

近世

近世の遺構では、墓を主体に調査が行われている。調査地南の南江戸桑田遺跡は近世墓地で、棺桶11基、箱棺墓1基、土壇墓を検出している。調査地西南の北齊院地内遺跡では15・16世紀の墓や、掘立柱建物を中心とした集落遺構を検出している。

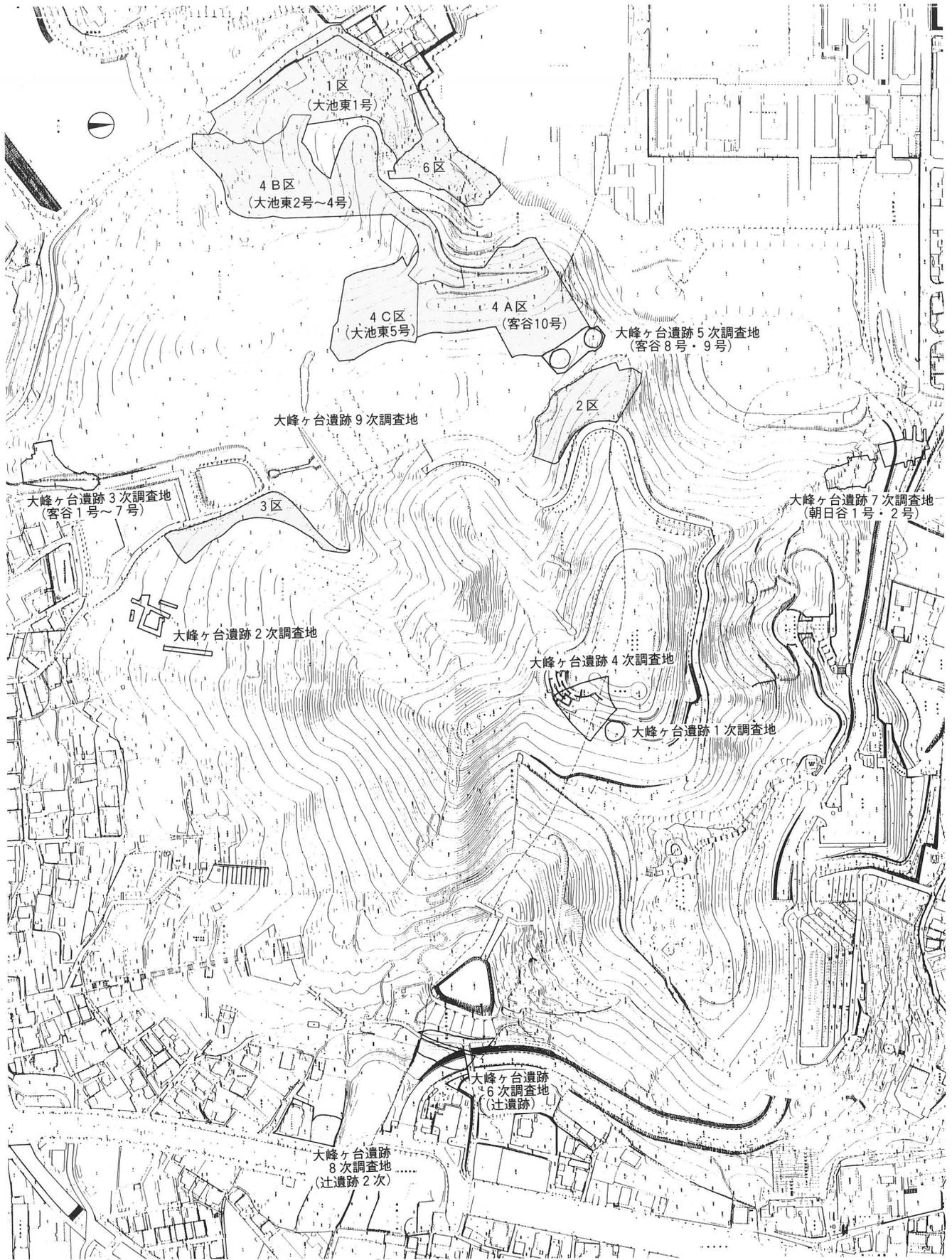
〔文献〕

- 栗田 茂敏 1995『大峰ヶ台遺跡4次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 梅木 謙一・松村 淳 1994『大峰ヶ台丘陵の遺跡』「朝美澤1次」「客谷古墳群B地区」「朝日谷1号墳」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 宮内 慎一 1992『朝美澤遺跡』松山市埋蔵文化財センター
 眞木 潔 1992『辻町遺跡』
 栗田 正芳 1996『古照遺跡8・9次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
 河野 史知・相原 浩二 1995『辻町遺跡2次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター

表1 大峰ヶ台遺跡調査地一覧

遺跡名	所在地	時代	主な遺構・遺物等	面積	調査期間	備考
大峰ヶ台1次	朝日ヶ丘1丁目1709	弥生中期	住居址3棟、土壇2基	150m ²	S50. 4.15～S50. 4.30	
大峰ヶ台2次	朝日ヶ丘1丁目1376	古墳			S60.	
大峰ヶ台3次	南江戸町1602外	古墳後期	群集古墳	26,000m ²	S61. 7. 1～S62. 2. 9	客谷古墳群A地区 客谷1～7号墳、年報I
大峰ヶ台4次	南江戸5丁目1586-6	弥生中期	竪穴住居址、掘立柱建物、溝欄状遺構、段状遺構	1,500m ²	S62.11. 4～S63. 5.12	年報II、報告書48
大峰ヶ台5次	南江戸6丁目1586外	古墳後期	トレンチ調査、古墳2基	900m ²	S63. 2.22～S63. 8.17	客谷古墳群B地区 客谷8・9号墳 年報II、報告書40
大峰ヶ台6次	朝日ヶ丘1丁目1376外	弥生中期 ～ 後期	遺物包含層	3,000m ²	S63. 5.11～H 1. 2.28	辻遺跡 年報II
大峰ヶ台7次	朝日ヶ丘1丁目 南江戸6丁目	弥生終末 ～ 古墳	古墳、鏡、鉄鏃、須恵、鉄剣	23,000m ²	H 1. 4. 1～H 1. 8. 1	朝日谷1号墳・2号墳 1号のみ年報III、報告書40
大峰ヶ台8次	南江戸5丁目1544-1外	古墳 ～ 中世	掘立、土壇、須恵	186m ²	H 1. 7.15～H 1. 7.31	辻遺跡2次 年報III
大峰ヶ台9次	南江戸6丁目 古墳	古墳 ～ 末	古墳6基、須恵、埴輪、鉄製品	44,010m ²	H 6. 4. 1～H 8. 9.30	大池東1～5号 客谷11号墳 年報VII

客谷8・9号墳は報告書40では客谷B地区1・2号墳と報告されている。



第2図 大峰ヶ台遺跡調査地位置図 (1:4,000)

第2章 調査の経緯

調査は、平成6年度から平成8年度の3年間行った。調査地は、大峰ヶ台丘陵の西側に位置する。調査以前は果樹園及び樹木林であった。調査申請面積は44,010m²である。調査区は、工事の進行上6区画に分け、さらに4区については、4A区、4B区、4C区に小区分した。

調査は、平成6年度には1区と2区を行い、1区は平成6年4月1日～平成7年3月31日、2区は平成6年4月4日～6月30日の間実施した。1区では、羨道部と墓道をもつ横穴式石室(大池東1号墳)1基を検出した。2区では、遺構は検出されなかった。

平成7年度は、4A区と4B区の調査を実施した。4A区は平成7年4月1日～10月13日、4B区は9月25日～平成8年3月31日の間行った。4A区では石室の一部が残る古墳を検出し、客谷10号墳と呼称した。4B区では円墳を3基検出し、大池東2号墳、3号墳、4号墳と呼称した。2号墳は横穴石室で半壊状態であった。3号墳・4号墳は周溝が接し、各々で墳丘と周溝を検出した。ただし、石室は検出されなかった。

平成8年度は、4C区、6区及び3区の調査を実施した。4C区と6区は、平成8年7月10日～10月31日の間に、同時に調査を行った。4C区では、方墳を1基検出し、大池東5号墳と呼称した。大池東5号墳は主体部が遺存していた。6区では、遺構は検出されなかった。

3区は、調査区が急斜面の為に踏査による調査を行なった。調査の結果、遺跡は無いものと判断した。

5区は公園整備の計画変更に伴い調査は行わなかった。

本報告書は調査区ごとに報告を行う。

地区	調査期間	面積	検出遺構
1区	平成6年7月1日～平成7年3月31日	4,370m ²	大池東1号墳
2区	平成6年4月4日～平成6年6月30日	2,190m ²	
3区	平成8年7月10日 踏査による調査	2,920m ²	
4A区	平成7年4月1日～平成7年10月13日	6,800m ²	客谷10号墳
4B区	平成7年9月25日～平成8年3月31日	5,200m ²	
4C区	平成8年7月10日～平成8年10月31日	4,180m ²	大池東2号・3号・4号墳
6区	平成8年7月31日～平成8年8月13日	1,450m ²	

第3章

— 1区の調査 —



第3章 1区の調査

1. 調査の経緯

調査地は大峰ヶ台丘陵の西裾の丘陵斜面に立地する。調査は、7月1日に地形測量を行う。地形測量後丘陵斜面にトレンチを11本（T1～11）設定し掘り下げを開始する。T1～3のトレンチで遺構を検出したため、7月21日、T1～3の間の表土剥ぎを行い遺構検出を行う（拡張区）。

調査地南端部には、古墳と思われる盛り上がり部があり、十字にトレンチを設定し表土を取り除き8月8日にトレンチ内を地中レーダー探査を行った。その結果石室と思われる位置を確認することができた。8月9日よりT1～10の土層測量と拡張区の遺構掘り下げを行う。9月28日、T1～10の位置図と拡張区の遺構測量と写真撮影を行い、斜面の調査を終了し本格的に古墳の調査に入る。古墳は大池東1号墳と呼称する。

1号墳の調査は、初めに地形測量を行いトレンチを設定し掘り下げ盛土の確認を行う。トレンチ調査より墓壙と周溝を検出し掘り下げを行う。墓壙の掘り下げを行うと石室の側壁上部を検出した。石室は、既に天井石は失われており玄室内には土が流入しているため、流入土を取り除き、玄室内床面の検出作業を行う。平成7年1月20日、玄室床面から出土した遺物と敷石を高所作業車を使用して写真撮影を行い測量を行う。3月3日より羨道部と墓道の調査を行い閉塞石を検出する。閉塞石を測量を行いながら取り除くと床面からは、排水溝を検出した。排水溝の写真撮影と測量を行い床面を掘り下げ土層図の作成を行う。墓道は平面では明確に検出できないためトレンチ(T10)断面で検出を行う。その結果2本の墓道を検出した。3月13日玄室内の敷石の測量と写真撮影を行う。玄室と羨道部の展開図を写真測量で行う。敷石を取り除き床面より掘り方を検出する。墳丘内に羨道部から左右に続く石組みを検出し測量を行う。3月21日にラジコンヘリコプターを使用し写真撮影を行う。

3月26日墳丘東側を重機を使用して盛土を除去し盛土の状況と主体部掘り方・地山整形の確認を行い、埋め戻し調査を終了する。

2. 層位

調査地は、大峰ヶ台西丘陵の西側と北側斜面の標高23～48mに立地する。調査以前は、雑木林と果樹園であった。とくに北側斜面の果樹園後は、段状にカットが行われているため堆積土は少なく腐葉土と地山の風化土から形成される。トレンチは、西側斜面に4本（T1～4）、北側斜面に7本（T5～11）の計11本を設定した。南端部の調査は、地中レーダー探査機を使用して行った。土層は、第Ⅰ層腐葉土、第Ⅱ層鈍い黄橙色土、第Ⅲ層橙色土、第Ⅳ層黄橙色土、第Ⅴ層褐色土、第Ⅵ層灰白色土、第Ⅶ層黄褐色土（地山）である。土層図は、トレンチの両端と中央部をA・B・Cとして柱状図を作成した。

（1）斜面の調査

第Ⅰ層は、厚さ2～30cmを測る。T1～4と8～11のA・B・C、T5のA・C、T6・7のA・Bで検出した。

第Ⅱ層は、厚さ2～35cmを測る。T1のA・B、T2・7～10のA・B・C、T3・4・6のA・B、T11のCで検出した。

第Ⅲ層は、厚さ2～20cmを測る。T1のB、T3・4のA、T5・9のA・B・C、T6・8・11のA・B、T10のB・Cで検出した。

大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区

第Ⅳ層は、厚さ2～5cmを測る。T4・6のC、T7・8・10のA・B・C、T9・11のA・Bで検出した。

第Ⅴ層は、厚さ20～25cmを測る。T1のCで検出した。

第Ⅵ層は、厚さ2～55cmを測る。T8・11のCで検出した。

第Ⅶ層は、全てのトレンチで検出した。

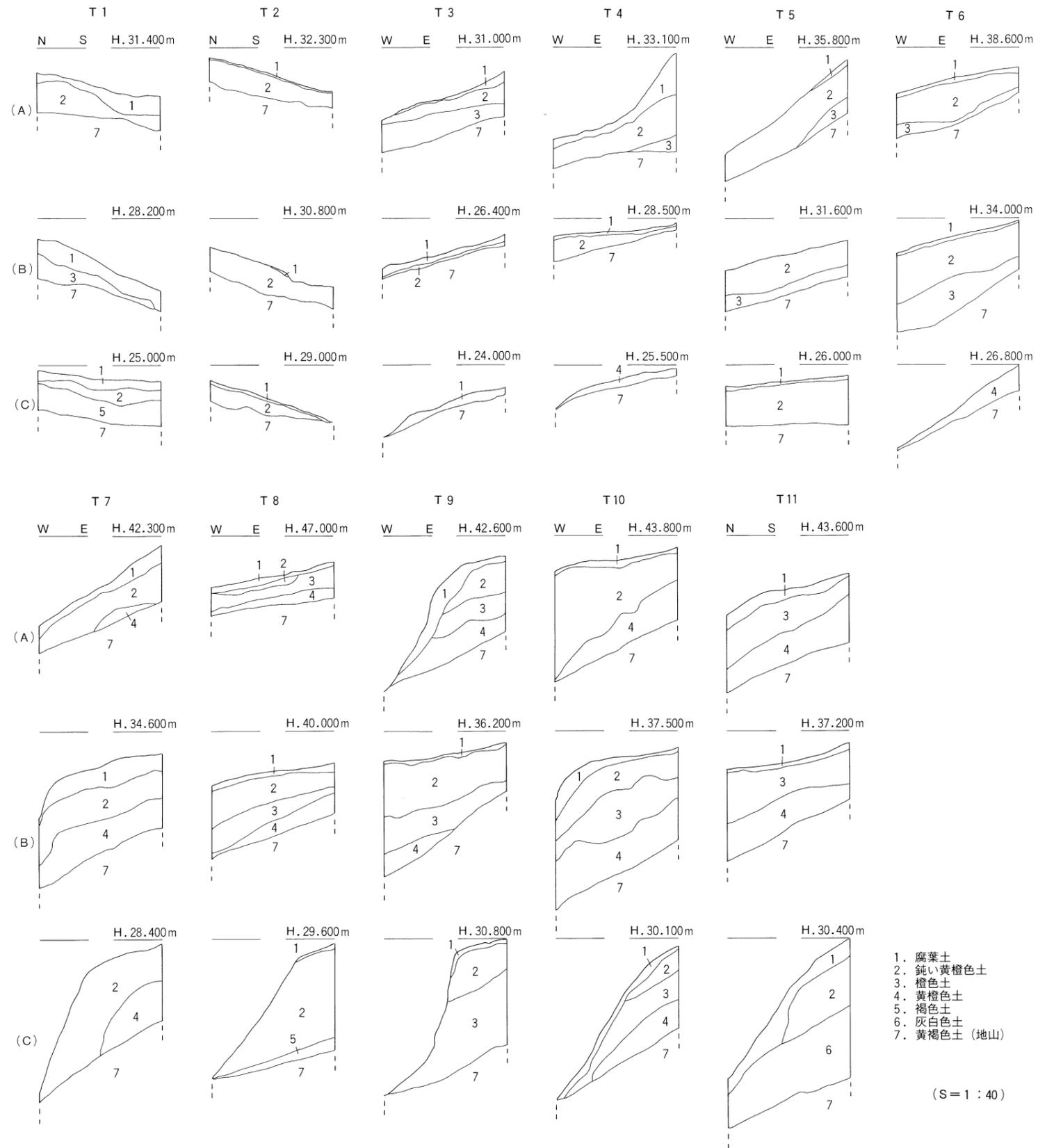
(2) 南端部の調査

南端部の調査は、十字にトレンチを設定し表土剥ぎを行い、地中レーダー探査を行った。探査結果からは南北方向の長い落ち込みを石室と判断した。トレンチ内からは須恵器が出土した。地中レーダー探査とトレンチ調査の結果より、調査地を古墳と認定し大池東1号墳として調査を行った。



第3図 調査区区割図

層 位



第4図 トレンチ土層柱状図

3. 遺構と遺物

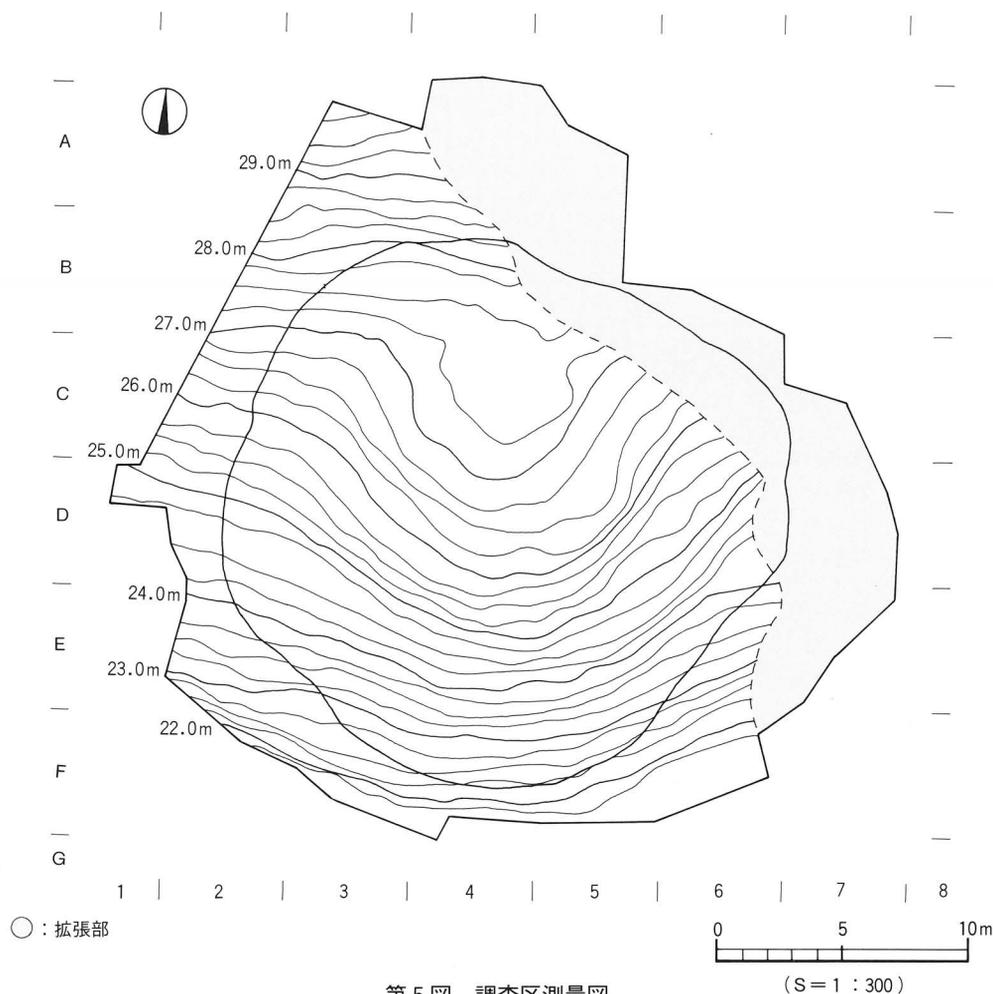
(1) 大池東1号墳

1) 調査の経緯

1号墳は大峰ヶ台丘陵西側の分岐丘陵、西側斜面と谷部が接する標高27m付近の緩傾斜面から谷部に立地する。2号墳の南西10mほどの位置に存在する。ほぼ南西方向に開口する横穴式石室を有する円墳である。調査以前には径20m、高さ5m前後の墳丘が確認されている。本古墳は横穴式石室（1号石室と呼称）のほか、小石室を有している。土層観察より1号石室の最終の盛土で埋まっていることから同時に築造されたものと考えた。よって、この小石室を2号石室と呼称した。

調査は調査区の設定後、石室の確認、掘り下げ、墳丘の土層観察、墳丘内施設の確認、地山整形の順に進めた。その結果、石室は天井石は失われていたが、石室石材は玄室と羨道共に遺存状況が良好で、閉塞施設も一部残存していた。玄室床面には敷石が完存し、副葬品も残されていた。

ここで、調査工程をふまえて概略を説明する。まず、調査開始時、墳丘の範囲を想定し25×28mの範囲に調査区を設定し、5m四方のグリッド（地区）割を行った（第5図）。同時に墳丘の地形測量を行った。しかしながら、調査が進むにつれ墳丘が調査区外に続くことが判明した。よって調査区の北東部を拡張したが、拡張部のコンタは未測量である。



第5図 調査区測量図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区

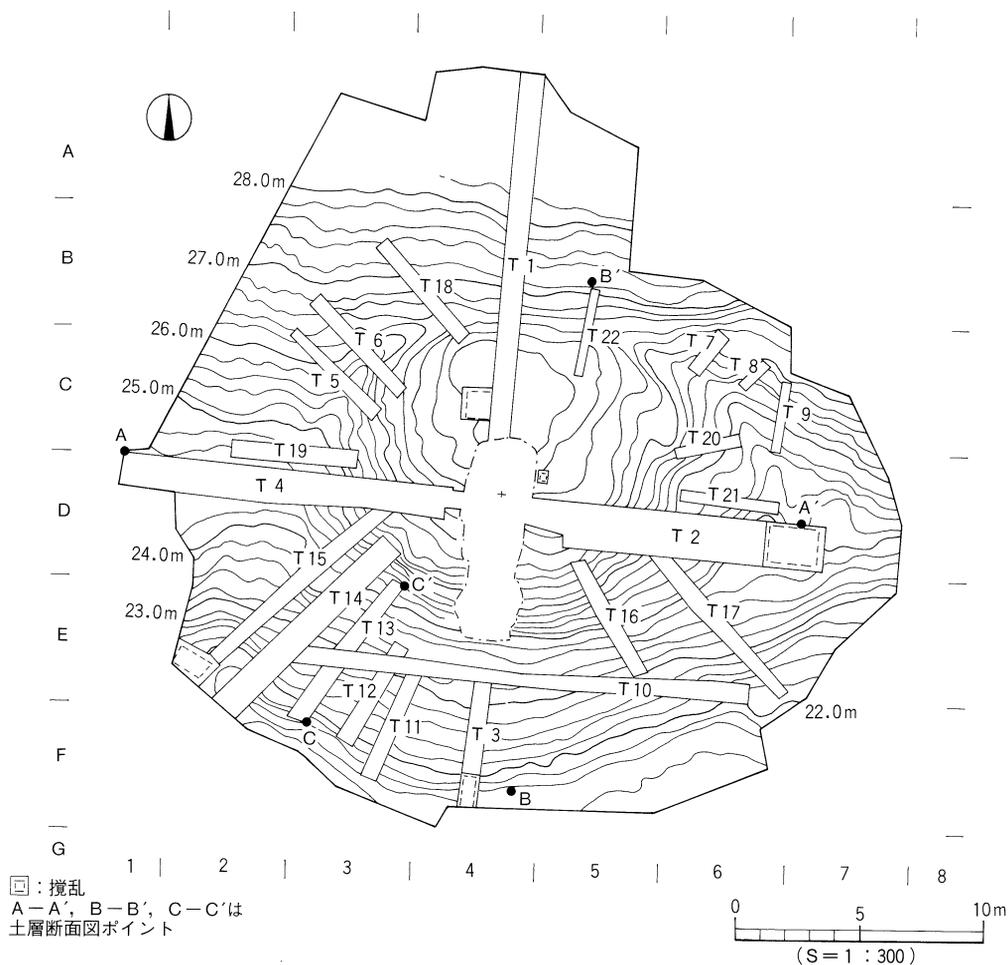
調査区を設定後、地中レーダー探査を行い、石室の有無と範囲確認を行った。その結果にもとずき、主体部を中心にT1～T4の4本のトレンチを設定し、石室の東西、南北方向の主軸ポイントを設定した（P-P'、Q-Q'）。この後、調査は主体部と墳丘部とに分けて実施した。

まず、墳丘部は土層観察にもとずき表土の剥ぎ取り後、墳丘の遺存範囲を確認した。現況の地形測量を行った後、数本のトレンチを設定し周溝の確認をし、盛土、周溝の掘り下げをそれぞれ行った。それと同時に、2号石室の調査も並行して実施した。

一方、主体部は墳頂部を精査し盗掘坑や墓壇の検出を行ったが、明確な掘り方は確認できなかった。そのため、トレンチにて検出した石材の範囲に沿って主体部内部の掘り下げを進めた。石室は天井石はなく、石室内には土砂が大量に流入している状況であった。そこで、まず玄室内の土砂を除去後、床面の調査を進めた。とりわけ、床面にて玉類や耳環が出土したことから、床面付近の土はすべて採取した。玄室の調査終了後、羨道部の調査を行った。羨道部は閉塞施設が一部残存しており、床面には排水施設が付設されていた。墓道はトレンチ（T10）の土層観察により大小2本を確認した。

このほか、前庭部に列石と考えられる石列を2列検出した。3本のトレンチ（T11～13）を設定し土層観察を行った結果、羨道部の構築の際に同時に構築されたものであることが判明した。

主体部の調査をすべて終了した後、墳丘の東半部の盛土を重機で除去し、墳丘の構築や地山整形の



第6図 トレンチ位置図

遺構と遺物

状況を確認する。その際、墳丘の土層断面図を作成した（第9図）。土層図のポイントは第6図に記している。この結果、墓壙の一部と地山整形面を確認した。地山の地形測量を行い、1号墳の調査をすべて終了した。

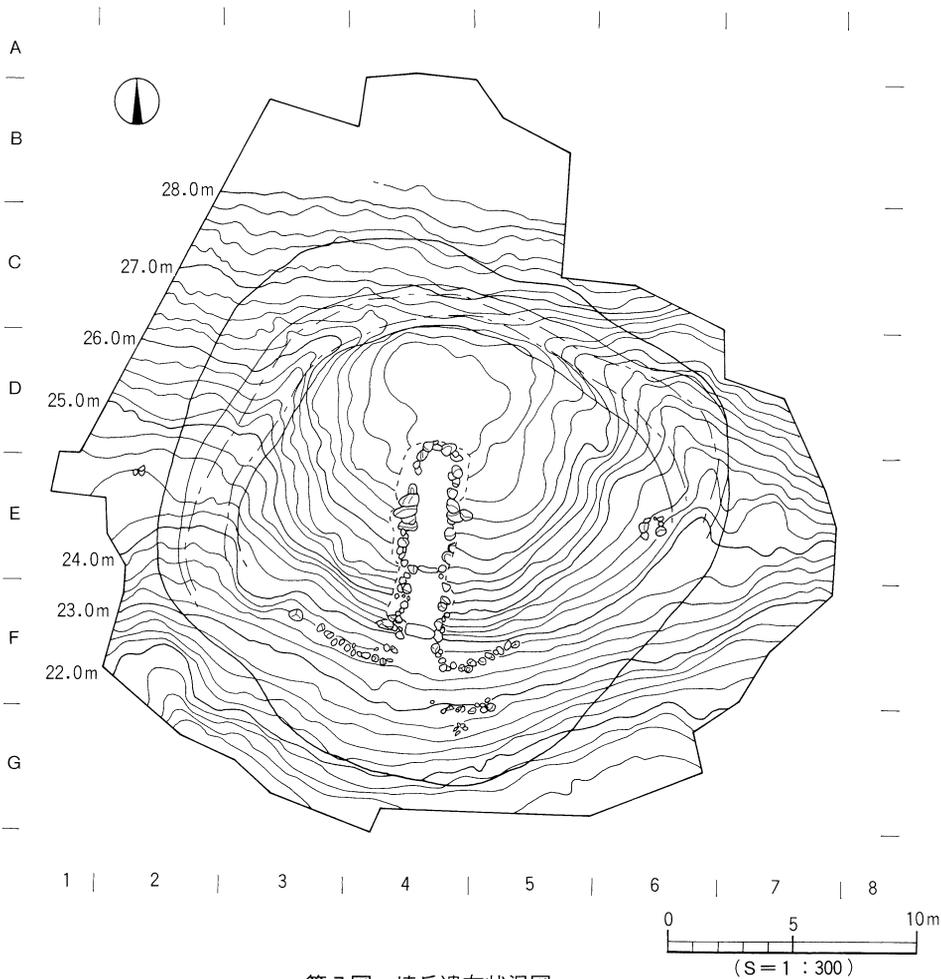
2) 墳丘・周溝

1号墳の墳形は円形を呈するものと考えられ、墳丘規模は径21.2~22.0mを測る（第7図）。墳丘直下の基盤層は玄室中央部より北側では地山整形で露出した花崗岩風化土、南側では地山上面に発達した黒色土及び灰褐色土である。墳丘南半部の地山上面にて少量ではあるが炭化物が出土している。

石室掘り方は玄室中央部より北側では地山整形面、南側では盛土から掘削されている。掘り方の形態は隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は南北約7.2m、東西検出長4.0m、深さは玄室中央部で80cm以上を測る。墳丘盛土は玄室下の地山面から2.4m前後が残存している。

推定される築造工程は大きく5つに分けられる。地山整形後、墳丘南半部に盛土し整地した後、石室掘り方の掘削を行い、石室の構造と掘り方の埋め戻しをする。その後、2段階の盛土によって墳丘を構築している。ここで各工程ごとに状況説明を行う。

まず、第1工程は地山面の整形である（第8図）。墳丘中央部やや北寄り、標高25mの地点に半円状



第7図 墳丘遺存状況図

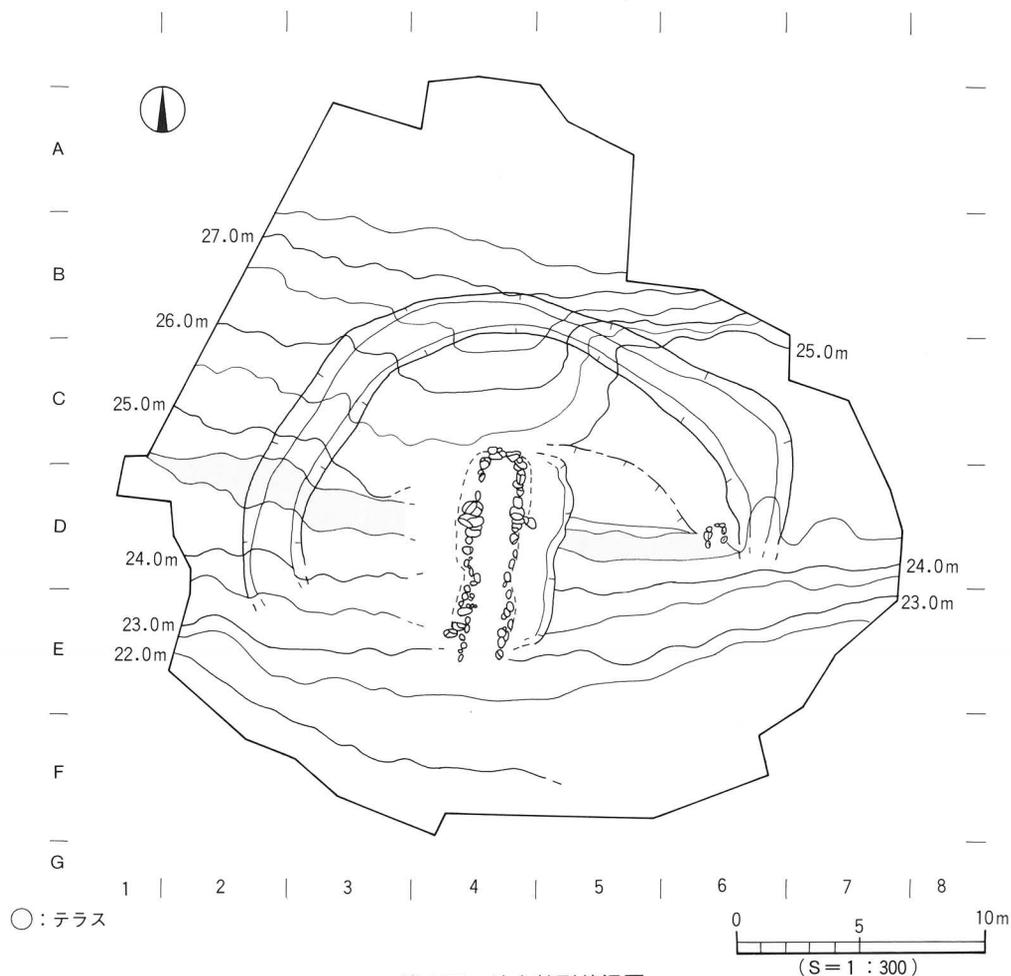
大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区

に地山をカットし、玄室中央部付近に幅2m前後のテラス状に整形された面を作り出す。奥壁部分はおそらく垂直に近い状況で地山がカットされ、奥壁に使用した石材がカット面に寄り添うように据えられたものと判断される。墳丘南半部は旧地形のまま、この時点では傾斜面をなしている。

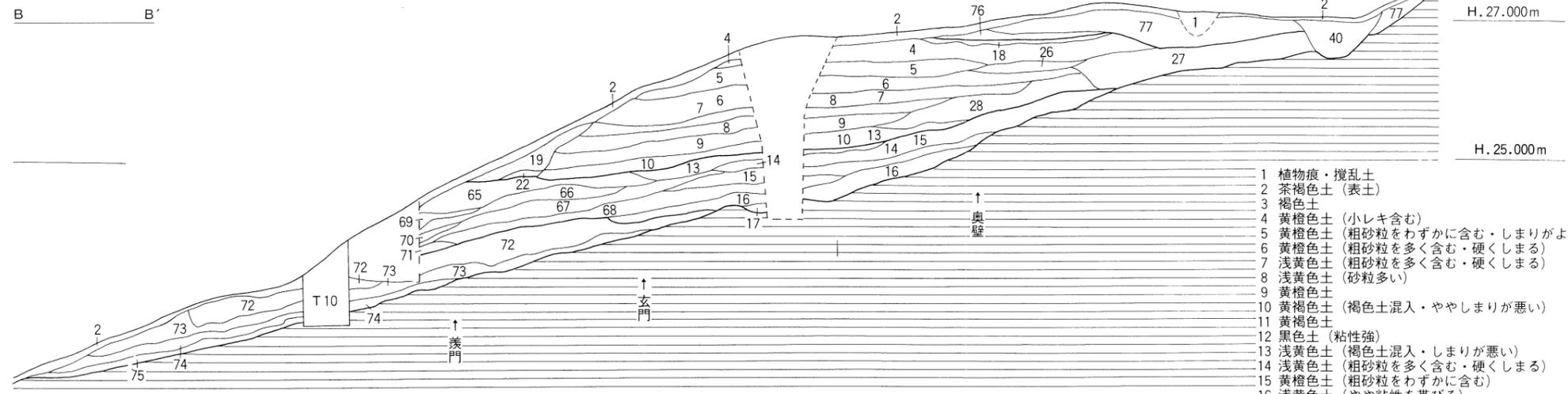
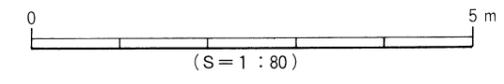
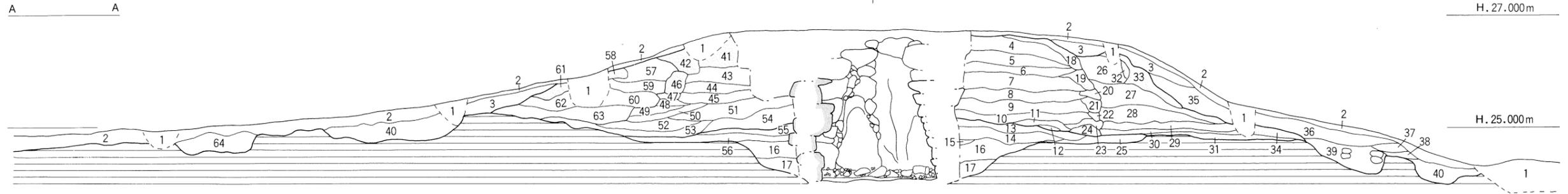
第2工程は墳丘南半部の整地である(第10図)。玄室中央部から南側では基盤面が傾斜して下がっているため盛土により水平面を作り出す。まず、灰褐色土及び黒色土を前庭部の中心に9×15mの範囲に厚さ5~10cm前後敷き詰める。次に、黒色土の上に8×9mの範囲に3~5cm大のレキを含む砂礫を厚さ20~40cm盛土しているのである。

第3工程は石室の掘り方と構築である(第12図)。砂礫を盛土した後、石室の構築を開始する。まず、玄室部は地山を掘り下げ墓壙を掘削し腰石を据える。一方、羨道部は砂礫層に直接腰石を据える。おそらく、石を据える部分のみ砂礫層を掘りくぼめたものと考えられる。その後、石室の構築と掘り方の埋め戻しを行い、玄室部は5~6段目、羨道部は4~5段目、ちょうど玄門の高さぐらいまで石材を積みながら盛土をする。盛土は径13~14mの範囲に円形状に施され、黄色~黄橙色土と粘性の強い褐色~黒色土が覆う。この工程の際に前庭部にある列石は構築されたものと考えられる(T13の土層観察による)。第3工程では墳丘南半部を中心とした盛土が施されている。

第4工程は石室の構築と石室を中心とした盛土である(第12図)。羨門から玄室までの部分を中心と



第8図 地山整形状況図

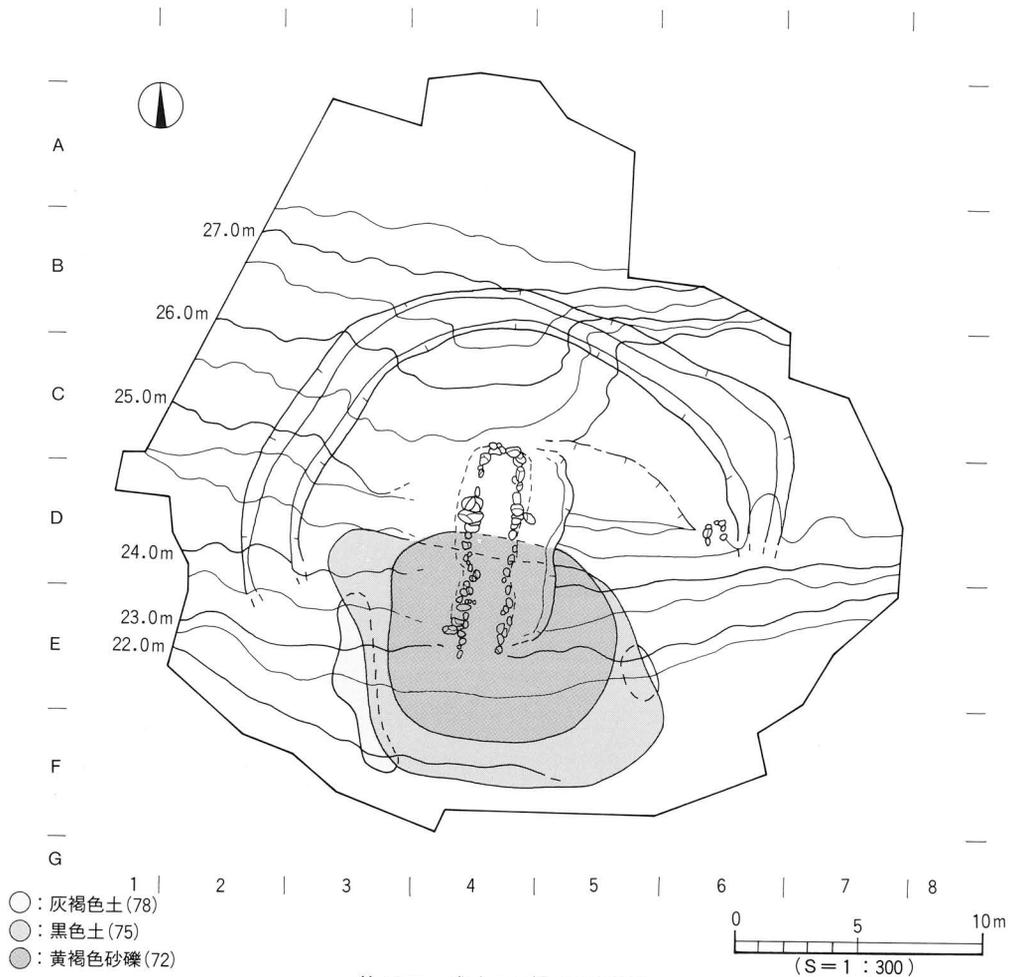


第2工程：72~75
 第3工程：13~17・25・55・56・65~71
 第4工程：(内側) 4~12・18~24・41~48・51・54
 (外側) 26~34・49・50・52・53・57~63
 第5工程：35~40・76・77

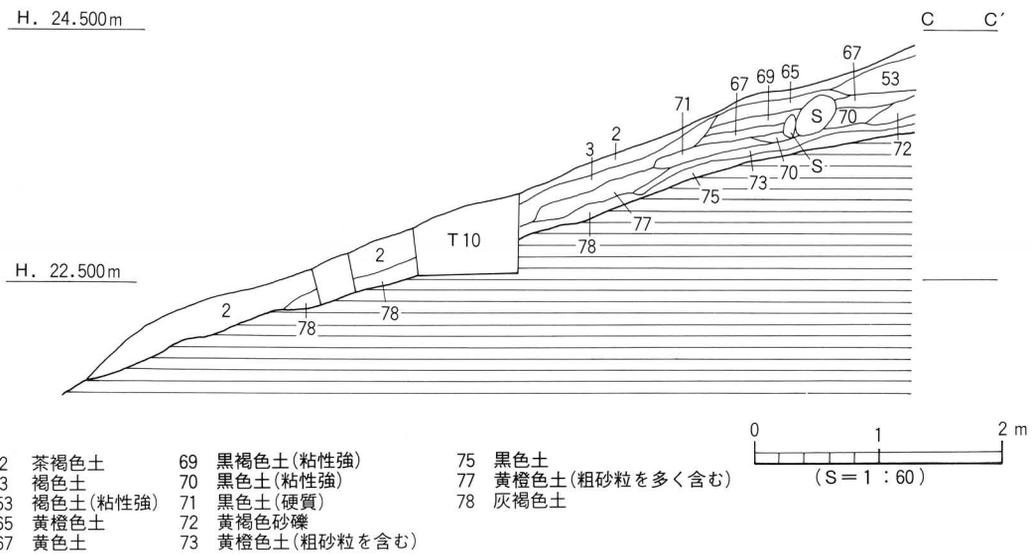
- 1 植物痕・攪乱土
- 2 茶褐色土 (表土)
- 3 褐色土
- 4 黄褐色土 (小レキ含む)
- 5 黄褐色土 (粗砂粒をわずかに含む・しまりがよい)
- 6 黄褐色土 (粗砂粒を多く含む・硬くしまる)
- 7 浅黄色土 (粗砂粒を多く含む・硬くしまる)
- 8 浅黄色土 (砂粒多い)
- 9 黄褐色土
- 10 黄褐色土 (褐色土混入・ややしまりが悪い)
- 11 黄褐色土
- 12 黒色土 (粘性強)
- 13 浅黄色土 (褐色土混入・しまりが悪い)
- 14 浅黄色土 (粗砂粒を多く含む・硬くしまる)
- 15 黄褐色土 (粗砂粒をわずかに含む)
- 16 浅黄色土 (やや粘性を帯びる)
- 17 浅黄色土 (粗砂粒を含む)
- 18 黒色土 (粘性強)
- 19 黒褐色土 (粘性強)
- 20 褐色土 (粘性強)
- 21 黒色土
- 22 黒褐色土
- 23 褐色土 (粘性強)
- 24 黒色土
- 25 黄色土
- 26 明黄褐色土 (粗砂粒を含む・硬くしまる)
- 27 にぶい黄褐色土
- 28 灰黄色土 (小レキ多い・硬くしまる)
- 29 にぶい黄褐色土 (しまりが悪い)
- 30 黒色土
- 31 茶褐色土
- 32 褐色土 (粘性強)
- 33 黒色土 (粘性強)
- 34 黒褐色土 (粘性強)
- 35 浅黄色土 (小レキ多い・硬くしまる)
- 36 浅黄色土 (褐色土混入)
- 37 灰褐色土
- 38 灰黄色土
- 39 暗灰黄色土
- 40 黄褐色土 (粗砂粒含む) [周溝]
- 41 黒色土 (粘性強)
- 42 黒褐色土 (粘性強)
- 43 浅黄色土 (粗砂粒を多く含む・硬くしまる)
- 44 浅黄色土 (砂粒多い)
- 45 黄褐色土
- 46 茶褐色土 (粘性強)
- 47 黒色土 (粘性強)
- 48 黄褐色土 (褐色土混入・ややしまりが悪い)
- 49 浅黄色砂礫
- 50 黄褐色土
- 51 浅黄色土 (褐色土混入・しまりが悪い)
- 52 黄褐色土
- 53 褐色土 (粘性強)
- 54 浅黄色土 (粗砂粒を多く含む・硬くしまる)
- 55 浅黄色砂礫
- 56 黄色土
- 57 黄褐色土
- 58 黒色土 (粘性強)
- 59 浅黄色土
- 60 浅黄色土 (小レキ多い・硬くしまる)
- 61 黒色土 (粘性強)
- 62 浅黄色土 (粗砂粒をわずかに含む)
- 63 黄褐色土
- 64 暗灰黄色土
- 65 黄褐色土
- 66 にぶい黄褐色土 (褐色土混入)
- 67 黄色土
- 68 黄褐色土 (粘性強)
- 69 黒褐色土 (粘性強)
- 70 黒色土 (粘性強)
- 71 黒色土 (硬質)
- 72 黄褐色砂礫 (3~5cm大のレキ)
- 73 黄褐色土 (粗砂粒を含む)
- 74 にぶい黄褐色土
- 75 黒色土
- 76 灰黄色土
- 77 黄褐色土 (粗砂粒を多く含む)

第9図 墳丘土層断面図

遺構と遺物



第10図 盛土及び整地状況図



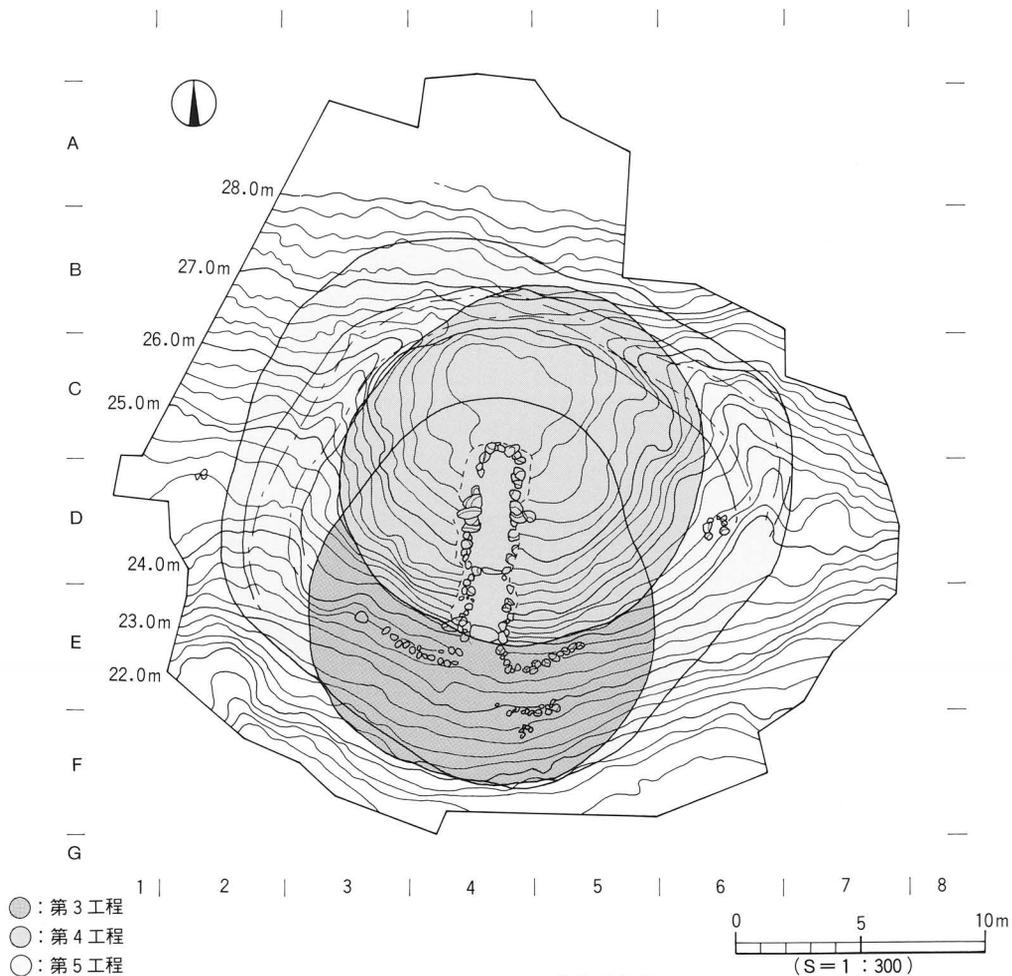
- | | | |
|-------------|-----------------|-------------------|
| 2 茶褐色土 | 69 黒褐色土(粘性強) | 75 黒色土 |
| 3 褐色土 | 70 黒色土(粘性強) | 77 黄褐色土(粗砂粒を多く含む) |
| 53 褐色土(粘性強) | 71 黒色土(硬質) | 78 灰褐色土 |
| 65 黄褐色土 | 72 黄褐色砂礫 | |
| 67 黄色土 | 73 黄褐色土(粗砂粒を含む) | |

第11図 T13土層断面図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区

して径14m前後の範囲に円形状に盛土する。盛土は石材を積むのと並行して行われ、石室の周囲7m前後の範囲には小レキを含む黄色～黄橙色土を用いて構築し、その外側部分では浅黄色～黄橙色土を用いて交互に構築している。しかも、それぞれの盛土のまわりには粘性の強い茶褐色～黒色土を使用して盛土を固く締めている。盛土に使用した土は石室の東側と西側ではわずかに異なっている。

第5工程は2号石室と周溝の構築及び墳丘全体の盛土である。この工程では墳丘北半部を中心として黄色～褐色土の花崗岩媒乱土を主体とした盛土が覆う。この盛土を施す前に地山を掘り下げて2号石室が構築される。また、周溝は最終的な盛土を掘削して構築されている。墳丘北半部に馬蹄形状に検出した。規模は南北検出長12.0m、東西検出長22.0m、溝幅1.2～3.0m、深さ10～40cmを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色土である。



第12図 墳丘盛土状況図

3) 墓道

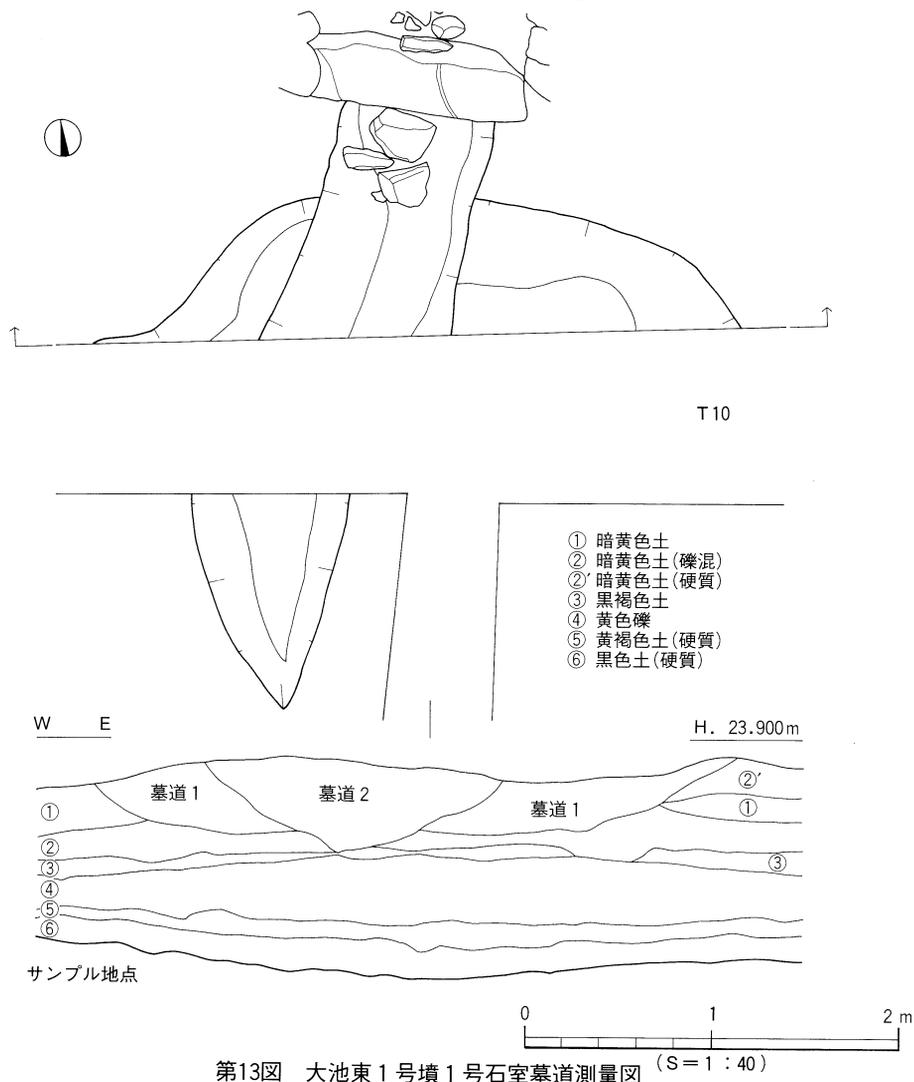
墓道は、2基を検出した。墓道①は、北側は墓道②に、南側はT10に切られているため長さ、幅は残存長である。平面形態は半楕円形で規模は長さ(0.8)m、幅(3.4)m、深さ40cmを測る。横に広い残存である。墓道②は墓道①を切りT10に切られる。平面形は溝状で規模は長さ3.3m、幅0.9m、深さ50cmを測る。断面形態はレンズ状である。墓道端部は主軸より西側に取り付けている。

遺物は土師器と鉄製品が出土した。

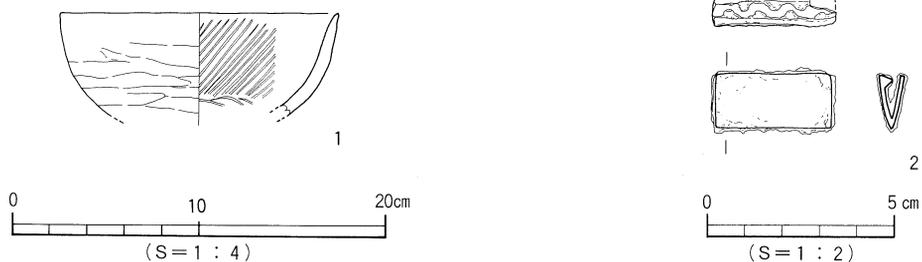
出土遺物 (第14図、図版11)

遺物は土師器の埴と鉄製の金具が出土した。

1は埴の口縁部から体部にかけての残存である。体部は丸味をもち端部は先細りする。内面に放射状と螺旋状の暗文を施す。2は鉄製の飾帯金具か? 断面は「V」字状で内側に互い違いに鋸が残る。



第13図 大池東1号墳1号石室墓道測量図 (S=1:40)



第14図 大池東1号墳1号石室墓道出土遺物実測図

4) 羨道

羨道からは、壁体と梱石・立柱・排水溝・閉塞施設を検出した。羨道の規模は長さ2.3m、幅1.1mを測る。天井部と壁体上部は失うが比較的良好な状態で残存している。構築方法は、玄室床面と水平になるように盛土を行いながら梱石・立柱・排水溝を設置し、壁体を積み上げ構築する。壁体は、玄門部で5段の残存である。腰石は70～120cmの石を横置きに使用する。2段目からは、腰石より小型の石を腰石とは逆に縦に置き小口面を内側にし積み上げる。

梱石は羨道入口〔第1梱石〕と玄室入口〔第2梱石〕に位置する。第1梱石と第2梱石の間は2.3mを測る。第1梱石は、幅30cm、厚さ30cm、長さ110cmの四角柱を横置きに使用する。第2梱石は、幅25cm、厚さ27cm、長さ120cmの四角柱を横置きに使用する。下部は埋まっている。

立柱は梱石を挟む形で検出した。第1立柱は羨道入口に位置し入口側に傾き、羨道側壁内面と同じ面が続く。第1立柱は梱石と同じく四角柱を使用している。第2立柱は玄門入口に位置し側壁内面よりは内側に位置し大型の石材を使用している。規模は幅80cm、厚さ27cm、長さ140cmを測る。

排水溝は、羨道部中央の第1梱石の入口側から第2梱石の下部間に位置する。規模は、幅40cm、長さ3.1mを測る。構築方法は盛土を行いながら15～40cmの石材を横置きに使用する。第2梱石側は完全に埋まり、第1梱石側は下部が埋まり第1梱石の下を通り墓道に続く。

閉塞施設は第1梱石から第2梱石の間で行われている。閉塞は10～50cmの石を高さ0.9mに積み上げて行う。

遺物は第2梱石の上部に須恵器と閉塞石の上部中央から土師器の台付坏が2個出土した。

出土遺物 (第18図)

3は坏蓋の完形品である。天井部は扁平で口縁部は短く屈曲し直立気味に下がる。口縁端部は丸味をもつ。4・5は土師器の脚台付坏である。4は浅い坏部に「ハ」字状の脚台が付く。5は丸味のある坏部に「ハ」字状の脚台が付く。

5) 1号石室

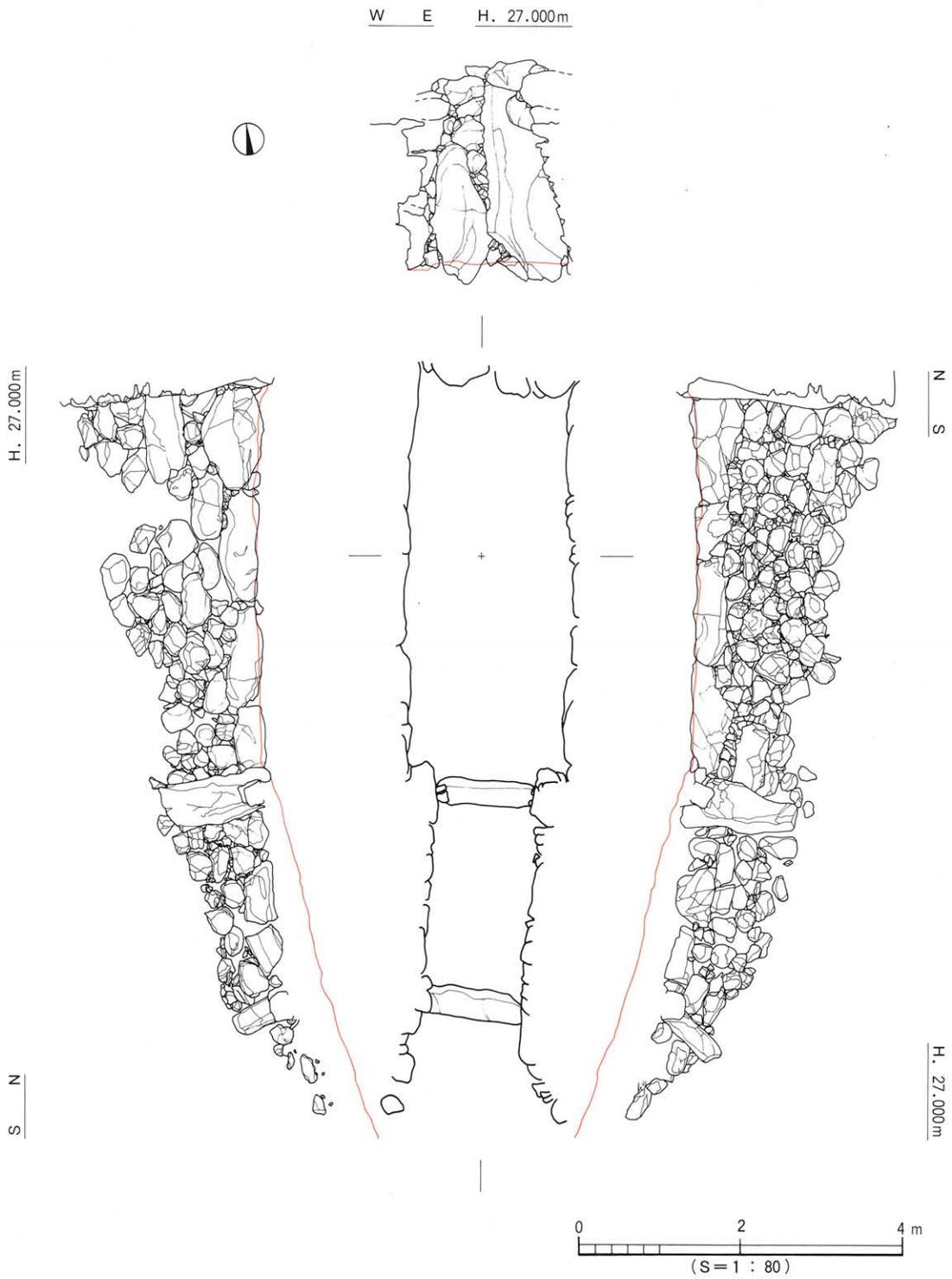
本墳の埋葬施設は主軸をN-8°30'-Eにとり、南側(谷)に向かって開口する単室の両袖形横穴式石室である。石室は、ほぼ長方形プランを有する。石室全長は、左側壁で7.70m、右側壁で7.75mを測る。石室内はすでに天井部を失っているため、側壁の崩落や流土によって深く埋没したが、床面の玉石、敷石、副葬品は元位置を保った状態で出土した。石室を構築する石材は全て花崗岩の割石が使用されている。玄室には、細長く開き気味の羨道部が接続する。

玄室は、奥壁幅1.80m、玄門側幅1.2m、右側壁長4.87m、左側壁長4.85mを測る。奥壁がわずかに広い長方形のプランを示す。構築方法は、割石を積み上げ構築する。奥壁には2枚の大型の石材を腰石に使用する。左側には175×100cm、右側には250×100cmの割石を使用し、上部には30～80cmの割石を積み上げる。左右の側壁には50～140cmを測る割石の面を整え、縦置きにし腰石として使用する。腰石上部には腰石と同規模の割石を、小口面が内側を向く状態で横置きし、持ち送りをしながら積み上げて構築する。

玄門部は素型の両袖で特別な施設はない。袖幅は右袖35cm、左袖30cmを測り、左袖が若干狭い。袖石には未加工の転石を立てて構築する。

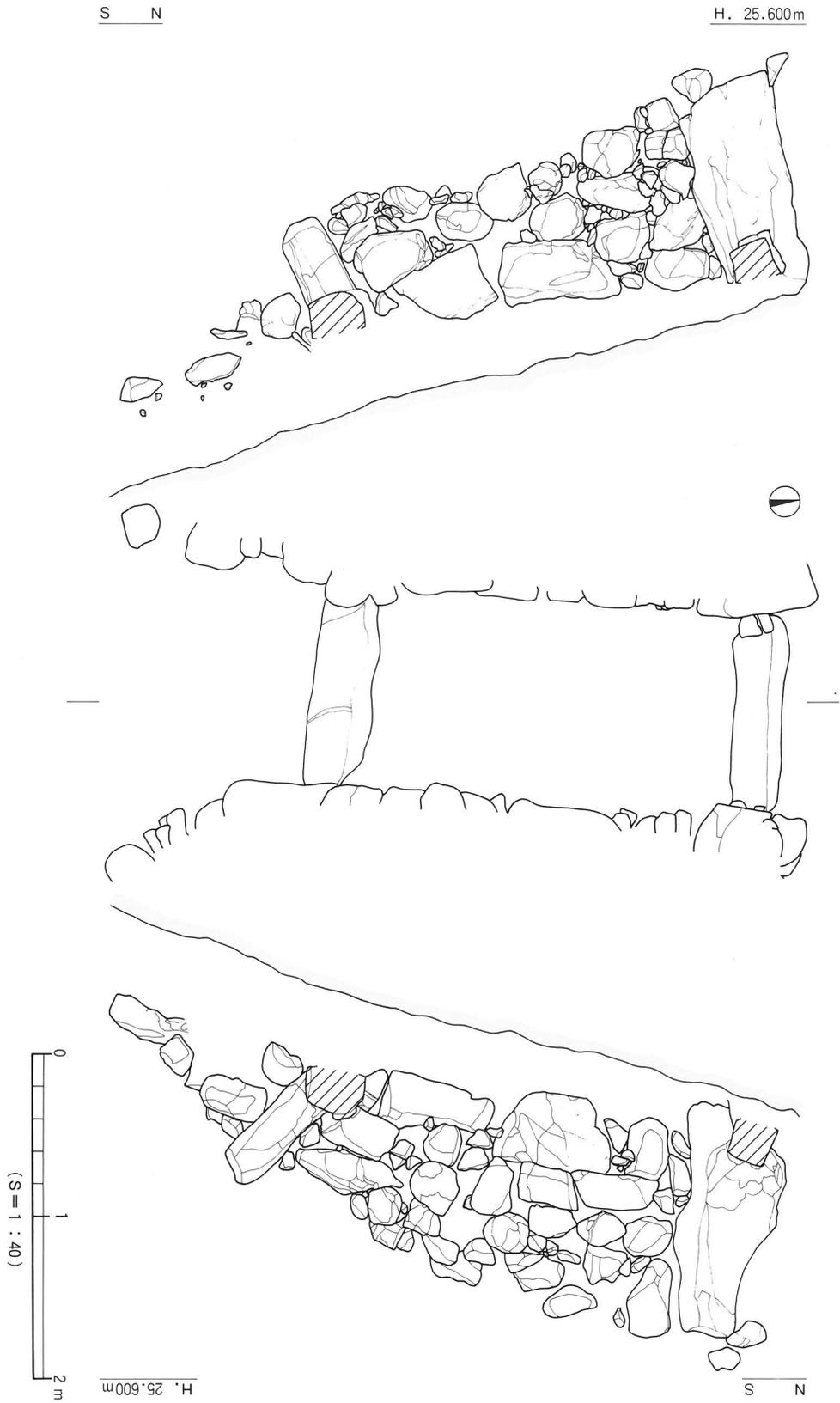
床面施設には20～40cmの扁平な割石を施し、その上面には5～10cmの玉石を敷き構築されている。

遺構と遺物



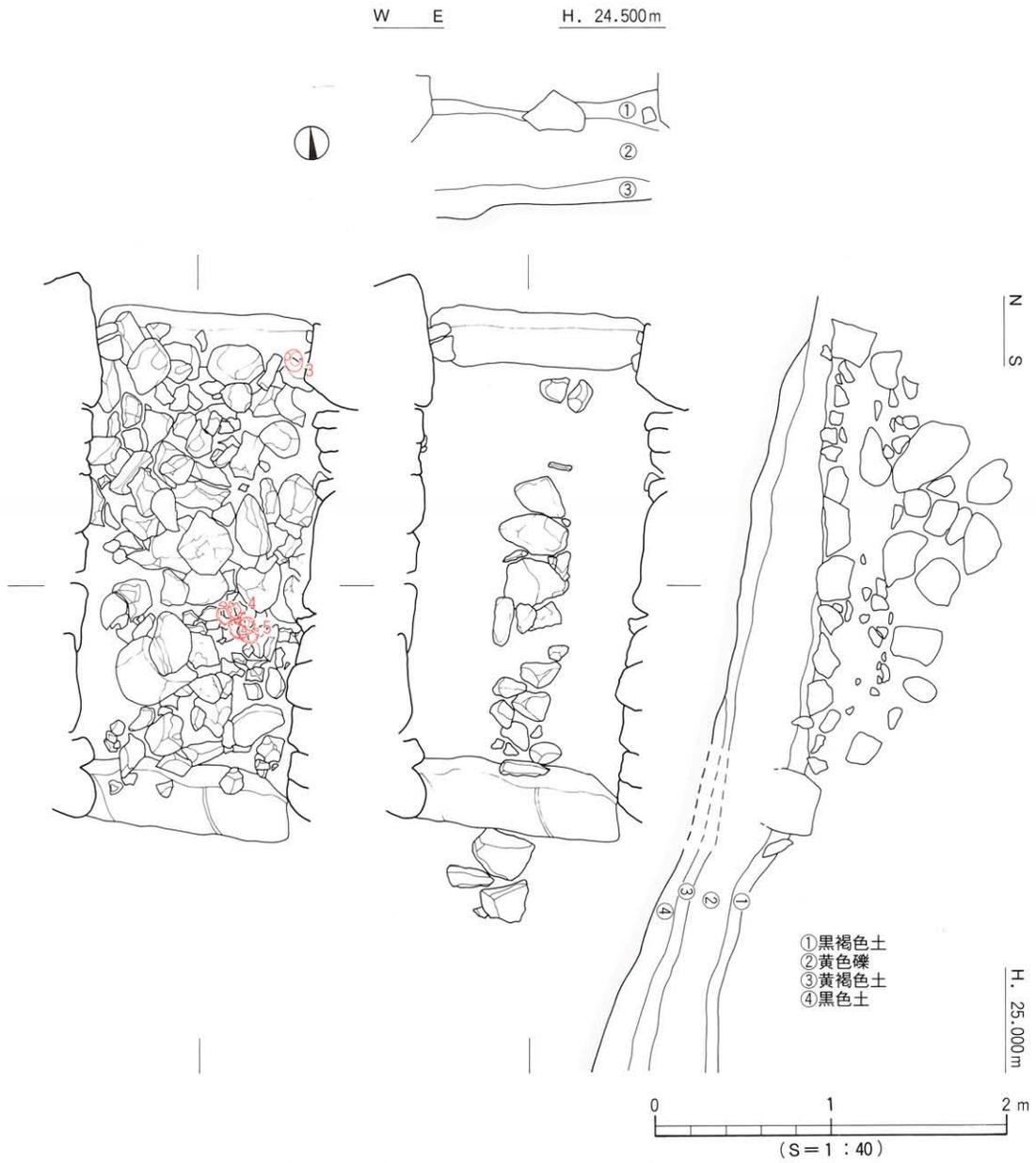
第15図 大池東1号墳1号石室測量図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区

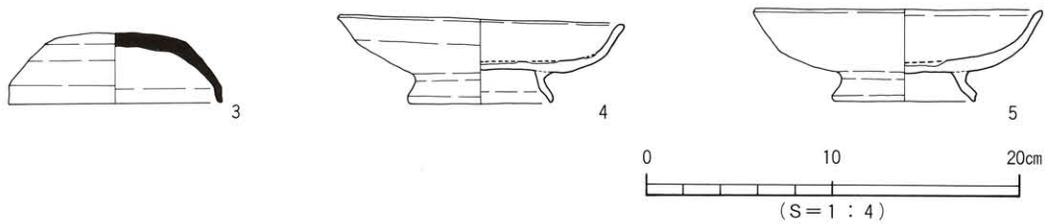


第16図 大池東1号墳1号石室羨道部展開図

遺構と遺物

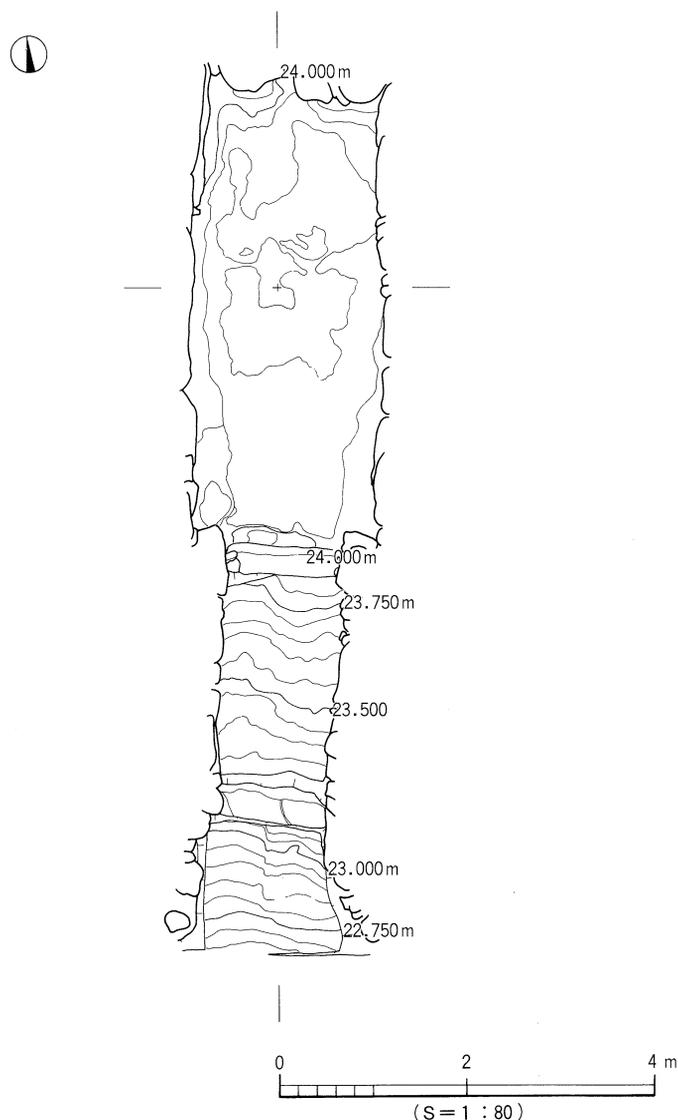


第17図 大池東1号墳1号石室閉塞石・排水溝測量図



第18図 大池東1号墳羨道出土遺物実測図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区



第19図 大池東1号墳1号石室内地形測量図

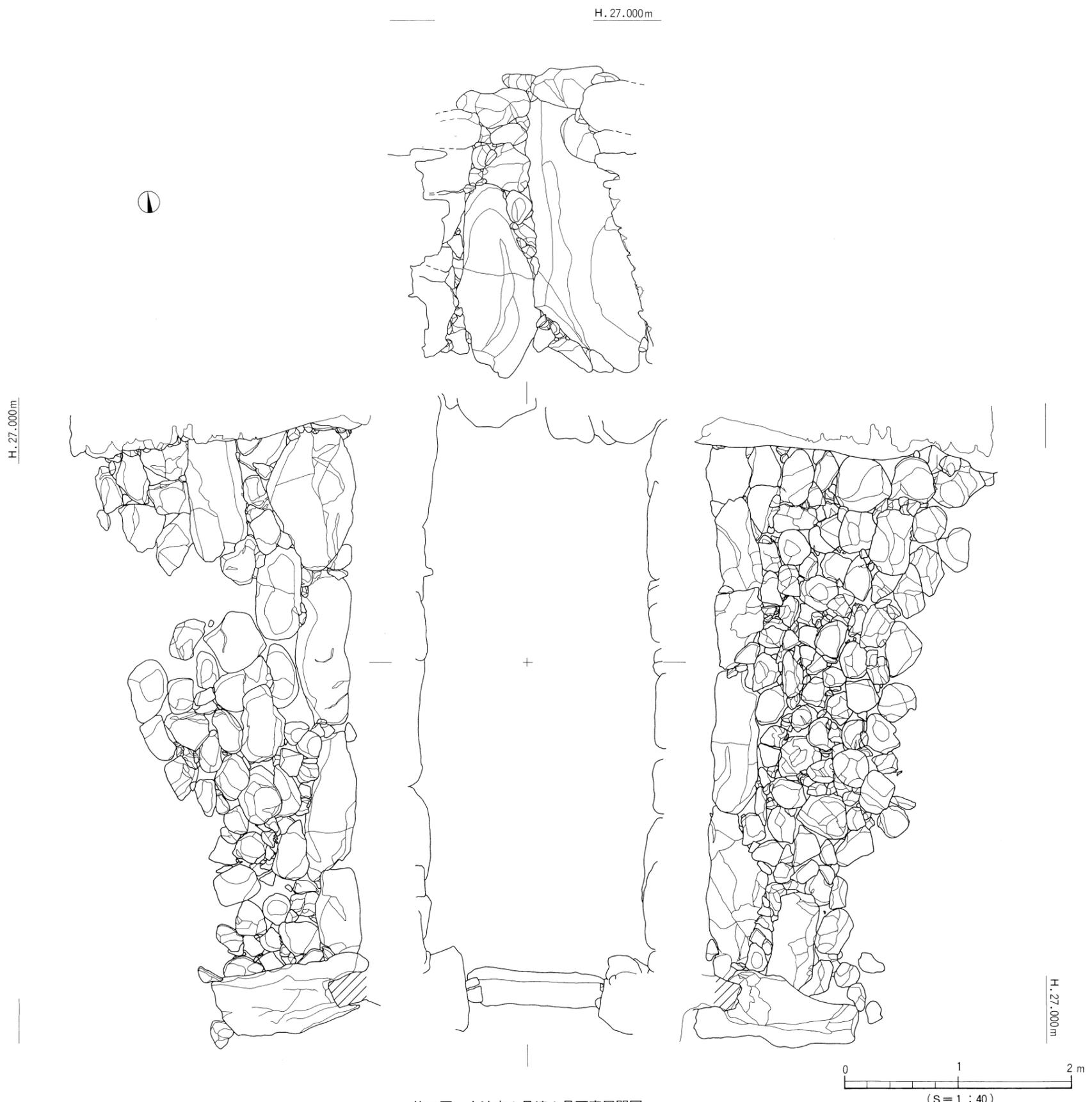
遺物は須恵器、鉄製品、耳環、玉が出土した。

出土状況は奥壁側、中央部、玄門側の3ヶ所にまとまりが見られる。奥壁側からは直刀1点、耳環4点、玉5点が出土した。中央部からは坏蓋、坏身、坏、高坏、耳環3点、玉2点が出土した。とくに、10・11の坏蓋と坏身は重なりあって出土した。玄門側からは坏蓋、坏身、壺、耳環1点が出土した。

土層埋土中からは、須恵器2点（16・19）と土師器1点（20）が出土し、埋土ふるいの中に耳環が1点出土した。

出土遺物 須恵器（第22・23図）

坏蓋（6～10） 6の口縁部は一部欠損している。右袖付近から出土した。口縁部は外反し端部は丸く、口縁部に刻みを施す。7は完形品である。左側壁の中央やや南寄り出土した。口縁部は直立し端部は丸く、天井部から口縁部にかけて屈曲して口縁部に至る。8・9は完形品である。右袖付近から出

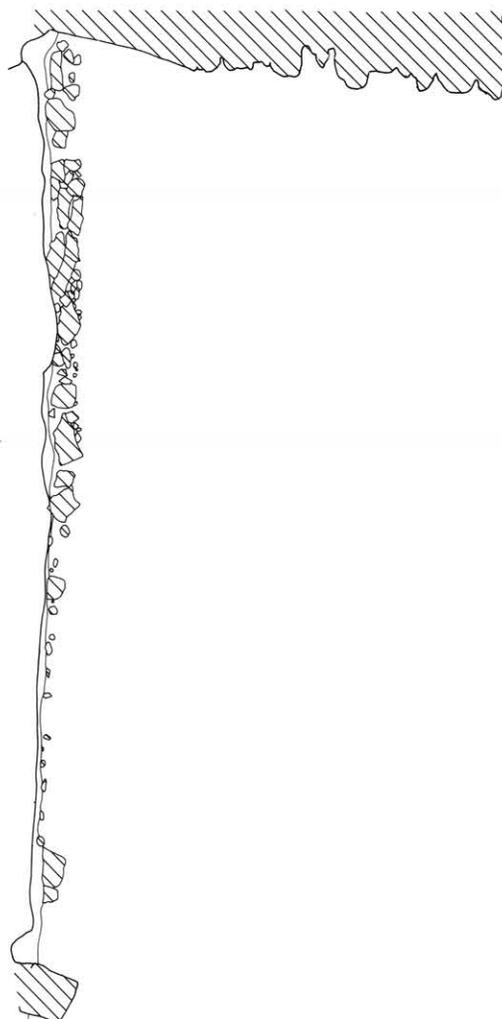
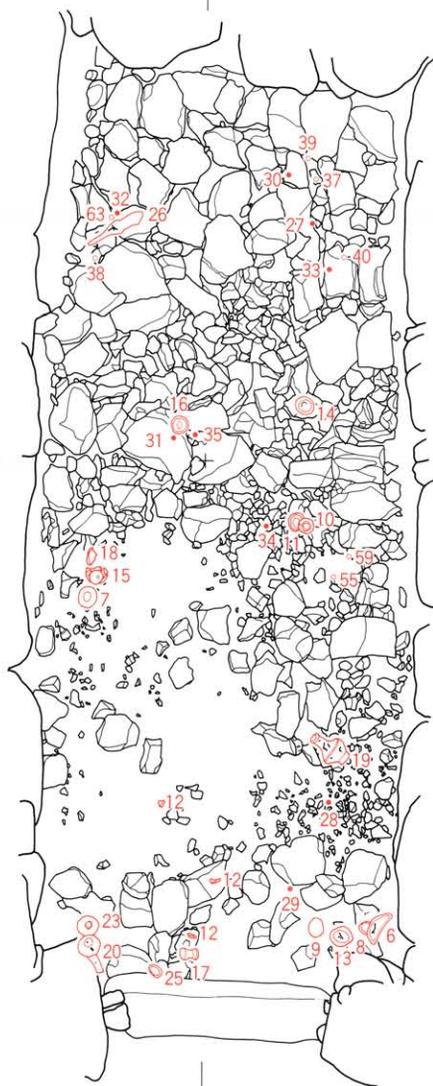
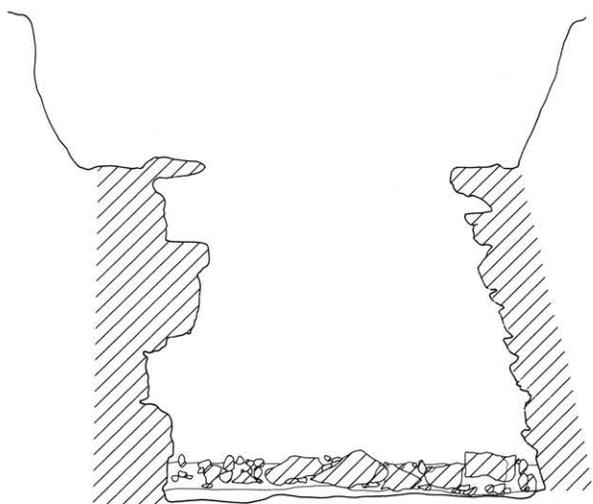


第20図 大池東1号墳1号石室展開図

遺構と遺物

W E

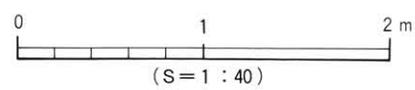
H. 27.000m



N S

H. 27.000m

○ 玉
● 耳環



第21図 大池東1号墳1号石室遺物測量図

大峰ヶ台遺跡9次調査1区

土した。天井部は丸みを持ち、屈曲して口縁部に至る。口縁部は、直立して下がり、端部は丸く仕上げる。10は完形品である。右側壁の中央やや南寄り出土した。11とはセットである。天井部に丸みがあり、天井部と口縁部の境に凹線が巡る。口縁部は直立し端部は丸い。

坏身 (11~13) 11は完形品である。右側壁の中央やや南寄り出土した。10とはセットである。体部は内湾気味にたちあがり、口縁部はわずかに外反する。底部は丸みのある平底である。12は1/3の残存である。受部端に沈線状の凹みが巡る。13は完形品である。右袖付近から出土した。たちあがり短く内傾し端部は丸い。受部は上外方にひねりだされている。底部は平底である。底部外面に回転ヘラ切り痕がある。

坏 (14) 右側壁の中央やや南寄り出土した。口縁部は外反し端部は丸い。底部は平底である。ほぼ完形品である。

高坏 (15~17) 15は左側壁の中央やや南寄り出土した無蓋高坏である。坏部は埴型である。口縁部は直立し端部は丸い。脚部は短脚で脚端部は上下に肥厚し、脚端面はわずかに凹む。16は玄室中央で出土した無蓋高坏である。坏部は埴型で、口縁部は直立し端部は丸い。脚部は短脚で端部は上下に肥厚し、端面はわずかに凹む。17は玄門部の中央付近で出土した無蓋高坏である。坏部は埴型で、口縁部は直立し口縁端部は尖りぎみで丸い。脚部は「ハ」字状に外反し、脚端部は丸い。裾部に1条の凹線状の凹みが巡り、脚端面は1条の凹線状の凹みがある。

埴 (18) 18は1/2の残存である。口縁部は直立し端部は丸い。

壺 (19~23) 19は右側壁の南側で出土した台付長頸壺である。口縁部が一部欠損するがほぼ完形品である。口縁部は欠損し、高台は、「ハ」字状をしている。頸部は2条の沈線が巡り、胴部と肩部の境界には1条の沈線が巡る。20は左袖付近で出土した台付長頸壺である。高台が欠損するもののほぼ完形品である。口縁端部は外反し、高台接合痕が残る。頸部には2条の沈線が巡り、胴部上位に1条の沈線と刺突列点文が巡る。21は長頸壺の口頸部片で口縁部1/3の残存である。口縁部は内湾し、口縁端部は尖る。頸部は2条の凹線が巡る。22は短頸壺の蓋で完形品である。框石の西側で出土した。天井部は扁平であり、天井部から口縁部にかけてなだらかなカーブを描き、口縁部は内傾している。23は短頸壺で完形品である。左袖付近で出土した。口頸部は短く直立し、胴部は扁球形である。口縁端部は内傾し、底部は平底である。

甕 (24) 24は甕の小片である。口縁部は大きく外反する。

皿 (25) 25は土師器の皿であり、2/3の残存である。口縁部は外反し端部は尖りぎみである。

鉄製品 (第23図、図版11)

直刀 (26) 26は直刀で、大きなコブ状の固まった錆が厚く付着する。先端付近は比較的錆が少なく原型が復元しやすい。遺存長31.5cm、刃身幅4.3cmを測る。断面形態は二等辺三角形状を呈する。

装飾品 (第24図、図版11)

耳環11個・ガラス玉13個・白玉13個・土玉1個が出土した。

耳環 (27~36) 27は完形品である。表面層中がかなり剥がれており、銅芯部が露呈する。外径3.1cm、内径1.7cmを測る。28は完形品である。表面層は一部しか残っておらず銀色を呈する。銅芯部分がかんり露出し、全体的には暗緑色を呈する。残存径は外径2.7cm、内径1.7cmを測る。29は完形品である。表面は鈍い銀色を呈する。部分的に金色に光る表面層が剥がれた部分は黒緑色を呈する。外径2.8cm、内径1.65cmを測る。30はかんり変形している。表面は銀色、表面層は全体の1/3ほどしか

遺構と遺物

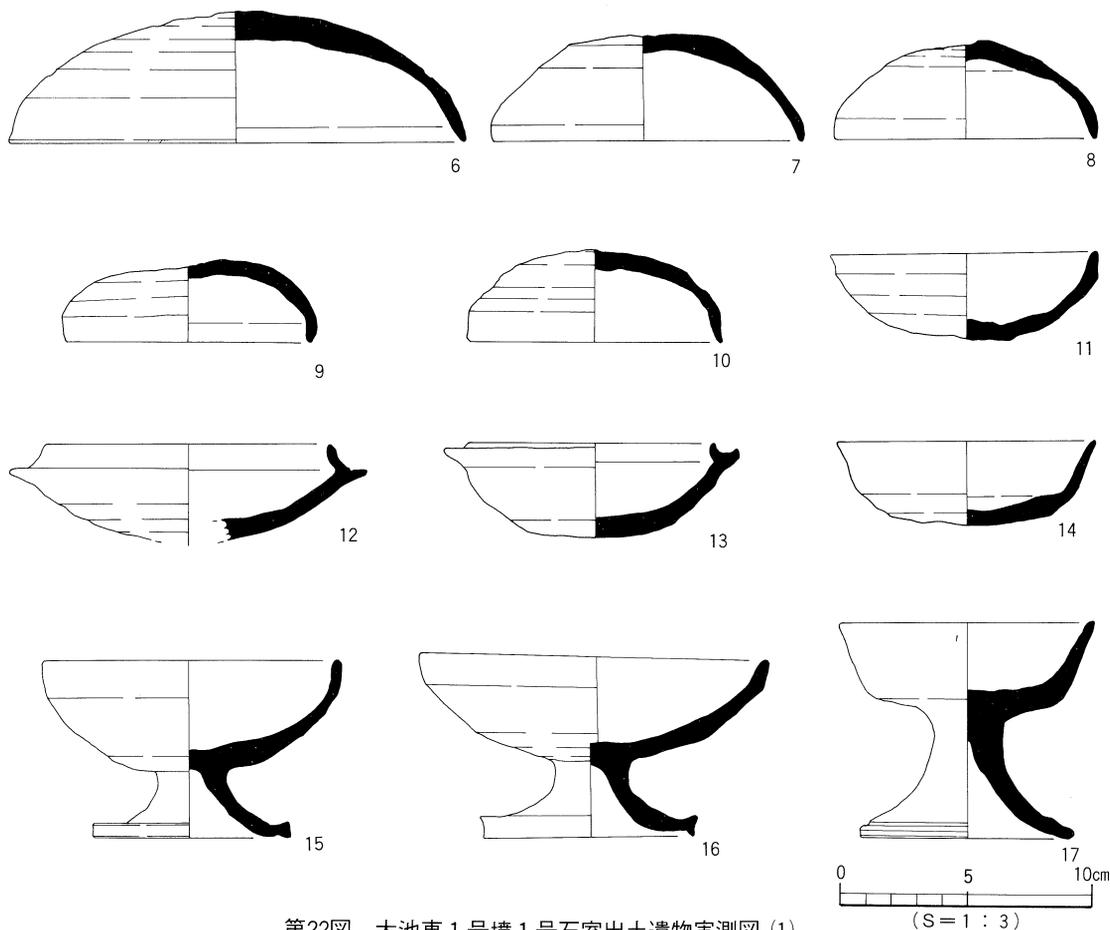
残っており、表面層が剥がれた部分は腐食が著しく緑色を呈する。残存径は外径が2.4cm、内径1.8cmを測る。31は完形品である。表面は鈍い銀色に光る。外径2.4cm、内径1.3cmを測る。32はほぼ完形品である。表面層は鈍い銀色に光る。表面層が剥がれた部分は緑色を呈する。表面層が一部剥がれており、銅芯が露出しているものの鍍銀部分の残りは良い。外径2.3cm、内径1.4cmを測る。33は完形品である。表面層は鈍い金色に光る。表面層が剥がれた部分は黒緑色を呈する。外径2.1cm、内径1.2cmを測る。34は完形品である。表面層は金色に光る。表面層が剥がれた部分は緑色もしくは黒色を呈する。外径2.1cm、内径1.1cmを測る。35はほぼ完形品である。表面は鈍い金色に光る。表面層が剥がれた部分は緑色もしくは黒色を呈する。外径2.1cm、内径1.15cmを測る。36はほぼ完形品である。全体的に鈍い銀色を呈する。黄緑色の薄い錆などが付着する。外径2.6cm、内径1.6cmを測る。

ガラス玉 (37~49) ガラス玉の大きさは長さ0.21~1.02cm、径0.4~1.2cm、孔径0.1~0.5cmを測る。色調は緑色が37、濃紺色が38~43、紺色が44・48・49、黄色が45、青緑色が46、黄緑色47である。

白玉 (50~62) 白玉の大きさは長さ0.28~0.62cm、径0.6~0.8cm、孔径0.18~0.3cmを測る。色調は青灰色が50・51・53・54・56~58・61、灰色が52・55・59・60、濃緑灰色が62である。

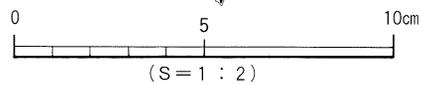
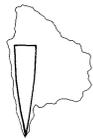
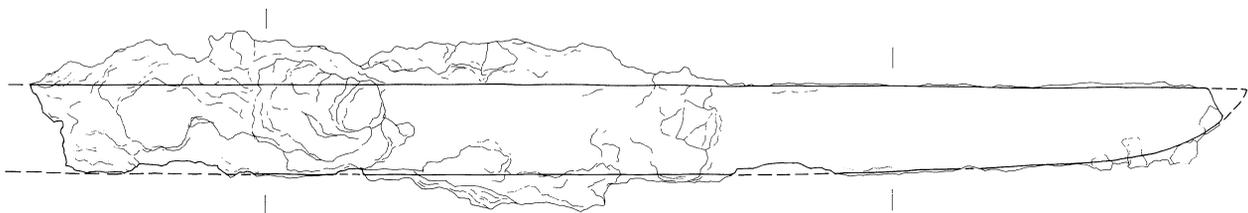
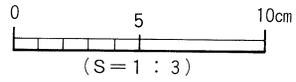
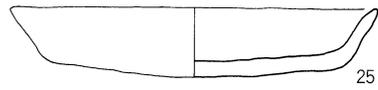
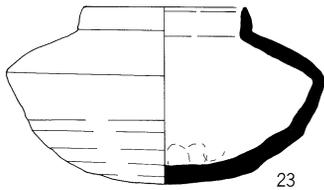
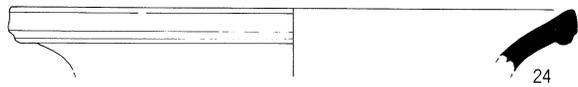
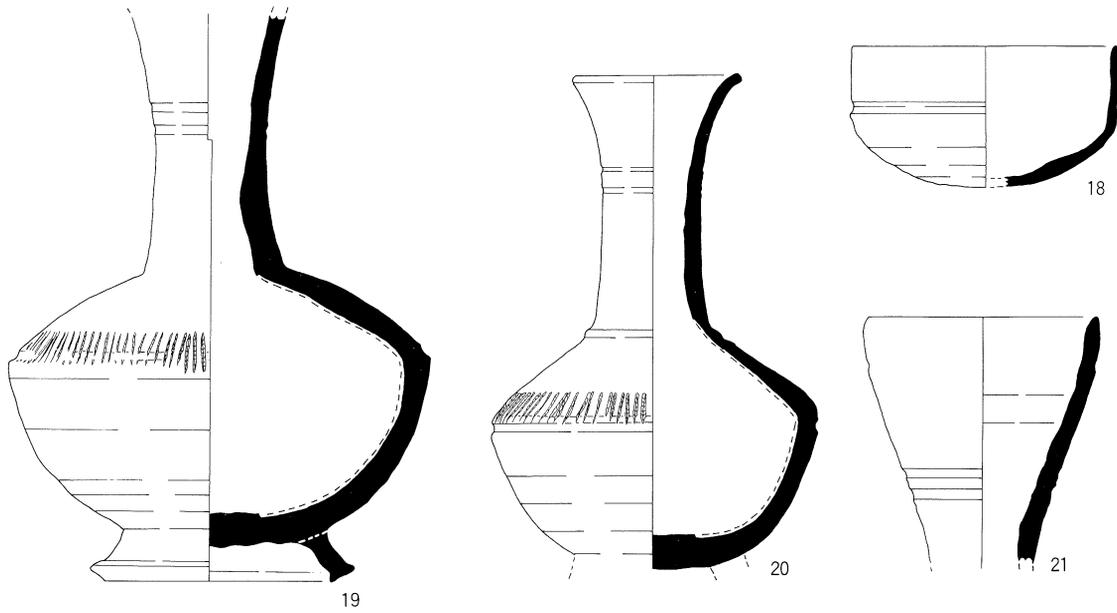
土玉 (63) 大きさは長さ0.34cm、径0.70cm、孔径0.18cmを測る。色調は灰色である。

時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代終末期に構築された古墳と思われる。



第22図 大池東1号墳1号石室出土遺物実測図(1)

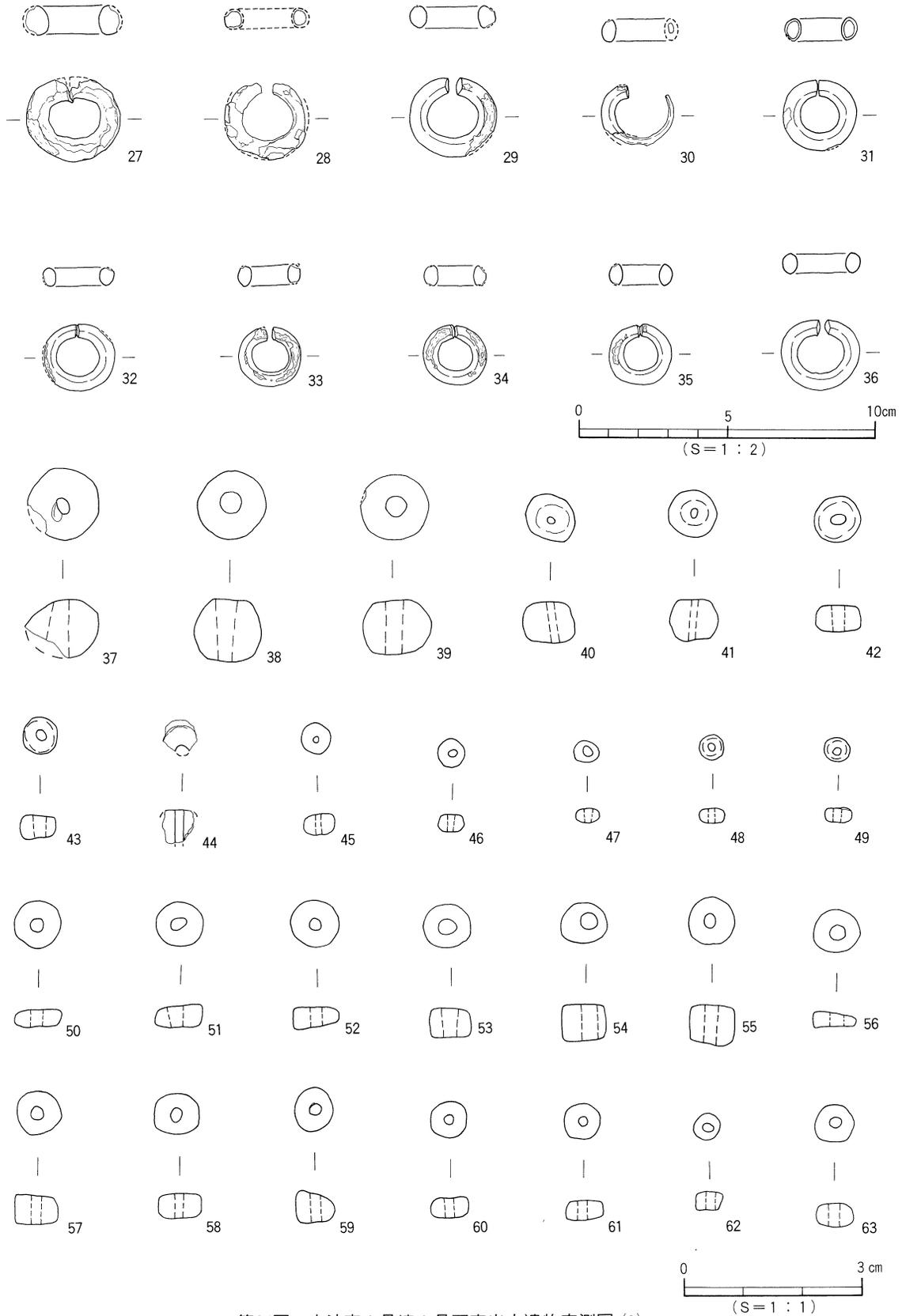
大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区



26

第23図 大池東1号墳1号石室出土遺物実測図(2)

遺構と遺物



第24図 大池東1号墳1号石室出土遺物実測図(3)

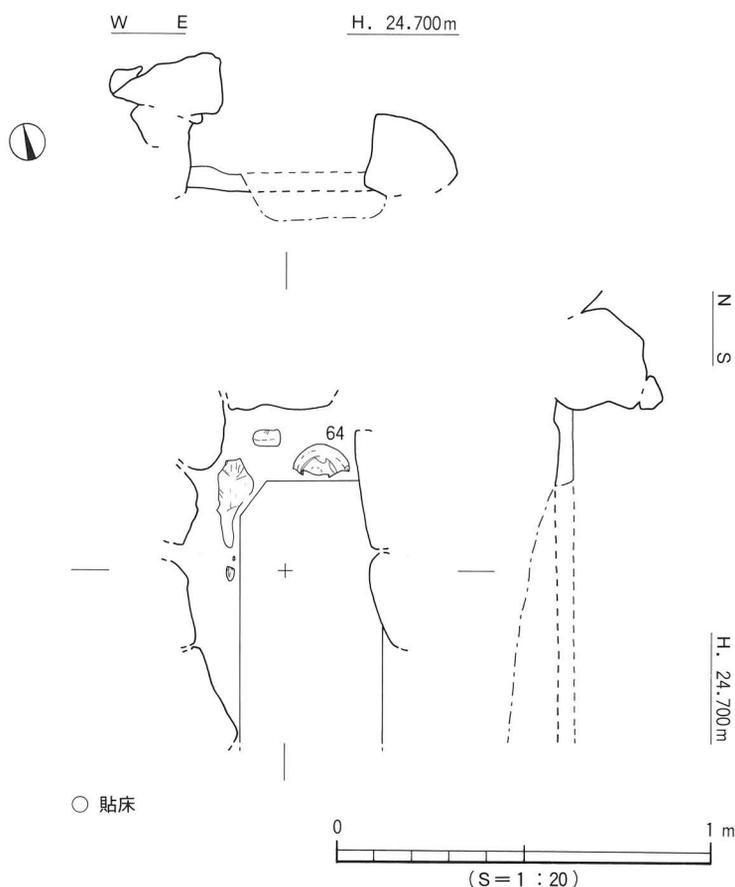
6) 2号石室 (第25・27図、図版9)

2号石室は、1号石室の東側に位置し、南開口の石室である。石室の検出規模は長さ0.9m、幅0.38m、高さ0.3~0.43mを測る。右側壁が1~2段、左側壁と奥壁は2段が残存している。天井石は検出されなかった。床面は貼り床がなされていた。出土遺物は、須恵器の坏身が1点と木棺と思われる木と炭が出土している。

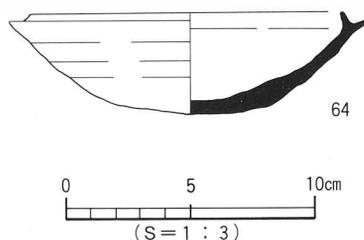
出土遺物 (第26図)

坏身 (64) たちあがりは内傾し、端部と底部は丸い。

時期：出土遺物の坏身の形態と石室が1号墳と同時構築のため、古墳時代終末期の石室と思われる。

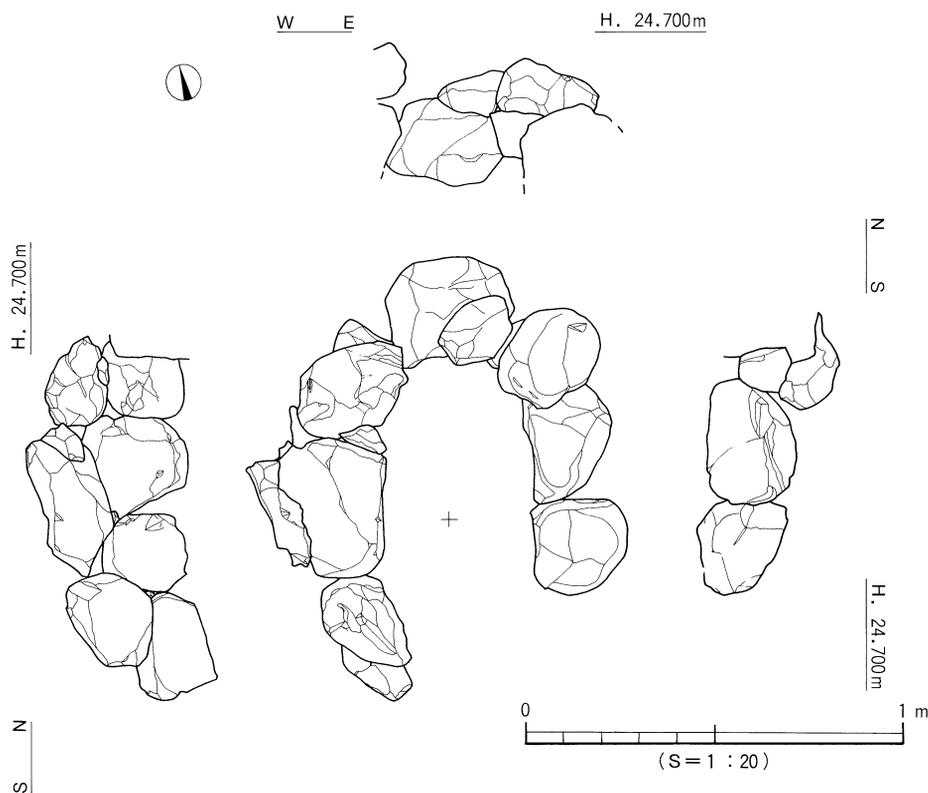


第25図 大池東1号墳2号石室測量図(1)



第26図 大池東1号墳2号石室出土遺物実測図

遺構と遺物



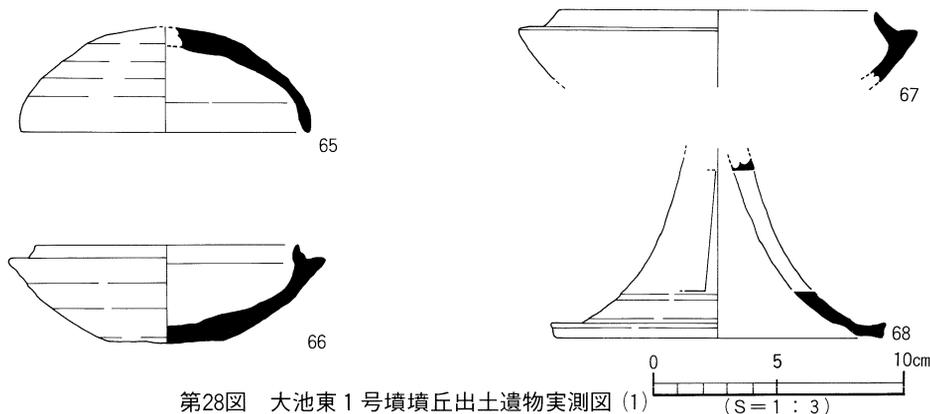
第27図 大池東1号墳2号石室測量図(2)

7) 石室以外の出土遺物

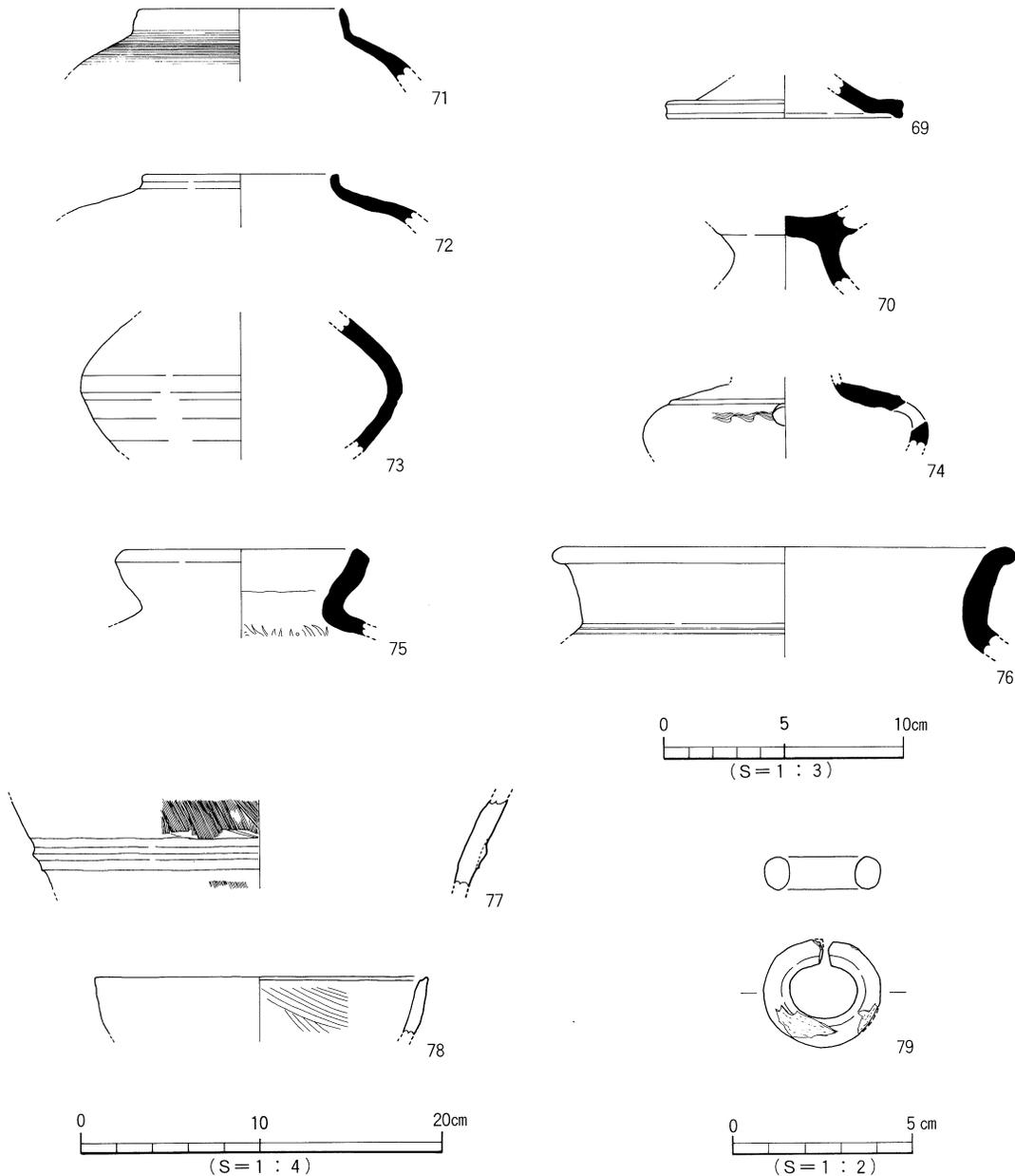
本古墳では玄室や羨道、墓道以外に墳丘や周溝内から遺物が出土している。墳丘からはトレンチ掘削時に盛土から出土したものを含め、石室周辺と奥壁側の墳丘斜面から出土したものが多く、とりわけ、前庭部からは耳環が1点出土している。

出土遺物 (第28・29図)

65～68・71～73・78・79は石室南半部周辺、D・E4区の盛土内、76は奥壁側の斜面B4区、77は周溝内から出土したものである。その他はトレンチ掘削時に出土したもので、69はT3、70・74・75はT11出土品である。65は須恵器坏蓋、66・67は坏身である。65・67は小片、66は約1/3の残存である。68～70は須恵器高坏の脚部片である。68は3方向にスカシをもつ。71・72は須恵器短頸壺の口頸部である。小片。73は長頸壺の胴部片、74は甗の胴部片である。径1cm大の孔を穿つ。75・76は須恵器の甕である。77は周溝出土の円筒埴輪である。小片。78は土師器坏で、1/8の残存である。口縁部内面に内傾する段をもつ。79は耳環の完形品である。全体的に灰緑色を呈する。外径3.2cm、内径1.85cmである。



第28図 大池東1号墳墳丘出土遺物実測図(1)



第29図 大池東1号墳墳丘出土遺物実測図(2)

4. 小 結

本調査は大峰ヶ台西丘陵の標高27mの傾斜面に立地し、古墳1基（大池東1号墳）を検出した。大池東1号墳は円墳で径22mを測る。墳丘施設は横穴式石室1基、竪穴小石室1基、羨道部、墓道2基、周溝を検出した。以下、調査成果を記述する。

(1) 墳丘構造

墳丘の構築方法は5段階に分かれる。①斜面をL字状にカットを行い平坦面を作る。②裾部をL字カットした平坦面と同じ高さになるように盛土を行う。③墓壙を掘り石室の位置をきめる。④石室を構築しながら裏込めと盛土を行う。⑤2号石室を構築し最終盛土を行う。このように墳丘構造では、

遺構と遺物

地山整形を行う5段階の構築方法であることと、2号石室を1号石室と同時に構築していることが検証できた。

(2) 石室構造

1号石室は南面に開口する横穴式石室である。奥壁には大型の1枚石を2個据え、側壁にも比較的大きな石を7段に積み上げて使用している。玄門部には立柱と梱石を据える。床面には、敷石と主関を敷く構造である。1号墳の石室は、大型の石を使う大型の横穴式石室であることが解った。

(3) 付帯施設

付帯施設には、羨道部、閉塞、排水溝、墓道がある。

羨道部は、玄門部に取り付き裾部は墳丘内に続く構造である。閉塞石は乱雑に積み上げている。排水溝は羨道下部から検出した。墓道は羨道部の裾に取り付く。

(4) 遺物

玄室からは、須恵器、土師器、鉄剣、鉄鏃、耳環、材質の異なる玉が出土した。羨道からは、土師器の腕が2点出土した。しかし2点の土師器腕は、古墳造成時のものではなく10世紀代と古墳時代以降の腕である。

本調査で検出した大池東1号墳は比較的遺存状況の良好な横穴式石室である。石室内からは7世紀第1四半期から第2四半期に比定される遺物が出土している。規模的にみると大峰ヶ台丘陵においてこれまでに検出された同時期と思われる石室の中では最も大型のものである。特に奥壁に大型の石を据えて構築していることや、側壁にも比較的大きな石を使用している点は注目される場所である。また、羨道部で検出された排水施設は松山平野においてはあまり検出例がなく貴重な資料となるものである。

〔文献〕

- 梅木 謙一 1994「客谷古墳群B地区」「朝日谷1号墳」『大峰ヶ台丘陵の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮内 慎一・山ノ内志郎 1992「道後城北遺跡群の須恵器」『祝谷アイリ遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
田城 武志・高尾 和長 1994『東山古墳群4・5次調査』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
栗田 茂敏 1995『大峰ヶ台遺跡4次調査』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
松山市史料集編集委員会 1980『松山市史料集第一巻 考古編Ⅰ』
松山市史料集編集委員会 1986『松山市史料集第二巻 考古編Ⅱ』
松山市教育委員会 1989『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

大峰ヶ台遺跡 9次調査 1区

遺物一覧 ——凡例——

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

遺物観察表は高尾・田崎が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法 量 欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

体→体部、脚→脚部、天→天井部、頸→頸部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)、多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含むである。」

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表2 大池東1号墳1号石室墓道出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	埴	口径(14.7) 残高 5.5	体部は丸味をもつ。端部は先細り。内面に放射状・らせん状の暗文あり。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	ヨコナデ→暗文	乳赤色 茶色	密 ◎		

表3 大池東1号墳1号石室墓道出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
2	飾帯金具?	完形	鉄製	3.3	1.7	0.75	4.928	断面は「V」字状。内側に互い違いに鋸が残る。	11

表4 大池東1号墳1号石室墓道出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
3	坏蓋	口径 11.3 器高 3.8	扁平な天井部。口縁部が短く屈曲し、直立気味に下がる。口縁端部は丸味をもつ。	㊦ヘラ切り痕 ㊧体回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	長(2~4) ◎		
4	脚台付坏	口径 15.1 底径 7.5 器高 4.7	浅い坏部に「ハ」字状の脚台がつく。	㊦マメツ ㊧体上ミガキ?(マメツ) ㊨体下ヨコナデ ㊩脚マメツ	マメツ ハクリ	乳茶色 乳茶色	密 ◎		11
5	脚台付坏	口径 15.0 底径 7.3 器高 4.9	丸味ある坏部に「ハ」字状の脚台がつく。	㊦ヨコナデ ㊧体ミガキ?(マメツ) ㊨脚マメツ	ヨコナデ	乳赤茶色 乳赤茶色	密 ◎		11

遺物観察表

表5 大池東1号墳1号石室内出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	坏蓋	口径 18.0 器高 5.2	口縁部と天井部はなだらかなカーブを描く。口縁部外反し、端部は丸く、刻みを施す。	㊤回転ヘラケズリ→ナデ ㊦回転ナデ→ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~5) ○		
7	坏蓋	口径 12.3 器高 4.2	天井部は屈曲し、口縁部に至る。口縁部は直立し端部は丸い。	㊤回転ヘラ切り未調整 ㊦回転ナデ	㊤回転ナデ→ナデ ㊦回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~5) ○		
8	坏蓋	口径 10.3 器高 3.8	口縁部と天井部は屈曲し、口縁部は直立し端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊦回転ナデ→ナデ	内面は回転ナデの渦巻きがきれいに残っている。	青灰色 青灰色	長(1~4) 密 ○		
9	坏蓋	口径 9.7 器高 3.3	口縁部と天井部は屈曲し、天井部は丸い。口縁端部は直立し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊦回転ナデ	回転ナデ	青灰色、灰色 青灰色	長(1~2) 密 石(2) ○		
10	坏蓋	口径 10.1 器高 3.6	口縁部と天井部は屈曲し、境に凹線が巡る。口縁部は直立し、端部は丸い。	㊤回転ヘラケズリ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~3) 密 ○		
11	坏身	口径 10.4 器高 3.4	底部は丸味をもつ。口縁部はわずかに外反する。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ切り未調整	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) 密 ○		
12	坏身	口径(10.2) 器高 3.7	受部端に沈線状の凹みが残る。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ切り未調整	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) 密 ○		
13	坏身	口径 9.6 器高 3.8	立ち上がりは短く内傾し端部は丸い。受部は上外方にひねりだされている。底部は平底である。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~3) 密 ○		
14	坏	口径 10.15 器高 3.4	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。底部は平底である。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	薄灰色 淡黄灰色	砂密 ○		
15	高坏	口径 11.7 底径 7.9 器高 7.5	無蓋高坏。坏部は塊型である。口縁部は直立し端部は丸い。脚部は短脚で、脚端部は上下肥厚する。	回転ナデ→ナデ ㊦回転ナデ	㊦回転ナデ→ナデ ㊦回転ナデ	白灰色、灰色 白灰色、灰色	長(1~2) 密 ○		
16	高坏	口径 13.8 底径 8.2 器高 7.4	無蓋高坏。坏部は塊型である。口縁部は直立し端部は丸い。脚部は短脚で、脚端部は上下肥厚する。	㊦回転ヘラケズリ→ナデ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2)		
17	高坏	口径 10.0 底径 8.2 器高 8.6	無蓋高坏で完存品である。坏部は塊型である。口縁部は直立し、端部は尖りぎみで丸い。	㊦回転ナデ→ナデ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(2~2.5) 密 ○		
18	塊	口径(10.6) 残高 5.5	口縁部は直立し端部は丸い。底部は平底である。	㊦回転ナデ ㊧ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(2) 長(1~2) 密 ○		
19	壺	底径 8.9 残高 23.4	台付長頸壺。頸部に2条の沈線。胴部と肩部は屈曲している。高台は「ハ」字状をしている。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
20	壺	口径 6.8 器高 19.6	台付長頸壺。頸部に2条の沈線。胴部上位に1条の凹線と刺突列点文。胴部と肩部は屈曲している。	㊦回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	密 ○		
21	壺	口径(9.1) 残高 9.8	長頸壺の口頸部片。口縁部は内湾し、端部はとがる。頸部に2条の凹線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	長密 ○		
22	蓋	口径 8.4 残高 3.1	短頸壺の蓋。口縁部と天井部は、なだらかなカーブを描く。口縁端面は、内傾し、端部はとがる。	㊤回転ヘラケズリ→ナデ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 ○		
23	壺	口径 6.4 器高 7.1	短頸壺。口頸部は短く直立し、口縁端部はとがる。胴部は扁球形で、平底である。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	㊦回転ナデ ㊧ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1)		
24	甕	口径(22.3) 残高 2.5	口縁部は、大きく外反している。	ナデ 回転ナデ	マメツ	緑灰色 緑灰色	長密 ○	自然釉	

大峰ヶ台遺跡 9 次調査 1 区

大池東 1 号墳 1 号石室内出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	皿	口径 14.6 底径 12.0 器高 2.8	土師器の皿。口縁部は外反している。 口縁端部は、尖りぎみ。	㊦回転ナデ ㊧手持ちヘラケズリ	回転ナデ→不正 方形のナデ	橙茶褐色 灰茶色	密 ○		11

表 6 大池東 1 号墳 1 号石室内出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
26	直刀	茎部欠損	鉄	31.5	2.3	0.4	247.632	重量には石の重さを含む。	11

表 7 大池東 1 号墳 1 号石室内出土遺物観察表 装飾品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
27	耳環	完形	銅	3.1	1.7	0.97	16.684	中実	
28	耳環	完形	銅	2.7	1.7	—	6.037	中実	
29	耳環	完形	銅	2.8	1.65	0.73	11.223	中実	
30	耳環	かなり変形	銅	2.4	1.8	0.60	3.809	中実	
31	耳環	完形	銅	2.4	1.3	0.75	3.973	中空	
32	耳環	ほぼ完形	銅	2.3	1.4	0.58	6.605	中実	
33	耳環	完形	銅	2.1	1.2	0.61	4.885	中実	
34	耳環	完形	銅	2.1	1.1	0.69	4.944	中実	
35	耳環	ほぼ完形	銅	2.1	1.15	0.66	5.553	中実	
36	耳環	ほぼ完形	銅	2.6	1.6	0.64	8.183	中実	

遺物観察表

大池東1号墳1号石室内出土遺物観察表 装飾品

(2)

番号	器種	残存	材質色	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
37	玉	2/3	ガラス 緑	1.00	1.20	0.25	1.513		11
38	玉	完形	ガラス 濃紺	1.02	1.15	0.37	1.831		11
39	玉	完形	ガラス 濃紺	0.90	1.14	0.37	1.581		11
40	玉	完形	ガラス 濃紺	0.70	0.80	0.12	0.661		11
41	玉	完形	ガラス 濃紺	0.70	0.80	0.10	0.684		11
42	玉	完形	ガラス 濃紺	0.45	0.78	0.22	0.430		11
43	玉	完形	ガラス 濃紺	0.40	0.60	0.19	0.183		11
44	玉	1/3	ガラス 紺	0.58	0.60	(0.16)	0.206		11
45	玉	完形	ガラス 黄	0.32	0.50	0.10	0.117		11
46	玉	完形	ガラス 青緑	0.30	0.44	0.11	0.085		11
47	玉	完形	ガラス 黄緑	0.21	0.41	0.18	0.047		11
48	玉	完形	ガラス 紺	0.25	0.40	0.10	0.063		11
49	玉	完形	ガラス 紺	0.25	0.40	0.18	0.085		11
50	玉	完形	滑石 青灰	0.30	0.80	0.20	0.252		11
51	玉	完形	滑石 青灰	0.30	0.80	0.30	0.351		11
52	玉	完形	滑石 灰	0.37	0.80	0.20	0.323		11
53	玉	ほぼ完形	滑石 青灰	0.50	0.78	0.30	0.508		11
54	玉	ほぼ完形	滑石 青灰	0.60	0.76	0.30	0.551		11
55	玉	完形	滑石 灰	0.62	0.75	0.23	0.681		11
56	玉	ほぼ完形	滑石 青灰	0.28	0.75	0.24	0.210		11
57	玉	完形	滑石 青灰	0.50	0.75	0.21	0.446		11
58	玉	完形	滑石 青灰	0.40	0.72	0.18	0.376		11
59	玉	ほぼ完形	滑石 灰	0.57	0.65	0.20	0.436		11
60	玉	完形	滑石 灰	0.30	0.60	0.18	0.193		11
61	玉	完形	滑石 青灰	0.31	0.60	0.18	0.203		11
62	玉	完形	滑石 濃緑灰	0.30	0.46	0.20	0.069		11
63	玉	完形	土 灰	0.34	0.70	0.18	0.189		11

大峰ヶ台遺跡9次調査1区

表8 大池東1号墳2号石室内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
64	坏身	口径 12.7 器高 4.0	たちあがりは内傾し、端部と底部は丸い。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 △		

表9 大池東1号墳墳丘出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
65	坏蓋	口径(11.4) 残高 4.2	丸みのある天井部。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く仕上げる。1/8の残存。	㊦回転ヘラケズリ 1/2 ㊧回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉 D4区	
66	坏身	口径(10.4) 器高 3.9	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。受部はほぼ水平にのび、底部は平底風である。1/3の残存。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ 1/3	回転ナデ	青灰色 灰色	長(2) ◎	E4区	
67	坏身	口径(12.6) 残高 2.7	たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部は比較的太くやや上方にのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	D4区	
68	高坏	底径(12.9) 残高 7.2	「ハ」字状に外反する脚部。脚端部は上方に肥厚し、脚端面は凹む。3方向の透かしあり。1/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~5) ◎	E4区	
69	高坏	底径(9.6) 残高 1.6	高坏の脚裾部。脚端面に凹線状の凹みあり。1/6の残存。	マメツ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎	T3	
70	高坏	残高 3.1	高坏の脚基部。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	T11	
71	壺	口径(8.3) 残高 3.1	短頸壺の口頸部。口縁部は内傾し端部は尖る。肩部外面にカキメ調整を施す。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	E4区	
72	壺	口径(8.1) 残高 2.0	短頸壺の口頸部。口縁部は直立し端部は丸い。肩部の張りは強い。1/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	E4区	
73	壺	胴部径(13.2) 残高 5.6	長頸壺の胴部。1/4の残存。	㊨上回転ナデ ㊨下回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	E4区	
74	甗	胴部径(11.8) 残高 2.7	扁球形の胴部。胴上位に1条の沈線と波状文を施す。径1cm大の孔を穿つ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	T11	
75	甗	口径(9.5) 残高 3.7	口縁部は内湾し、口縁端部は肥厚する。1/4の残存。	回転ナデ	㊦回転ナデ ㊧円弧叩き	灰色 灰色	密 ◎	T11	
76	甗	口径(18.3) 残高 4.5	口縁部はわずかに外反し、口縁端部は玉縁状に仕上げる。頸部外面にカキメ調整を施す。3/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	B4区	
77	埴輪	残高 5.0	円筒埴輪の胴部。丸みのある断面三角形のタガを貼付する。	ハケ(10本/cm)	マメツ	乳橙色 乳色	石・長(1) ◎	周溝	
78	坏	口径(18.4) 残高 3.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部内面は内傾する段をもつ。小片。	ヨコナデ	ハケ(5本/cm)	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ◎	E4区	

表10 大池東1号墳墳丘出土遺物観察表 装飾品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
79	耳環	完形	銅	3.2	1.85	0.88	24.633		

第4章

— 2区の調査 —

第4章 2区の調査

1. 調査の経緯

調査地は、大峰ヶ台主丘陵の西裾にある谷部の東斜面に位置し、字名は客谷である。谷部の地形は南に開口し、北上がりを示す。この谷部は、昭和63年2月22日～同年8月17日の間に客谷古墳群B地区として調査が行われており、谷北部で2基の円墳や土坑、祭祀遺構、集石遺構などの調査が行われている。また、大峰ヶ台頂上付近の調査では、弥生時代中期の高地性集落が発見されている。調査は、古墳関連遺構や弥生集落関連遺構の検出を主目的とし、平成6年4月4日～同年6月30日の間、調査を行った。

調査区は、客谷古墳群B地区1号墳、2号墳の東上方斜面地にあたり、調査対象面積は2,190㎡である。調査前の状況は、段状の開墾後が部分的に見られた。斜面の傾斜角は25°～35°を測り、比較的急傾斜をなしている。調査は、北から南へT1～T9までの9本のトレンチを設定し、その後、T2～T3の間を第1拡張区、T4～T5の間を第2拡張区、T6～T7の間を第3拡張区として土層断面、平面の精査を行った。

2. 層位 (第31・32図)

調査地は急傾斜の斜面であり、そのため堆積土は少なく基本的に腐葉土等の表土と地山の風化土から形成されている。

第Ⅰ層は腐葉土層である。調査区全面にはなく部分的にたまっている。層厚5～40cmを測る。第Ⅱ層は明黄褐色土、第Ⅲ層は鈍い黄橙色土、第Ⅳ層は暗黄褐色土、第Ⅴ層は灰黄褐色土、第Ⅵ層は黄橙色土、第Ⅶ層は明褐色土、第Ⅷ層は暗褐色土である。地山土は花崗岩風化土で部分的に変色が認められ一様ではなく、第Ⅱ層以下はすべて地山層といえるものである。遺物包含層は、全く検出していない。

3. 遺構と遺物

第3拡張区の表土から須恵器の小破片1点と土師器甕の破片が1点出土した。遺物の器形からは、時期を認定できないが、客谷古墳群B地区の1号、2号墳と同時期の6世紀前半の遺物と思われる。その他のトレンチや拡張区から遺物は1点も出土しなかった。

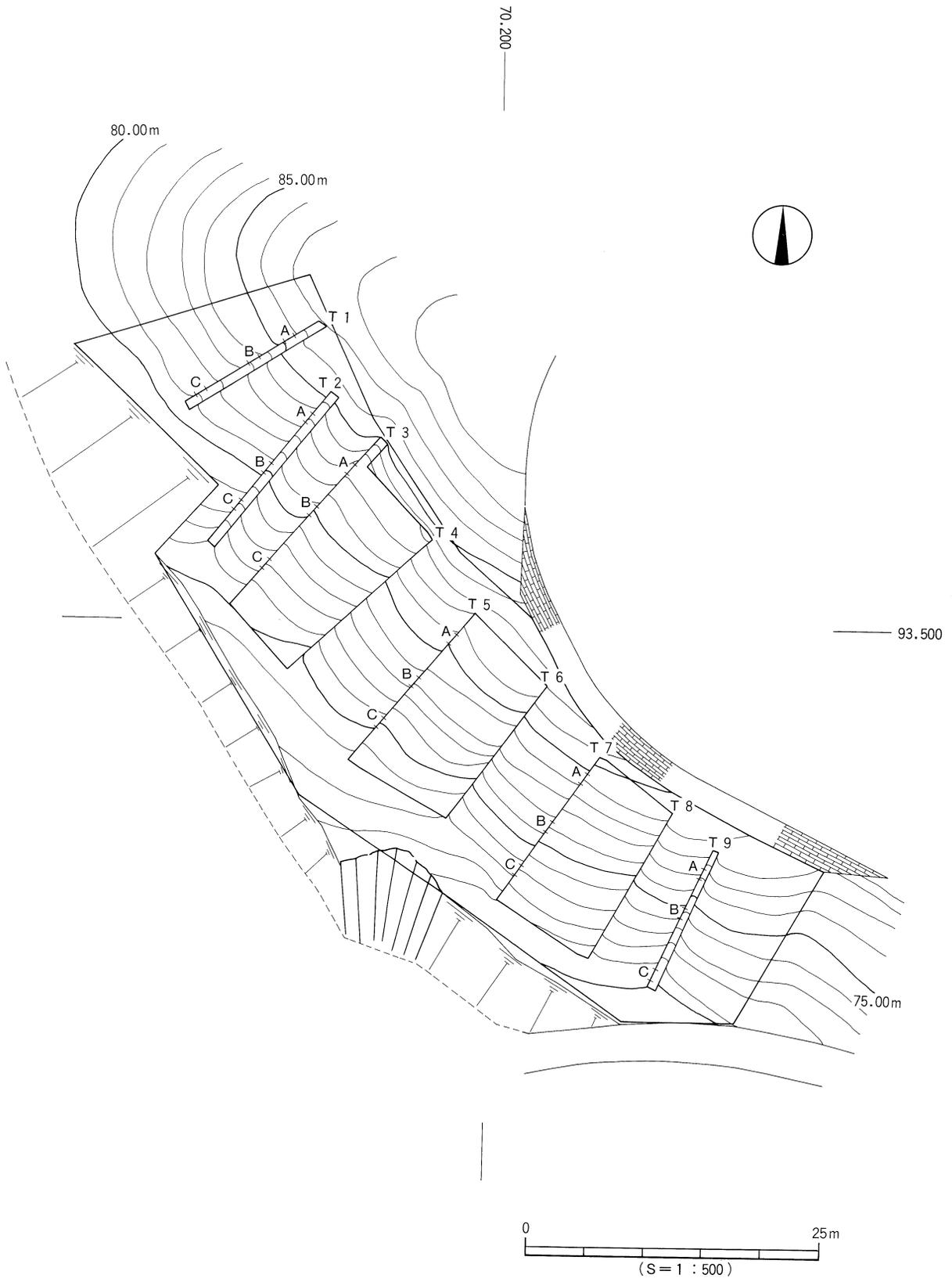
4. 小 結

今回の調査では、遺構は全く検出されず、遺物も表採品が2点のみであった。2区は比較的急傾斜の丘陵斜面地であり、人為的介入が困難であったと思われ、2区には弥生時代～古墳時代の遺跡に域が及んでいないことが確認された。

〔文献〕

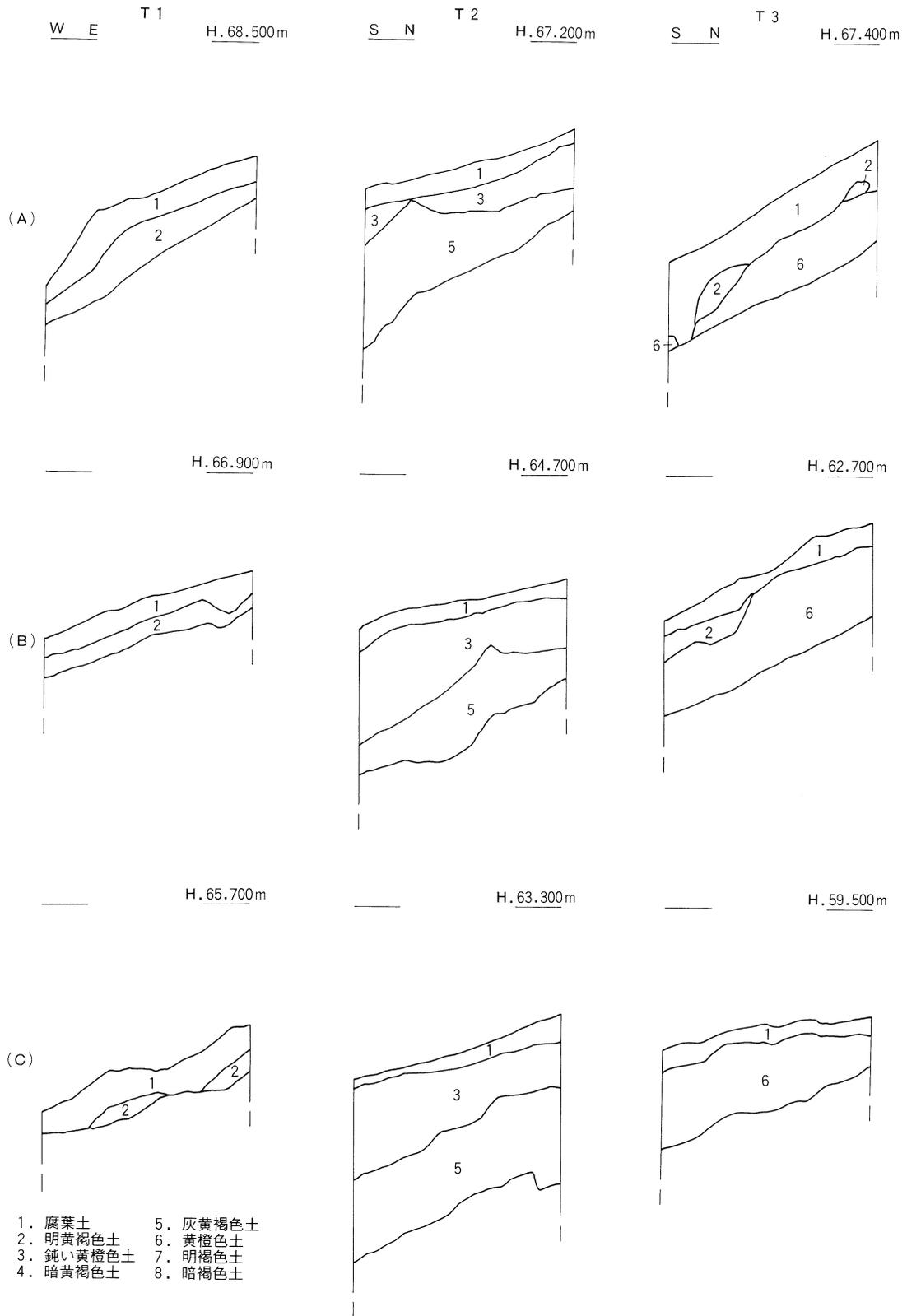
- 松村 淳・梅木 謙一 1994「客谷古墳群B地区」『大峰ヶ台丘陵の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 茂敏 1991「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

大峰ヶ台遺跡 9次調査 2区



第30図 調査区測量図

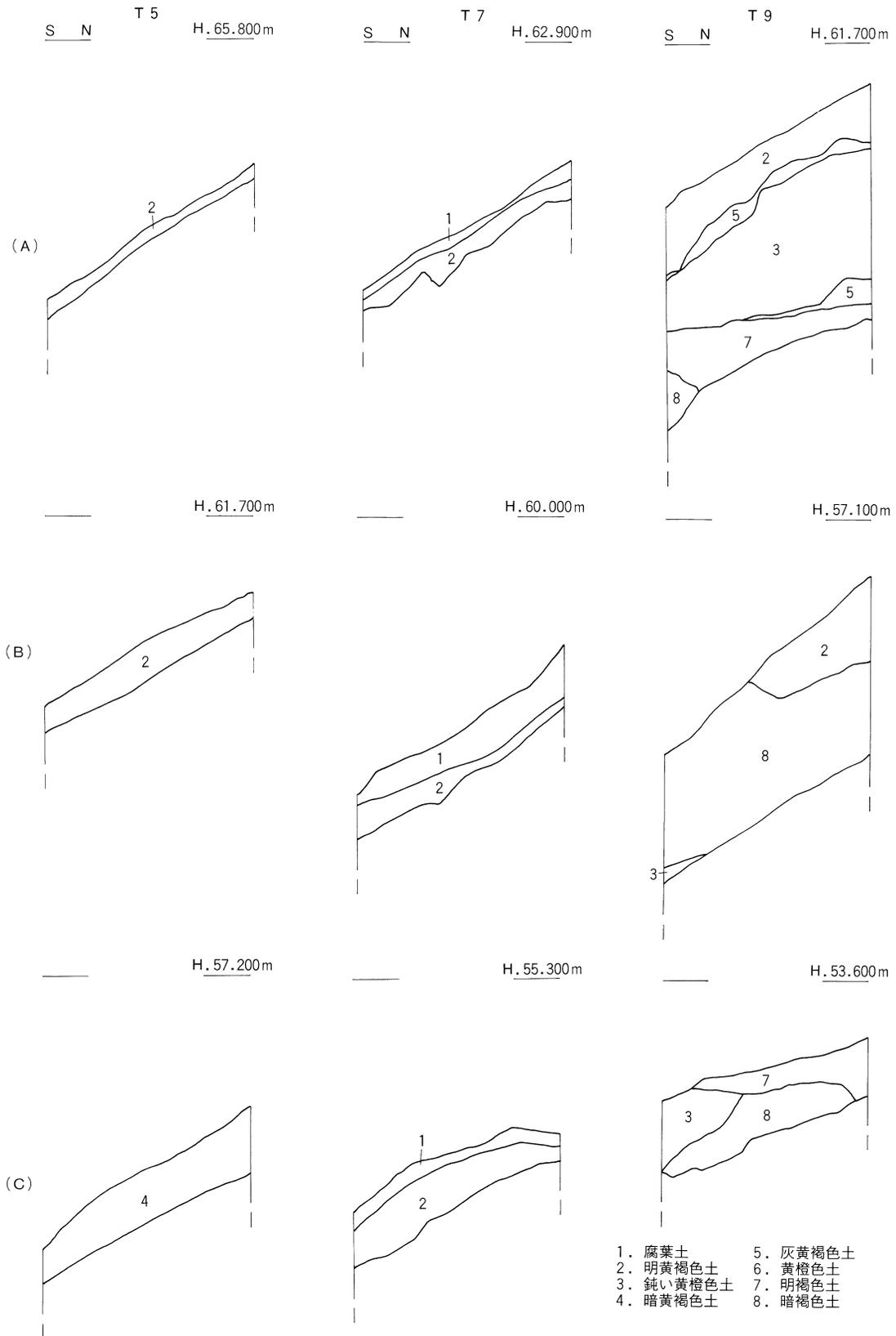
層 位



第31図 トレンチ土層柱状図 (1)

(S=1:30)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 2区



第32図 トレンチ土層柱状図 (2)

(S = 1 : 30)

第5章

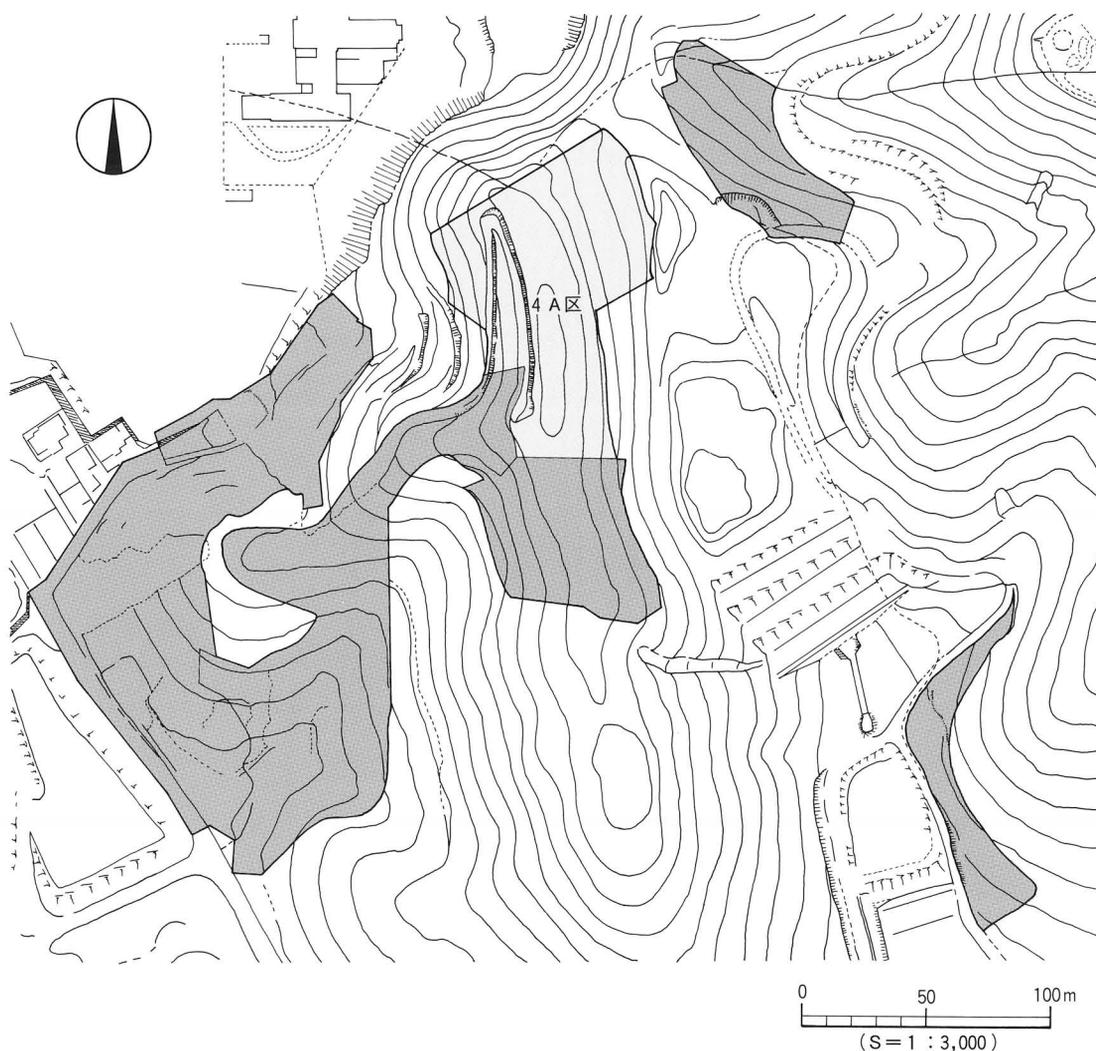
— 4 A区の調査 —

第5章 4A区の調査

1. 調査の経緯

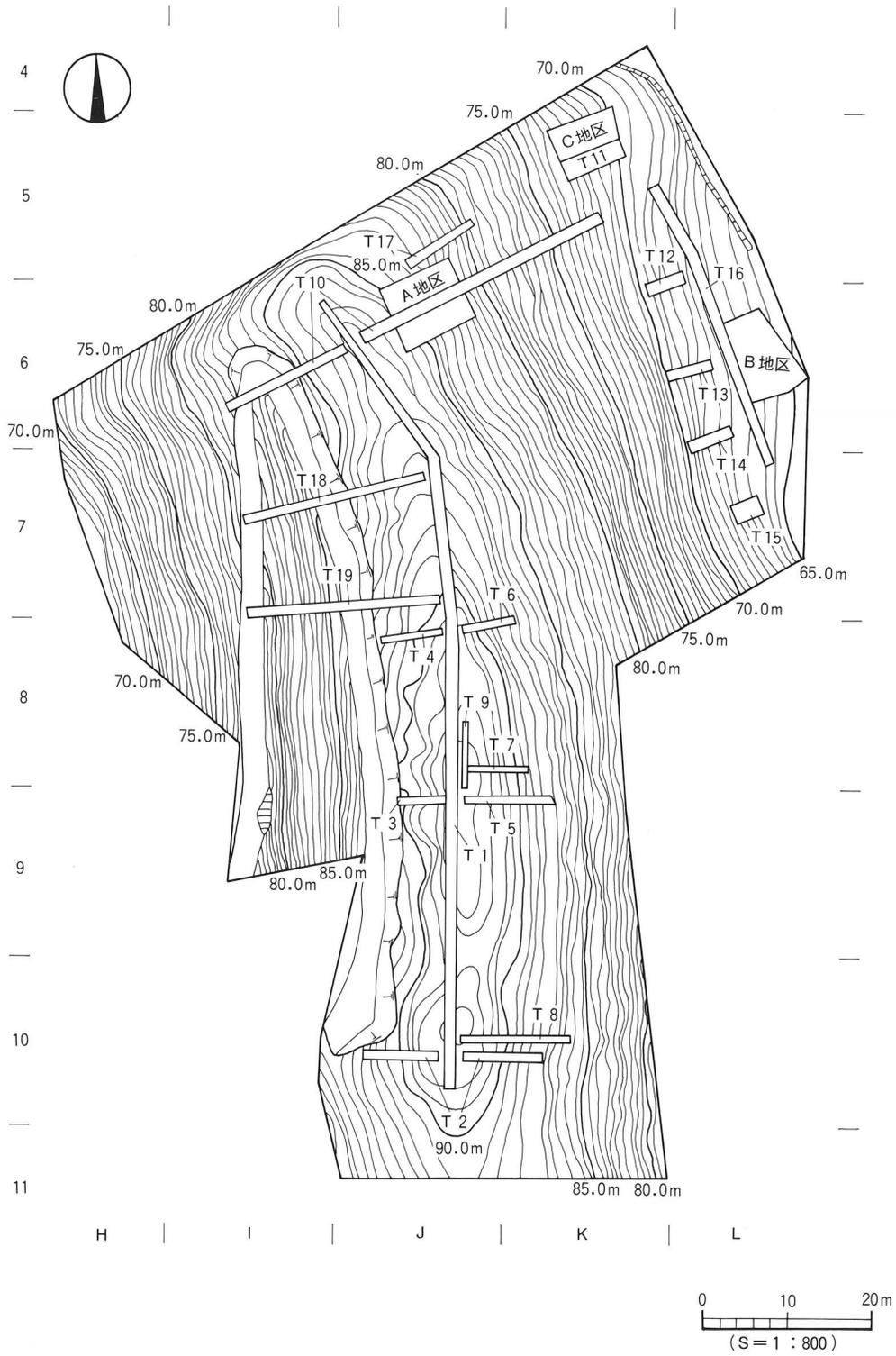
4A区は調査地の北東部、大峰ヶ台丘陵の主丘陵に対して谷間を挟んだ西側の分岐丘陵に位置する(第33図)。調査地の地形は南北に尾根が長く、裾部が東西に広がり丘陵全体に急勾配をもっている。東西約90m、南北130m、調査面積は6,290m²である。調査地の標高は丘陵頂上部で92m、裾部で65mを測る。

調査は平成7年4月1日から同年10月13日までの約半年間実施した。まず、丘陵頂上部の尾根線に沿ってトレンチ(T1)を設定し、その後、T1に直交するように、東西斜面部にT2からT19の18本のトレンチを設定した(第34図)。19本のトレンチのうちT10、T11、T16の3本のトレンチ内から遺物が出土したことから、それぞれのトレンチを拡張し3つの小地区(A、B、C地区)を設定した。その結果、A地区からは溝状遺構1条、B地区からは集石を検出した。また、C地区からは石室の一部を検出したことから古墳と認定した。古墳は『客谷10号墳』として調査を進めた。



第33図 調査区位置図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 A区



第34図 調査区測量図・トレンチ位置図

2. 遺構と遺物

〔1〕 トレンチ調査

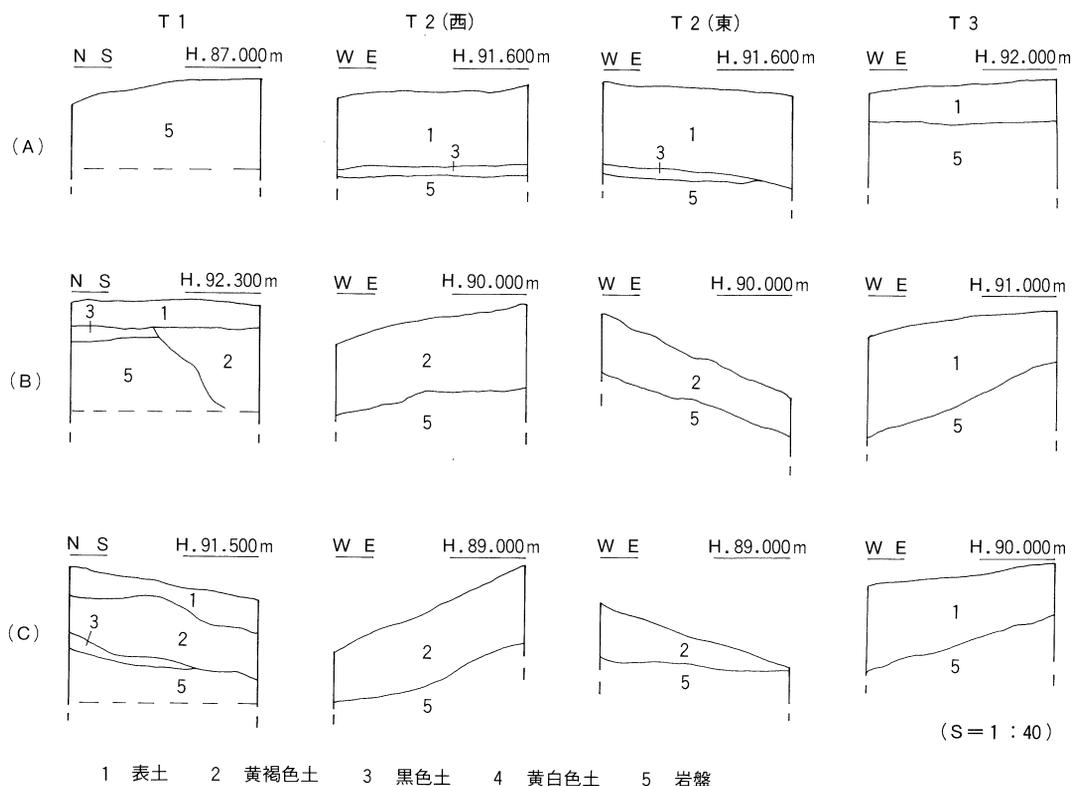
(1) 層 位

調査地は急勾配の斜面のため堆積土は少なく、大部分が表土と地山の風化土から形成されている。基本層位は第1層表土、第2層黄褐色土、第3層黒色土、第4層黄白色土（地山）、第5層岩盤である。このうち、第3層は部分的に検出された土層である。各トレンチの土層堆積状況はトレンチの上位、中位、下位の順にA、B、Cとして土層柱状図を掲載した。ただし、T1とT16では地形の高低差があまりないため、トレンチ北側をA、南側をCとしている（第35～37図）。

トレンチ調査の結果、丘陵頂上部はほとんどの地域で第1層が厚さ10～20cm堆積しており、第1層下には第5層の岩盤が露出する状況であった。一部、T1の南側及び中央部付近とT2、T7、T8、T9にて第3層が部分的に検出された。一方、丘陵斜面部では頂上部と同様、第1層と第5層のみの検出であるが、T10から第3層がブロック状に検出された。

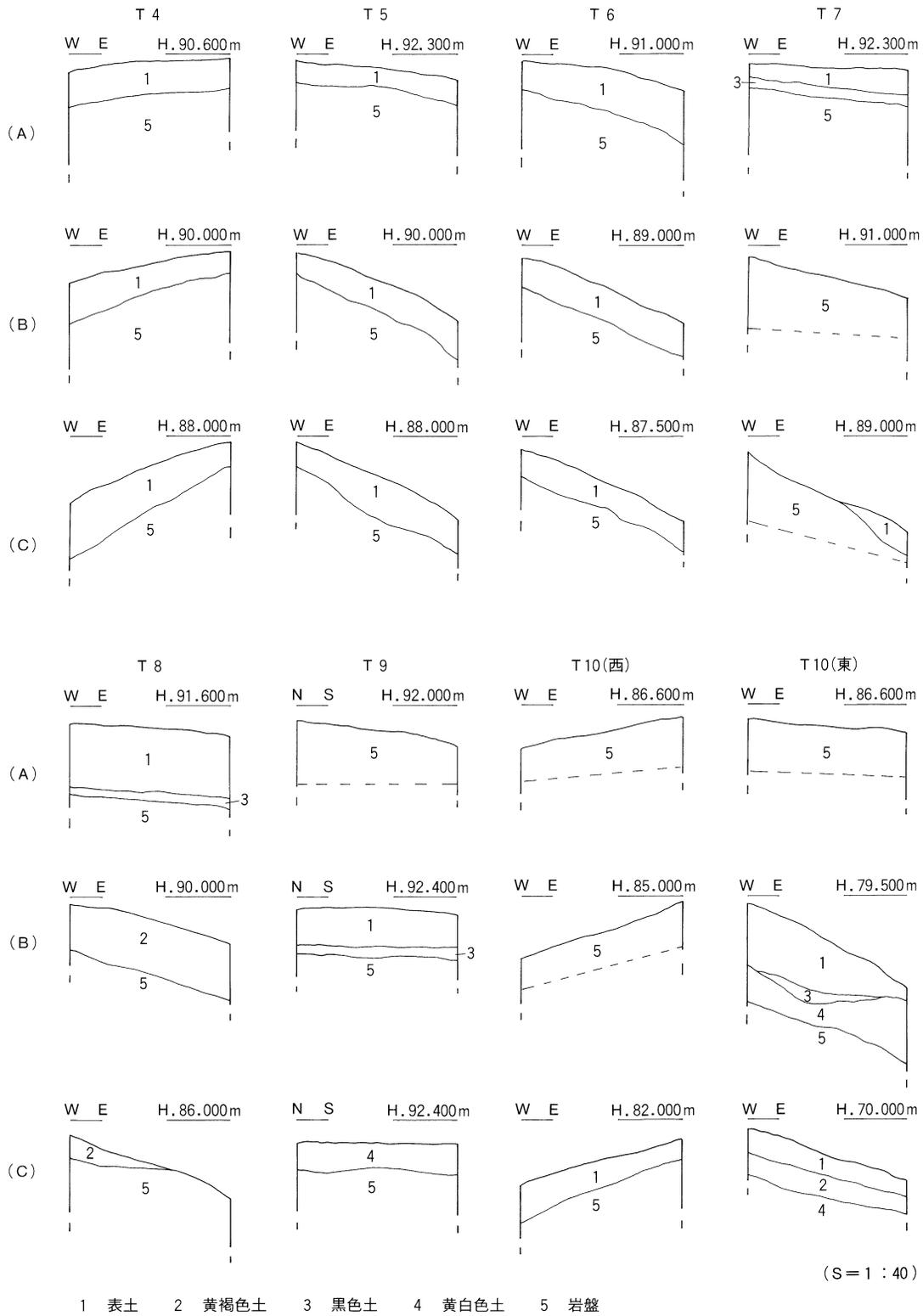
(2) 遺構と遺物

調査地に設定した19本のトレンチのうち調査地の北側T10からは溝状遺構を1条（SD1）、丘陵尾根部T1からは第3層黒色土の広がりをも2箇所検出した（SX1・SX2と呼称）。また、調査地北東部の丘陵裾部T16からは人頭大の石の集石を検出した（SX3と呼称）。そのほか、調査地北東部T11からは石室と思われる石材を検出した。



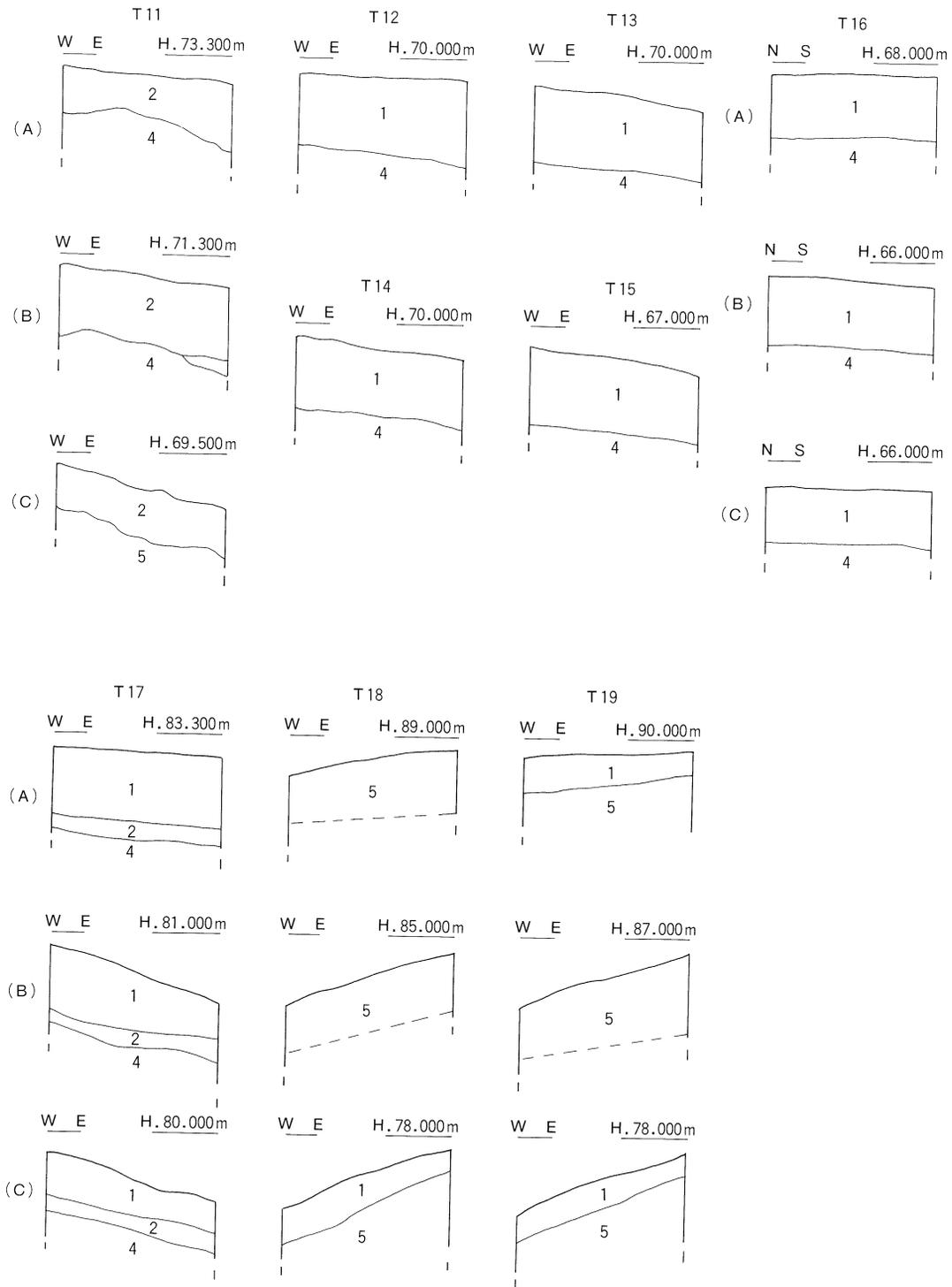
第35図 トレンチ土層柱状図 (1)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4A区



第36図 トレンチ土層柱状図 (2)

層 位



(S = 1 : 40)

1 表土 2 黄褐色土 4 黄白色土 5 岩盤

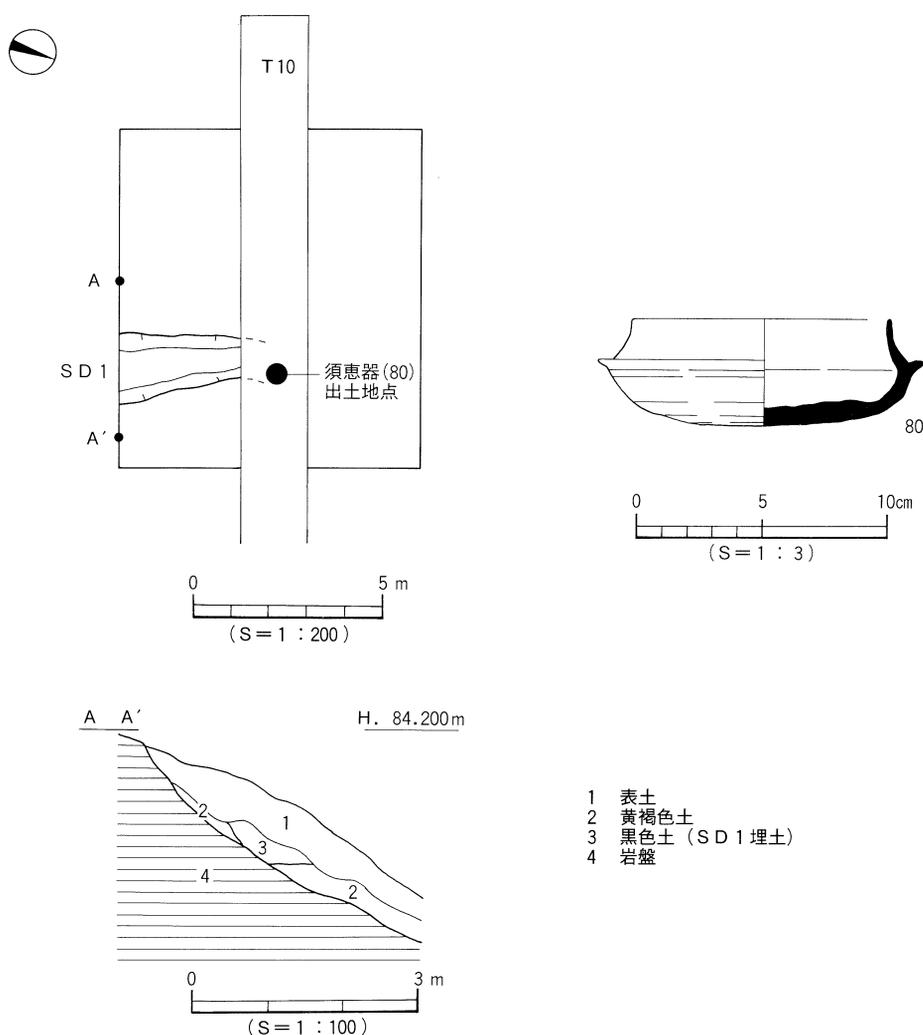
第37図 トレンチ土層柱状図 (3)

1) 溝状遺構 (SD1)

T10の東斜面、標高83.8mの地点にて溝状遺構を1条検出した(第38図・図版18)。トレンチの周辺を8m四方の範囲に拡張し(A地区)、平面的な広がりや検出につとめた。その結果、溝の北側は検出されなかったが、南側はA地区の外側に続いていることが判明した。ただし、調査区の状況からそれ以上の範囲確認はできなかった。現況で溝の規模は幅1.3~1.8m、深さ20~40cmを測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は第3層の黒色土単層である。溝内からはトレンチ掘削時に完形の須恵器坏身が1点出土した。溝の性格は全容がわからないため定かではないが、完形品が出土したことや形状がわずかに湾曲していることから古墳に伴う周溝の可能性もある。

出土遺物 (第38図、図版16)

坏身 (80) 80は須恵器坏身である。完形品。口径10.4cm、器高4.2cm、色調は青灰色を呈する。たちあがりは内傾し、端部付近で直立する。たちあがり端部は丸く仕上げる。底部は平底で、底部外面に左方向の回転ヘラ削り調整を施す。



第38図 SD1 測量図・出土遺物実測図

遺構と遺物

時期：出土した須恵器が6世紀前半の特徴を示している。よって溝の時期も古墳時代後期、6世紀前半頃と考えられる。

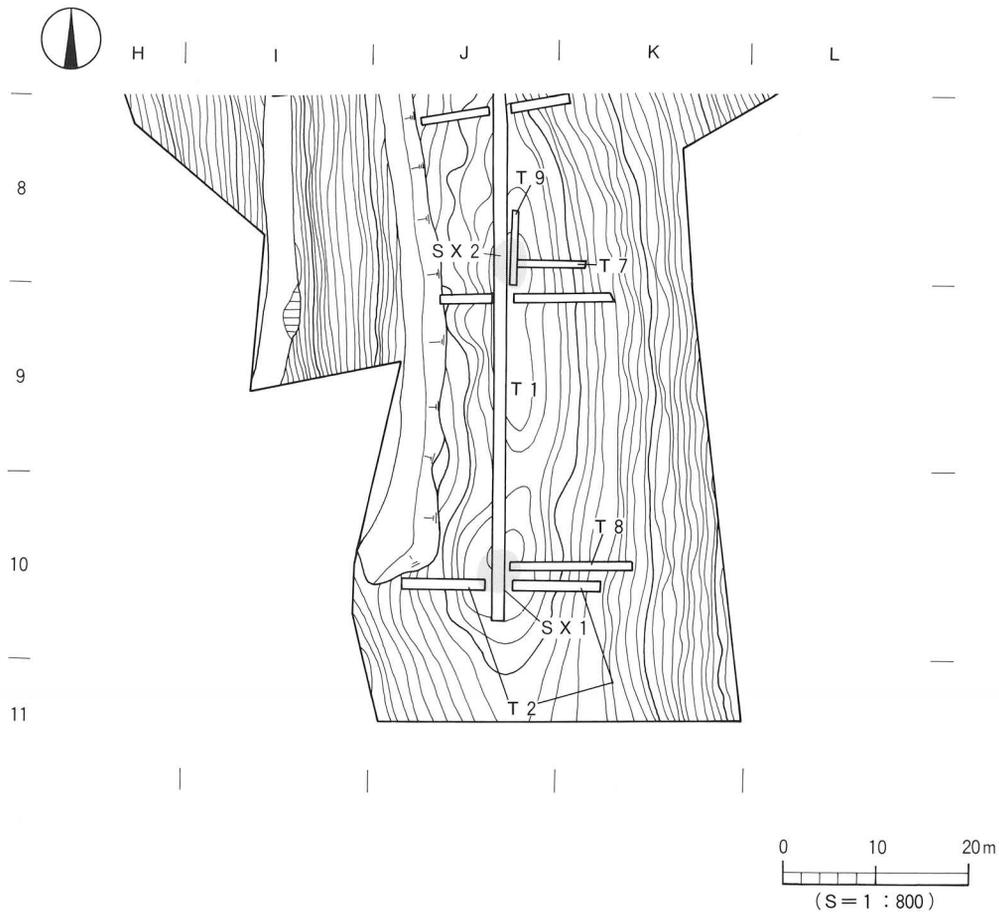
2) 性格不明遺構 (SX)

SX 1 (第39図、図版15)

T 1の南端部、標高92.0mの地点にて第3層黒色土が検出された。黒色土の分布域を確認するためT 2とT 8の2本のトレンチを設定した。その結果、半径5mの楕円形を呈して黒色土の広がりが認められた。掘り方は存在せず、第5層上に厚さ1~2cm程度に堆積する状況であった。SX 1からの遺物の出土はなく時期や性格は不明である。

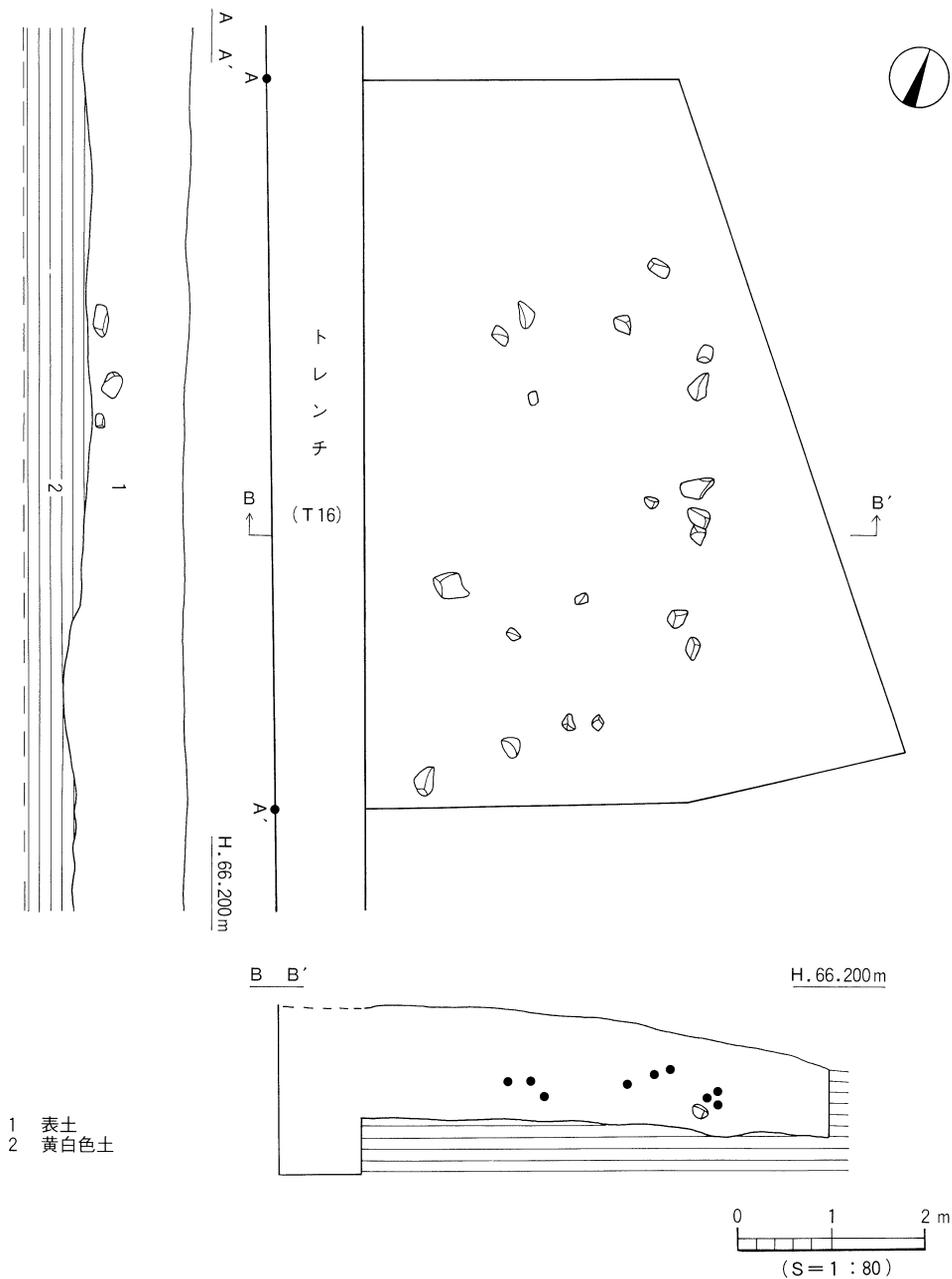
SX 2 (第39図)

T 1の中央部、標高91.5mの地点にて第3層黒色土が検出された。分布域を確認するためT 7とT 9の2本のトレンチを設定した。その結果、東西3m、南北5.5mの楕円形を呈して黒色土の広がりが認められた。SX 1と同様、掘り方は存在せず、第5層上に厚さ1cm程度に堆積する状況であった。SX 2からの遺物の出土はなく時期や性格は不明である。



S X 3 (第40図)

丘陵裾部の T16からは拳大から人頭大の大きさの石が検出された。石室が存在しているのではないかと考え、T16周辺を南北10m、東西6～8mの範囲に拡張した(B地区)。その結果、B地区全域の第1層下部にて散在して石が多数検出された。石材はほとんどが花崗岩であり、一部には風化の顕著なものもある。出土状況から判断すると、これらの石は本来は現在の位置にあったものではないと考えられる。S X 3からの遺物の出土はなく、性格や時期はさだかではないが、石室に使用された石であった可能性も考えられる。



第40図 S X 3 測量図

〔2〕客谷10号墳の調査

(1) 調査の経緯

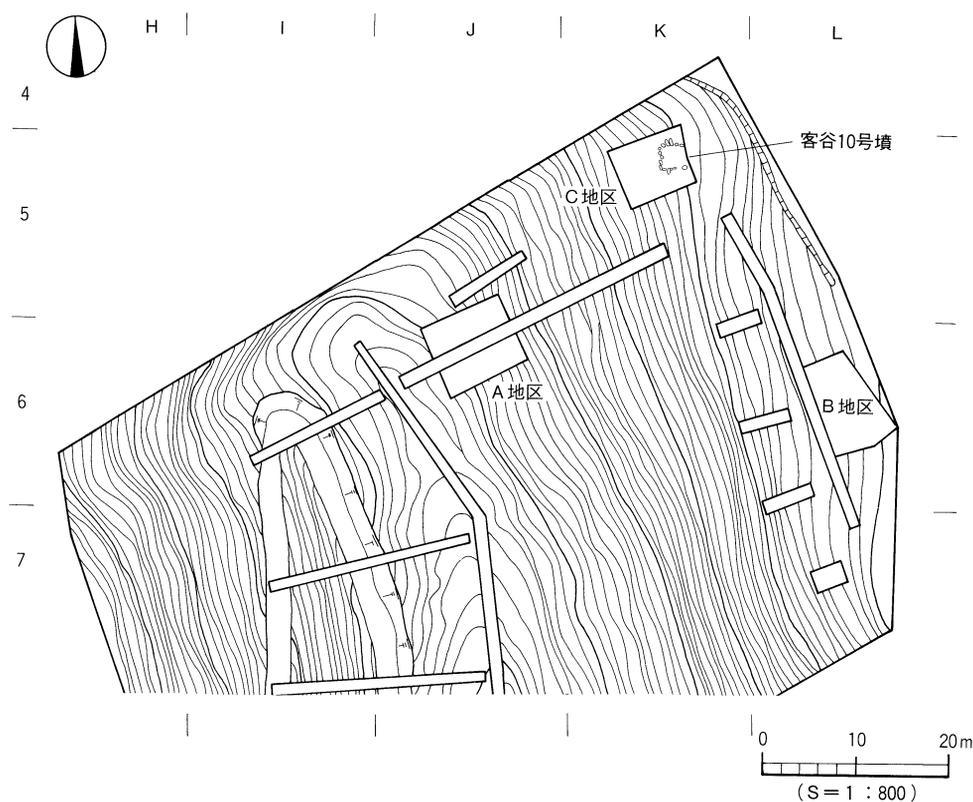
調査地の北東部、T11からは完形の須恵器が1点出土したほか、石室の一部と思われる石材を検出した。そのためT11の周辺を6×8mの範囲に拡張した(C地区)。その結果、墳丘と考えられる土層は検出されなかったが、小型の石室を1基確認した。C地区にて検出した古墳は字名とこれまでの調査結果により『客谷10号墳』と呼称した(第41図)。

(2) 規模・構造

客谷10号墳は調査地の北東斜面裾部、標高70.8mに位置する。主体部が残存するのみで、墳丘はすべて失われた状況であった。そのため、墳形や墳丘の規模は不明である(第42図)。

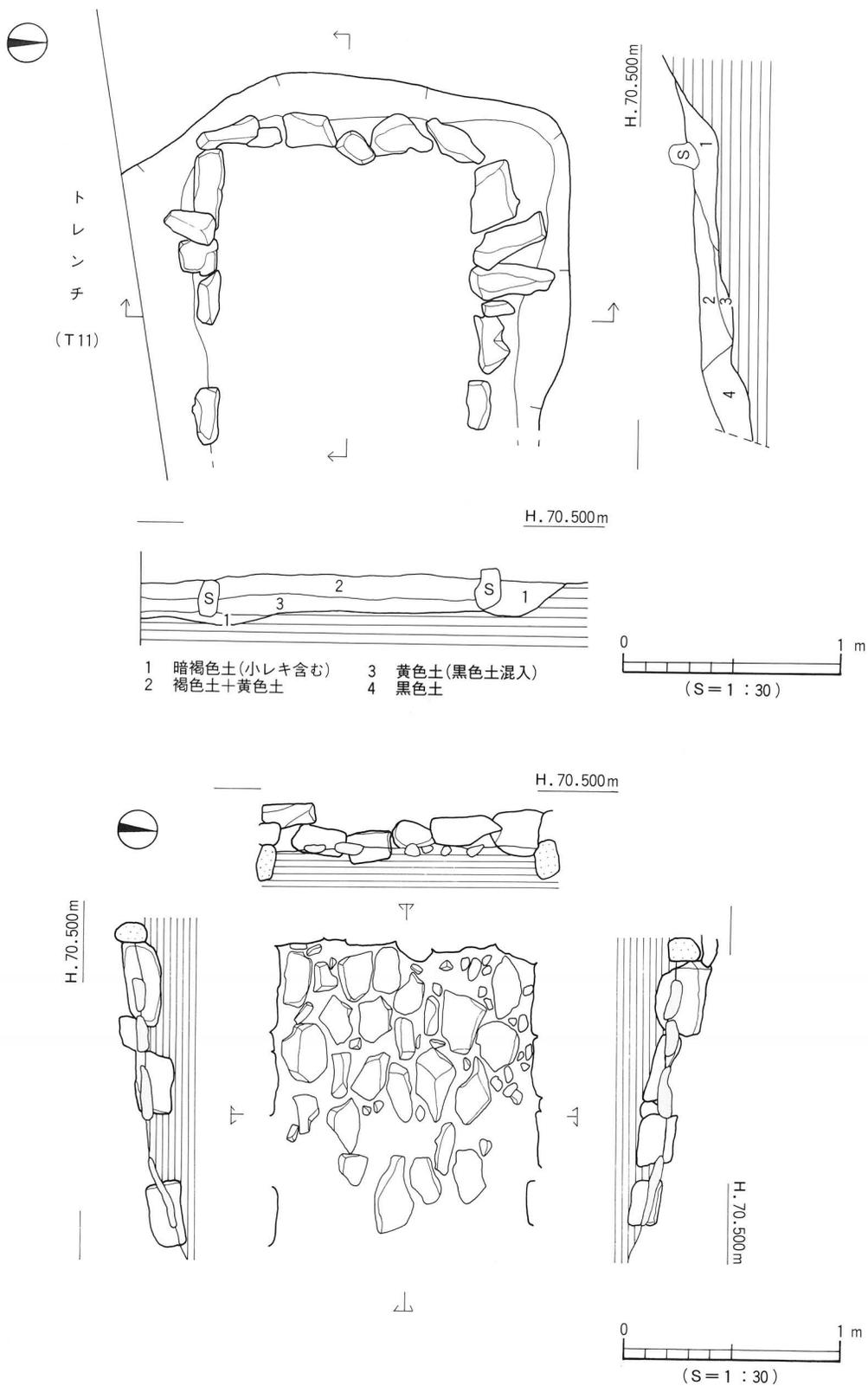
主体部は東に開口する小型の横穴式石室と考えられる。ただし、石室東側が近現代の造成により削平されておりその形状は明確ではない。石室は地表面から40cm下で検出した。天井部はなく、側壁と奥壁は腰石と2段目までがわずかに残る程度である。石室の規模は奥壁長1.3m、側壁長1.4m、両側壁間は床面中央部で1.2mを測る。石室に使用している石は20~40cm大の割石を横積みし、両側壁の2段目の石の一部には小口積みを施している。床面には貼床が施され、貼床上に径20cm大の割石を敷石として使用している。

墓壙は一部、トレンチに削平されているが、南側にやや広がりをもつ隅丸(長)方形を呈している。規模は東西1.6m、南北1.7m、深さは奥壁部分で約26cmを測る。基底部分には黄色土(地山)である。中央部がコブ状に盛り上がり、東側下がり傾斜面をなす。腰石は墓壙より内側に据えているが、その



第41図 客谷10号墳位置図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4A区



第42図 客谷10号墳石室測量図

遺構と遺物

際に腰石設定部分は石室内基底面より一段深く掘り下げられている。

石室内には4種類の土壌が確認された。第1層は腰石と墓壙の間にある土で小レキが混入する締まりの強い土である。第2～4層は貼床土である。第2層は褐色土と黄色土の混合土で、墓壙中央部付近にみられた。第3層黄色土（黒色土混入）はやや締まりの弱い土で、第2層下に検出された。第4層黒色土は石室東側のみで検出したもので、粘性が強い土である。

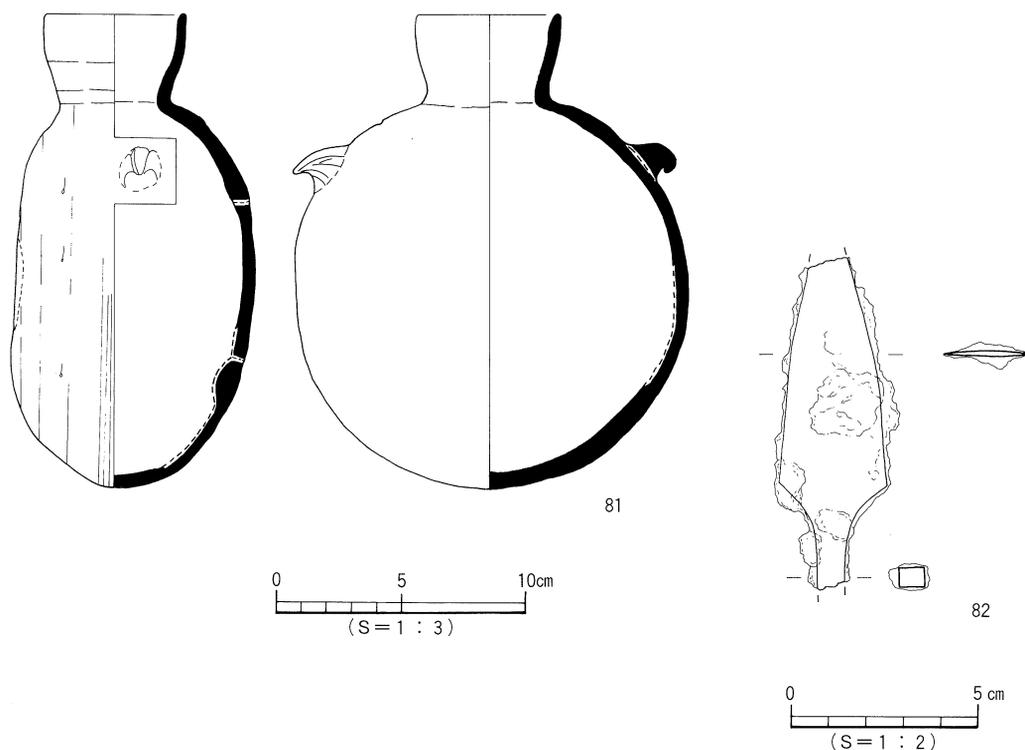
遺物はT11掘削中に須恵器提瓶が1点出土した。また、敷石の除去作業中に搬出した排土中から鉄器が1点出土した。これら2点の遺物は出土地点は明確ではないが、本古墳に伴う遺物と考えられる。

出土遺物（第43図、図版20）

提瓶（81） 81は須恵器提瓶である。口縁部が一部欠損するもののほぼ完形品である。器高19.0cm、胴部最大径15.8cmを測る。体部両側に鉤状の吊り手が付く。

金属製品（82） 82は身部と基部の先端部を欠損する鉄鏃である。小石や砂を含んだ錆が全体に厚く付着する。明瞭な関部をもち、基部の断面形は方形を呈する。

時期：出土した須恵器が6世紀後半の特徴を示している。よって、本古墳も古墳時代後期後半、6世紀後半の造営と考えられる。



第43図 客谷10号墳出土遺物実測図

3. 小 結

今回の調査では、古墳時代後期の古墳 1 基と溝状遺構 1 条及び性格不明遺構 3 基を検出した。

客谷10号墳は遺存状況から小型の古墳と考えられる。主体部は東に開口する横穴式石室と考えられる。造営時期は出土した遺物の特徴から 6 世紀後半頃と考えられる。墳丘はほとんどが失われており、墳形や墳丘規模は不明である。石室に使用した石材は複雑な加工痕が明確に見てとれるものが多い。石室構築の際に石を組み合わせながら構築することが可能なように加工を施しているものがある。床面には 20~30cm 大の割石を敷石として使用している。割石の多くは平坦面を表側にしているが、なかには平坦面を裏側にして突出した面を表側に使用しているものがある。このような状況から本来は割石の上に玉石などを敷き詰めて水平面を築いていたのではないかと推測される。

そのほか、黒色土を埋土にもつ溝状遺構を確認した。出土遺物から 6 世紀前半の遺構と考えられる。溝の全容は定かではなく、性格は判断しがたいが、古墳に伴う遺構（周溝）の可能性もある。また、性格不明遺構 S X 1・2 は黒色土の分布範囲を表したものである。掘り方がなく、岩盤の上に敷き詰められた状況である。これは大池東 1 号墳にて検出された地山直上にある黒色土と検出状況や土質が類似している。この観点から判断すると、S X 1・2 の地点にも古墳が存在していた可能性が高いのではないかと推測される。

今回の調査では小型の石室を 1 基検出したにとどまった。調査結果から分析すると、丘陵頂上部では溝や黒色土の堆積が検出されたことから、本来は古墳が存在していた可能性が高いと考えられる。頂上部に存在したと考えられる古墳については、溝から出土した遺物が古墳時代後期前半の特徴を示していることから、おそらく同時期に存在していたものと推測される。

表11 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
80	坏身	口径 10.4 器高 4.2	たちあがりは内傾し、端部付近で直立。たちあがり端部は丸い。底部は平底。完形品。	㊦回転ナデ ㊧底回転ヘラケズリ (2/3)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		18

表12 客谷10号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
81	提瓶	器高 19.0 胴径 15.8	口縁部が一部欠損。体部両側に鉤状の把手が付く。	カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗褐色 暗褐色	密 ◎		20

表13 客谷10号墳出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
82	鉄鏃	先端部と基部欠損	鉄	8.80	2.90	0.15	28.295		20

第6章

— 4 B 区の調査 —



第6章 4B区の調査

1. 調査の経緯

4B区は、1区の南東側に位置し大峰ヶ台西丘陵の尾根と谷の調査である。調査は、①区〔下段〕、②区〔中段〕、③区〔上段〕と3区画に区分けを行い①区から調査を開始した(第44図)。

①区は谷部の調査である。初めに東と南の斜面にトレンチを11本(T1~11)設定し掘り下げを10月31日まで行ったが遺構は検出されなかった。北側斜面は大池東1号墳の東側に位置する。地形に僅かに平坦面がみられたため古墳を想定しトレンチ調査前に、地形測量を行った。その後トレンチを2本(T12・13)設定し掘り下げを行うとT13より石室の一部を検出したため古墳と認定した。古墳は、大池東2号墳とし調査を開始する。

大池東2号墳の調査は、12月1日より表土剥ぎ及び主軸トレンチを設定し掘り下げを行い、石室と周溝を確認する。1月30日より周溝と石室内を掘り下げ床面の検出を行う。床面からは遺物と敷石を検出し測量と写真撮影を行う。遺物と敷石を取り上げ3月12日に石室内の展開図を写真測量により行う。3月26日ラジコンヘリコプターを使用し全体の写真撮影を行い野外調査を終了する。

②区には、2基の古墳の存在が考えられ地形測量を行うこととした。地形測量後トレンチを南北2本(T15・16)と東西1本(T14)を設定し掘り下げを行った。トレンチ内からは、周溝と遺物を検出したため古墳と認定し、大池東3・4号墳と呼称し調査を同時に開始した。

大池東3・4号墳の調査は、12月18日に表土剥ぎを行い周溝と土坑を検出したが石室は検出できなかった。周溝と土坑を掘り下げ遺物を検出する。遺物の測量と写真撮影を行い取り上げを行う。盛土を確認後測量を行う。盛土除去後地形測量を行い3月15日に調査を終了する。

③区にも古墳と思われる地形の変化がみられたため地形測量を行い、尾根線状に1本(T17)と尾根に直交する2本(T18・19)の計3本のトレンチを設定し掘り下げを行うが古墳は確認できなかった。トレンチ内の土層断面を測量し写真撮影を行い、調査地全体の測量と写真撮影を行い調査を終了する。

2. 層位

調査地は、急傾斜の斜面のため堆積土は少なく大部分が腐葉土と地山の風化土から形成されている。

調査は、①区(13本)、②区(3本)、③区(3本)の計19本のトレンチを設定し調査を行った。

土層は、第1層腐葉土(表土)、第2層淡い茶色土、第3-①層灰色土、第3-②層灰色土(黄色混じり)、第3-③層灰色土(白色混じり)、第4層黒色土、第5層黄色土(地山)、第6層岩盤である。

土層図は、トレンチの両端と中央部の3ヶ所をA・B・Cとし柱状図を作成した(第45・46図)。

①区

①区は大峰ヶ台西丘陵の谷部、標高23~40mに位置する。トレンチは13本(T1~13)を設定した。土層は第1層、第2層、第3-①層、第3-②層、第6層を検出した。

第1層は、厚さ5~55cmを測る。T1~13のA・B・Cで検出した。

第2層は、厚さ5~35cmを測る。T1・5・9・10のBとT12のB・C、T13のA・B・Cで検出した。

第3-①層は、厚さ10~20cmを測る。T5のCで検出した。

第3-②層は、厚さ10~20cmを測る。T5のCで検出した。

第5層は、T1～11のA・B・Cで検出した。

第6層は、T12・13のA・B・Cで検出した。

遺物は、T2からは弥生土器と瓦、T3からは瓦器、T4・6・9からは須恵器片が出土した。遺構はT13から石室（大池東2号墳）を検出した。他のトレンチからは遺構は検出されなかった。

②区

②区は、大峰ヶ台西丘陵の中段、①区の上部の標高48～52mに立地する。トレンチは3本（T14～16）を設定した。土層は第1層、第2層、第3-①層、第3-②層、第3-③層、第4層、第5層を検出した。

第1層は、厚さ5～50cmを測る。T14～16のA・B・Cで検出した。

第2層は、厚さ10～25cmを測る。T14のAで検出した。

第3-①層は、厚さ5～25cmを測る。T15のAで検出した。

第3-②層は、厚さ5～35cmを測る。T15のA・B・CとT16のAで検出した。

第3-③層は、厚さ5～35cmを測る。T14のCとT16のAで検出した。

第4層は、厚さ5cmを測る。T16のAで検出した。

第5層は、T13～15のA・B・Cで検出した。

遺物は、T14からは弥生土器・須恵器・鉄器が出土し、T15からは土師器が出土した。遺構は、古墳2基（大池東3・4号墳）を検出した。

③区

③区は、大峰ヶ台西丘陵の上部の標高73～81mに立地する。トレンチは3本（T17～19）を設定した。土層は、第1層、第2層、第4層、第5層を検出した。

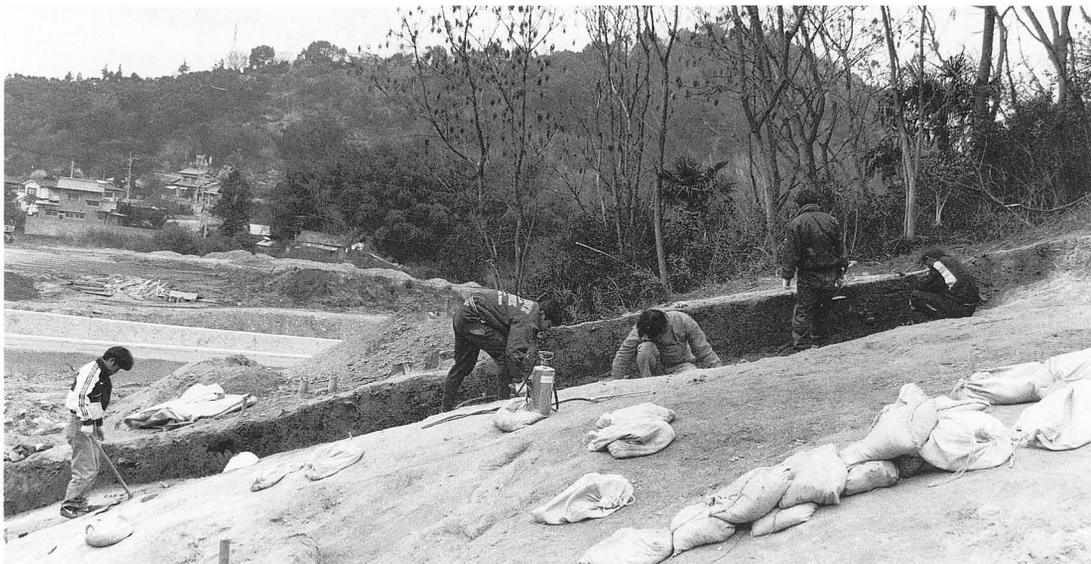
第1層は、厚さ5～45cmを測る。T17～19のA・B・Cで検出した。

第2層は、厚さ5～35cmを測る。T18のCとT19のB・Cで検出した。

第4層は、厚さ5～30cmを測る。T19のBで検出した。

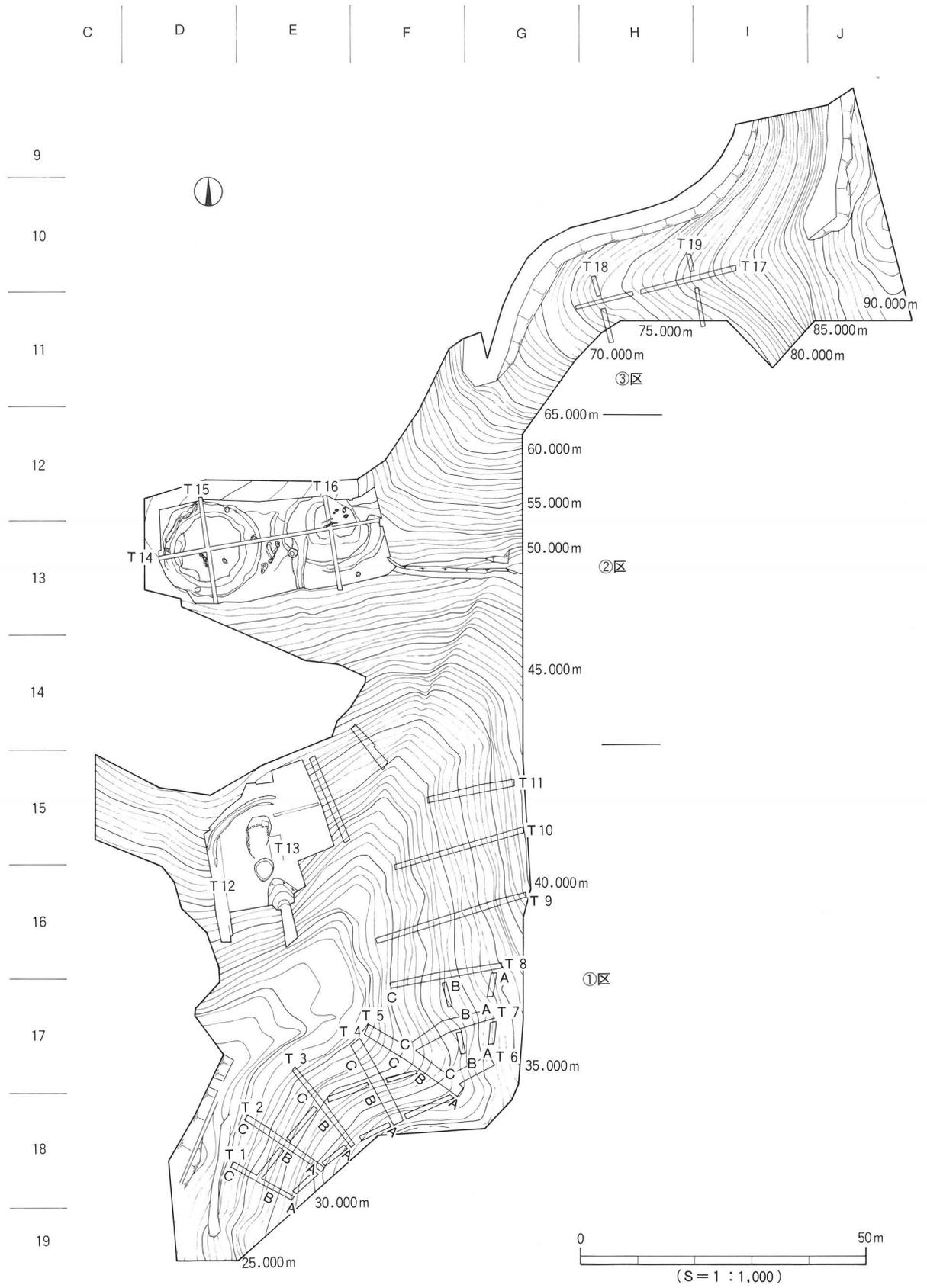
第5層は、厚さ10～50cmを測る。T17のA・BとT19のCで検出した。

遺物は、T17からは須恵器・土師器が出土し、T18からは須恵器が出土した。遺構は検出されなかった。



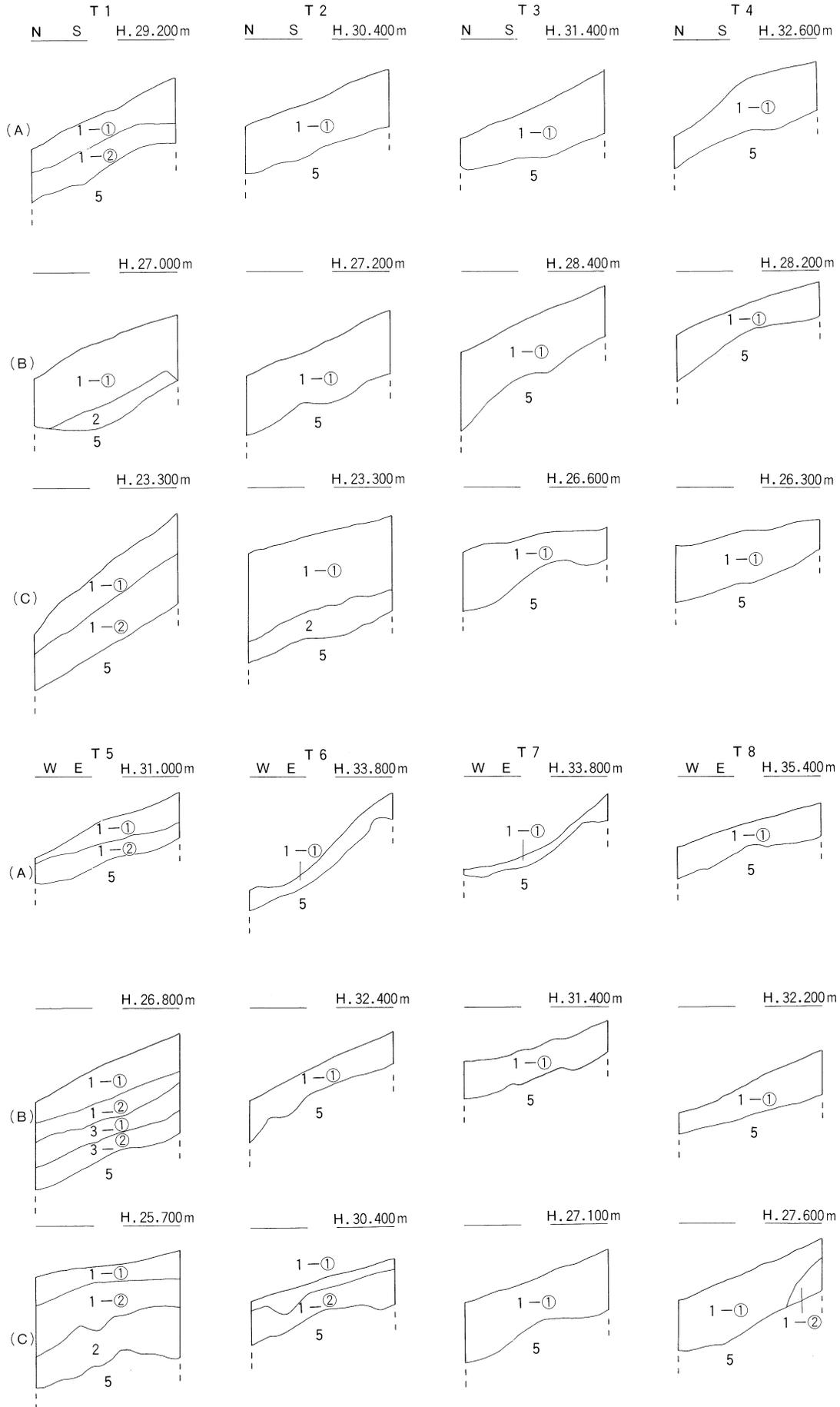
作業風景

遺構と遺物



第44図 4B区遺構配置図及びトレンチ位置図

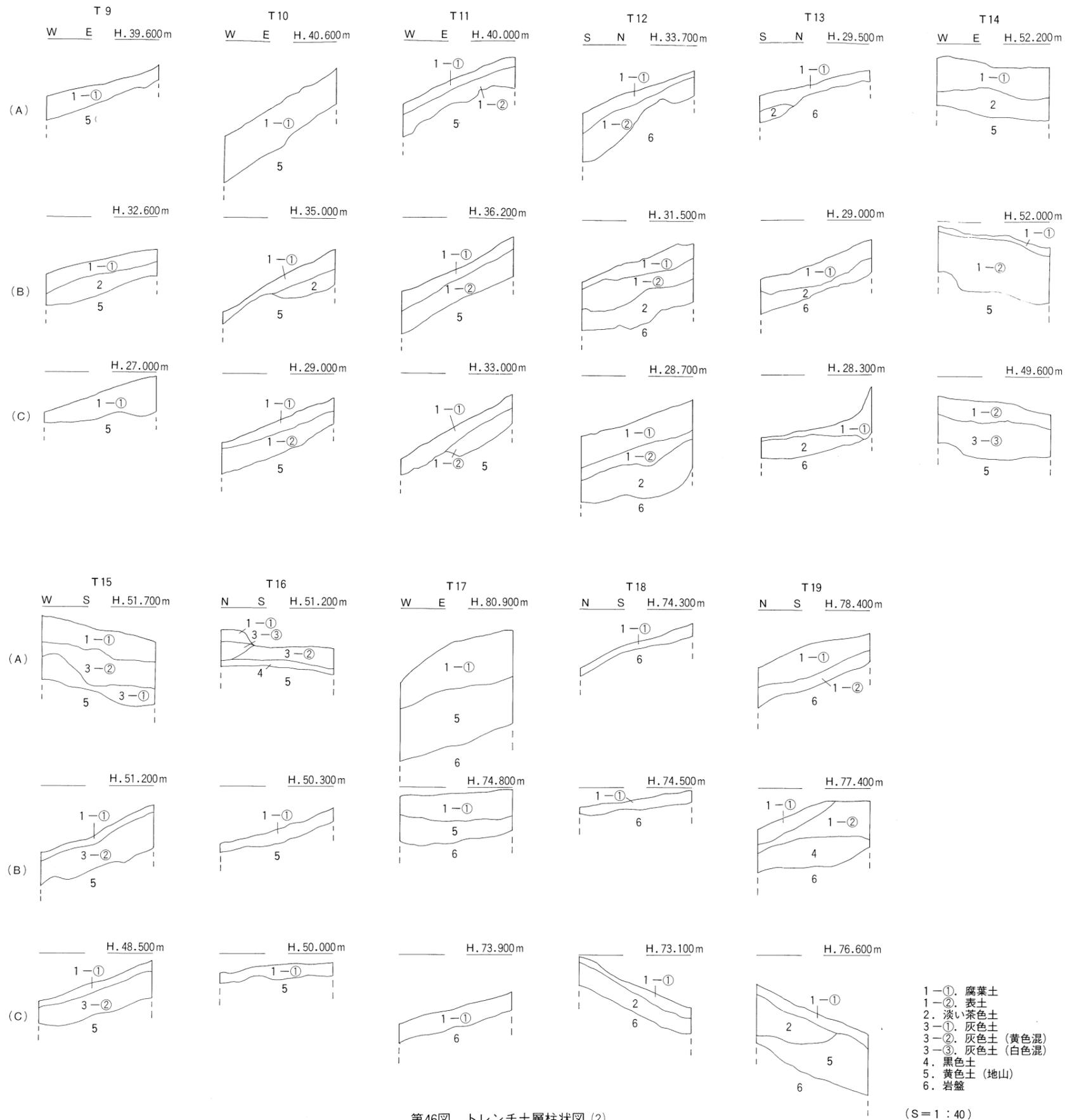
大峰ヶ台遺跡 9 次調査 4 B 区



第45図 トレンチ土層柱状図 (1)

(S=1:40)

層 位



第46図 トレンチ土層柱状図 (2)

(S=1:40)

3. 遺構と遺物

〔1〕4B①区の調査

調査地は大峰ヶ台丘陵の西側斜面と谷部が接する標高28.0～36.5m地点に立地する。調査以前は竹林であった。

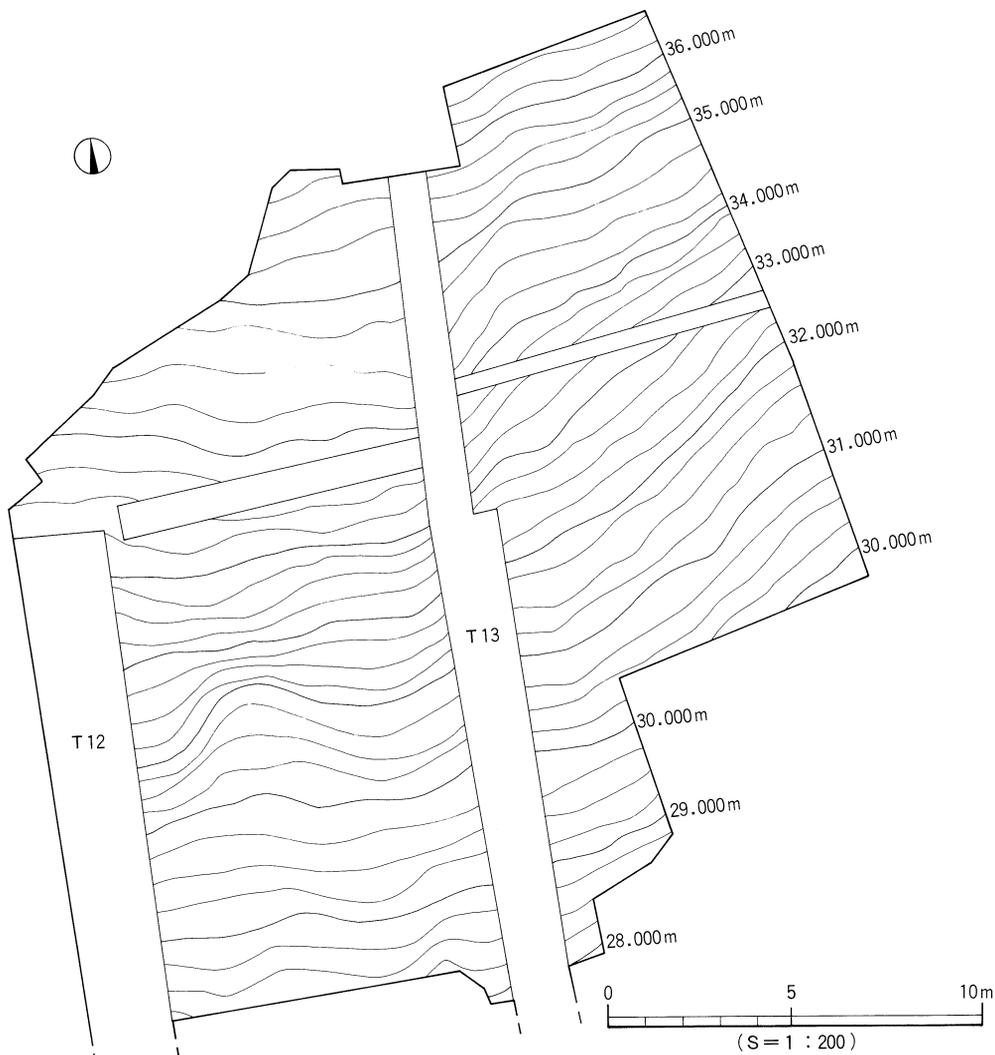
本調査では古墳と土坑を1基検出した。古墳は字名より大池東2号墳とした。

(1) 大池東2号墳 (第48図、図版22)

1) 墳丘

墳形は円墳もしくは楕円形で、規模は南北19.75m、東西検出長16.0mを測る。墳丘からは石室と周溝を検出した。

墳丘構築方法は下部から順に3工程(工程Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)に分けられる。工程Ⅰ：古墳の位置を決め、地山をL字状にカットし、黒色土を敷き、水平化する。工程Ⅱ：墓壙を掘り石室を作りながら裏込めの淡い茶色土の土を入れる。工程Ⅲ：石室に向け灰色土、黄色土を用い水平化を測るように盛土を行う。墳丘の盛土は、石室の北側と南側で残存している。



第47図 大池東2号墳調査前地形測量図

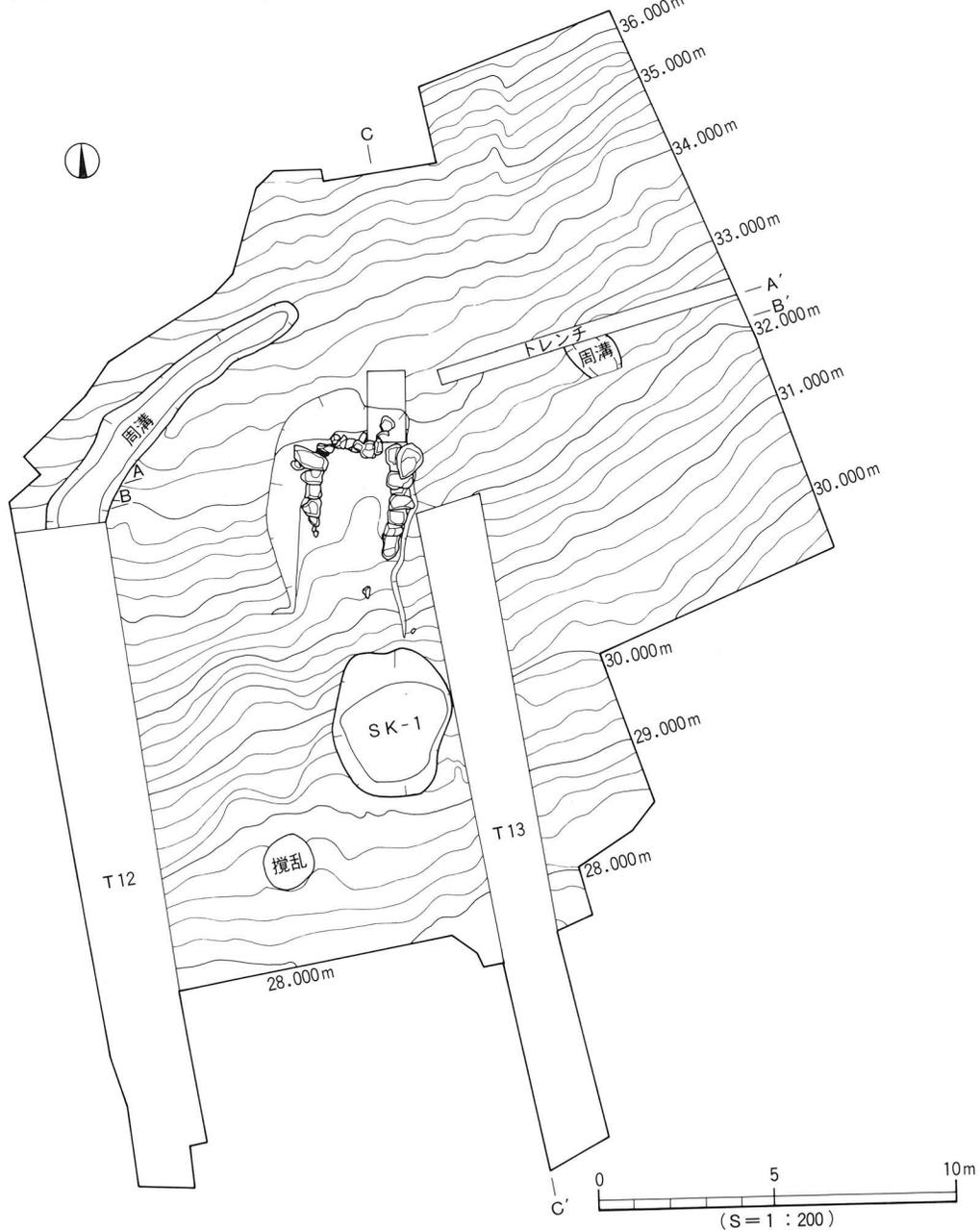
2) 周溝

周溝は墳丘北西部と東西ベルトで検出した。北西部の規模は検出長15.06m、幅0.4~1.4m、深さ8~28cmを測る。東西ベルトでは、幅1m、深さ20cmを測る。埋土は灰色土及び灰色砂に淡い黄色混じりである。遺物は出土していない。

3) 主体部 (第50・51図)

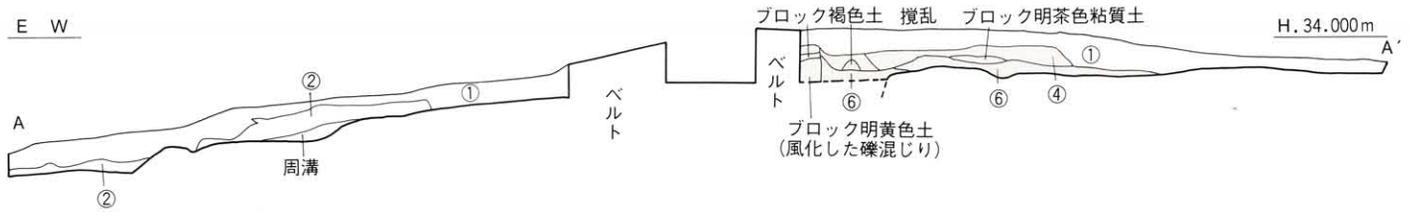
主体部は、主軸をN-8°30'-Eにとる南開口の横穴式石室である。天井部と羨道部は削平されている。石室の検出規模は長さ2.25m、幅1.93mを測る。石室は右側壁が1~6段、左側壁が1~4段、奥壁が5~6段残存している。右側壁と奥壁の1段目は大振りの石を積んでいるが、左側壁の1段目は大振りの石と小振りの石を積んでいる。2段目からは積み上げるごとに小振りの安山岩の割石を主に小口積される。石室の床面には貼り床がなされ、上部には敷石が敷きつめられる。袖部は、袖石は検出できなかったが左右より抜き跡を検出した。羨道部は削平されており検出できなかった。

遺物は、須恵器の坏身と坏が各1点、土師器の坏が1点、鉄製品が9点、耳環が4点出土した。

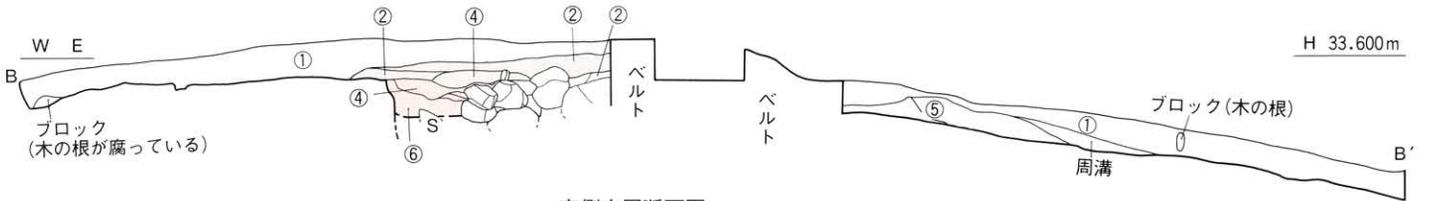


第48図 大池東2号墳遺構配置図及び調査後地形測量図

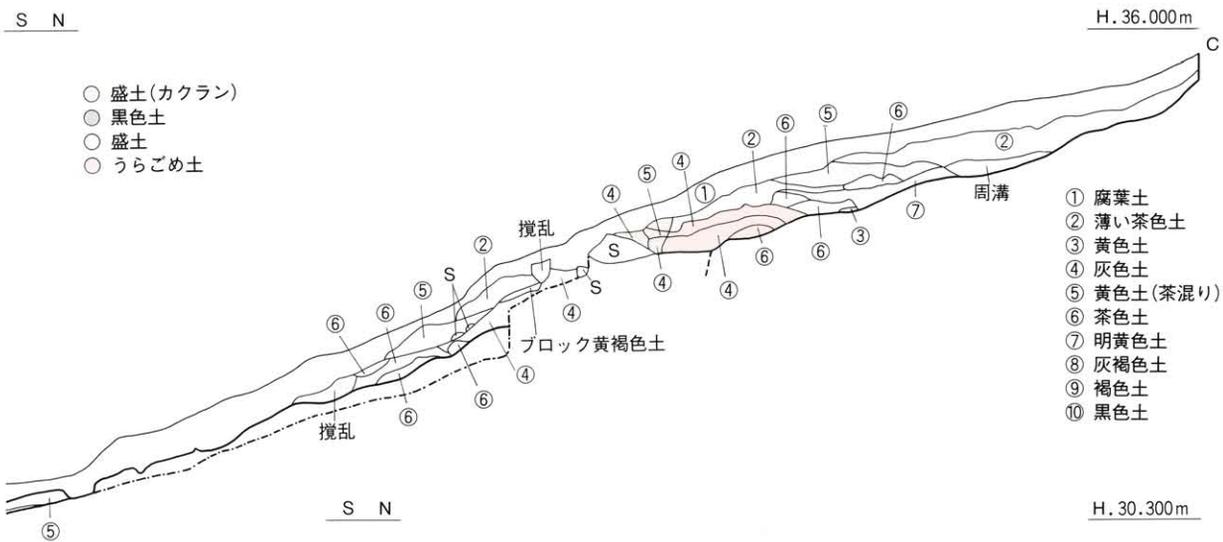
層 位



北側土層断面図

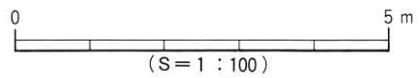
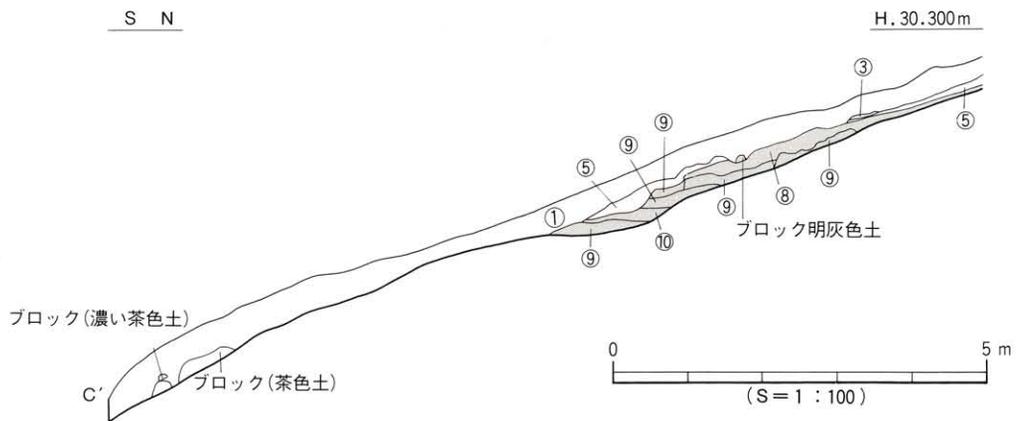


南側土層断面図

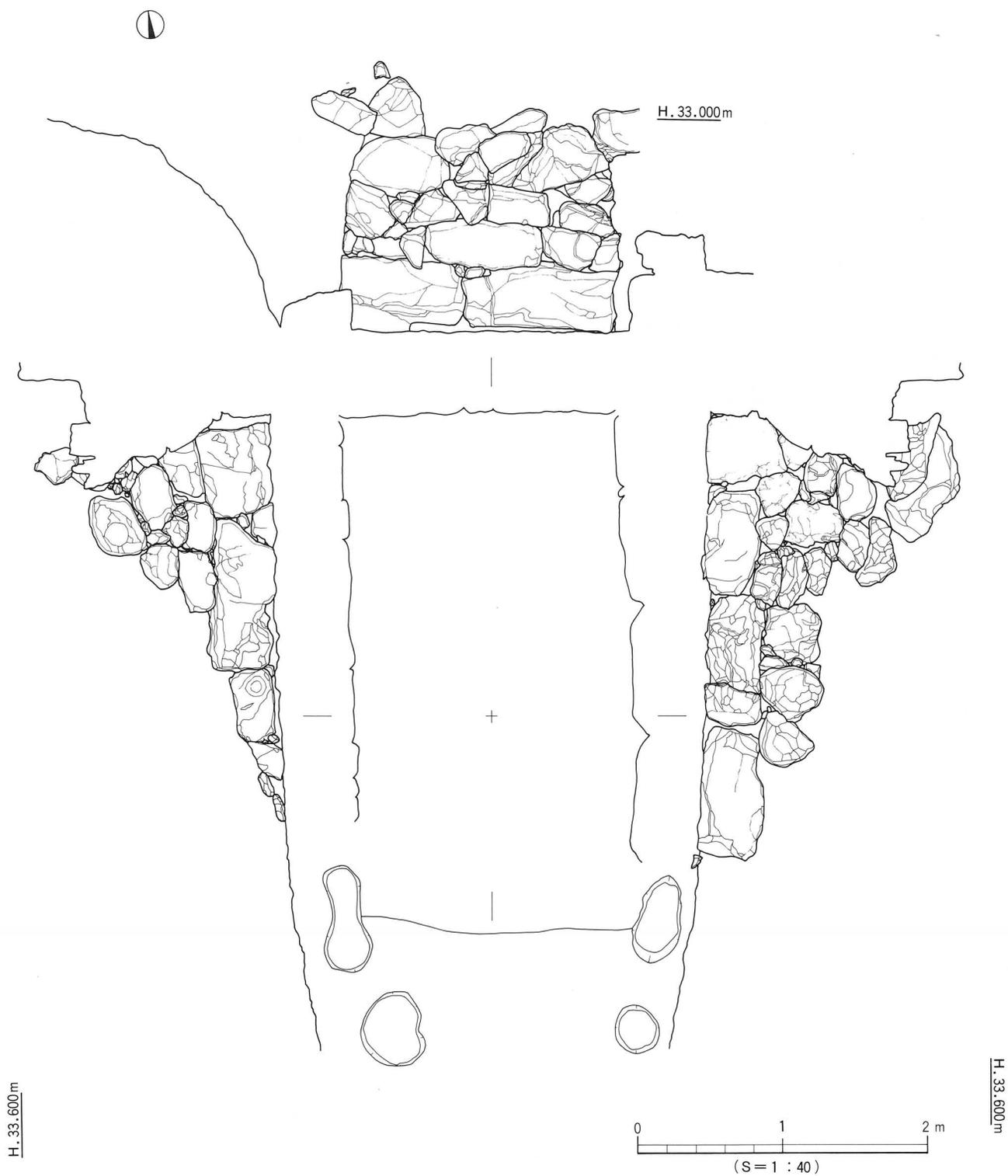


- 盛土(カクラン)
- 黒色土
- 盛土
- うらごめ土

- ① 腐葉土
- ② 薄い茶色土
- ③ 黄色土
- ④ 灰色土
- ⑤ 黄色土(茶混り)
- ⑥ 茶色土
- ⑦ 明黄色土
- ⑧ 灰褐色土
- ⑨ 褐色土
- ⑩ 黒色土



第49図 大池東2号墳土層測量図



第50図 大池東2号墳石室展開図

遺構と遺物



第51図 大池東2号墳遺物測量図

出土遺物 (第52図)

坏身 (83) 83は坏身の完形品である。奥壁の中央部で検出した。たちあがりは短く内傾した後、直立し端部は丸い。受部はわずかに上外方にのびる。底部は平底である。

坏 (84) 84は無台坏である。口縁部は欠損している。奥壁側で出土した。胴部はやや丸みをもち、底部は平底である。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。

坏 (85) 85は土師器の坏である。右側壁の南側で出土した。口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。底部は平底である。

金属製品 (第52図、図版25)

石室から出土した鉄製品は、太刀が1点、小刀が1点、鎌が2点、刀子が3点、鏝が1点、鏝金具が1点の計9点の出土である。

鎌 (86・87) 86は鎌の茎部である。刃部と基部が欠損している。全体的に錆が付着しているが、X線により筥被ぎが明瞭である。木質の錆(?)が付着している。断面形態は長方形と丸みのある正方形がある。残存長4.3cm、最大幅0.7cm、厚さ0.3cmを測る。

87は刃部と基部が欠損している。全体的に錆が付着しているが、X線により筥被ぎが明瞭である。木質の錆(?)と錆が比較的薄いところがある。断面形態は長方形と丸みのある正方形がある。残存長3.7cm、最大幅0.7cm、厚さ0.34cmを測る。

小刀 (88) 88は柄を欠損している。棟と刃は明瞭である。基部は鉄が層状剥離をしておりかなり膨張しているため、断面を測るのは難しいが基部断面は方形を呈していたと思われる。刃部断面形態は二等辺三角形状になっている。残存長27.1cm、最大幅2.5cm、厚さ0.7cmを測る。

太刀 (89) 89は太刀の破片である(?)。全体的に錆は薄いですが、剥離が著しく、生きている面が残っておらず、原型を復元するのが困難である。断面は層状剥離し膨張する。剥落面がある。残存長6.7cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmを測る。剣の破片の可能性も有り。

刀子 (90~92) 90~92は刀子の破片である。90は石をとり込んだ大きなこぶ状の錆の固まりが厚く付着するが、X線により外形が明瞭にわかる。棟と刃と関部が明瞭である。刃部が湾曲する。断面形は長方形と二等辺三角形状になっている。長さ17.6cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。91は刃部断面形態は二等辺三角形状になっている。長さ2.3cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る。92は全体に木質の錆が付着している。また錆が付着しているが方形の目釘が残る。残存長3.8cm、幅1.5cmを測る。

鏝 (93) 93は刀の鏝の完形品である。断面形態は長方形を呈している。長径5.1cm、短径4.0cm、厚さ0.5cmを測る。

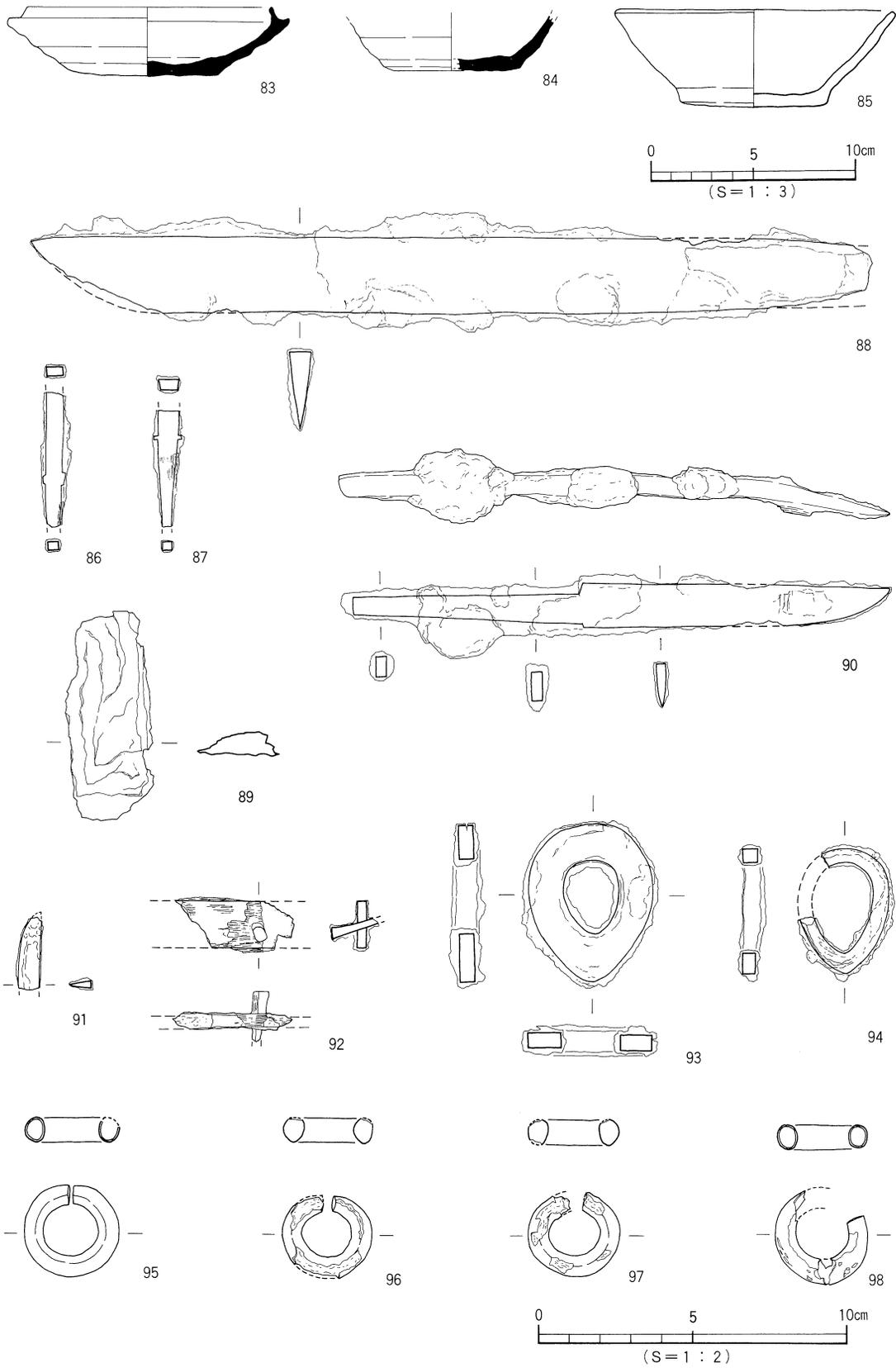
鏝金具 (94) 94は鉄製の鏝金具3/4の残存である。断面形態は長方形と正方形を呈している。長径4.0cm、短径(2.9)cm、厚さ0.5cmを測る。

耳環 (95~98) 石室から出土した耳環は4点である。

95は完形品である。肉眼では金・銀色の部分は認められないが、一部光沢がある部分が残る。全体的に緑がかった暗灰色を呈する。96はほぼ完形品である。表面層は光沢ある銀色である。表面層が剥がれた部分は、暗緑色を呈する。97はほぼ完形である。表面層は金色に光るが鍍金部分はかなり剥がれており、銅芯が露呈し、全体的には暗緑色を呈する。98は3/4の残存である。表面は内側にかなり光沢ある鍍金部が残る。金が剥がれた部分は黒灰色を呈する。

時期：出土した遺物から大池東2号墳の造営時期は、6世紀後半に比定される。

遺構と遺物



第52図 大池東2号墳石室出土遺物実測図

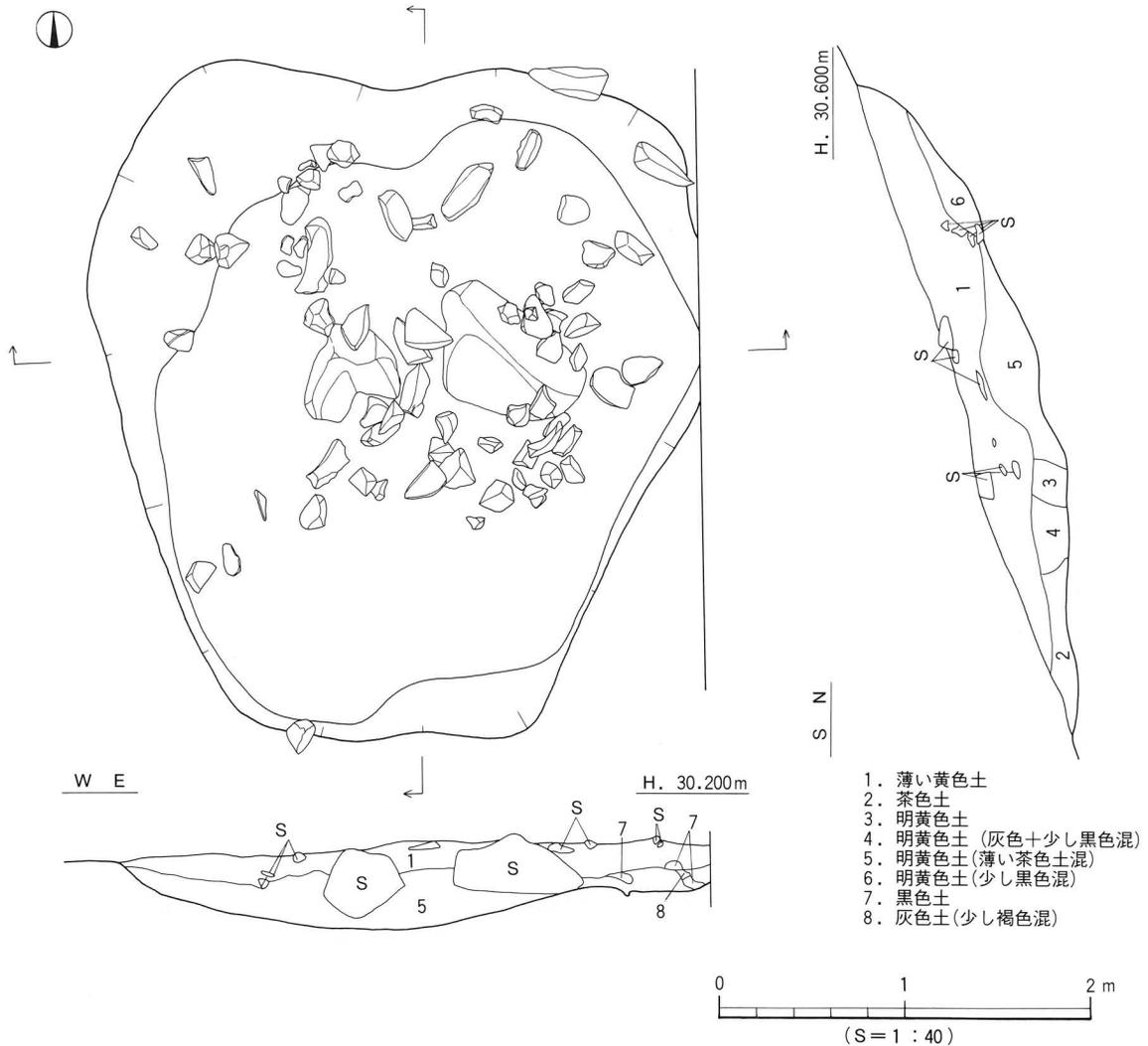
(2) 土坑 (SK)

SK 1 (第53図)

石室の南の緩傾斜面で検出された楕円形の掘り込みである。規模は南北3.48m、東西3.25m、深さ13~53cmを測る。基底は斜面と同じく北側が高くなっている。東西はほぼ水平である。埋土は上層に薄い茶色土が堆積し、厚さ4~38cmを測る。下層には明黄色土が堆積し、厚さ4~32cmを測る。

遺物は石室に使っていたと思われる石が出土している。石の大きさは6.0~74.5cmを測る。土坑の性格は判断できないが、人為的に掘られたと思われ、大きい石は石室の石が崩れた時に溜まったと思われる。

時期：遺物が出土しておらず明確な時期は判断できない。ただし、本土坑は2号墳の石材が出土しており、2号墳の築造後の遺構と考えられる。

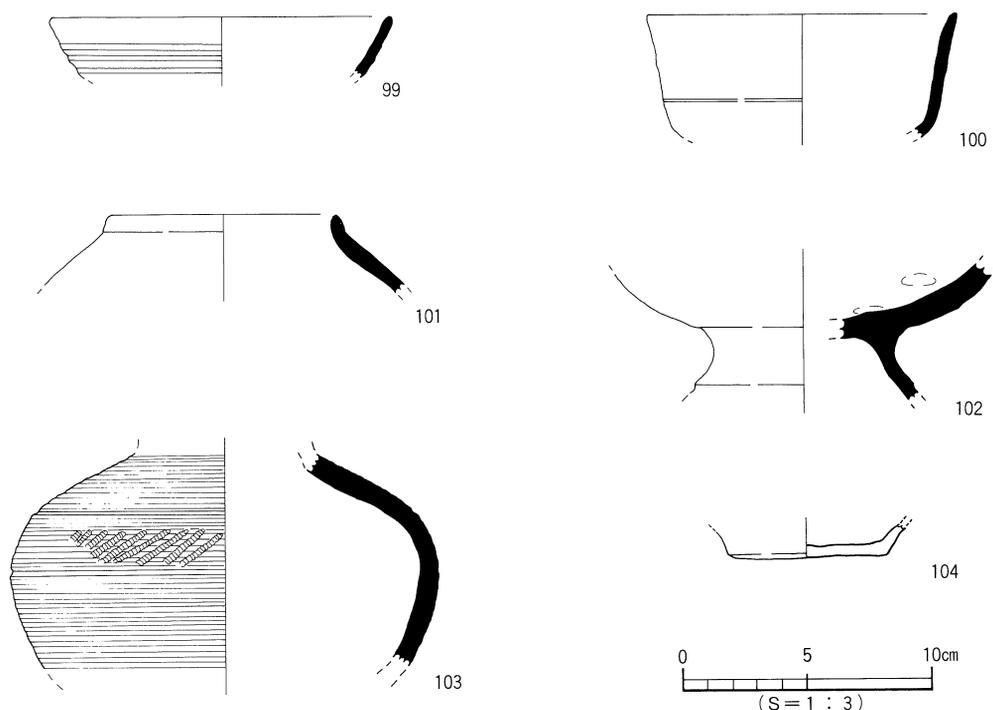


第53図 SK 1 測量図

(3) 墳丘出土遺物 (第54図)

墳丘から出土した土器は、須恵器の坏と壺が各1点、壺が3点、土師器の坏が1点の計6点が出土した。

99は坏である。口縁部は外反し端部は丸い。2条の凹線状の凹みが巡る。100は壺である。口縁部は直立し口縁端部は丸い。胴部下位に1条の沈線を施す。101は短頸壺である。口縁部は短く直立し端部は丸い。肩部外面に自然釉が付着する。102は脚付長頸壺である。脚部はハの字に開き、内面に自然釉が付着する。底部内面に指頭痕が残る。103は長頸壺である。扁球形の胴部で、胴部上位と中位に凹線が巡り凹線間に刺突列点文を施す。104は土師器の坏である。口縁部は欠損する。底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。



第54図 大池東2号墳墳丘出土遺物実測図

(4) 小 結

本調査では、古墳時代後期の横穴式石室（大池東2号墳）を検出した。大池東2号墳は、半壊状態であった。墳丘は盛土が一部分残り、石室は奥壁と奥壁に近い側壁が1～6段残るだけである。

1) 墳丘構造

墳丘は地山をL字状にカットし、黒色土を敷き墓壇を掘り石室を構築する。2号墳も1号墳と同様に地山整形を行い、石室を構築する方法である。

2) 遺 物

遺物は、須恵器の坏身と土師器の坏、鉄刀、鉄鏃、刀子、鏝、鏝金具、耳環が出土した。とくに刃先の曲がっている刀子、鏝、鏝金具は出土例が少なく注目するものである。

大峰ヶ台遺跡 9 次調査 4 B 区

表14 大池東 2 号墳石室内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
83	坏身	口径 11.8 器高 3.3	たちあがりは短く内傾した後直立し端部は丸い。受部はわずかに上外方にのびる。底部は平底である。完形品。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 乳灰色	石・長(1) 密 ◎		
84	坏	底径 6.6 残高 2.65	無台坏。口縁部は欠損する。胴部はやや丸味をもち、底部は平底である。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(2) 密 ◎		
85	坏	口径 13.4 底径 7.2 器高 4.6	土師器の坏。口縁部はわずかに外反し端部は丸い。底部は平底である。	マメツ	マメツ	赤茶色 赤茶色	石・長(1~3) 密 ◎		

表15 大池東 2 号墳石室内出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
86	鍔	刃部と基部を欠損。	鉄	4.3	0.7	0.3	3.503		
87	鍔	刃部と基部を欠損	鉄	3.7	0.7	0.34	3.191		
88	小刀	柄を欠損している。	鉄	27.1	2.5	0.7	196.514		
89	太刀	破片	鉄	6.7	2.7	0.7	18.287		
90	刀子	ほぼ完形	鉄	17.6	1.5	0.3	47.269		
91	刀子	破片	鉄	2.3	0.7	0.2	1.368		
92	刀子	破片	鉄	3.8	1.5	0.4	6.017		
93	鐔	ほぼ完形	鉄	長径 5.1	短径 4.0	0.5	36.874		
94	鐔金具	3/4	鉄	長径 4.0	短径 (2.9)	0.5	8.839		

表16 大池東 2 号墳石室内出土遺物観察表 装飾品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
95	耳環	完形	銅	3.0	1.75	0.8	4.788	中空	
96	耳環	ほぼ完形	銅	2.9	1.6	0.8	15.587	中実	
97	耳環	ほぼ完形	銅	3.0	1.65	0.8	12.783	中実	
98	耳環	3/4	銅	3.0	1.7	0.7	3.011	中空	

表17 大池東 2 号墳墳丘出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
99	坏	口径 13.45 残高 2.4	口縁部は外反し端部は丸い。2 条の凹線状の凹みが巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(2) ○		
100	埴	口径(12.2) 残高 4.9	口縁部は直立し口縁端は丸い。胴部下位に 1 条の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 黄灰色	石・長(1) ○		
101	壺	口径(8.9) 残高 3.1	短頸壺。口頸部は短かく直立し端部は丸い。肩部外面に自然釉が付着する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白濃オリーブ色 灰白色	密 ○	自然釉	
102	壺	基部径 7.2 残高 3.1	脚付長頸壺。脚部はハの字に開き、内面に自然釉が付着する。底部内面に指頭痕が残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰色	密 ○	自然釉	
103	壺	胴部径 17.0 残高 8.5	長頸壺。扁球形の胴部。胴上位と中位に凹線が巡り、凹線間に刺突列点文を施す。	回転ナデ (回転カキメ)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
104	坏	底径 6.4 残高 1.25	土師器の坏。口縁部は欠損する。底部外面には、回転ヘラ切り痕を残す。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ○		

〔2〕4B②区の調査

4B②区は、大峰ヶ台西丘陵の丘陵北側頂部から西に分岐する尾根中腹に位置する。調査区は、緩やかな馬の背状を呈する。試掘結果より、調査区内には2基の古墳が存在することが明らかになった。古墳は西側を大池東3号墳、東側を大池東4号墳とし、平成7年12月18日～平成8年3月15日の間、調査を行った。

調査区には、地境を示す杉の植林と溝状の窪みが2基の古墳中央部を通る。また、4号墳丘には、稜線上の溝以外にも地境を示す尾根に直交する2条の溝状の窪みと、近・現代と思われるピットと石積遺構がある。

調査範囲は、できるだけ両古墳の全容が知れる範囲について調査区を設定したが、4号墳の北側と東側の一部が調査地外となった。調査に際しては、墳丘をそれぞれ東西トレンチと南北のトレンチを境に4区画し、北東部、北西部、南東部、南西部と呼称した。

（1）大池東3号墳

大池東3号墳は、2号墳から直線距離で北へ約50m、比高差約20mを測る。東側には4号墳が隣接している。

1) 墳丘（第56図、図版26）

墳形は円墳である。規模は、直径約11m、残存高は周溝底面より墳頂部まで2.1mを測る。盛土は若干残存している。

墳丘の盛土下には旧表土層とみられる厚さ4～16cmの黒色土層を検出している。この黒色土層は墳丘中央部を中心として直径約7mの範囲で円形に残り、墳丘裾では見られなかった。このことから墳丘は、本来ゆるやかに盛り上がったこの旧地表面を利用して、墳丘裾部を整形し墳丘を画する周溝を掘削し、旧表土層の上に盛土し成形したものと考えられる。

盛土残存高は旧表土面より約30cmを測る。盛土残存状況は後世の削平や流失などで全体的に遺存状況は悪く、版築状況は明瞭ではない。

遺物は、墳丘上から少量出土し、盛土中からは遺物の出土はない。

2) 周溝（第56図、図版27）

周溝は幅1.5～3.0m、周溝検出面よりの深さは5～25cmを測る。局部的に幅の縮小はあるものの比較的円形に整った周溝である。周溝断面は浅い凹レンズ状である。周溝南西部では周溝外側のたちあがりが見られず陸橋部を呈する。これは後世の地境の溝を掘削する際に本周溝にも影響が及んでいるものと考えられる。北西周溝の北側は浅い2段掘状を呈している。この北西周溝では中世の溝（SD1）を検出している。

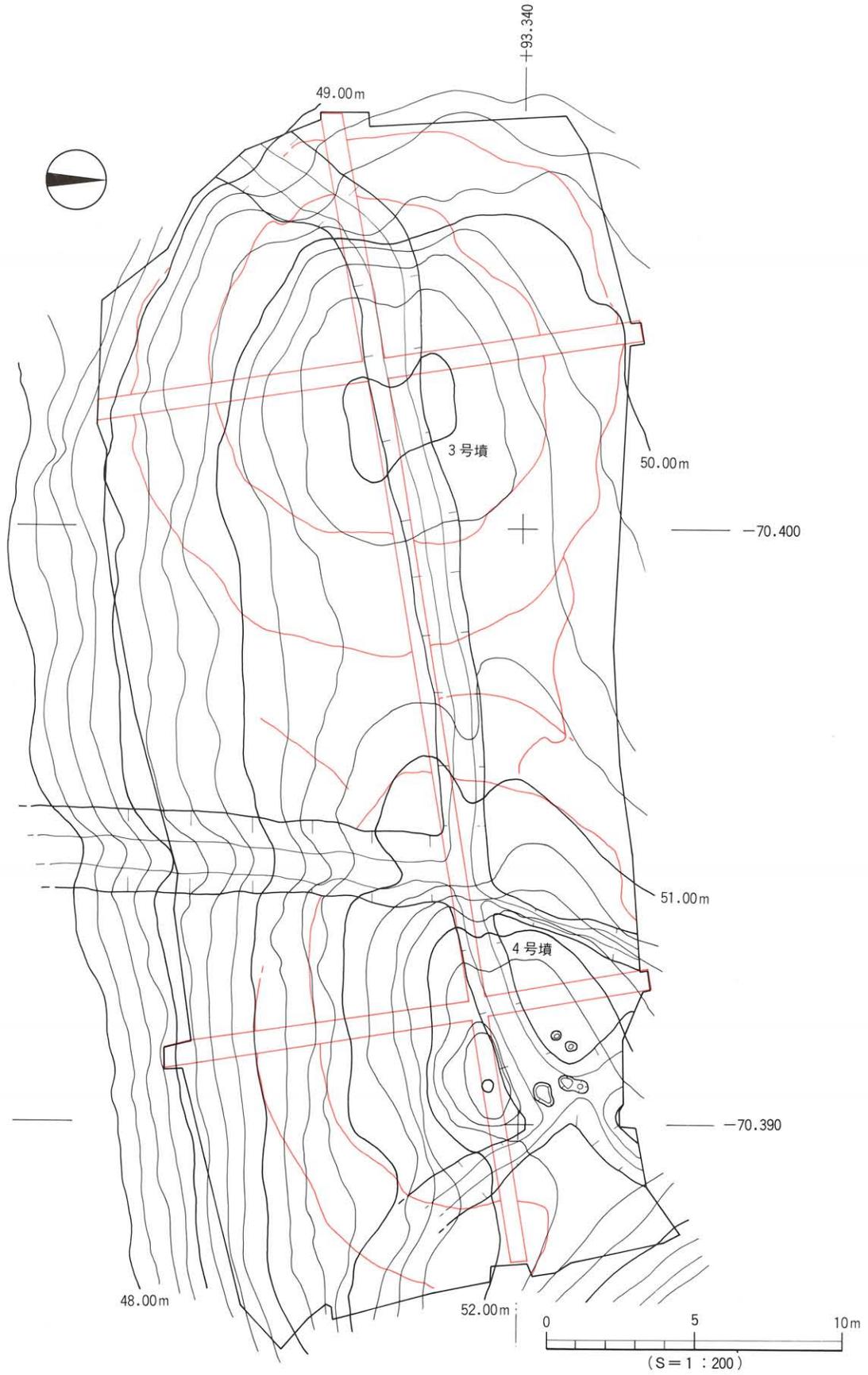
遺物は須恵器、土師器、埴輪、鉄器が出土している。出土状況は部分的に遺物が集中する場所やしない場所があるなど周溝内において差異がみられる。特に埴輪については南東部の周溝に偏っての出土である。

このほか、周溝底からは本墳に関係する祭祀遺構と思われる土坑4基を検出している。

3) 主体部

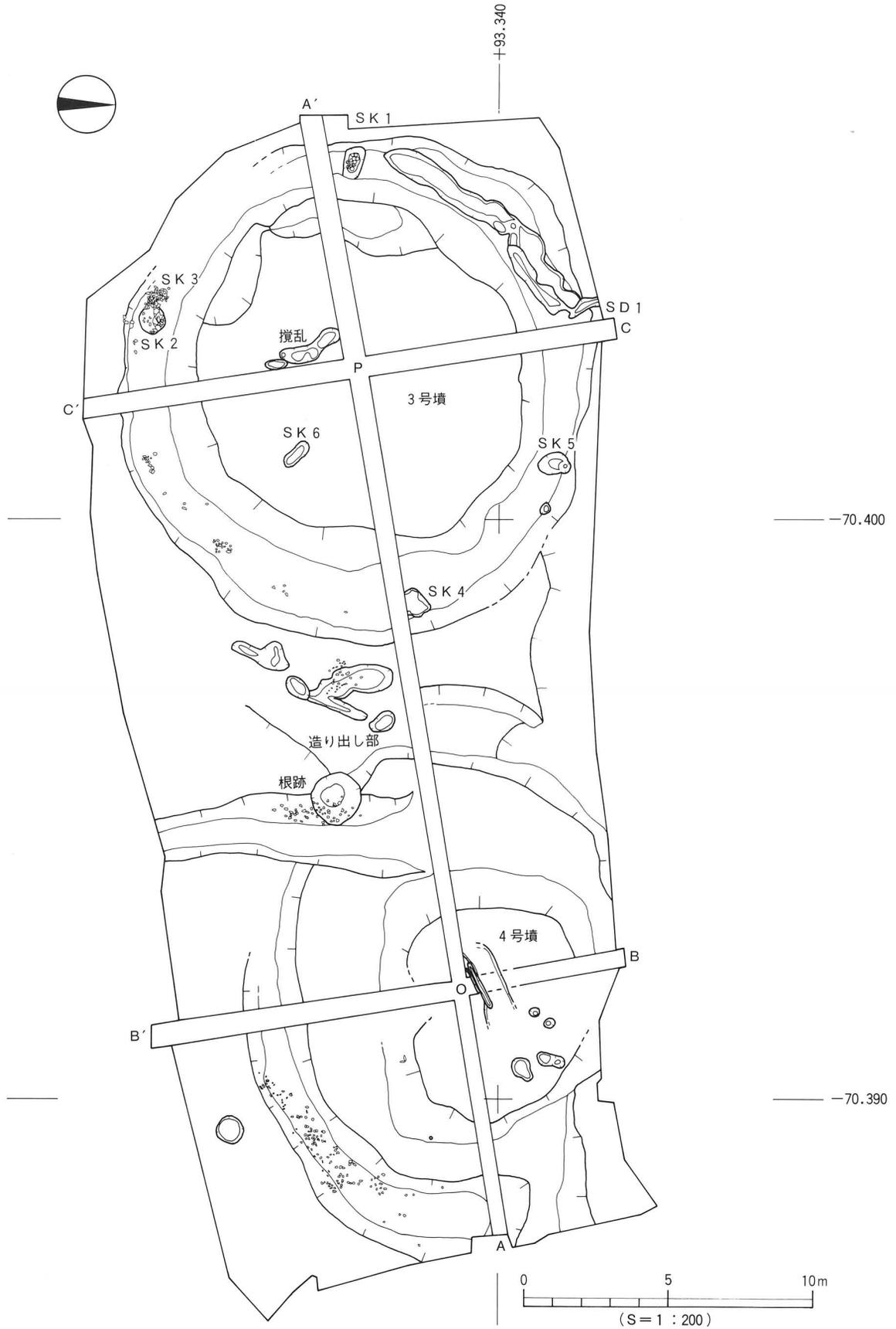
主体部は墳丘の精査を行ったが、墳丘上部が失われており、主体部と考えられる遺構は検出されなかった。墳丘上で確認した遺構は、墳丘中央南に南北に長く浅い不整形な攪乱坑と、墳丘南東部に現代の土坑（SK6）を検出している。

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4B区



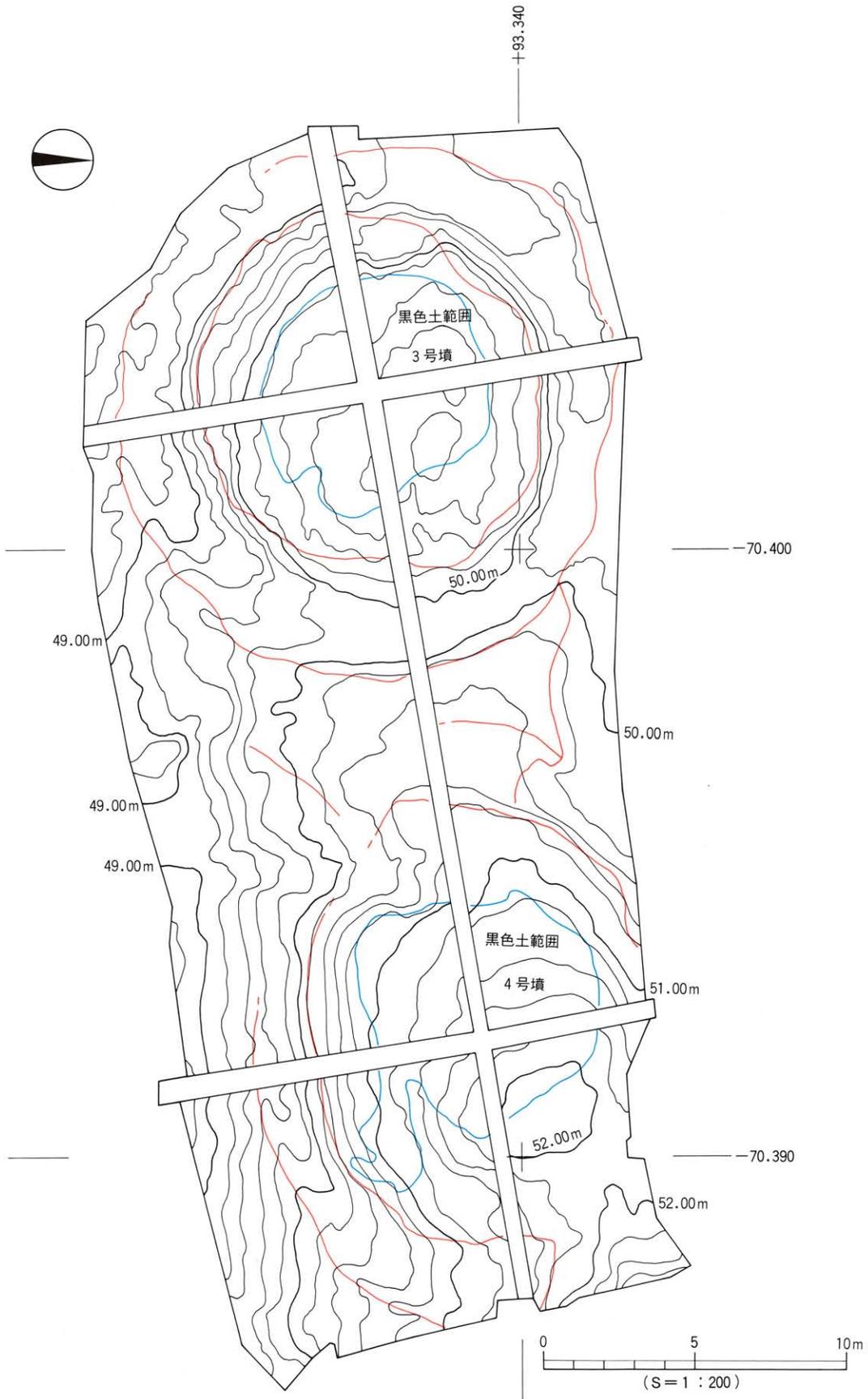
第55図 4B②区調査前測量図・トレンチ位置図

遺構と遺物

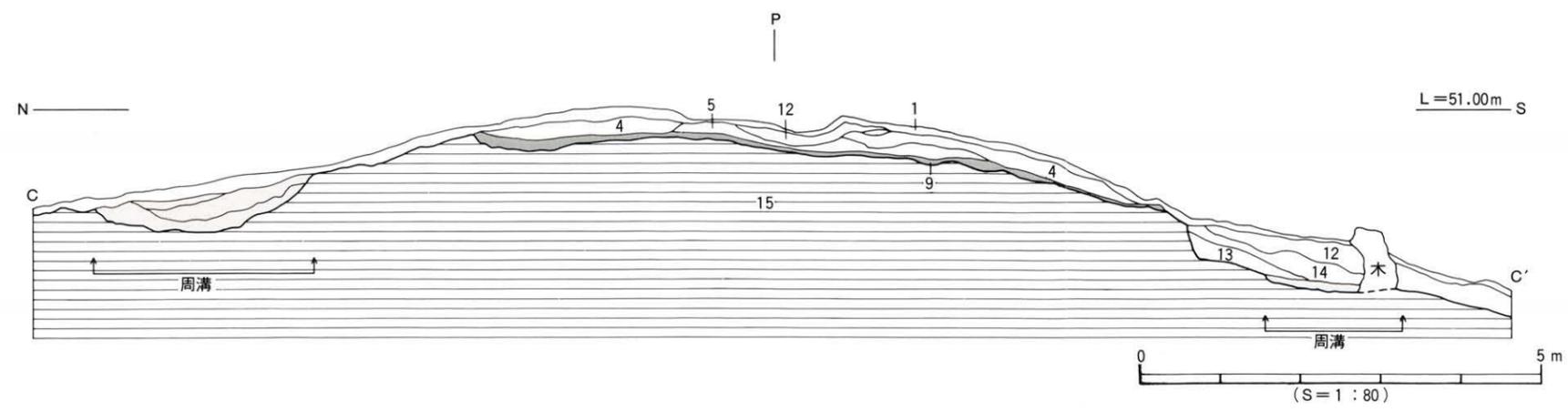
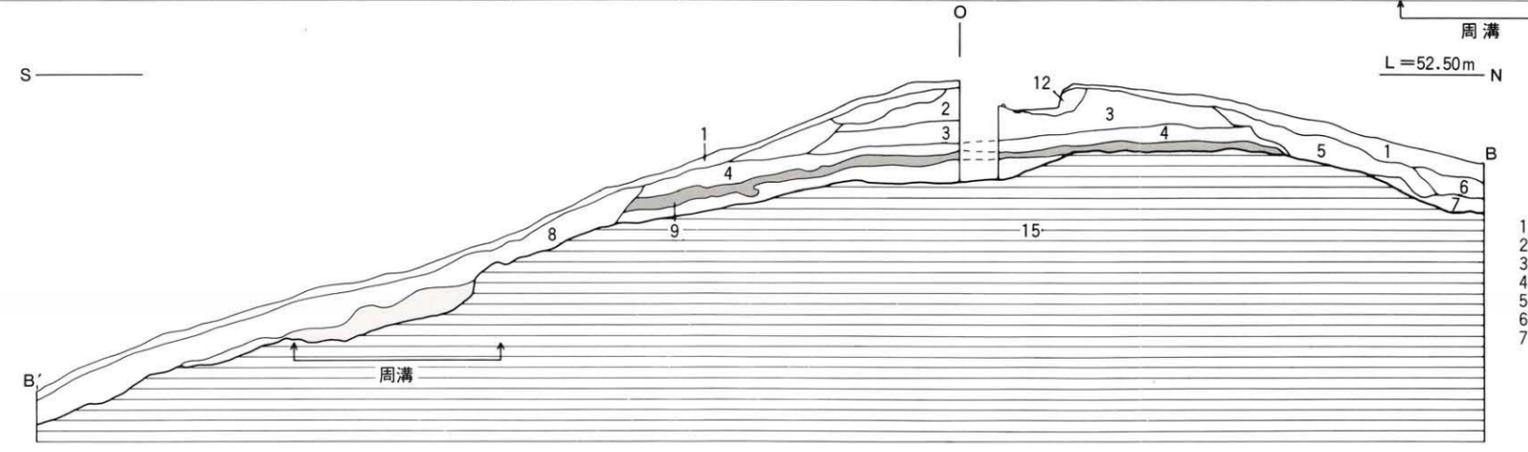
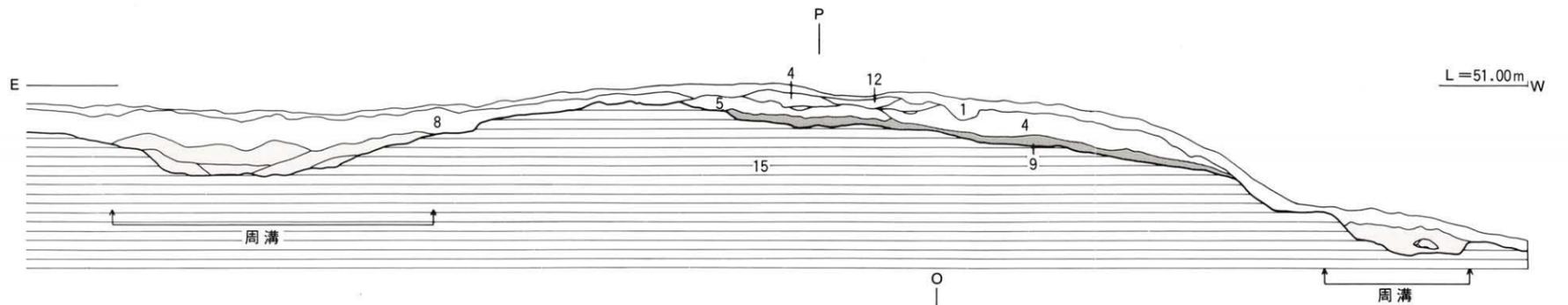
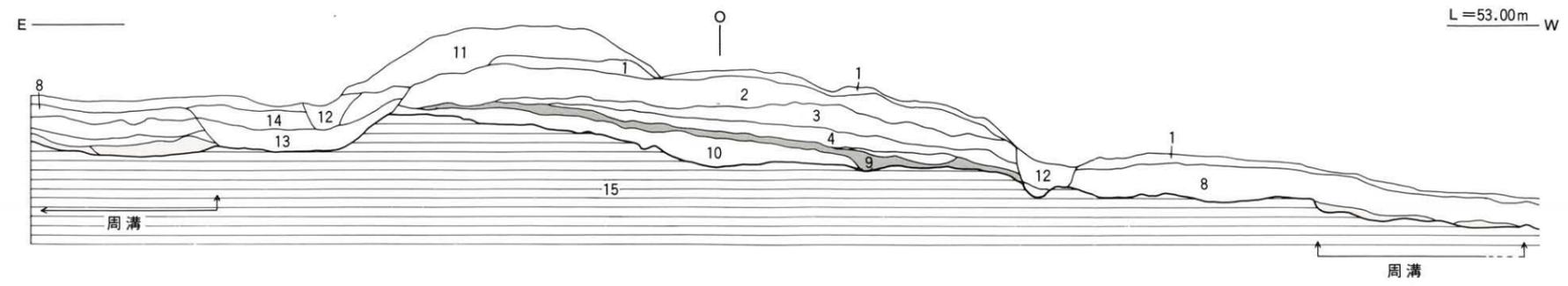


第56図 4 B ②区遺構配置図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4B区

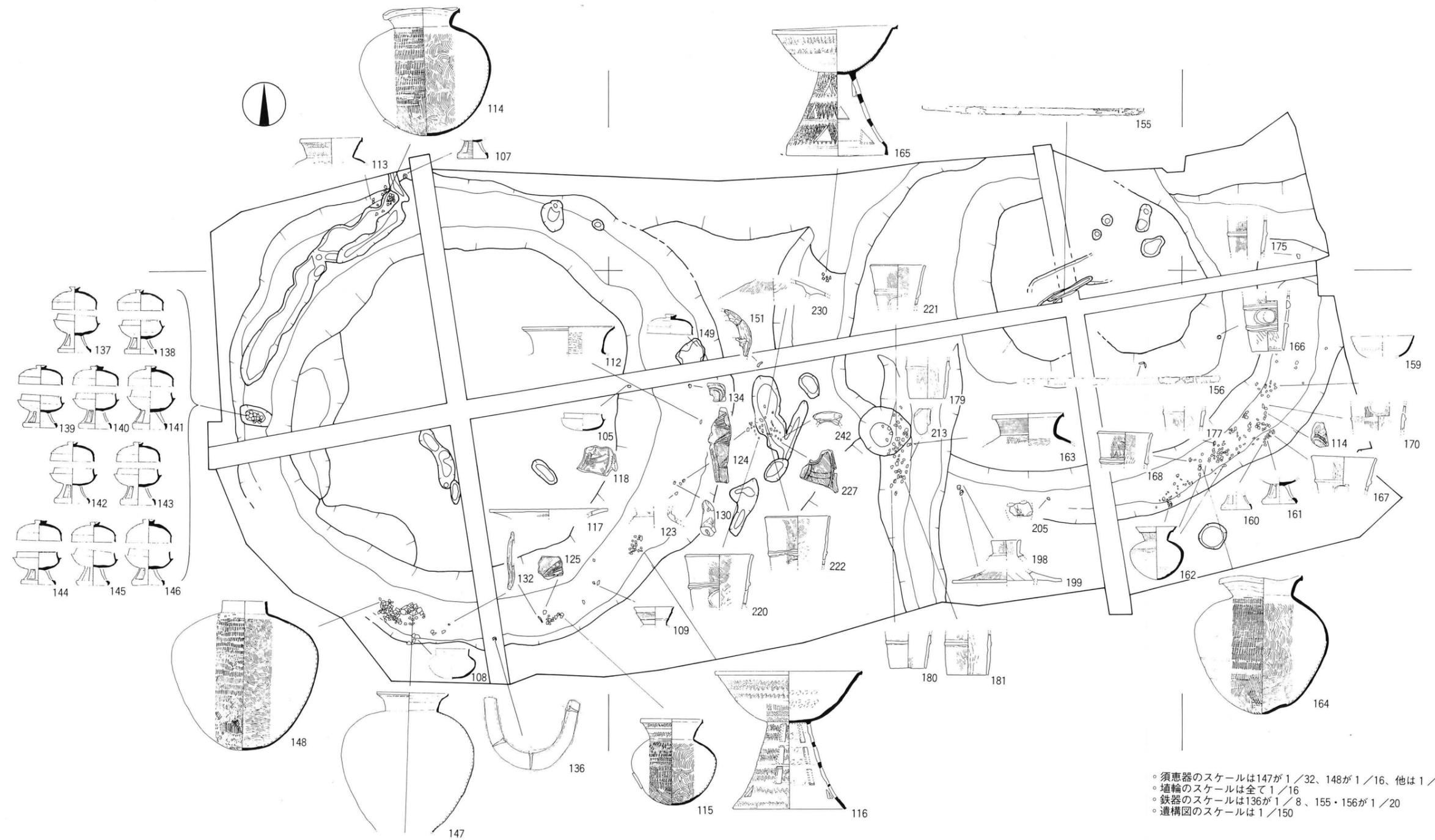


第57図 4B②区調査後測量図



- | | | | |
|---------|---------|-------------|---------|
| 1 表土 | } 盛土 | 8 暗黄灰色土 | } 近・現代溝 |
| 2 白黄色土 | | 9 黑色土 (旧表土) | |
| 3 明黄茶色土 | | 10 赤黄色土 | |
| 4 灰白色土 | | 11 石積遺構 | |
| 5 明黄灰色土 | 12 暗灰色土 | 13 茶褐色粘質土 | |
| 6 黄白色土 | 14 茶色土 | 14 茶色土 | |
| 7 暗黄色土 | 15 地山 | | |

第58図 大池東3号墳・4号墳トレンチ土層図



◦ 須恵器のスケールは147が1/32、148が1/16、他は1/12
 ◦ 埴輪のスケールは全て1/16
 ◦ 鉄器のスケールは136が1/8、155・156が1/20
 ◦ 遺構図のスケールは1/150

第59図 大池東3号墳・4号墳出土遺物配置図

4) 墳丘、周溝内出土遺物

遺物の出土状況については現位置を示すものは少ない。周溝内で出土した埴輪は、本来墳丘に据えられていたか、4号墳の造り出し部からの転落したものと考えられる。他の遺物についても周溝内から出土した同一個体の遺物が、4号墳の墳丘表土や周溝内から出土するなど散在した状況を示すものである。

3号墳の墳丘表土中からは須恵器、形象埴輪片が出土しているがその出土量はわずかである。周溝内からは須恵器、土師器、円筒埴輪、形象埴輪の土製品のほか、鉄製品の鋤先が1点出土している。

須恵器 (第60~62図、図版35・36)

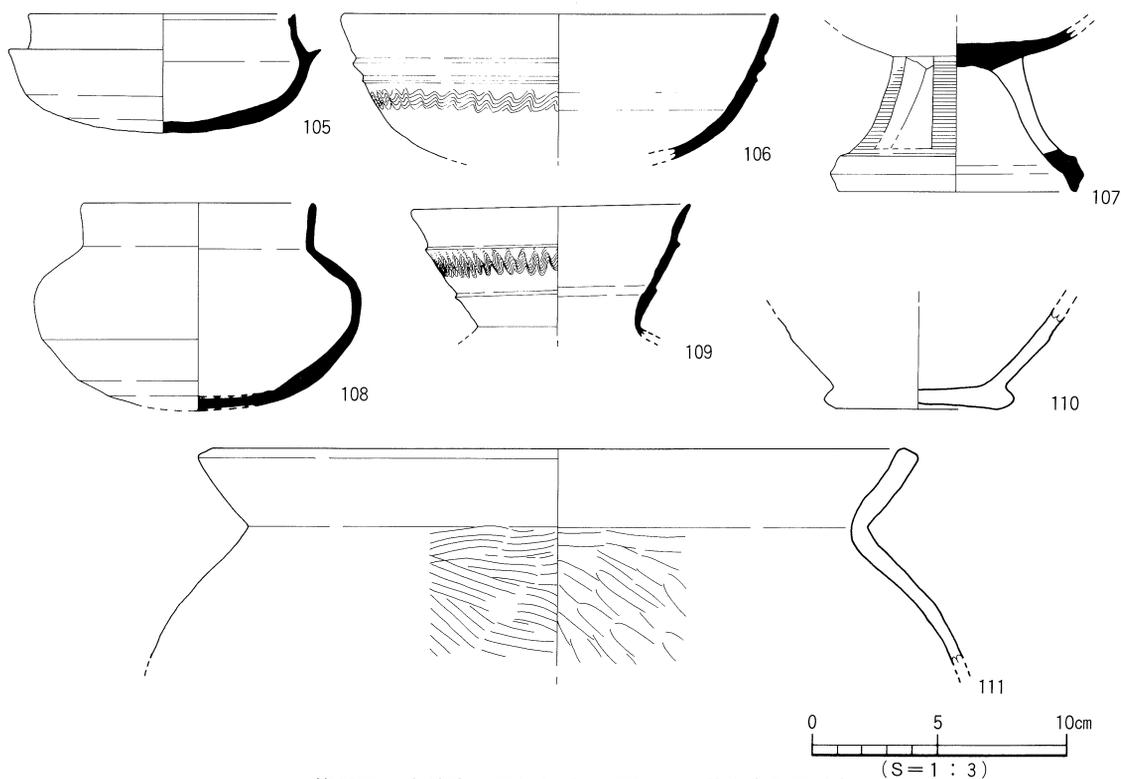
坏身 105は東西トレンチ調査時に3号墳の東側の周溝底から出土した坏身である。口径10.2cm、器高4.7cmで、たちあがりは内傾したのち上方にたちあがり、口縁端部は凹面をなす。受部はやや上方にのびる。底部は丸く、ヘラ削りの方向は逆時計回りである。

無蓋高坏 106は墳丘北西部の表土中での出土である。坏部には2段の稜を有し、波状文を施す。口縁端部は丸くおさめる。107は高坏脚部でカキ目調整が施される。透かしは3方向である。

短頸壺 108は南西と北西の周溝内から破片が出土している。底部は丸く、体部は肩が張る。口縁は外傾したちあがる。口縁端部は丸くおさめる。

壺 109は南東周溝から出土したが、4号墳の南西周溝からも接合可能な破片が出土している。口縁部に2段の稜を有し、稜間に波状文を施している。

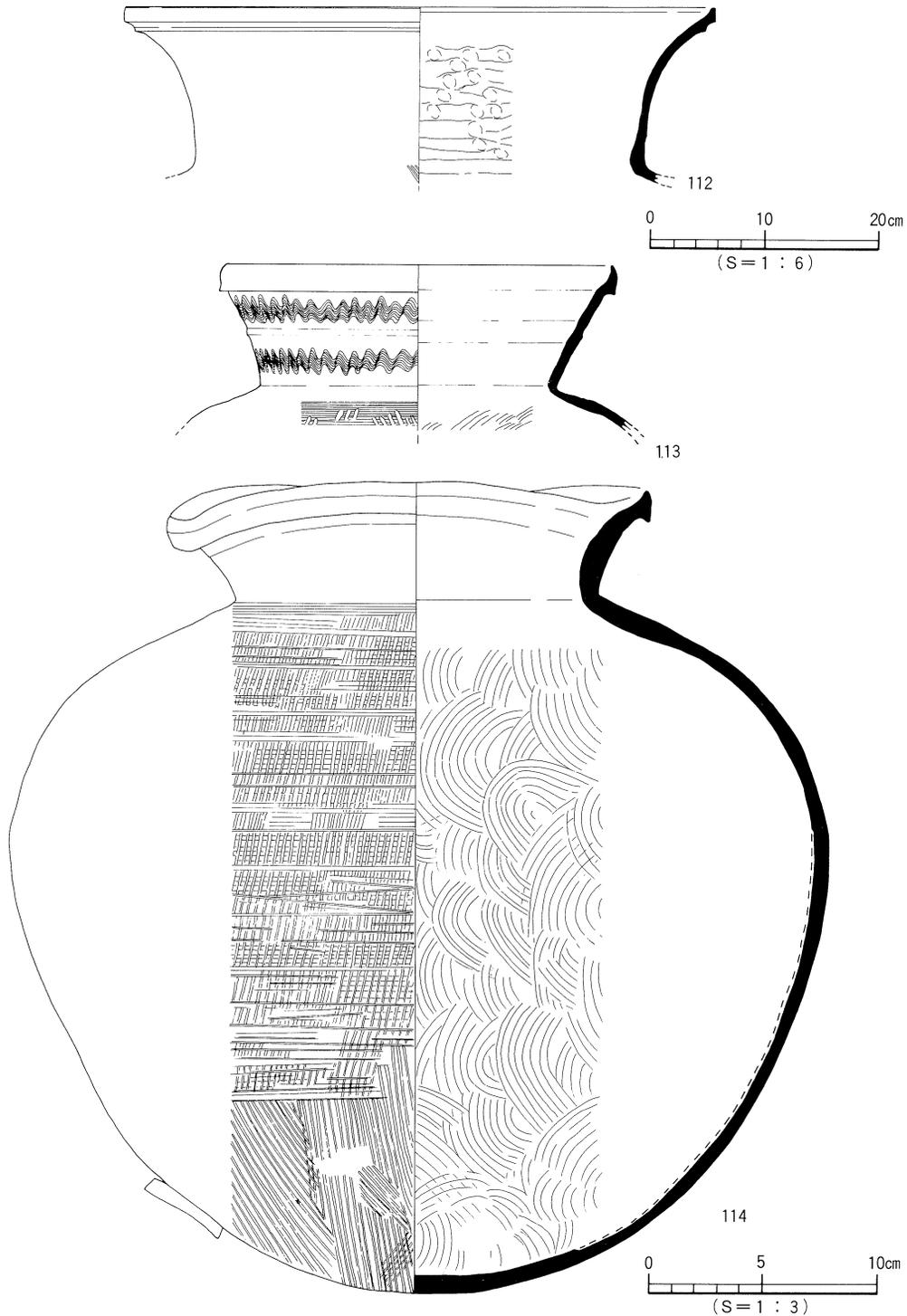
甕 112は3号墳の南西周溝埋土と4号墳の南西部表土中から同一個体の破片が出土している。推定口径50.8cmの大型の甕で、口縁端部外面直下に一条の凸帯を巡らす。口縁内面には指頭痕が看取される。



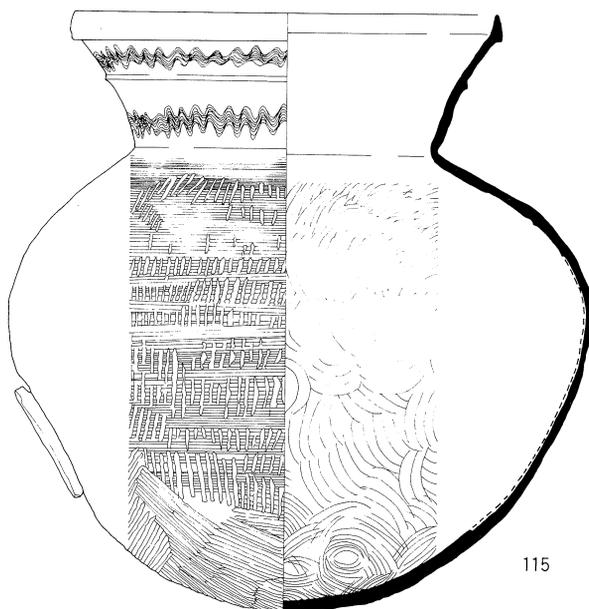
第60図 大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(1)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区

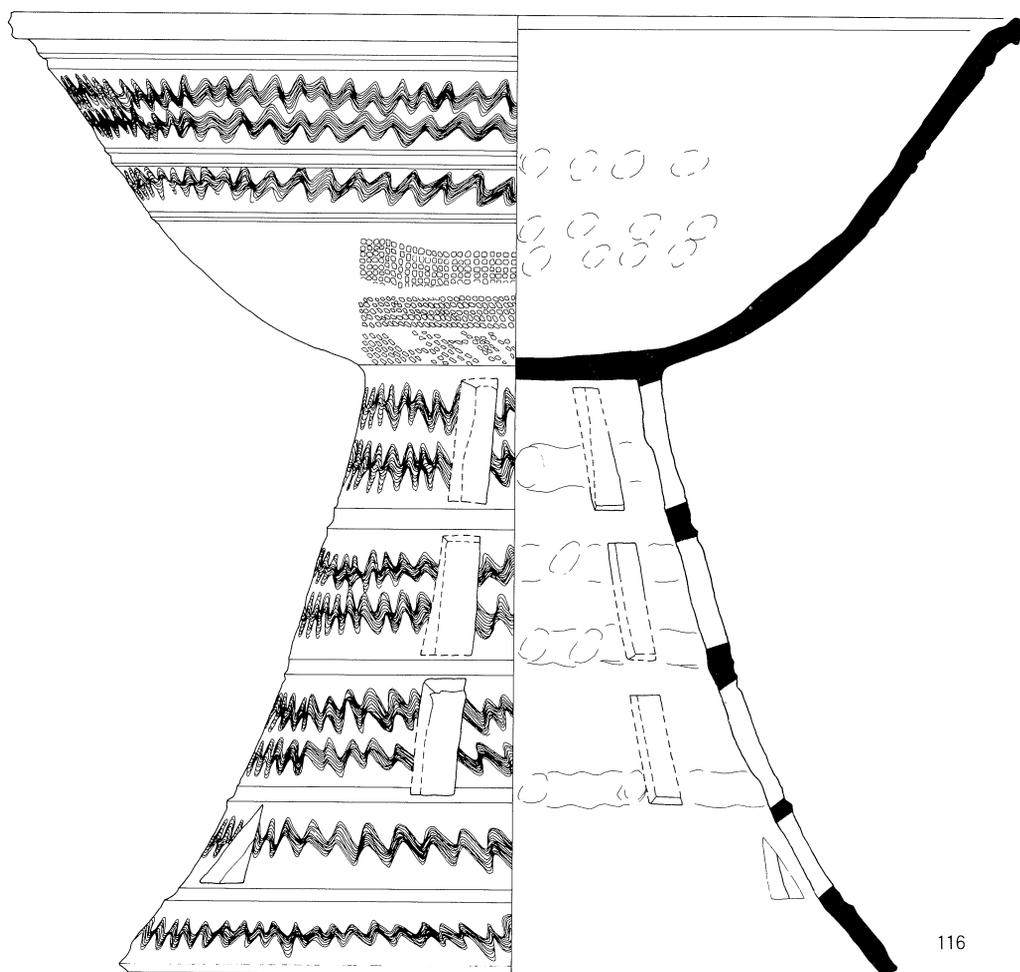
113は北西周溝内北側で出土したものである。口縁部中央に1条の稜で区画し、その上下の文様帯に波状文を施している。口縁端部は上下に拡張し丸くおさめる。114は北西周溝内の北側で破砕した状況で出土したものである。口径20.6cm、器高35.2cmを測り、体部最大径を中位にもち、底部は丸い。口縁部は外反してたちあがり、口縁端部は上下に拡張し、端部外面中央には稜をもつ。底部外面に他土器が付着している。115は南東周溝から出土したものである。体部最大径を上半にもつ。口縁部は外反し



第61図 大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(2)



115



116

0 5 10cm
(S=1:3)

第62図 大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(3)

てたちあがり、口縁端部は外方に肥厚し丸くおさめる。口縁外面中央に一条の凸帯を巡らし、上下に波状文を施す。体部下半に他土器が付着する。

器台 116は南東周溝からの出土である。坏部は外上方に内湾気味にたちあがり口縁端近くで短く外に屈曲する。口縁端部は上下に拡張し丸くおさめる。端部外面はわずかに膨らむ。坏部中位上半に2～3条の凹線を巡らし2段の文様帯をもつ。上1段には2条の波状文、その下段には1条の波状文を施す。坏底外面下半には格子状叩き目を残す。脚は「ハ」字状に開き脚台端部は内で接地する。脚部を4条の凹線で区画し脚台部を含め5段の文様帯をもつ。上3段に2条1組の波状文を施し、長方形のスカシを直列して5方向に配する。脚台とその上1段には1条の波状文を施し、上段に三角形のスカシを5方向に配する。

土師器 (第60図)

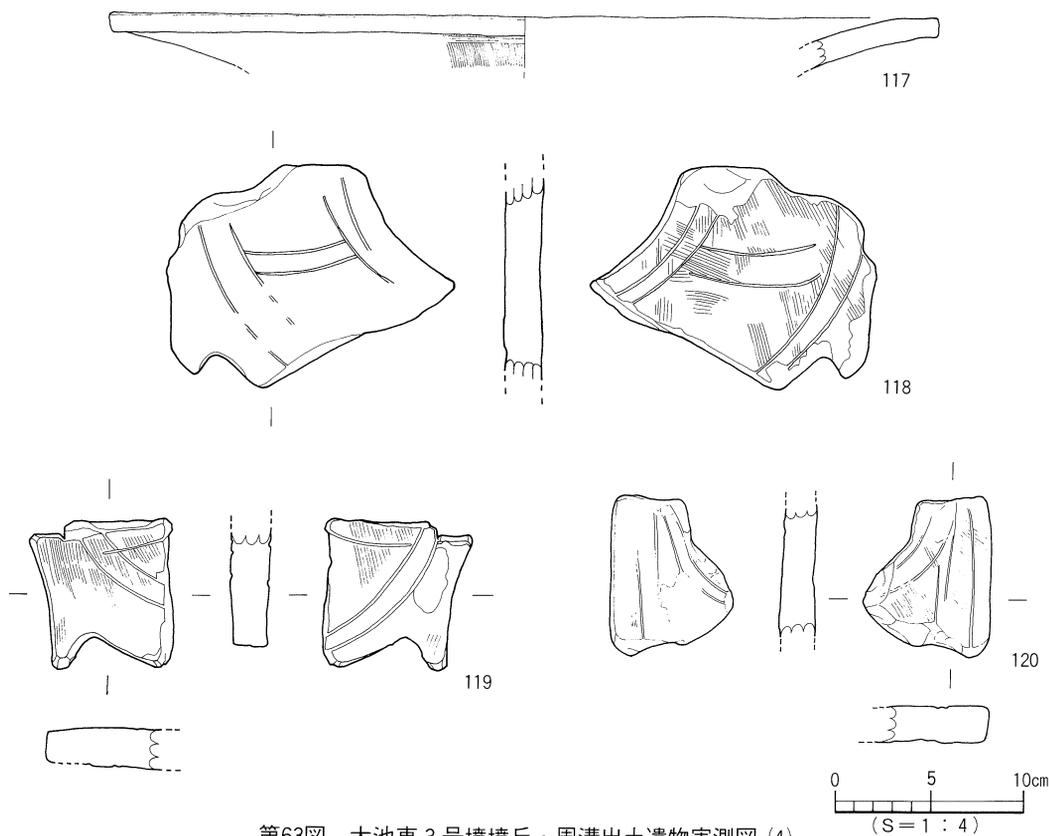
周溝内からは土師器が出土しているが須恵器や埴輪の出土と比べると、その出土量は少ない。

鉢形土器 110は南東周溝から出土したものである。やや上げ底の円盤状の底部から体部は内湾気味にたちあがる。器壁はもろい。

甕形土器 111は南東周溝から出土したものである。口縁部はやや内湾して上方にたちあがる。口縁端部はやや内に肥厚する。

埴輪 (第63～65図、図版45～47・49)

周溝からは円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が出土しているが、そのほとんどは南東周溝からの出土で南東周溝以外は極端に出土量が減少する。特に北東周溝からの出土はなく、北西周溝からも数点しか出土していない。円筒埴輪は出土量が少なく小碎片ばかりである。出土した埴輪は全て土師質であるが、なかには褐色が強く焼きの堅緻なものがみられる。



第63図 大池東 3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図 (4)

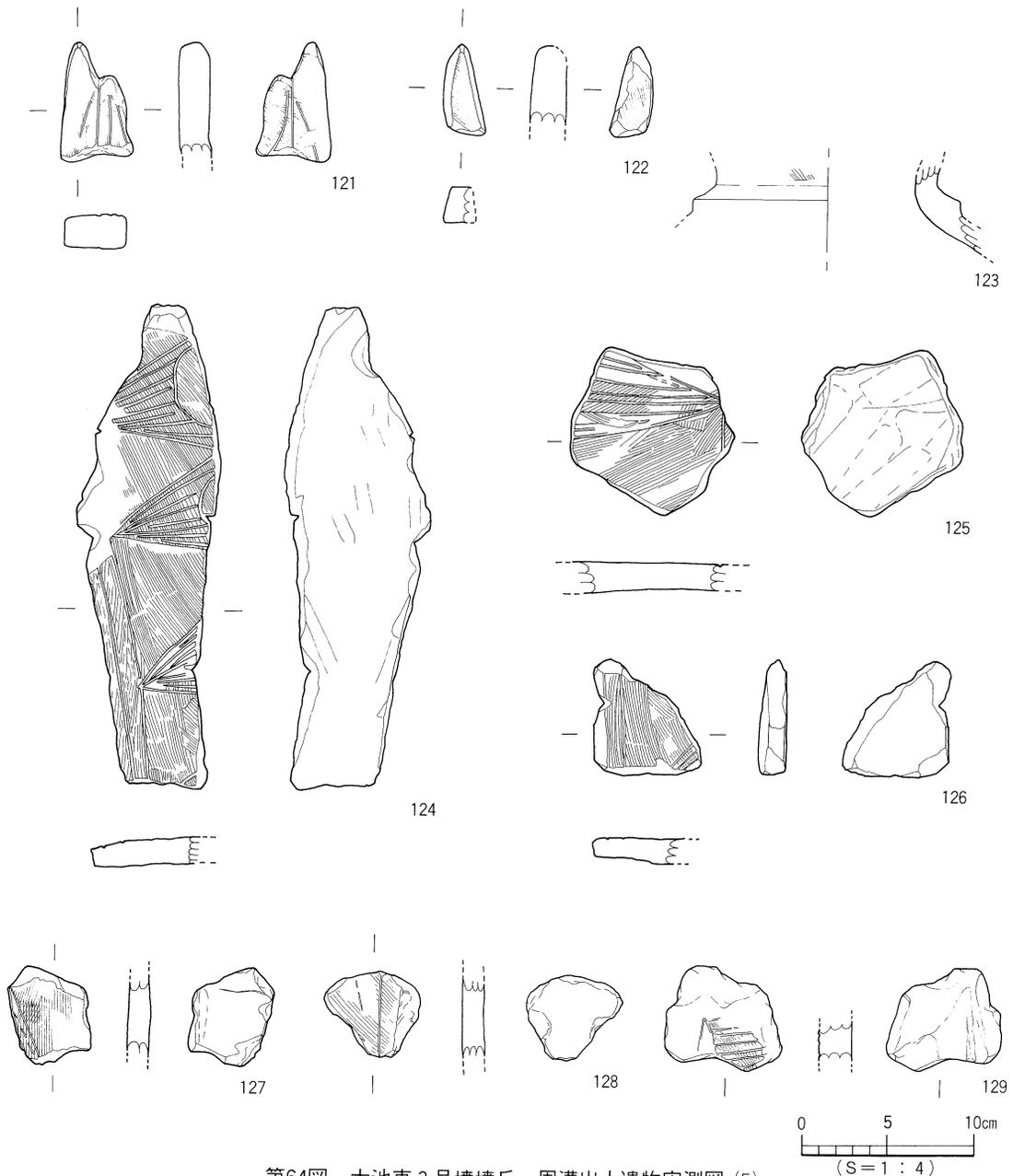
遺構と遺物

朝顔形埴輪 117は朝顔形埴輪とみられる口縁部の破片である。推定口径は43.2cmを測る。

蓋形埴輪 全て南東周溝からの出土である。破片で6点以上が出土しているが全体を知り得るものはない。118~122は立ち飾りの一部である。118・119は飾板に鱗がつく。飾板本体に2条一組の縁取りの沈線を刻み、その間に2条の沈線をわたす。線刻を施す前に斜め、もしくは縦位のハケ目調整をする。120~122は鱗飾り部で、123は笠部上端と軸受け接合部である。接合部に凸帯を巡らしている。

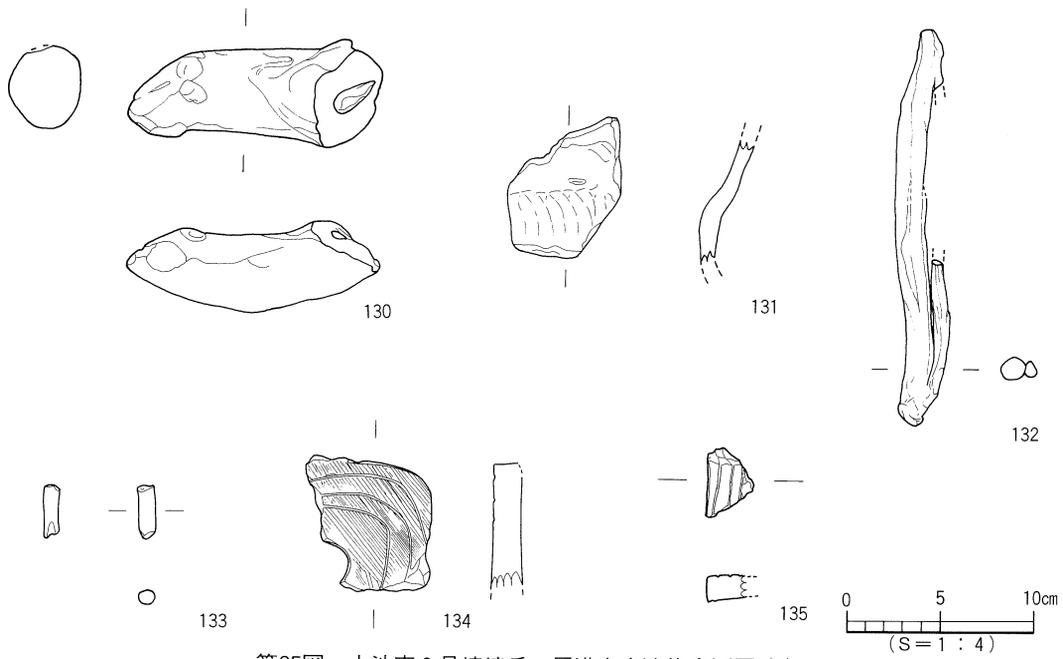
楕円形埴輪 破片で9点出土しているが、全容は知れない。円筒埴輪と比べると焼きは堅緻である。124の縁には2条の沈線を施し、弧状の文様から外向きに3ないし4単位の鋸歯文を刻むものと思われる。124・126は南東周溝、128・129は南西周溝、127は北西周溝、125は南西墳丘からの出土である。

人物埴輪 130は南東周溝表土中から出土した左腕の破片と思われる。指は全て欠損している。131は



第64図 大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(5)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区



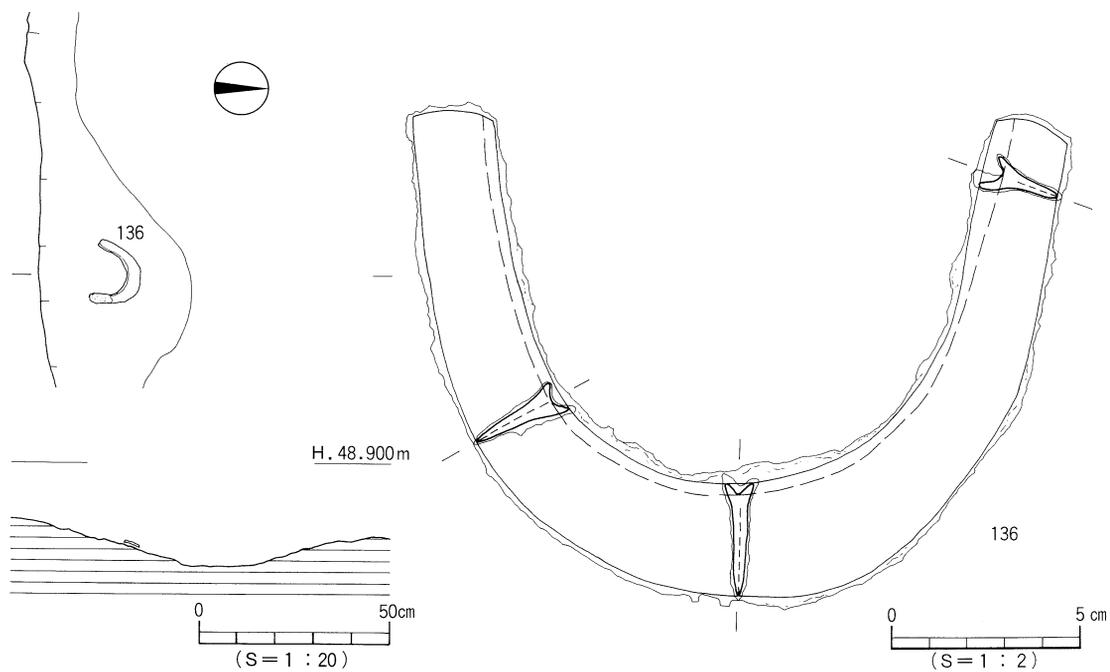
第65図 大池東3号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(6)

南東周溝から出土した脚部と思われる破片である。132は南東周溝と南西周溝から出土したものである。弓をかたどったものと思われ、おそらく人物埴輪の手にもたされていたものとする。

器種不明埴輪 133～135は南東周溝から出土した遺物である。133は円柱状の破片である。134は縁に3条の沈線を施し、内側に孔の存在が知れるものである。135は縁に3条の沈線がみられる。

金属製品 (第66図、図版37)

南西周溝の南北トレンチ近くの周溝から鋤先が1点出土している。出土状況は、U字先端を北へ向



第66図 大池東3号墳周溝内鋤先出土測量図・実測図

遺構と遺物

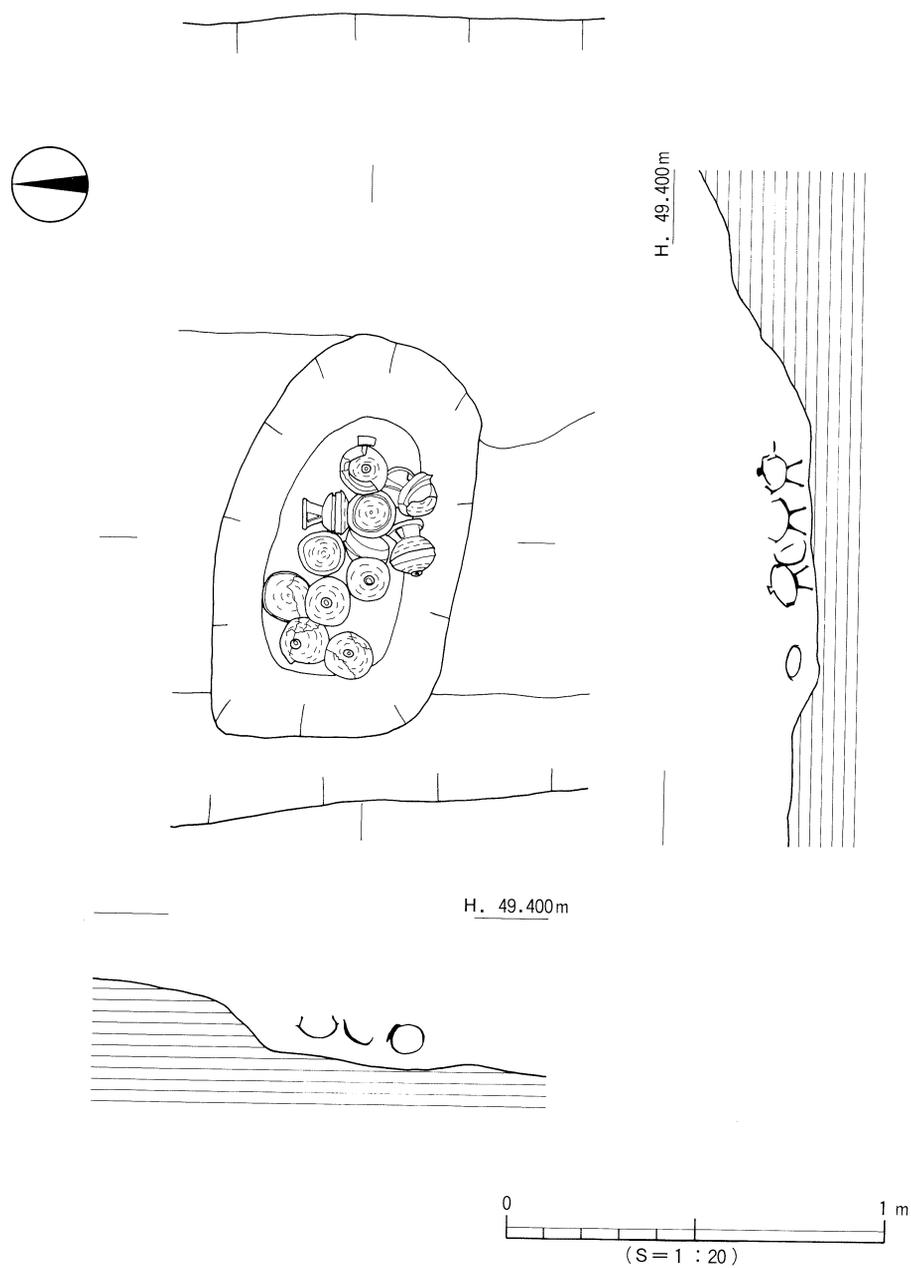
け周溝外側たちあがりの器壁底面にへばりついた状況で出土した。

鋤先 136はU字形の鋤先で、内側にV字溝を有する。内側の一部に木質が残存している。

5) 周溝内検出遺構

SK 1

北西周溝の底で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は検出長軸1.08m、短軸0.66m、深さ10cmを測る。断面形態は舟底状である。埋土は周溝埋土と同じ茶色土である。土坑底内には須恵器、有蓋高坏が蓋・身セットで10個体出土した。出土状況は、7個体が正置の状態出土し、そのうち



第67図 SK 1 測量図

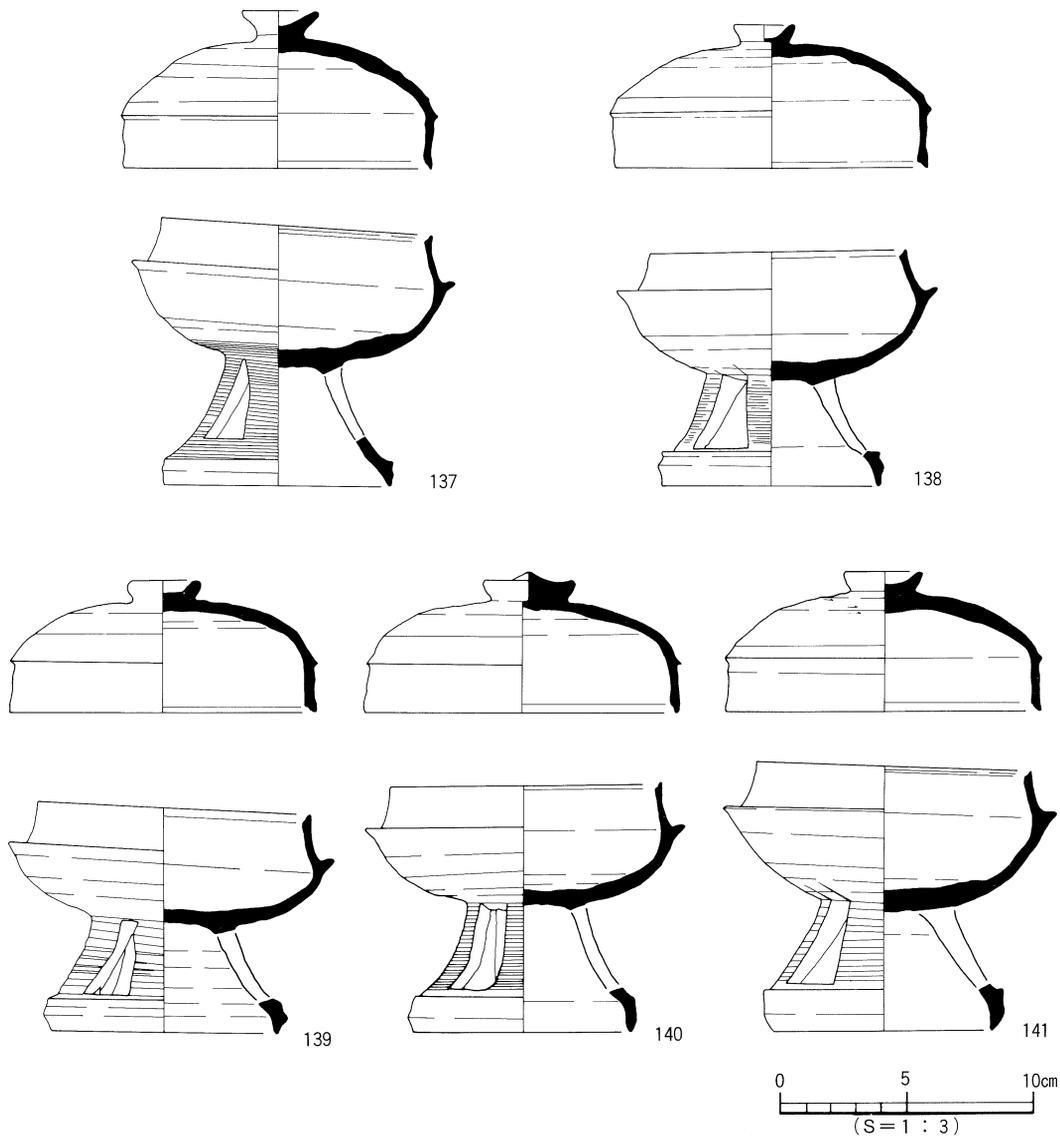
2個体は蓋を外した状態で出土した。残る3個体は蓋をしたまま、横倒しの状態で出土した。これらの坏内には視認できる遺物は認められなかった。

出土遺物 (第68・69図、図版38)

有蓋高坏 (137~146) 蓋を開けられた状態のものが2点(139・142)あるが、蓋は近接して置かれており、すべてセット関係を把握できるものである。

蓋は口径11.9~12.4cm、器高5.4~6.5cmを測る。口径最大のは141で、器高が最大のは146である。蓋の天井部は10点とも全体的に丸い。ツマミは中央がくぼむもの、137~139・141~143・145、中央部がやや膨らむもの、144・146があり、中央部が突出するもの、140がある。稜は全体に短く鋭いが、141・144はやや丸く鈍い感がある。口縁端部は内に傾く平面をなすもの141・146があり、のこる8点の口縁端部は凹面をなす。天井部のヘラ削りの方向は全て逆時計回りである。

高坏は口径10.0~11.1cm、脚底径8.4~9.2cm、器高9.1~10.7cmを測る。口径最大を測るものは146



第68図 SK 1 出土遺物実測図 (1)

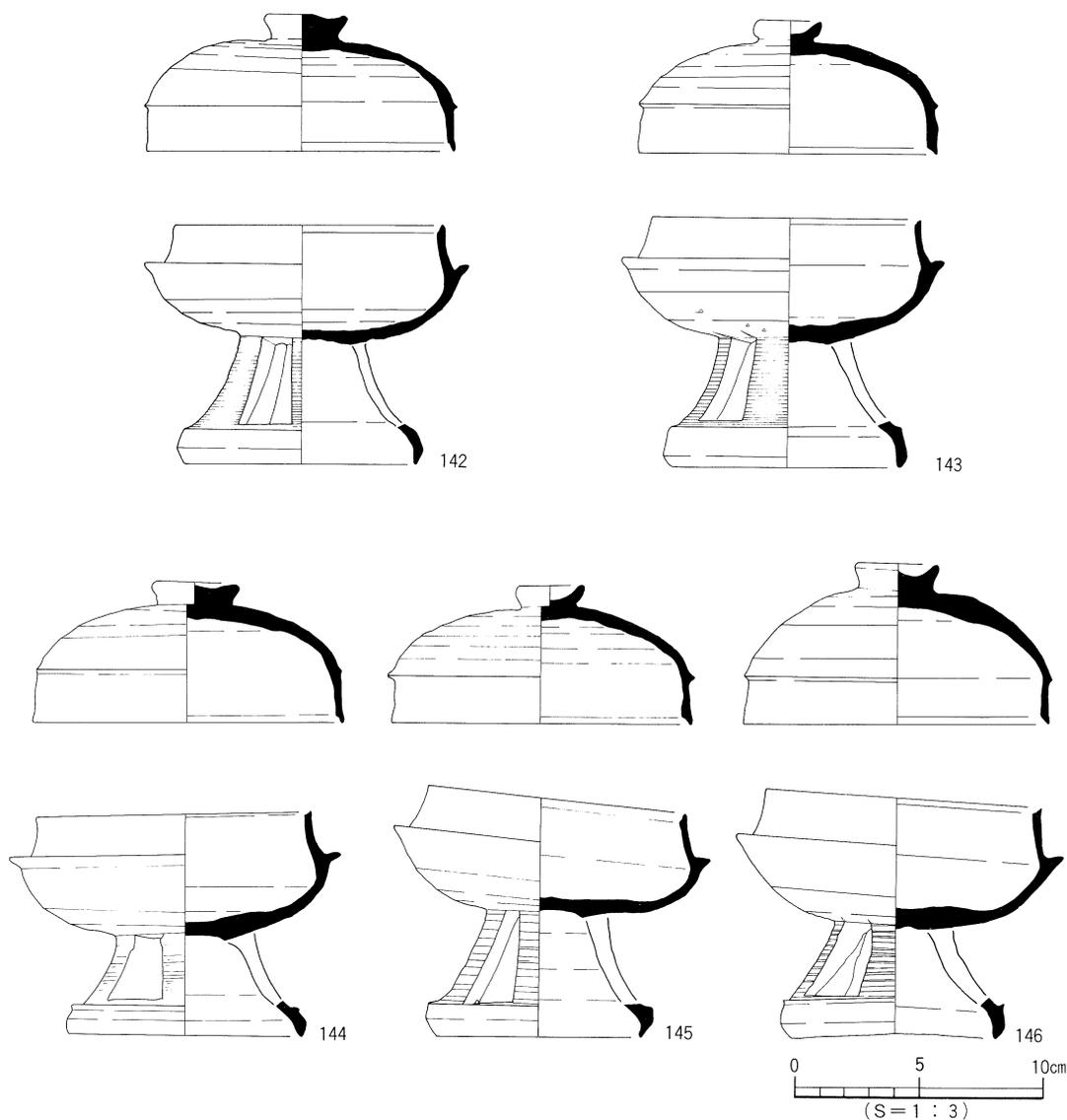
遺構と遺物

である。坏部のたちあがりは、すべての個体については内傾したのち上方にのびるものである。たちあがりの端部形態は、凹面をなすものが主体となるが、段をもつものに141がある。受部は水平気味にのびるもの141・145があり、他は上方へのびる。底部は丸みをもつもの137・138・141・143・146があり、他はやや扁平な感がある。底部外面のヘラ削りはすべて逆時計回りである。

脚部はすべての個体にカキ目調整が施される。脚部にはすべての個体に3方向のスカシを施す。スカシの形は、三角形のもの137があり、他は長方形のスカシを施してある。

S K 2 (第70図)

南西周溝底での検出である。平面形態は円形で規模は直径約60cm、深さ30cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は茶色土である。出土遺物は甕が出土している。周溝掘削時からS K 2上には甕の破片が出土していたものである。S K 2はこの大甕を安定して据えるための土坑と思われるが、底部は出土していないことから、据える段階で底部を打ち欠いているものと思われる。S K 2の西側50cmにはS K 3がある。



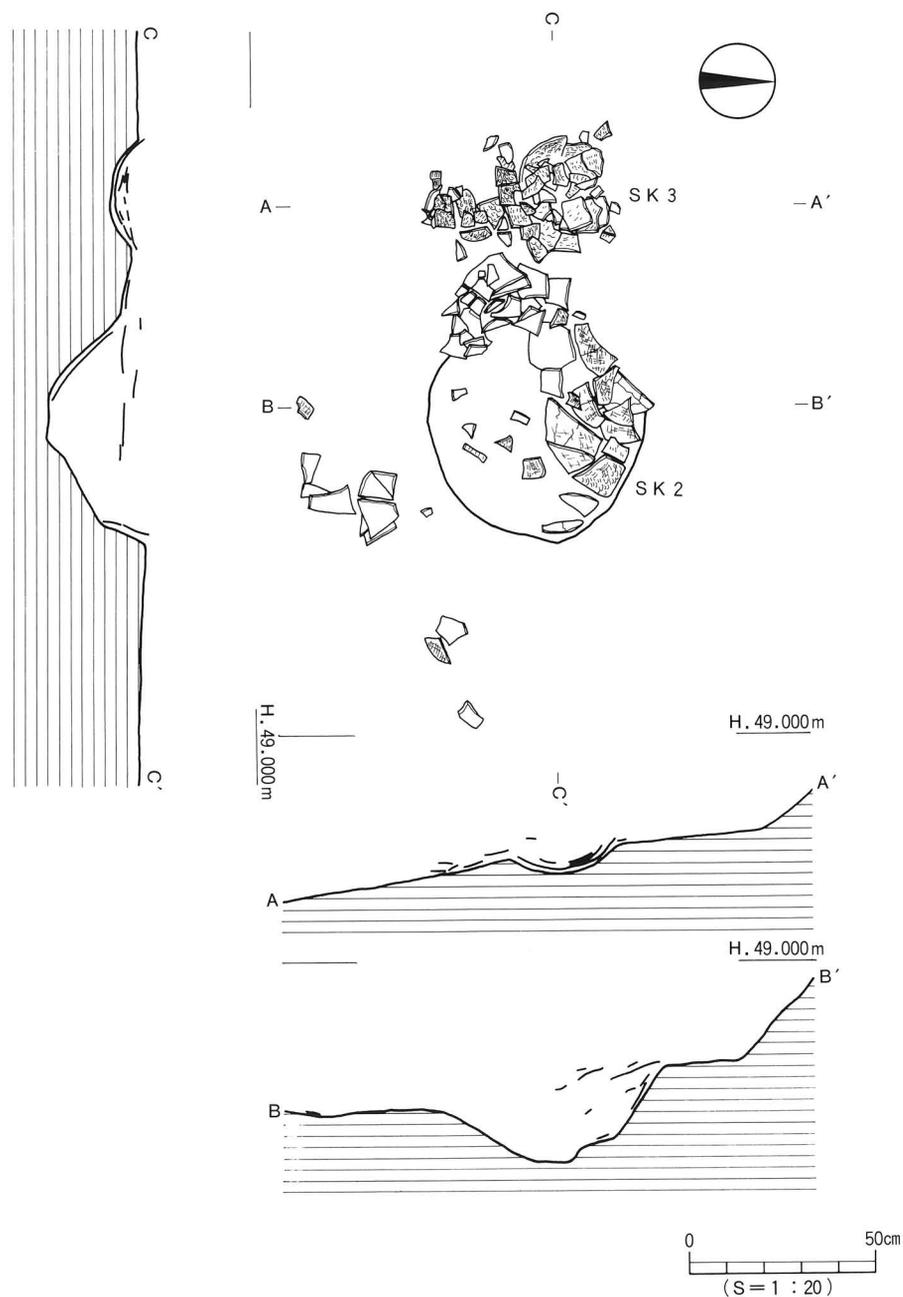
第69図 SK 1 出土遺物実測図 (2)

出土遺物 (第71図、図版39)

甕形土器 147は推定口径51.6cm、残存高103.6cmを測る大型の甕である。体部最大径を中位上半にもち、肩が張る。口頸部は外上方にたちあがり、口縁部はさらに外反する。口縁端部は丸くおさめ、口縁端直下に一条の凸帯を巡らし、凸帯下には刺突文が施される。体部外面には平行タタキ目痕を残し、内面は丁寧なナデケシをおこなっている。

SK 3 (第70図)

南西周溝の検出で、平面形態は円形である。検出規模は直径約30cm、最深部の深さは10cmを測り、



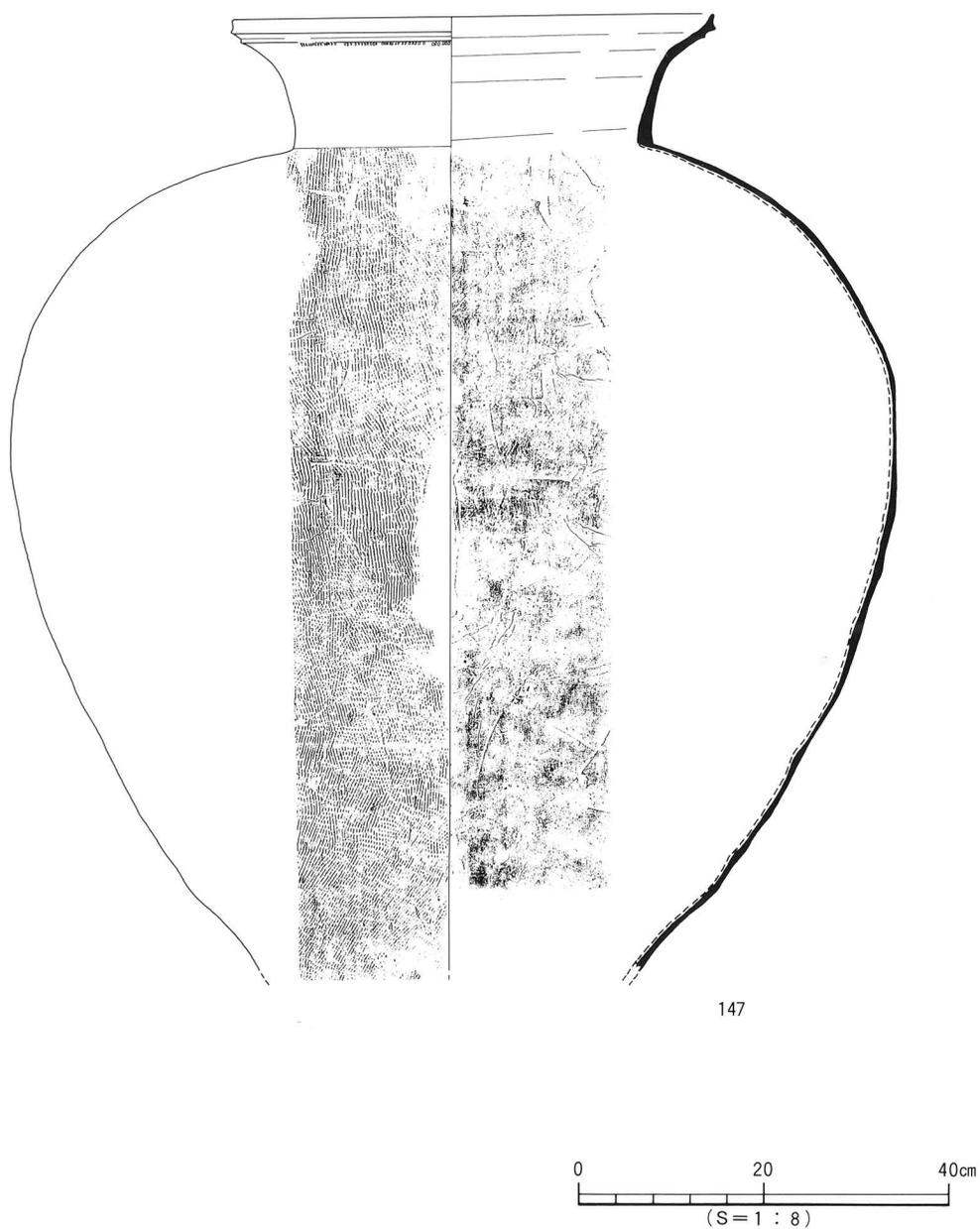
第70図 SK 2・SK 3 測量図

遺構と遺物

断面形態は凹レンズ形の土坑である。検出前からSK 3 周辺の上部からは須恵器片が出土していたもので、SK 3 の遺存する土坑壁に沿って須恵器壺の底部片が出土した。SK 2 と同様に、SK 3 も土器を据えるための土坑といえる。

出土遺物 (第72図、図版40)

壺形土器 148は推定口径16.0cm、器高54.4cmを測る。体部最大径を体部上半にもち肩が張る。底部は丸い。頸部はやや内傾して上方にたちあがり、口縁部は肥厚し、端部は凹面をなす。体部外面上半



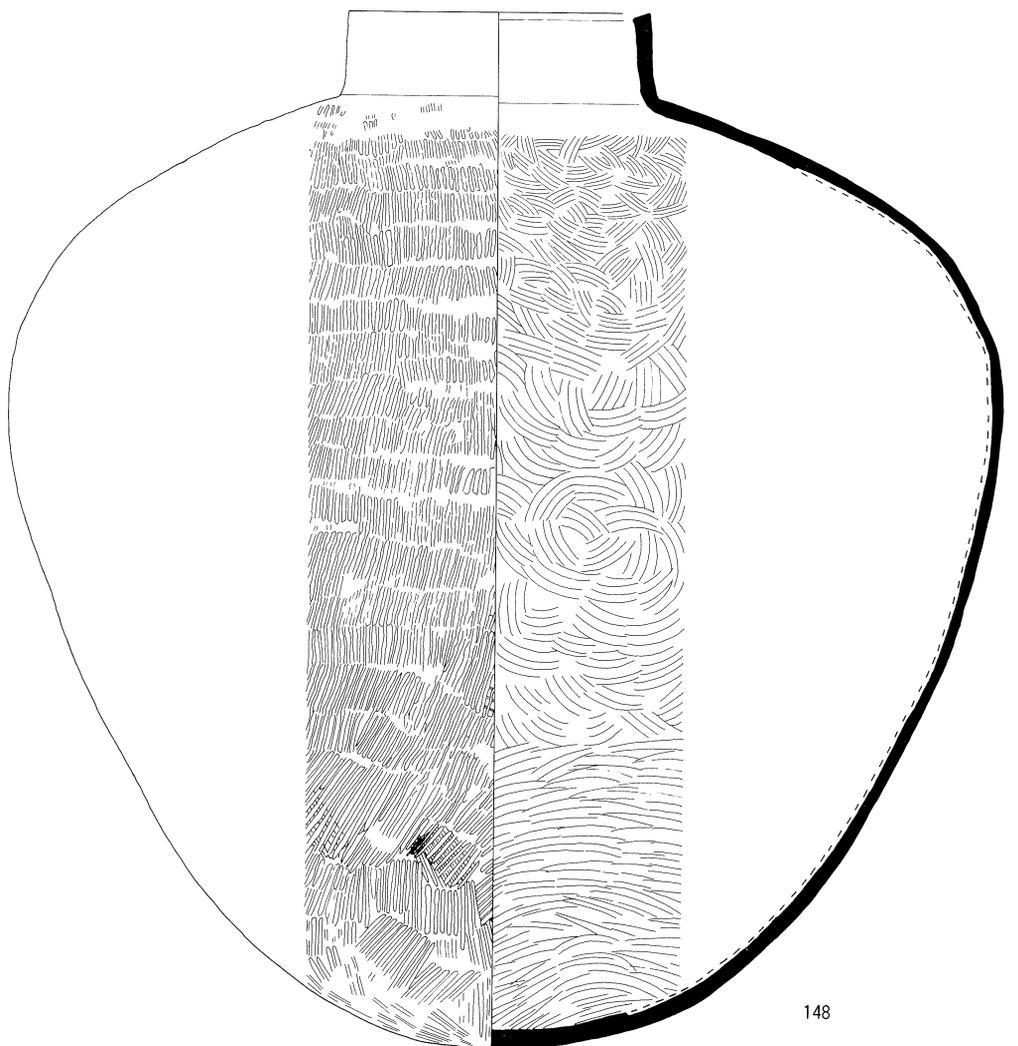
第71図 SK 2 出土遺物実測図

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4B区

には縦位のタタキ目を、下半には、縦と斜め方向のタタキ目を残す。体部内面には同心円状の当て具痕を明瞭に残す。

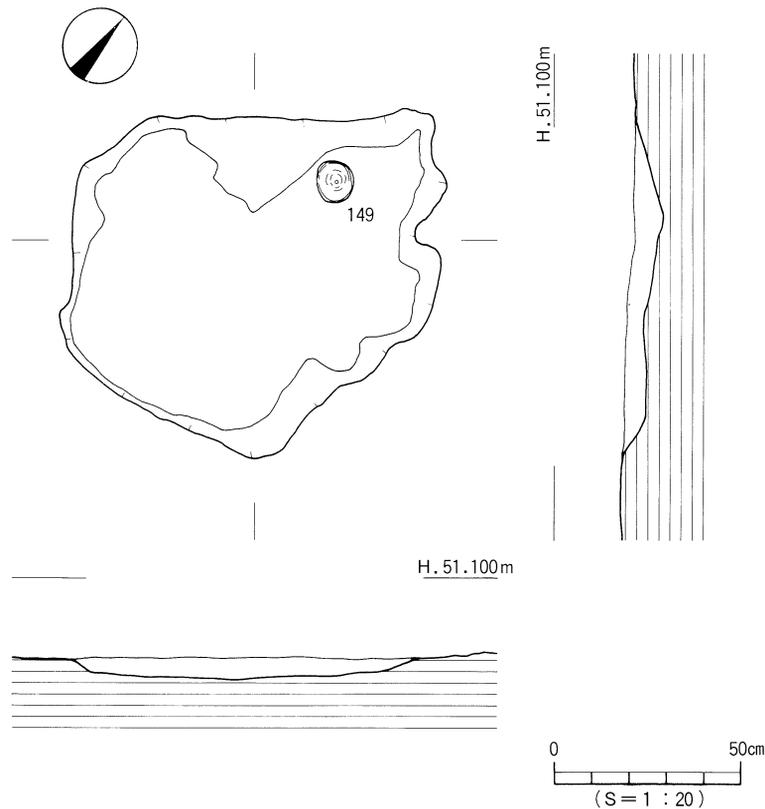
S K 4 (第73図)

北東周溝底での検出である。平面形態は不整形である。規模は長軸1.1m、深さは最深部で8cmを測る。断面形態は、埋土は周溝埋土と同じ茶色である。土坑内北側で完形の有蓋高坏の蓋が1点出土している。

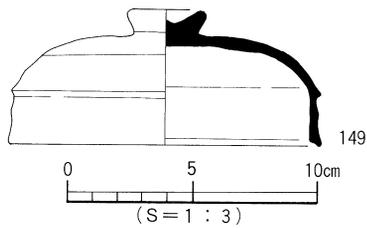


第72図 SK 3 出土遺物実測図

遺構と遺物



第73図 SK 4 測量図



第74図 SK 4 出土遺物実測図

出土遺物 (第74図)

蓋形土器 149は口径12.4cm、器高5.4cmを測る。天井部はやや扁平でツマミは中央部がやや膨らむ。稜は短く丸みを帯びる。口縁端部は肥厚して内傾する凹面をなす。天井部1/2にヘラ削りを施す。ヘラ削りの方向は逆時計回りである。

SK 5 (第75図)

北東周溝底での検出である。平面形態は不整形である。検出規模は、土坑中央部より南北方向を長軸とし、それに直交する東西方向を短軸として、長軸112cm、短軸64cm、深さ8～24cmを測る。土坑埋土は周溝埋土と同じ茶色である。土坑内上部には拳大の割石を敷き詰めている。この石を撤去したところ、土坑内北側に断面形が逆台形を呈するピット状の段落ちを検出している。土坑内からは遺物は出土しておらず、周溝との切り合い関係も把握できていないため、3号墳との関係は不明である。

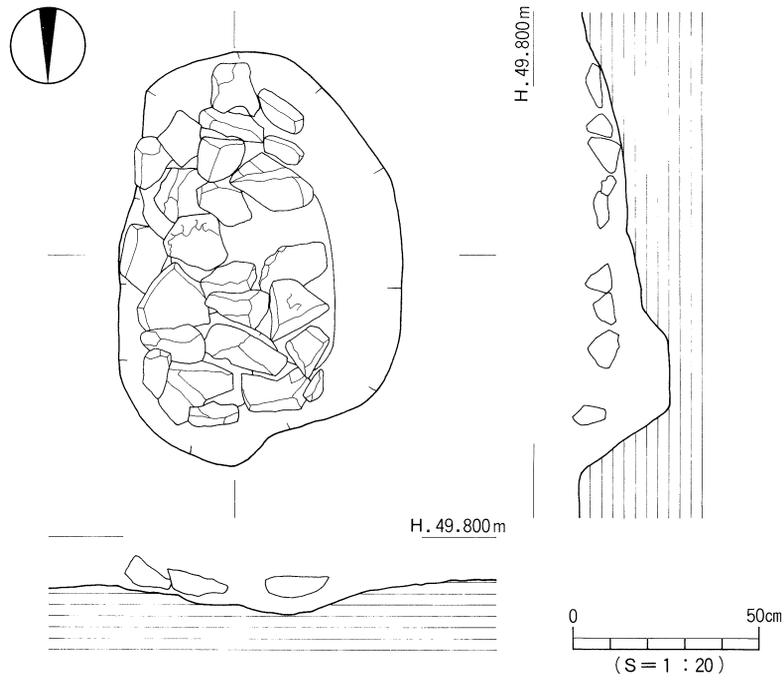
6) その他の遺構・遺物

墳丘上で現代の土坑を1基検出し、周溝内で溝1条を検出している。遺物は墳丘表土中で石鏃1点、周溝内から化石2点が出土している。

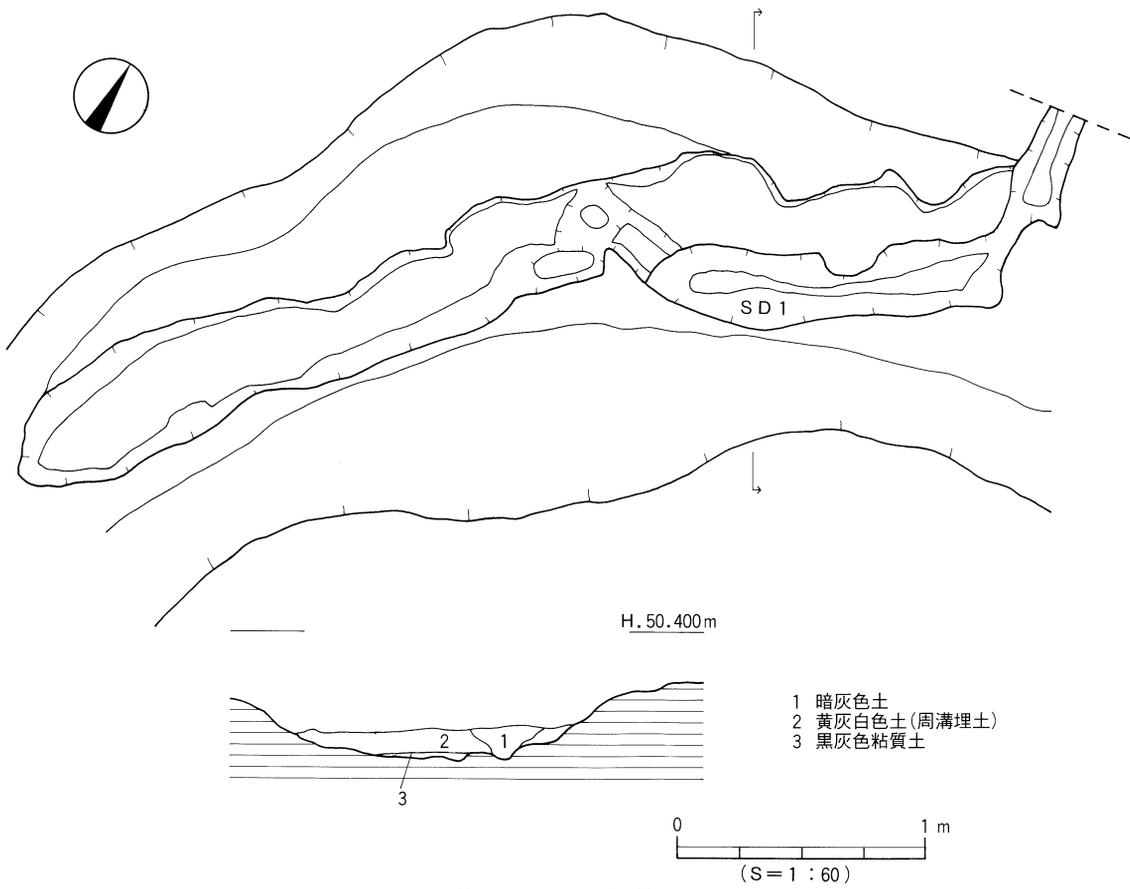
SD 1 (第76図)

北西周溝北側の周溝埋土上での検出である。埋土は暗褐色土で、北西周溝内を短く東西にのび、北

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4B区



第75図 SK 5 測量図



第76図 SD 1 測量図

- 1 暗灰色土
- 2 黄灰白色土(周溝埋土)
- 3 黒灰色粘質土

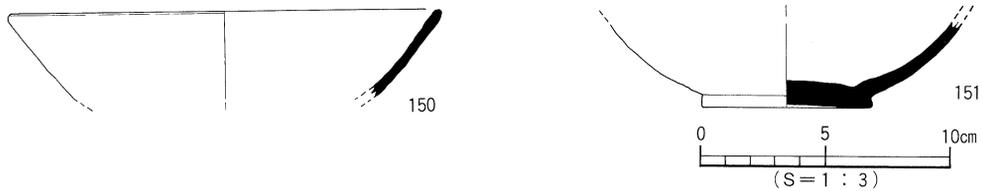
遺構と遺物

へ曲がり周溝外へ続く。検出規模は長さ約4m、幅0.3~0.5m、深さ0.25mである。遺物は須恵器の埴が出土している。

出土遺物 (第77図)

150・151は埴である。150は推定口径16.9cmを測る。口縁部は外上方にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。151の口縁部は欠失している。底部は円盤状高台で体部は内湾してたちあがる。

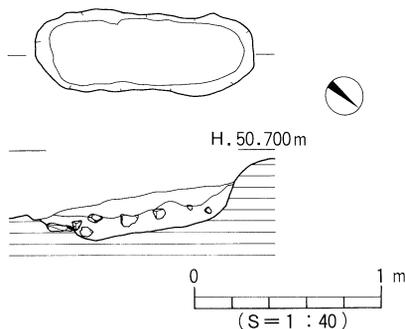
時期：出土遺物より10世紀後半以降と思われる。



第77図 S D 1 出土遺物実測図

S K 6 (第78図)

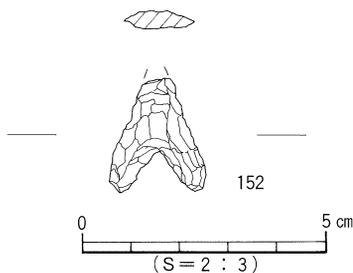
南西墳丘上で検出した遺構である。平面形態は隅丸長方形で規模は、長軸1.18m、短軸0.4mを測る。埋土は上層と下層に分けられる。下層には角礫が混入している。出土遺物は下層より、昭和21年発行の10円硬貨やプラスチックなどが出土しており、現代の遺構である。



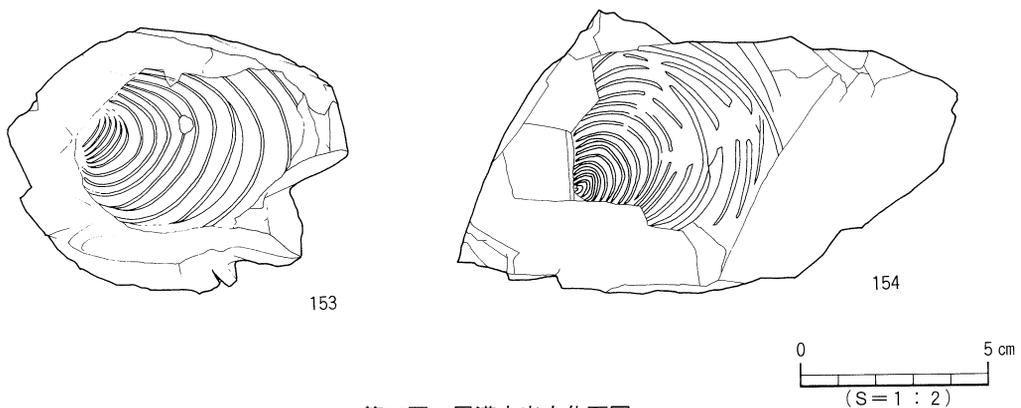
第78図 S K 6 測量図

石鏃 152は北西墳丘表土中で出土したもので、サヌカイト製の打製品である。先端部は欠失している。残存長2.3cm、重量1.136gを測る。

化石 大峰ヶ台北丘陵は化石の産地としても知られている。153・154はS K 1の南側、北西周溝の埋土中から出土した頁岩で、中生代白亜紀に最も繁栄した海産の二枚介類イノセラムスの化石である。



第79図 表採遺物実測図



第80図 周溝内出土化石図

(2) 大池東 4号墳

大池東 4号墳は、3号墳の東に隣接し墳頂部標高は52.5mを測る。

1) 墳丘 (第56図、図版30)

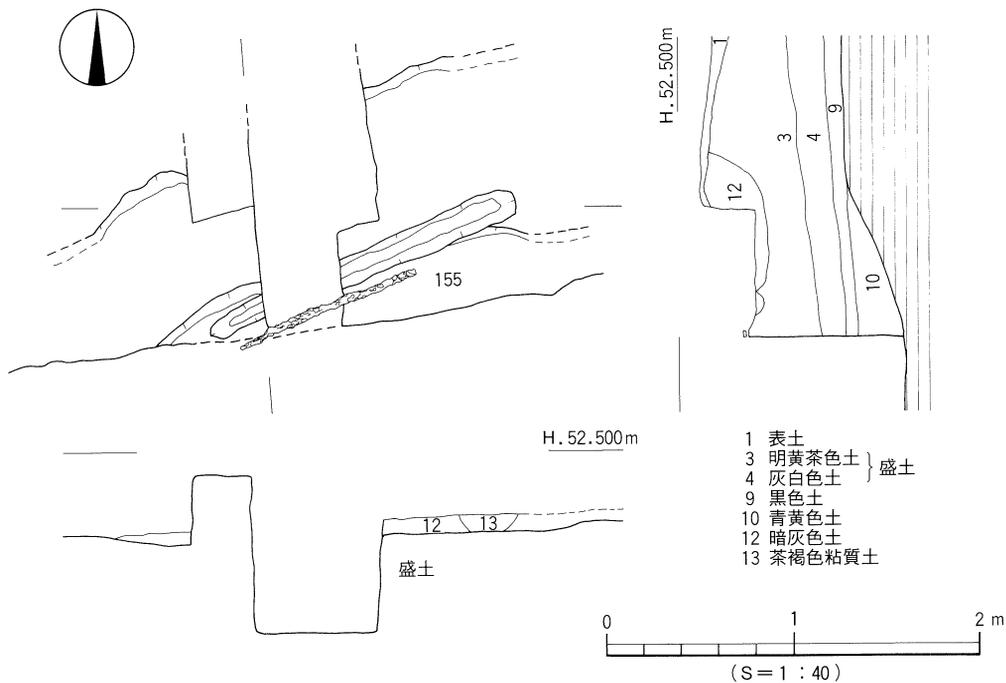
4号墳は直径約13m、周溝幅1.0~3.0m、盛土が残存し、周溝底面より墳頂部までの残存高は2.1~2.7mを測る。西側には地山成形の造り出しをもつと考えられる円墳である。

墳丘中央部の盛土下には旧表土層とみられる厚さ5~20cmの黒色土を検出している。この黒色土の範囲は南東部がいびつに張り出すが、直径約7mの円形を呈している。また、この黒色土を境に墳丘は版築状を呈している。墳丘は3号墳と同様に旧地表面を利用し、墳丘裾部を地山整形し墳丘を画する。周溝を掘削した地山土を旧表土層の上に盛土し成形したものと考えられる。

盛土残存高は、残りのよい中央部西側で厚さ80cmを測る。版築状況は東西トレンチの土層観察より、墳丘中央部を中心として、東から西に傾斜する黒色土上に東西のレベルを合わせるように西側に厚く盛土を構築している。盛土は、墳丘中央部は黄色系の堅くしまった盛土を施すのに対し、裾部では柔らかい茶色系の盛土を施している。これは、後世の削平や流失によるものと思われる。遺物は墳丘上から、太刀2点と、須恵器・埴輪片が少数出土している。

2) 周溝 (第56図、図版32)

周溝は北側が調査区外になるため全容は知れないが、東西にやや長い楕円形を呈している。規模は幅1.0~3.0m、深さ5~20cmを測る。西側は周溝外壁のたちあがり不明瞭になり、陸橋部を呈する。この部分より須恵器、埴輪が出土している。東側の周溝も途切れ陸橋部を呈するが、丁度周溝が途切れる所から岩脈が現れ岩脈のたちあがりとともに周溝が途切れ、岩を削った様子は見られない。このことから岩盤層にあたった為、掘削が行われなかったものと思われる。



第81図 大池東 4号墳太刀出土状況図

周溝内からは須恵器、埴輪が出土し、特に南側に集中している。

3) 主体部 (第81図、図版31)

主体部は残存墳丘上面及び墳丘中の精査を行ったが、明確に主体部と考えられる遺構は検出されなかった。ただし、墳丘中央部において表土と近・現代の地割り溝を掘削時に、地割りに沿うように盛土上面から太刀(155)が出土した。太刀周辺の精査を行った結果、北側には地割り溝と小溝(長さ1.7m、幅0.2m、深さ5cm)を太刀に平行する形で検出したが小溝は地割り溝を切っていることから主体部に直接かかわりがないものと判断した。しかし、太刀の出土状況は刃部を北に切先を東にして完形で出土したことにより、現位置を移動しているとは考えられず、主体部は検出できなかったが、この位置に主体部があったと考えられる。この太刀が出土した、南東4.8mの表土中から折れた太刀(156)が1点出土していることから、主体部は後世の削平などにより壊滅的ダメージを受けているものとする。

出土遺物

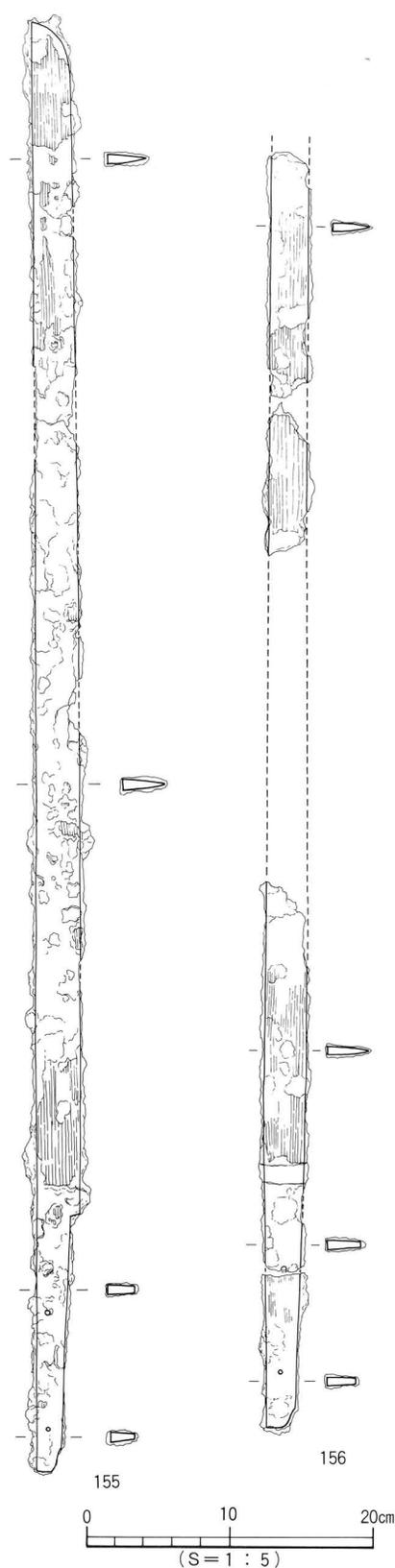
鉄器155・156は本来は主体部内に副葬されていたと思われる遺物である。

金属製品 (第82図、図版42・43)

太刀 155は墳丘中央部の盛土上で出土したものである。刀身、茎は錆化が進んでいるものの比較的遺存状態は良好である。刀身長83.6cm、茎長18.0cm、刀身幅3.0cmを測る。茎には懸け通し穴が2孔あり、刀身には鞘の木質が部分的に付着している。156は墳丘表土中からの出土である。切先、刀身中間部は欠失している。刀身には鞘の木質が付着している。

4) 墳丘、周溝内出土遺物

遺物の出土状況については3号墳と同様に現位置を示すものは少ない。周溝内で出土した埴輪は、本来墳丘に据えられていたものと考えられる。4号墳の墳丘表土中、盛土上面と周溝からは須恵器、埴輪片が出土している。これらの出土遺物は南側より多く出土した。



第82図 大池東4号墳墳丘出土遺物実測図

須恵器 (第83～85図、図版40・41)

蓋形土器 157は南東周溝、158は南トレンチの周溝部からの出土である。157のツマミは中央部がやや突出する。158は推定口径12.2cmを測る。稜はやや丸い。口縁端部は凹面をなす。

高坏形土器 159～161は南東周溝からの出土である。159は坏部の破片で、坏外面に波状文が施されている。160・161は高坏の脚部で、カキ目調整後、3方向に長方形のスカシを施している。

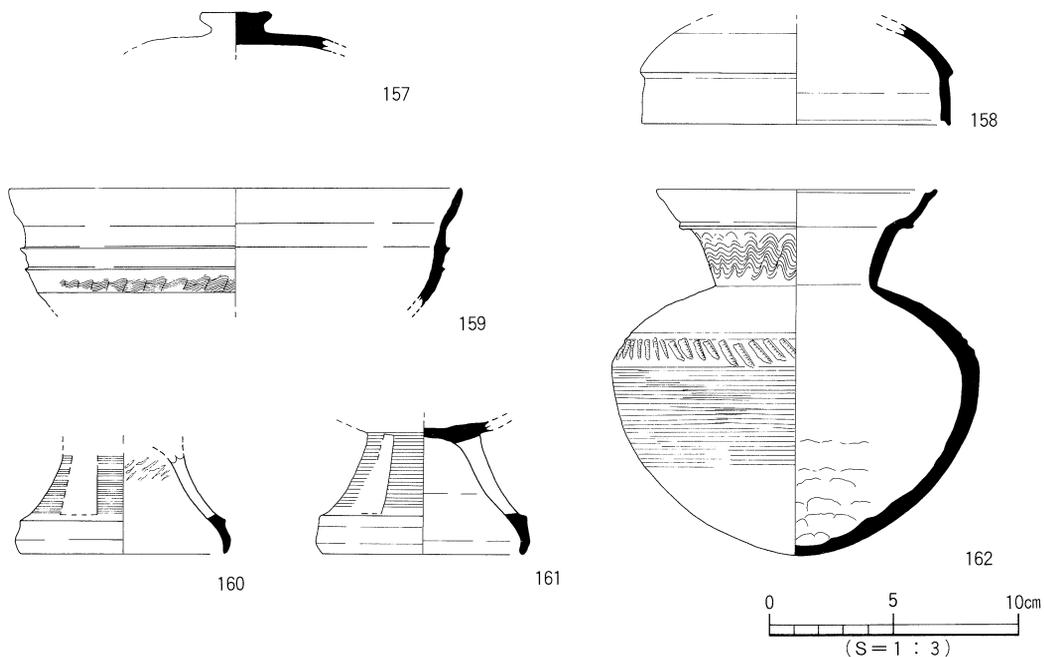
壺形土器 162は南東周溝からの出土であるが、その破片は南東周溝内に散在した状況で出土している。頸部に波状文を施し、口縁端部は凹面をなす。底部はやや尖り気味。体部上半に最大径をもち肩が張る。体部肩外面に刺突文を巡らしている。

甕形土器 163は南西周溝からの出土である。口縁部は外反し、口縁端部は上下に拡張し、端部外面はわずかに膨らむ。164は南東部周溝から破砕した状態で出土したもので、底部と口縁部の歪みが著しいものである。口径22.2cm、器高37.7cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部外面に稜をもつ。体部外面に縦位の平行叩き目文が施されている。

器台形土器 165は北西周溝からの出土である。坏部は外上方に内湾してたちあがり口縁部は外に屈曲しのびる。口縁端部は上下に拡張し丸くおさめ、口縁端部外面中央はナデによりくぼむ。坏部上半に2条の凹線を巡らしその上下の文様帯には波状文が施される。坏底部外面には格子状の叩き目を残している。脚は「ハ」字状に開き、脚台は下方に屈曲して接地する。脚部は2条の凹線で区画し3段の文様帯をもつ。上から1段目に3条の波状文、2段目に2条の波状文、3段目には3条の波状文を施している。脚には三角形のスカシを千鳥に配する。

埴輪 (第86～91図、図版44～49)

墳丘表土と周溝からは埴輪が出土しているが墳丘表土からの出土は少ない。その殆どは周溝からの

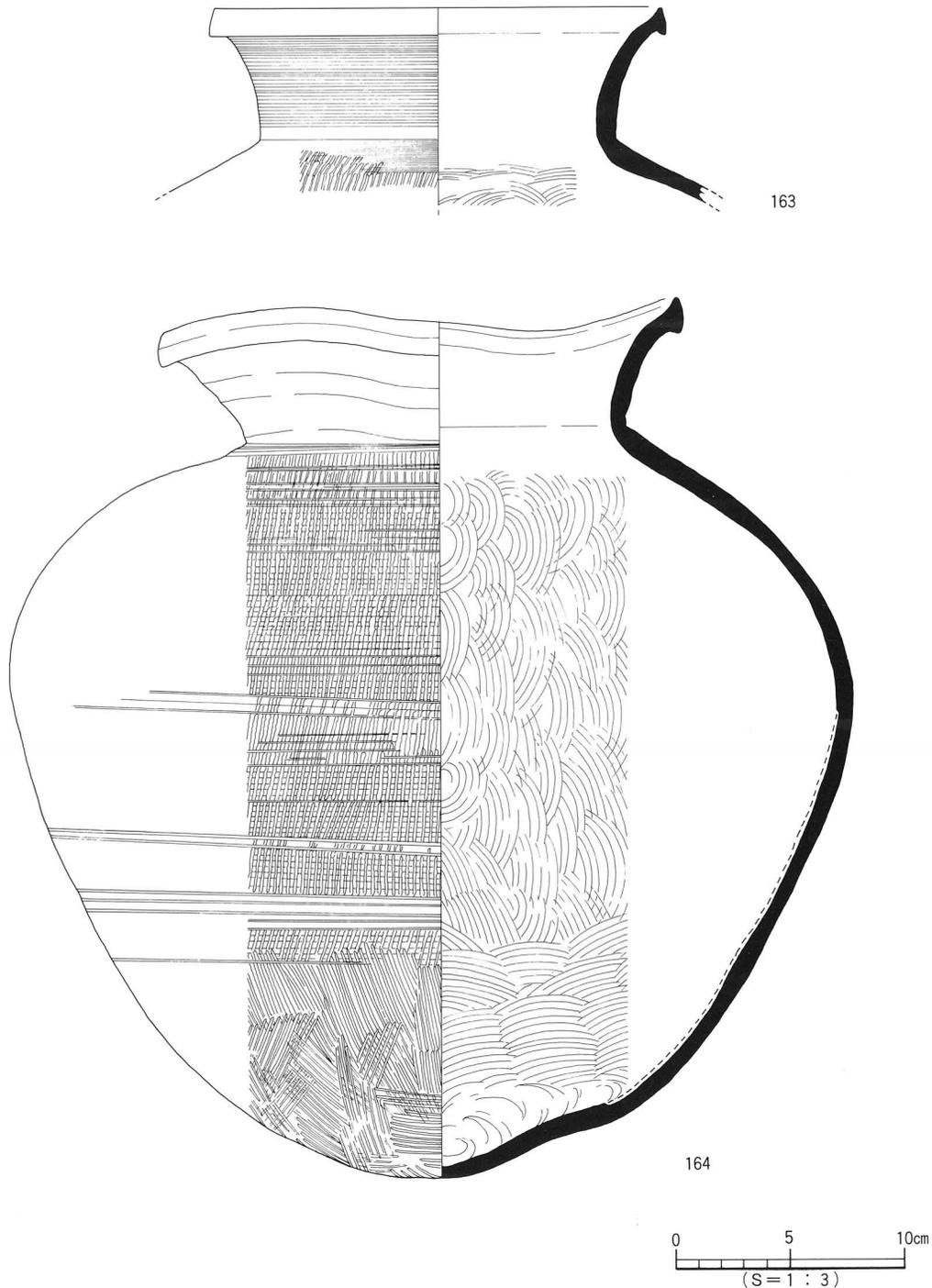


第83図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(1)

遺構と遺物

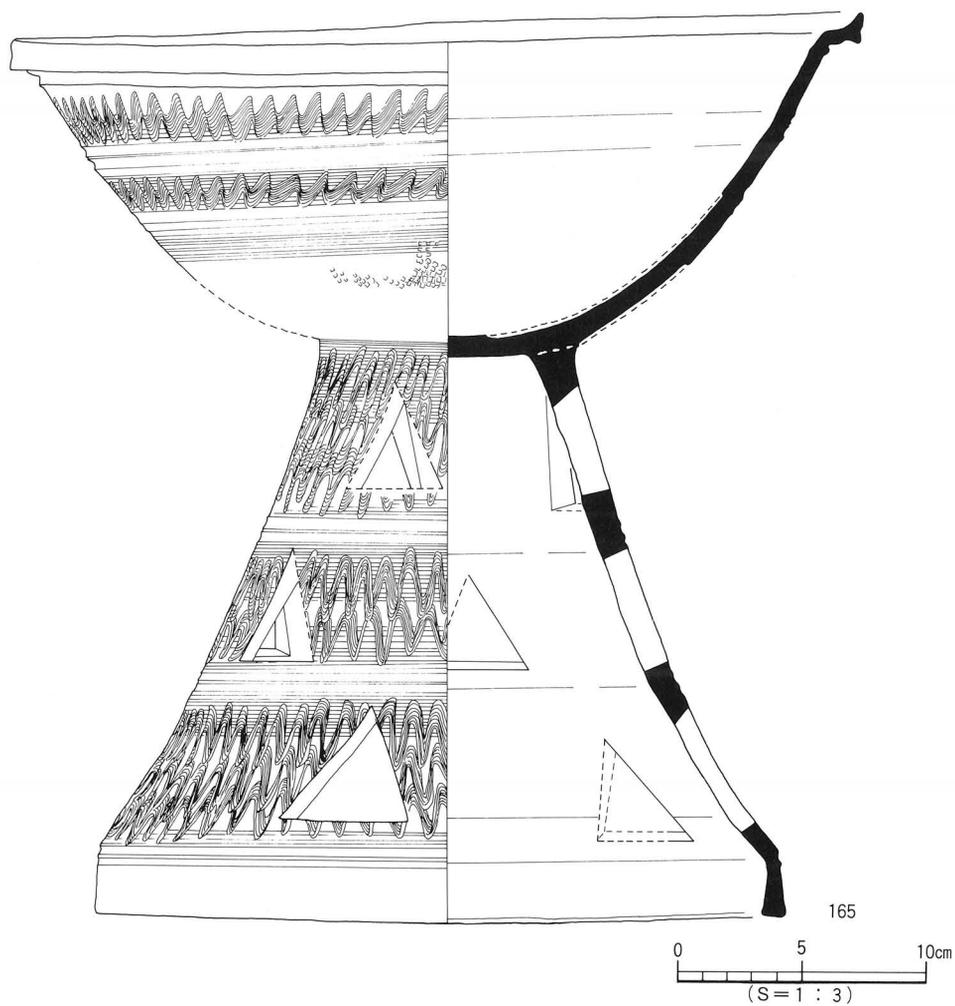
出土である。周溝からの出土状況は南東部から南西部にかけて多く出土している。円筒埴輪は口縁部、胴部、基底部が破片として多く出土したが、それらを接合することはできなかった。したがって、全容がわかるものはない。他の埴輪についても同様である。

円筒埴輪 166は唯一墳丘から立った状態で検出したものであるが、平面、断面精査の結果、埴輪を据える土坑も伴わず、埴輪埋土は地割り溝の埋土であり、現位置を保たないものである。

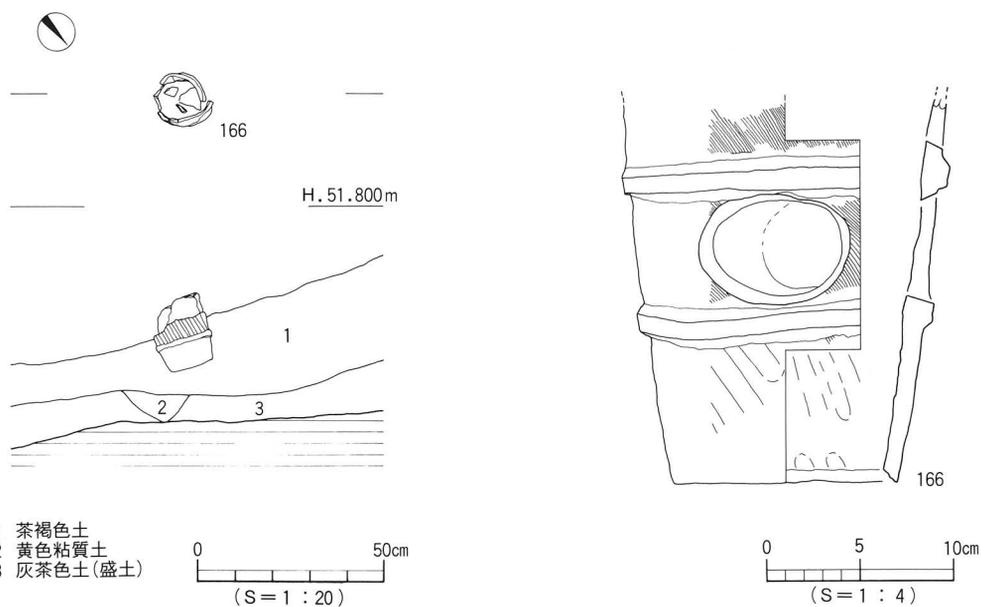


第84図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(2)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区



第85図 大池東 4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図 (3)



- 1 茶褐色土
- 2 黄色粘質土
- 3 灰茶色土(盛土)

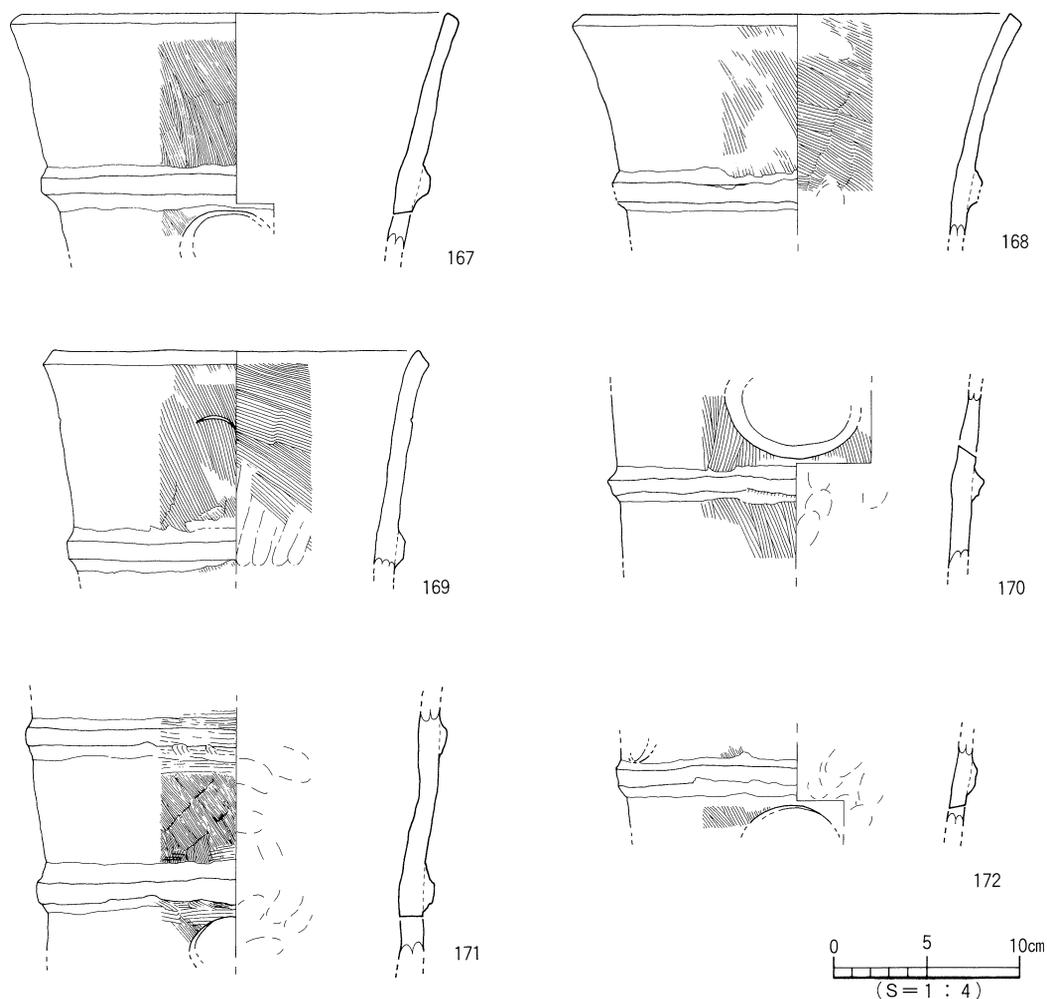
0 50cm
(S=1:20)

0 5 10cm
(S=1:4)

第86図 大池東 4号墳墳丘埴輪出土状況図及び実測図

遺構と遺物

口縁部の形態は直角に開くもの167、最上段のタガより外反して開くもの168、あまり外反せず直線的に開き端部でわずかに外方へ屈曲するもの169とがある。口径は、口縁部が完存するものはなく復元径で23.8~24.0cmを測る。胴部170~178は、概ね底部から口縁部にかけて直線的に外傾して開くものである。透孔は、確認できたものは全て円形であるが、正円というよりは扁平な円形である。透孔の直径は5~6cm程度になると思われる。透孔の数、及び配置については、166より、基底部より2段目と3段目に千鳥に配し、対向して2ヶ所に施される。タガは、全体的に低く、断面が台形を呈するもの、強いヨコナデにより端面が内湾するもの、低く扁平なものがある。171は上のタガは断面扁平で、下のタガは断面台形を呈するもので、1個体の埴輪でもタガの断面形が異なったものがある。タガの幅は1.4~2.2cmで、高さは0.3~0.8cmで、1cmを越えるものはない。タガ間の距離はタガが2段残存しているもので8cm前後を測る。上段タガより口縁端部までの長さは9.0~9.5cmで、胴部タガ間より長い。基底部179~181は、直線的にたちあがっている。調整はタテハケ、ナナメハケ、ナデ、ナデオサエの組合せで行う。外面は左上がりのタテハケを施してあり、タガ貼付後の外面には調整は行われていない。口縁部は端部を最終調整としてヨコナデを施している。基底部はタテハケを施し、さらに縦方向のナデ、ナデオサエを行い、タテハケを消している。内面の調整は、縦方向の丁寧なナ

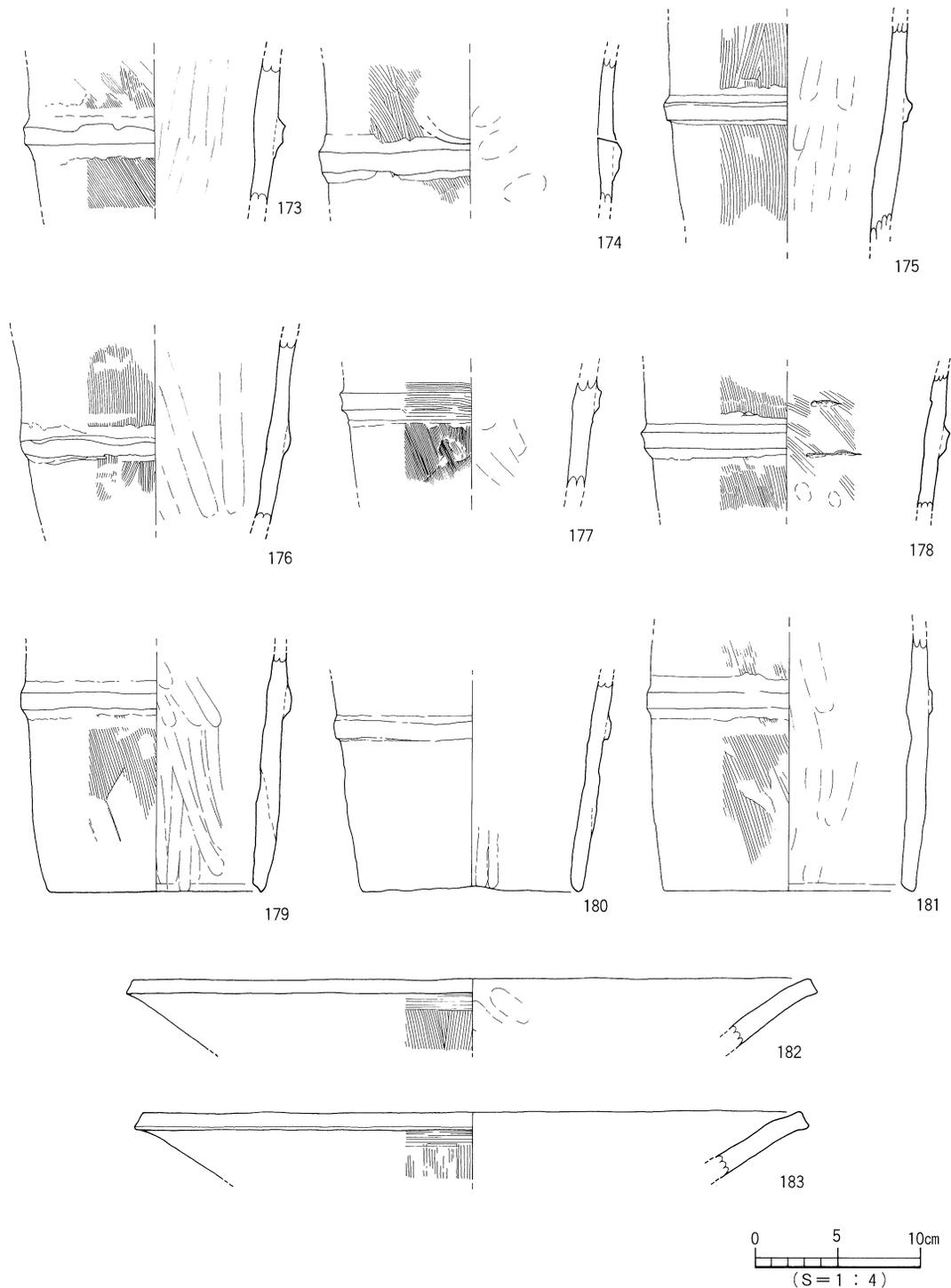


第87図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(4)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区

デを施したあと、口縁部にかざり左上がりのヨコハケを施してある。167は、内面器壁の風化がひどく不明であった。また、169の口縁部下位には弓形のヘラ記号が見られる。

円筒埴輪の形態は、基底部から2段目に透孔をもつものとした場合、166・167からは2条のタガをもつ3段の形態のもの、171の様に3条のタガをもち4段の形態をとる二つのタイプがあるものと



第88図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(5)

遺構と遺物

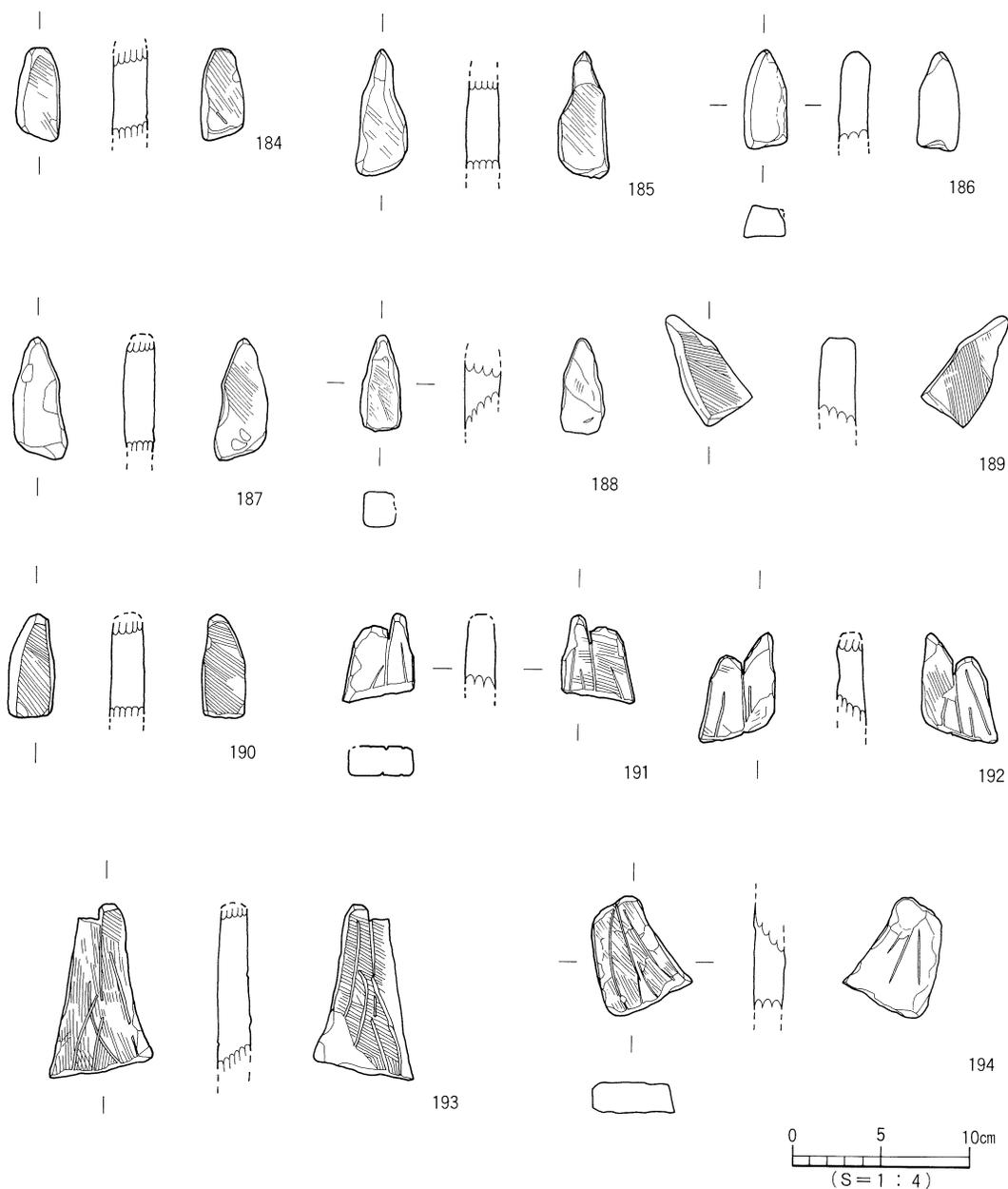
推察されるが、171は、朝顔形埴輪、形象埴輪の円筒部とも考えられる。タガ2条、3段の形態のものでは推定の高さは、23~25cmになり、小型の円筒埴輪である。

朝顔形埴輪 182は北西周溝と周溝外からの出土で推定口径41.3cmを測る。183は南西周溝と南西墳丘表土からの出土であるが、182と同一個体の可能性がある。推定口径39.4cmを測る。

蓋形埴輪 184~197は立ち飾りの破片である。3号墳から出土したものと形態、施文は同様である。198は笠部上端と軸受け接合部である。199は笠部で、調整は外面にハケ目、内面はナデである。

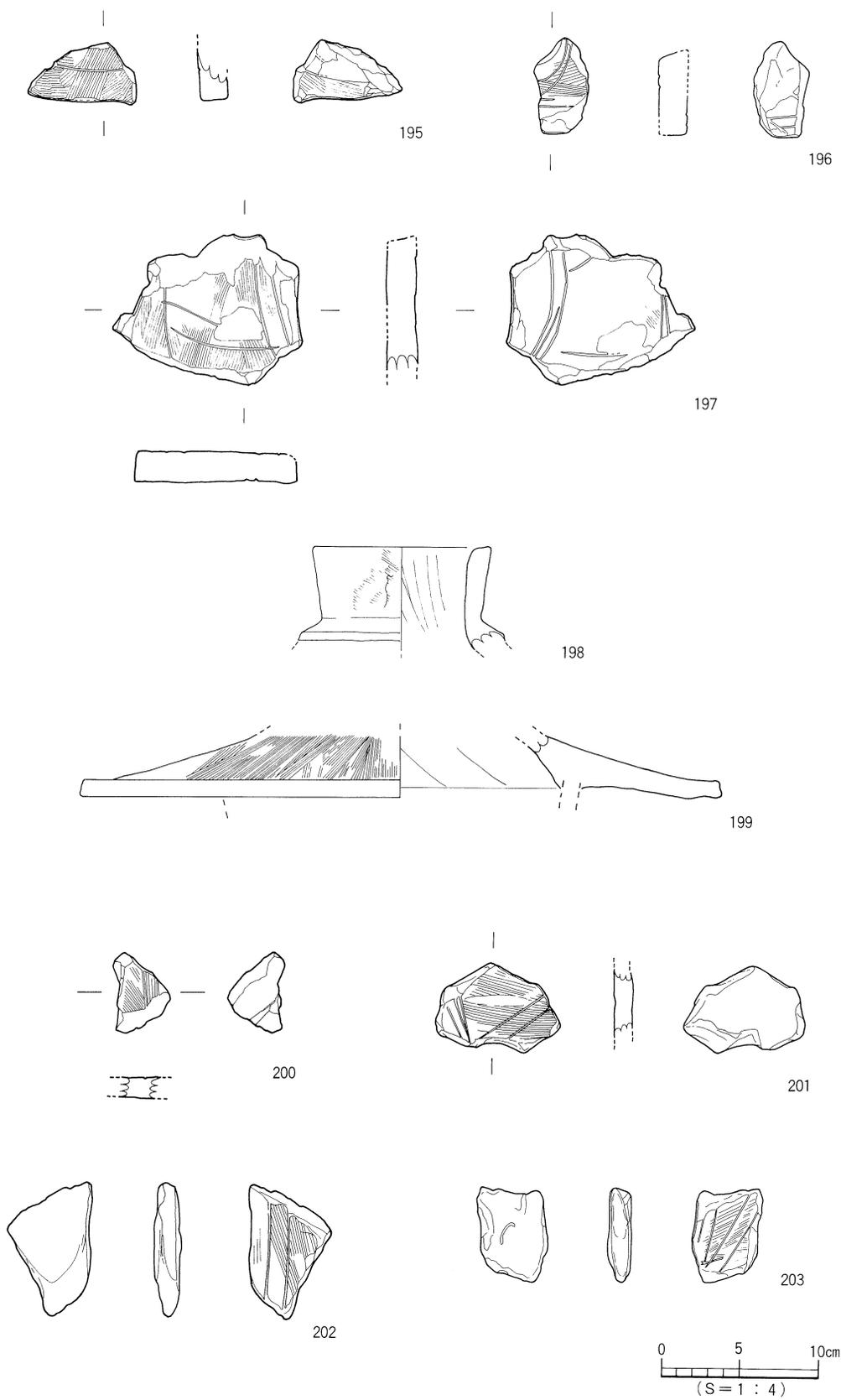
楕形埴輪 4号墳からは楕形埴輪とみられる破片が南東周溝から1点(200)、南西周溝から3点(201~203)の計4点が出土している。胎土、色調から3号墳から出土したものと同一個体と思われる。

人物埴輪 204は南西周溝から出土の鬚の一部である。205・206は南西周溝から出土した顔の破片で



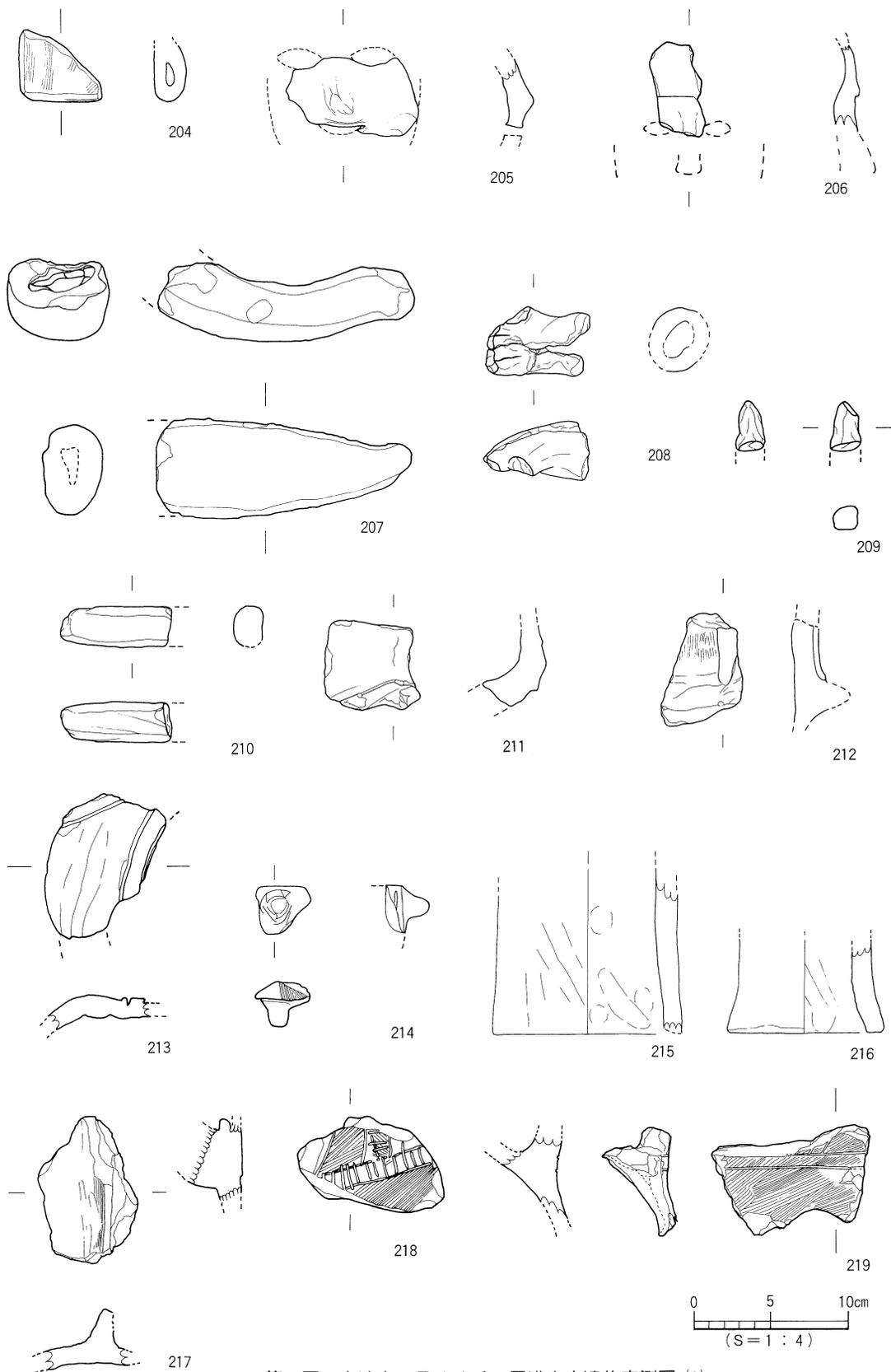
第89図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(6)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区



第90図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(7)

遺構と遺物

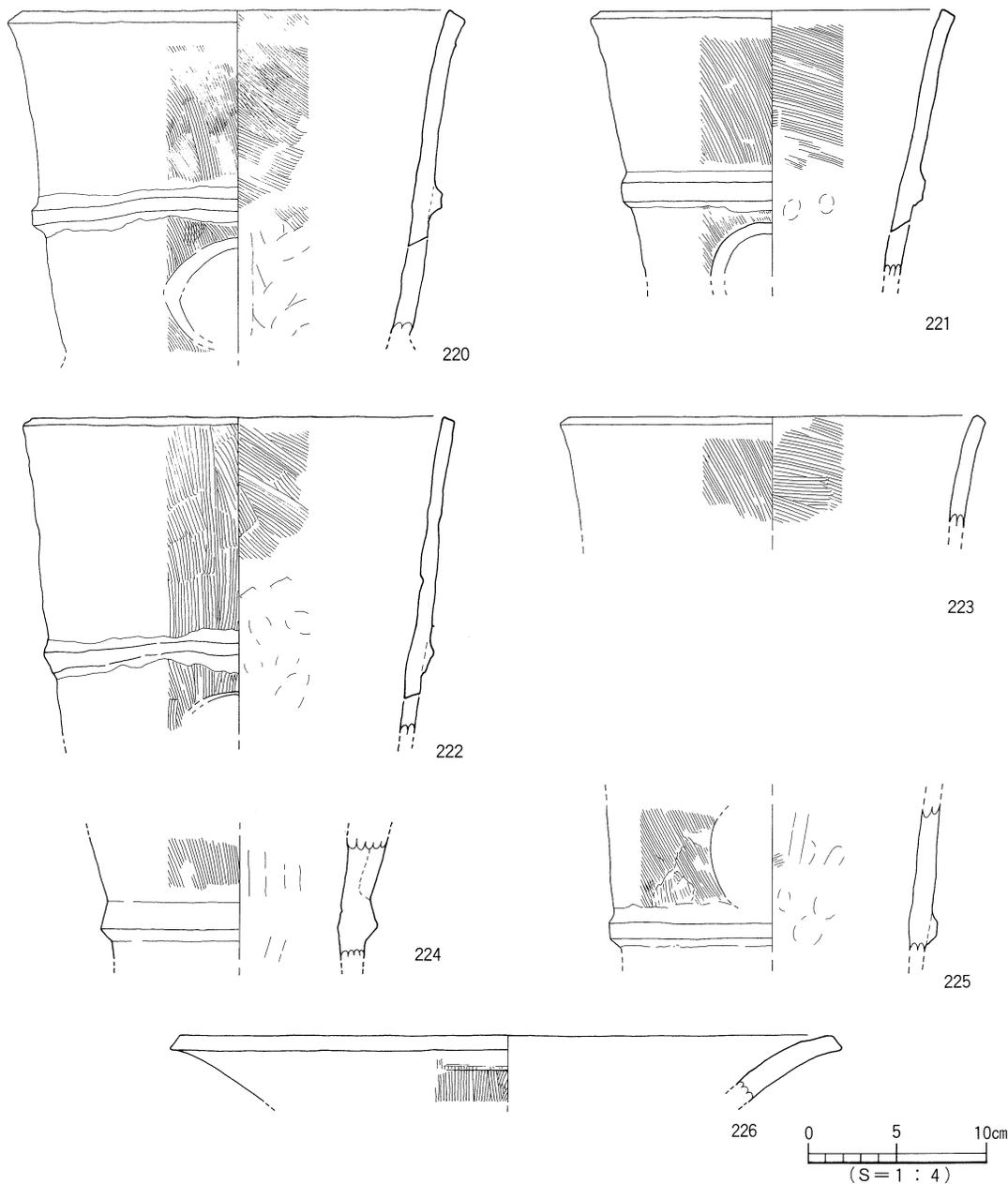


第91図 大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物実測図(8)

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区

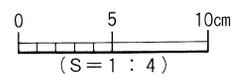
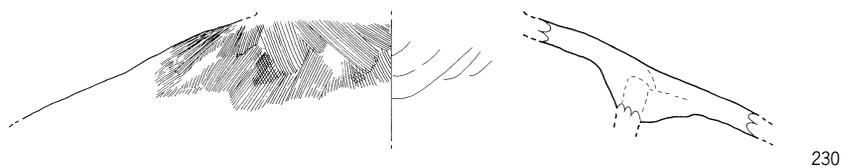
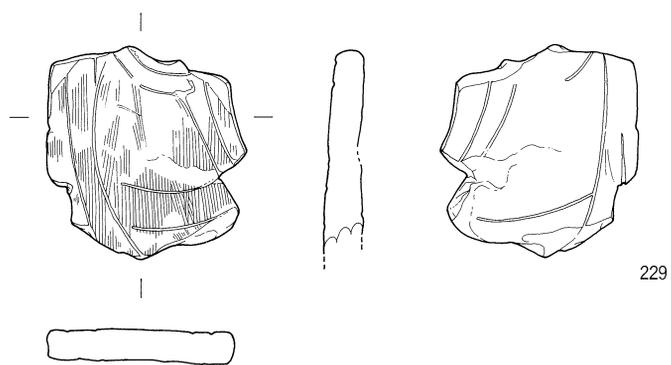
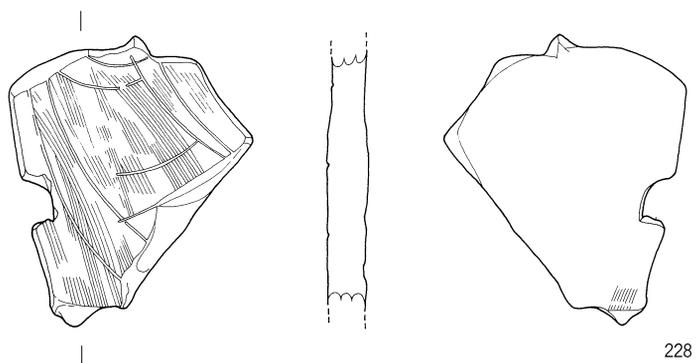
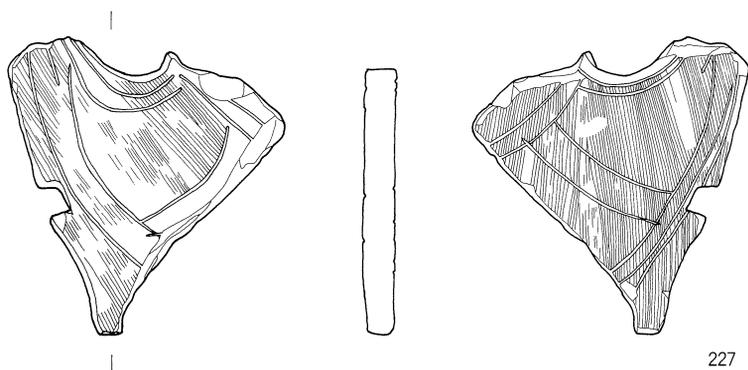
ある。207と208は北西周溝からの出土で207は腕部、208は手である。指は欠失している。209は指片である。210は扁平な柱状で胴部に貼り付くものと思われる。211・212は脚部と円筒部の接合部で、212の胴部外面には平らな何かを模した粘土を貼り付けている。213は首から肩部にかけての破片と思われる。214は胴部の破片で服飾の一部とみられ、ボタン状の外面に接合部が突出したものである。215・216は北西周溝からの出土で、人物埴輪の基底部と思われる。

器種不明埴輪 217は北西周溝、218は南東周溝、219は南西周溝から出土したものである。小片で全容が不明であり、本墳出土の楕形埴輪とは形態と文様に差異がみられる。



第92図 大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(1)

遺構と遺物



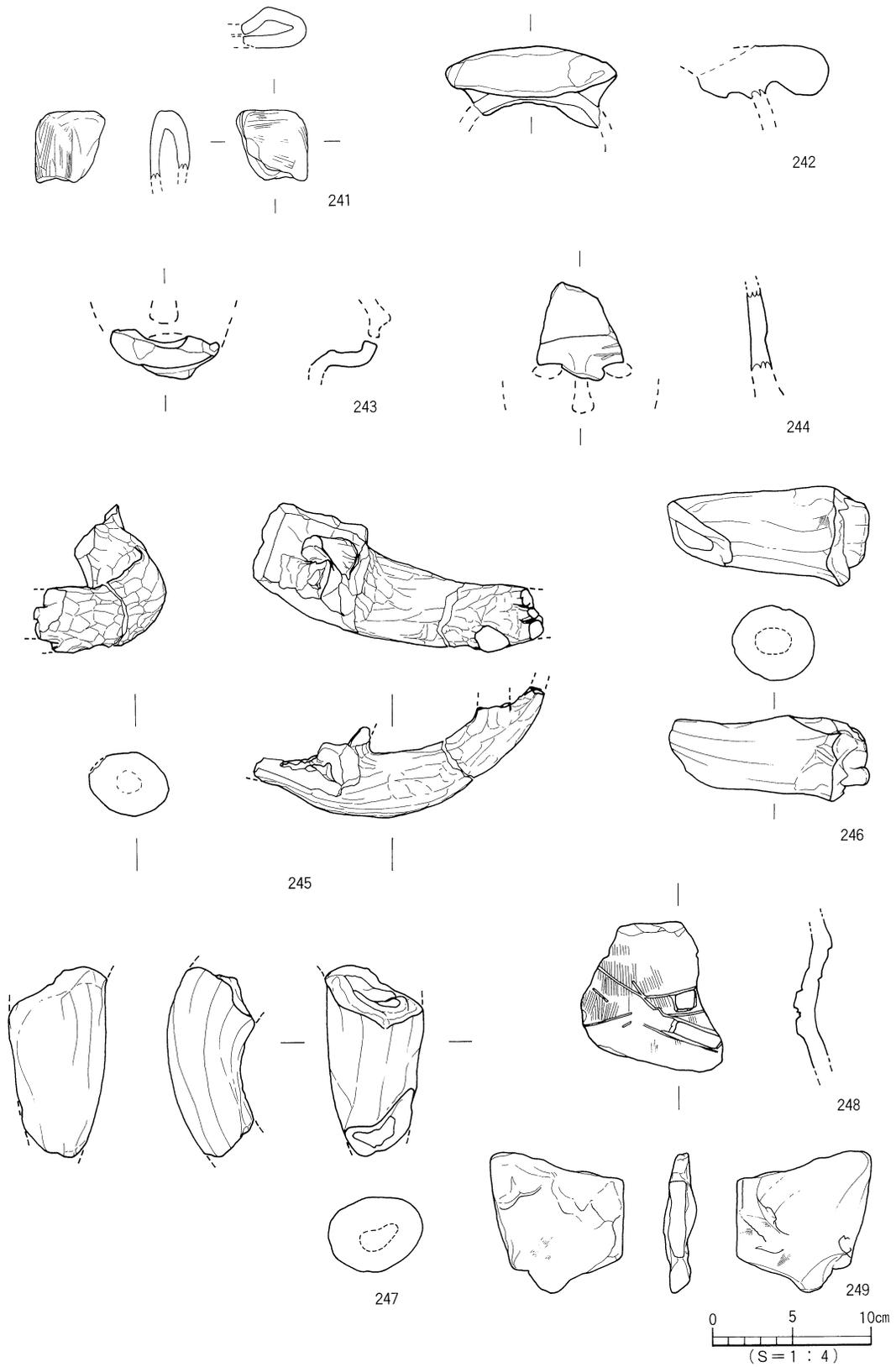
第93図 大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(2)

大峰ヶ台遺跡9次調査4B区



第94図 大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(3)

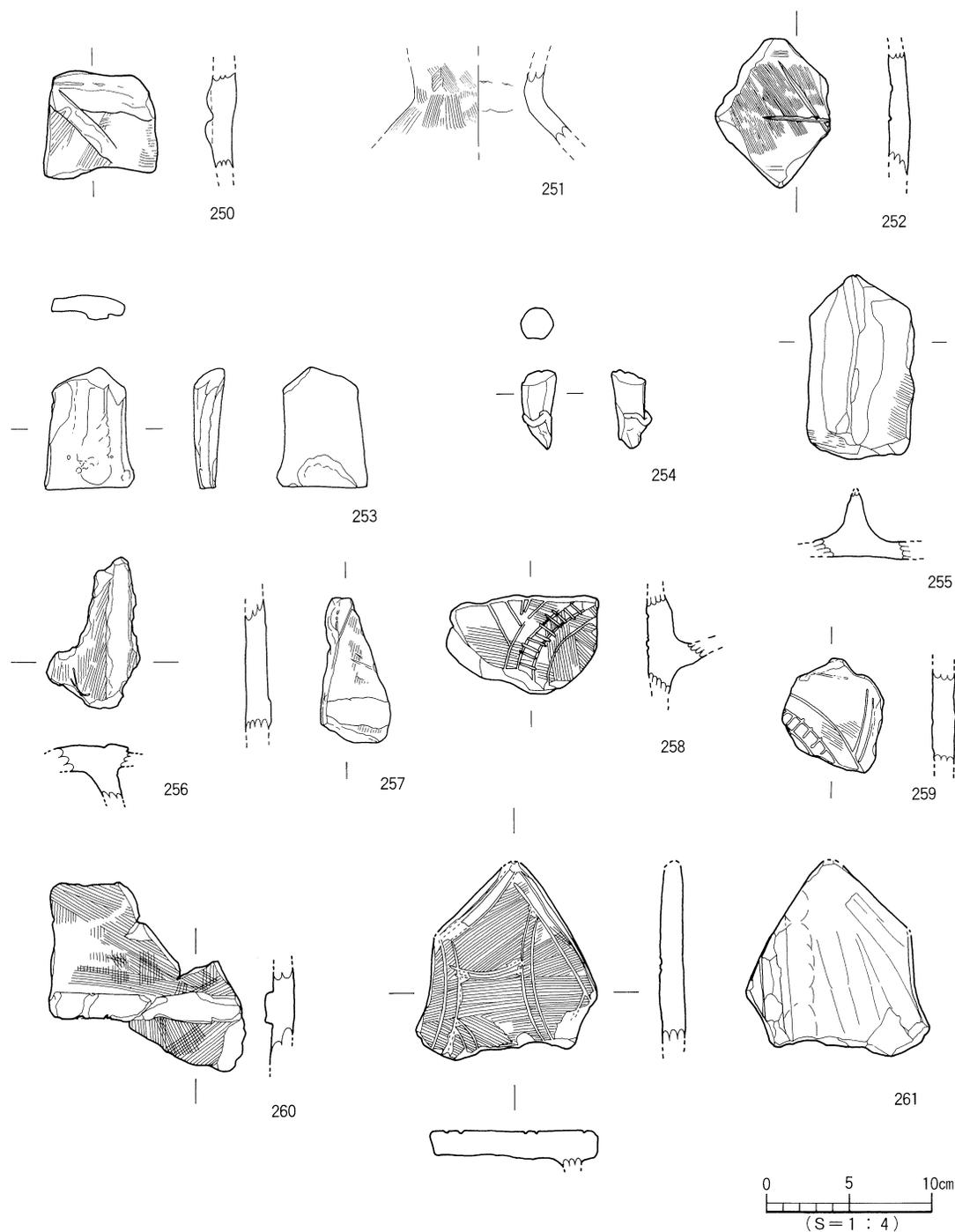
遺構と遺物



第95図 大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(4)

5) 墳丘、周溝外出土遺物

4号墳の西側造り出し部と考えられる南肩表土中（暗黄灰色土中）で出土した遺物である。その殆どが埴輪である。出土した埴輪は現位置を示すものはないと考える。それらの遺物が出土した地山面には、深さ2～4cmの不整形の浅い窪みがみられたが、出土遺物はなく、窪みの性格は不明である。
 円筒埴輪 220～225は周溝から出土したものと形態、調整は同じである。口縁部は直線的に開くもの



第96図 大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物実測図(5)

遺構と遺物

と端部で短く外反するものがある。口縁部径は復元径で20.4～25.5cmを測る。胴部は直線的に開く。スカシは円形を呈する。タガは断面が台形のもの、強いナデで低く扁平なものがある。透孔は円形である。

朝顔形埴輪 226は口縁部の小片で復元口径36.8cmを測る。口縁端部はヨコナデを施される。

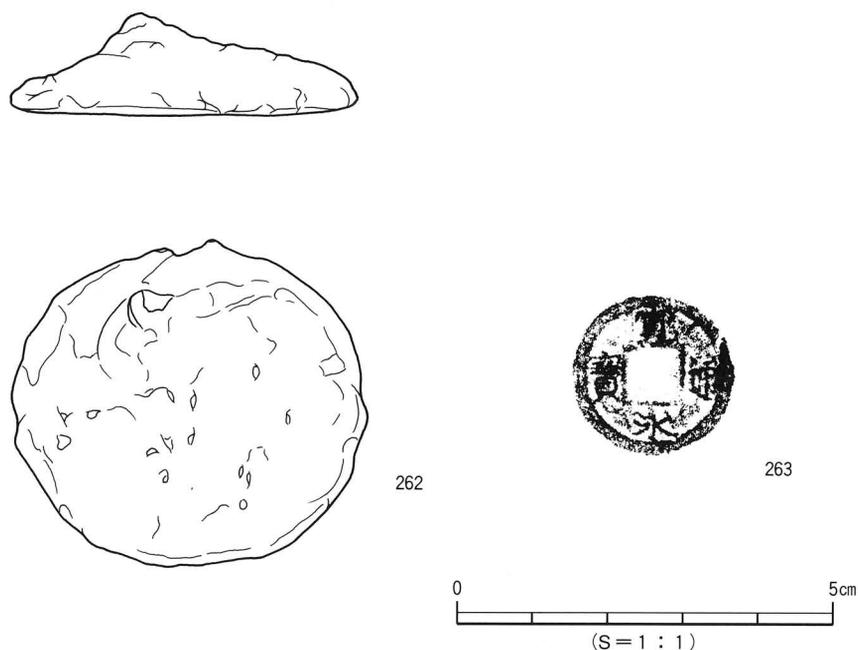
楕形埴輪 235～240は楕形埴輪と思われる破片である。3号墳、4号墳の周溝から出土したものと施文は同様であり、同一個体の可能性がある。

人物埴輪 241～253は、人物埴輪もしくは人物埴輪とみられる破片である。241は髻の破片、242は髻と頭頂部の破片である。243は顎部、244は額部である。245～247は中空の腕部である。245は指が欠失している。247・250は服装を表す胴部で、沈線で割り付けを行ったのち粘土帯を貼付しているものと思われる。252は沈線が施されている。249・253は板状のもので丁寧にナデ調整される。片側に接合痕跡が見られることから、板状の髻の可能性があるものである。

器種不明埴輪 254は先尖りの棒状のものである。255～261は3、4号墳から出土した不明埴輪と同一個体の可能性がある。

6) その他の遺構、遺物

石積遺構 4号墳の中央やや東よりに拳大の安山岩礫が、高さ1m、直径1.5mの範囲で積まれていた。安山岩はこの丘陵でごく普通にみられるものであるが、礫中には同丘陵から産出することがない緑色片岩が2個混じっていた。そのほか礫中からは、日露戦争の様子を描いた陶磁器などが混入しており明治以降の遺構と思われるが、その性格については不明である。陶磁器以外の出土遺物に不明石製品1点、寛永通寶1点が出土している。



第97図 大池東4号墳上石積遺構出土遺物実測図

出土遺物

不明石製品 262は石積礫中からの出土で、直径4.7cmの円形である。片面は平面をなし、反対面は突起をもつ。重量は17.635 gである。

寛永通寶 263は1697年以降に鑄銭されたものと思われる新寛永通寶である。

(3) 小 結

①墳 丘

大池東3号墳、4号墳の墳丘盛土下に旧表土と思われる黒色土を検出している。この黒色土は墳丘中央部を中心として直径約7mの範囲で見られた。このことから、旧地形を利用し、墳丘の中央部を掘削することなく、墳丘周囲の整形と周溝掘削時の排土を盛土に利用したものと考えられる。盛土の厚さは、4号墳の盛土上面から出土した太刀が棺底を示し、主体部が木棺直葬と考えれば、概ね2 m以上の盛土厚と想定される。墳丘現存高は3号墳で2.1m、4号墳で2.1～2.7mあり、上記の盛土厚を考慮すれば築造時の両古墳の周溝底面からの墳高は3m前後を測ったものと思われる。また、4号墳と3号墳との間で埴輪が出土しているが、検出当初は4号墳丘からの転落遺物として取り扱っていた。しかし、4号墳丘から遺物までの距離が長すぎることや、遺物出土状況のほか、4号墳の周溝が西側で不明瞭になり、3号墳にむかって広がる地山傾斜の変換点を有し、尾根特有の性格を考慮しながら地山コンタラインの検討などにより、4号墳には地山成形によって、西に裾広がりの造り出しが取り付くものと考えられる。3号墳については4号墳とおなじく西側の周溝が不明瞭になるが造り出しについては不明である。

②主体部

3号墳については盛土の削平がひどく、主体部は失われており、様相は全く分からなかった。4号墳についても、現位置を保ち主体部内に副葬されたと考えられる太刀が出土したが、主体部は近・現代の溝に削平され様相は不明であった。しかし、調査地の西、小谷を挟んだ岩子山丘陵上にある5世紀末～6世紀初頭とされる岩子山1号墳の主体部は、松山平野において本格的な横穴式石室導入前の主体部形態である木棺直葬と推定されており、4号墳の残存盛土上面で出土した太刀周辺には、石室や石棺を構築した石材もみあたらないことから、岩子山1号墳と同様な木棺直葬の可能性が高いものと考えられる。そのほか、主体部数については4号墳丘表土中から折れた太刀が1点出土しており同じ主体部に副葬されたものとも、別の主体部副葬品とも考えられ、主体部数についても問題を残した。

③埴 輪

3号墳、4号墳の周溝内、4号墳の造り出し部と本文中では南西周溝出土として取り扱った埴輪は造り出し部と墳丘との取り付く部分に集中して出土している。これらの埴輪は全て現位置を示すものではなく、同一個体と思われる破片が散在した状況なので円筒埴輪、形象埴輪の具体的な配置は不明である。ただ、埴輪が集中して出土した近くに配置されていたと考えればある程度予測は可能である。円筒埴輪は、4号墳の南東部、4号墳の造り出し南の付け根部、造り出し南辺部、形象埴輪は、造り出し南辺に配されていたものと考えられ、南方向を意識したものとなっている。このことは、古墳の立地と無関係ではなく、大峰ヶ台丘陵と西側の岩子山丘陵の間の谷部が南側に開口し、古墳時代前期の堰が見つかった、古照遺跡周辺の平野部を眺望する場所であることを考えれば、南からの視覚的効果を狙ったものと考えられる。3号墳については、埴輪の殆どが南東周溝からの出土であり、4号墳の造り出し部からの転落遺物の可能性が高く、3号墳丘上に埴輪が樹立された可能性は少ないと考える。

④周溝内祭祀

3号墳の周溝内で検出したSK1・2・3・4は祭祀に関係する遺構と思われる。このほか、北側周溝にも完形の甕が破碎した状態で出土しており、これらの遺物群を検出した箇所を考えると墳丘中央を中心として、東西南北に配置され、SK4がやや離れるものの相互の距離が等しい状況を呈する。西側のSK1からは須恵器有蓋高坏が10セット出土した。東側のSK4からは数量の差はあるものの高坏の蓋1点が出土した。南側のSK2、3からは甕が正置の状態で置かれて出土した。北側では掘り窪めた跡は見られなかったが、周溝底からやや浮いた状態であるが、破碎した甕が出土している。数の多少、器型の大小はあるものの、対向する周溝内に同器種を配している様子が伺え、遺物の配置と器種の選定には意識的な規則性があったものと思われる。ただし、それらの遺物の配置が埋葬に伴い同時に行われたかどうかは、主体部数等の様相が不明なため今後の課題として残った。4号墳については、3号墳のような遺物の出土状況は検出されなかった。また、両古墳からは須恵器が多く出土しているが、土師器は3号墳の周溝から2点しか出土しておらず、須恵器に対して土師器の使用が少ない。このような出土状況は、平野内の後期古墳中においても類例が見られるようで、当時の須恵器と土師器の性格を考えるうえでも貴重な資料である。

⑤古墳の時期

3号墳、4号墳とも主体部からの副葬品から時期を決定することは不可能であるが、両古墳の周溝から須恵器が出土しており、田辺昭三氏の陶邑編年によれば、4号墳から出土した器台と壺はTK23型式に類似し、3号墳のSK1出土の高坏はTK47型式に比定されるものと思われる。3号周溝から出土した器台は4号墳の周溝から出土したものより、脚端部外面に波状文が施されることからやや古い特徴を有するものと思われる。この器台を除けば3号墳出土の須恵器群はTK47型式に属するものとみられ、3号周溝から出土した器台を埴輪と同様に4号墳の造り出し部からの転落遺物とすれば4号墳出土の須恵器群は3号墳よりも全体的に若干古相を示し、TK23型式に比定しうる遺物群と考えられる。また、4号墳出土の円筒埴輪については、川西宏幸氏の編年によると、V期の前半にあたるものと考えられ、V期の始まる年代を概ねTK23以降としている。よって、出土遺物からは3号墳が6世紀初頭、4号墳が5世紀末頃に築造されたと思われ、4号墳の築造後、時期を隔たず3号墳が築造されたものであろう。

〔文献〕

- 名本二六雄 1975『岩子山古墳』 松山市教育委員会
 西尾幸則 1983『斉院茶白山古墳』 松山市教育委員会
 松村 淳・梅木謙一 1994「客谷古墳群B地区」「朝日谷1号墳」「大峰ヶ台丘陵の遺跡」松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎 1992『古墳時代の研究』(古墳Ⅲ 埴輪) 雄山閣出版
 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻 第2号』 日本考古学学会
 浜田俊三・河野勝昭 1996「松山市衣山の化石」『愛媛の自然』(地学その2 化石) 愛媛県立博物館編
 永井久美男 1996『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会

大峰ヶ台遺跡 9 次調査 4 B 区

遺物観察表

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法 量 欄 () : 推定復元値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴→胴部、柱→柱部、脚→脚部、
底→底部、体→体部、天→天井部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表18 大池東3号墳墳丘・周溝内出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
105	坏身	口径 10.2 器高 4.7	たちあがりは内傾し、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(0.5~2) ○	自然釉	35
106	無蓋 高坏	口径(16.8) 残高 5.7	口縁部は外方に開く。体部に沈線をめぐらせ、その下に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色	石・長(0.5~1.5) ○	自然釉	35
107	高坏	底径(9.3) 残高 6.6	脚部はカキ目調整で3方向にスカシを施す。	回転ナデ ◎脚柱カキ目	◎坏底ナデ ◎脚ナデ 回転ナデ	緑灰色	石・長(0.5~2.5) ○	自然釉	
108	短頸 壺	口径(9.0) 残高 8.0	口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。	◎口~胴回転ナデ ◎胴~底回転ヘラズリ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~1) ○		35
109	壺	口径 10.9 残高 5.3	頸部に二条の凸帯が巡り、その間に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色	石・長(1~2.5) ○	自然釉	35
110	鉢	底径(7.6) 残高 4.1	円盤上の底部。	マメツ	マメツ	黄橙色	石・長(1) △		
111	甕	口径(28.3) 残高 8.5	内湾気味に開く口縁部。	◎ヨコナデ ◎胴ハケ(3本/cm)	◎ヨコナデ ◎脚ナデ	明黄褐色 橙色	石・長(1~3.5) 石粒 ○		
112	甕	口径(50.8) 残高 15.0	外傾したのち外反する口頸部。端部外面直下に一条の凸帯が巡る。	回転ナデ、ナデ ◎平行叩き	回転ナデ ナデ	灰白色	石・長(細粒) ○		
113	甕	口径 16.6 残高 7.2	逆「ハ」字状に外反しながら開く口頸部。頸部中に凸帯を有し、上下に波状文を施す。	回転ナデ ◎平行叩き→カキ目	回転ナデ ◎同心円叩き	灰色	石・長(1) ○	自然釉	
114	甕	口径 20.6 器高 35.2	球形の体部より逆「ハ」字状に開く口頸部。口縁部に焼け歪み有り。	回転ナデ ◎平行叩き→カキ目 ◎平行叩き	回転ナデ ◎体~底 同心円叩き	青灰色	石・長(1~3) ○	自然釉	35
115	甕	口径 16.4 器高 23.7	逆「ハ」字状に外反しながら開く口頸部。頸部に一条の凸帯を有し、上下に波状文を施す。	回転ナデ ◎平行叩き→カキ目 ◎平行叩き	回転ナデ ◎体~底 同心円叩き	灰白色 灰色	石・長(細粒~3) ○	自然釉	36
116	器台	口径 39.2 底径 29.8 器高 37.8	坏部口縁端部は外に短かく屈曲する。	回転ナデ ◎坏底格子目叩き	回転ナデ (指頭痕)	緑灰色 緑黒色	石・長(1~2) ○		36
117	朝顔形 埴輪	口径(43.2) 残高 2.7	ラッパ状に開く口縁部。口縁端部断面は「コ」字状を呈する。	ヨコナデ ハケ(6~7本/cm)	ヨコナデ ナデ	橙褐色	石・長(1~3) ○		

遺物観察表

大池東3号墳墳丘・周溝内出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
118	蓋形埴輪	残高 10.8 幅 12.8	縁取りの2条の沈線の間に2条の沈線をわたす。	ハケ(7~8本/cm) マメツ		浅黄橙色	石・長(1~3) △		45
119	蓋形埴輪	残長 6.0 残幅 6.4	飾り板に鱗がつく。2条の縁取りの沈線。	ハケ(7~8本/cm) マメツ		浅黄橙色	石・長(0.5~2) △		
120	蓋形埴輪	残長 6.4 残幅 6.4	立ち飾り上端部。2条の縁取りの沈線。	ハケ(6本/cm) マメツ		黄橙色	石・長(1~3.5) △		45
121	蓋形埴輪	残長 6.0 残幅 4.0	鱗飾り上端部。	ハケ(6本/cm)		橙褐色	石・長(細粒~2) ○		
122	蓋形埴輪	残長 4.4 残幅 2.1	鱗飾り上端部。	ハケ(7~8本/cm) マメツ		橙色	石・長(0.5~2) △		
123	蓋形埴輪	残高 4.6 凸帯径 14.8	凸帯を一条巡らす。	ヨコナデ (一部ハケ痕)	ナデ	橙色	石・長(細粒~2) ○		
124	楕形埴輪	残長 27.6 残幅 7.9	2条の縁取りの沈線を施し、弧状の文様から外向きに3単位の鋸歯文を刻む。	ハケ(7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2.5) ◎		46
125	楕形埴輪	残高 9.2 残幅 8.6	鋸歯文。	ハケ(8~9本/cm) ナデ	ナデ	橙褐色	石・長(1~3) ○		46
126	楕形埴輪	残高 6.4 残幅 6.1	鋸歯文の一部残存。	ハケ(7~8本/cm) ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2) ○		46
127	楕形埴輪	残高 4.5 残幅 4.4		ハケ(7~8本/cm) ナデ	ナデ	橙褐色	石・長(1~3) ○		46
128	楕形埴輪	残高 4.5 残幅 5.3		ハケ(6本/cm) ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~2) ○		46
129	楕形埴輪	残高 6.8 残幅 4.4	鋸歯文の一部残存。	ハケ(6本/cm) ナデ	ナデ	橙褐色	石・長(1~2) 赤色土粒 ◎		
130	人物埴輪	残長 12.8	左腕。指は欠損し内側にRをもつ。	ナデ		橙褐色	石・長(1~3) ○		
131	人物埴輪	残高 5.2	脚部?	ナデ ヨコナデ		にぶい橙色	石・長(1~2) ○		
132	形象埴輪	残長 20.8	弓状の円柱にひも状の円柱を両端で接合する。	ナデ		橙色	密 ○		49
133	不明	残長 2.8	円柱状の破片	ナデ		にぶい橙色	密 ○		49
134	不明	残高 6.4 残幅 6.4	縁に3条の沈線を施し、内側に孔をもつ。	ハケ(5~6本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2.5) 石粒 ◎		47
135	不明	残長 3.6 残幅 2.4	縁に3条の沈線。	ハケ(6本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ○		

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4B区

表19 大池東3号墳周溝内出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
136	鋤先	完形	鉄	13.2	17.6	0.9	122.391		37

表20 SK1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
137	高坏蓋	口径 12.1 器高 6.2	天井部は丸く、天井部2/3ヘラケズリ。ツマミは中央部が凹む。稜はシャープ。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	石・長(細粒~2.5) ◎		38
	高坏身	口径 10.6 底径 8.8 器高 10.6	たちあがり端部は凹面。受部は外上方にのびる。坏底外面にカキ目あり。脚は3方に三角のスカシ。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (坏底~脚柱)カキ目	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~4) ◎		38
138	高坏蓋	口径 12.2 器高 5.7	天井部は丸く稜はシャープである。ツマミは中央部が凹む。天井部4/5ヘラケズリ。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	明緑灰色 灰白色	石・長(細粒~2) ○		
	高坏身	口径 10.0 底径 8.4 器高 9.3	たちあがりは内傾したのち上方にのびる。端部は内傾する凹面。受部は外上方にのびる。坏底部は丸い。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (脚柱)カキ目	回転ナデ	青灰色	石・長(細粒~2) ○		
139	高坏蓋	口径 12.0 器高 5.2	天井部は丸く稜は鋭い。口縁端部は段をなす。ツマミは中央部が凹む。天井部2/3ヘラケズリ。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~1.5) ○		
	高坏身	口径 10.7 底径 8.8 器高 9.2	たちあがりは内傾したのち上方にのびる。端部は浅い凹面。受部は水平気味。底部は丸い。	回転ナデ (脚柱)カキ目	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~2.5) ○	自然釉	
140	高坏蓋	口径 12.3 器高 5.6	天井部は丸く、口縁端部は凹面。ツマミは中央部が突起する。天井部2/3ヘラケズリ。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~3) ○		38
	高坏身	口径 10.7 底径 8.6 器高 9.8	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は凹面をなす。受部は外上方にのびる。底部は丸い。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (脚柱)カキ目	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~5) ○		38
141	高坏蓋	口径 12.4 器高 5.5	天井部は丸く、2/3ヘラケズリ。稜は丸味を帯びる。ツマミは中央部が凹む。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(細粒~4.5) ○	自然釉	
	高坏身	口径 10.8 底径 8.6 器高 10.6	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は凹面。受部は水平にのびる。底部は丸い。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (脚柱)カキ目	回転ナデ ナデ	灰色	石・長(細粒~3) ◎		
142	高坏蓋	口径 12.2 器高 5.5	天井部は丸く稜は短く鋭い。2/3ヘラケズリ。ツマミは中央部が凸する。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~4) ○		
	高坏身	口径 10.7 底径 9.2 器高 9.6	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は凹面。受部は外上方にのびる。底部は丸い。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (脚柱)カキ目	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~3) ○		
143	高坏蓋	口径 11.9 器高 5.4	天井部は丸く稜は短く鋭い。口縁端部は凹面。ツマミは中央部が凹む。天井部2/3ヘラケズリ。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色	石・長(細粒~4) ○		38
	高坏身	口径 10.6 底径 9.0 器高 10.0	たちあがりは内傾し、端部は浅い凹面。受部は外上方へのびる。底部は丸い。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (脚柱)カキ目	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~2) ◎		38
144	高坏蓋	口径 12.3 器高 5.7	天井部は丸く稜は短く鋭い。口縁端部は凹面。ツマミは中央部が突出する。	回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~4) ○		38
	高坏身	口径 10.9 底径 9.2 器高 9.1	たちあがりは内傾したのち直立し、端部は内傾する平面をなす。受部は水平にのびる。底部は丸い。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ (脚柱)カキ目	回転ナデ	青灰色	石・長(細粒~2) ○		38

遺物観察表

SK1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
145	高坏蓋	口径 12.0 器高 5.6	天井部は丸く稜は突出する。端部は凹面。ツマミは中央部が凹む。天井部2/3ヘラケズリ。	回転ナデ ⊗回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~15) ○	自然釉	
	高坏身	口径 10.3 底径 8.2 器高 10.0	たちあがりは内傾し、端部は凹面。受部は水平にのび底部はやや扁平。脚はカキ目痕有り。	回転ナデ ⊗(坏底)回転ヘラケズリ ⊗(脚柱)カキ目	回転ナデ	灰色	石・長(細粒~1) ○	自然釉	
146	高坏蓋	口径 12.3 器高 6.5	天井部は丸く器高が高い。稜は短い。口縁端部は浅い凹面。ツマミは中央部がやや突出する。	回転ナデ ⊗(天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	紫灰色 灰色	石・長(細粒~2) ○		
	高坏身	口径 11.1 底径 8.2 器高 10.0	たちあがりは内傾したのち直立する。端部は凹面。受部は外上方にのびる。坏部は丸味を帯びる。	回転ナデ ⊗(坏底)回転ヘラケズリ ⊗(脚柱)カキ目	回転ナデ ナデ	青灰色 暗青灰色	石・長(細粒~3) ◎		

表21 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
147	大甕	口径(51.6) 残高103.0	外傾したのち外反する口頸部。端部外面直下に一条の凸帯が巡り、その下に刺突文を施す。	回転ナデ ⊗(体~底)平行叩き	回転ナデ ⊗(体~底) 同心円叩き、ナデ	灰色 灰黄色	石・長(1~2) ○		

表22 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
148	壺	口径(16.0) 器高 54.4	口頸部は短く直立する。口縁端部は凹面をなす。	ナデ ⊗(体~底)平行叩き	ナデ ⊗(体~底) 同心円叩き	赤褐色、赤黒色 灰色	石・長(1~3) ○	自然釉	40

表23 SK4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
149	蓋	口径 12.4 器高 5.4	天井部は丸く、2/3ヘラケズリ。稜は丸味を帯びる。口縁端部は凹面。ツマミは中央部が凹む。	回転ナデ ⊗(天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~2) ○		

表24 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
150	埴	口径(16.9) 残高 3.5	口縁部は外上方にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(細粒) ○		
151	埴	底径 6.7 残高 3.4	底部は円盤状高台。体部は内湾してたちあがる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(1~3) △		

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B区

表25 大池東 3号墳出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
152	石鏃	完形	サヌカイト	2.3	1.9	0.4	1.136		
153	化石 イノセラムス	一部欠失	頁岩	7.1	9.1	3.6	288.504		
154	化石 イノセラムス	一部欠失	頁岩	13.3	7.5	6.4	485.201		

表26 大池東 4号墳墳丘出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
155	直刀	ほぼ完形	鉄	101.1	3.0	0.8	1100		42
156	直刀	3/4	鉄	(88.9)	3.0	0.8	580		43

表27 大池東 4号墳墳丘・周溝出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
157	蓋	残高 1.6	ツマミは中央部がやや凸する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	砂粒 ○	自然釉	
158	坏蓋	口径 12.2 残高 4.0	天井部はヘラケズリ。口縁端部は段をなす。	Ⓐ回転ヘラケズリ ⓐ回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~5) 砂粒 ○		
159	無蓋 高坏	口径(18.0) 残高 4.7	口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。体部外面に2条の凸線が巡り、その下に波状文を施す。	回転ナデ Ⓐ回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ○	自然釉	
160	高坏	底径 (8.2) 残高 4.0	脚部はカキ目調整を施し、3方向のスカシをもつ。脚端部は内湾して直立する。	Ⓐ脚柱カキ目 ⓐ脚端回転ナデ	回転ナデ (シボリ痕)	灰色	石・長(細粒~2) ○		
161	高坏	底径 (8.1) 残高 5.3	3方向のスカシをもつ脚部。脚端部は内湾して直立する。	Ⓐ坏底ナデ ⓐ脚柱カキ目 ⓑ脚端回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(細粒~1.5) ○		
162	壺	口径(11.2) 器高 14.5	外反する口縁部は段をなし端部は凹面。頸部に波状文を施す。胴上位に一条の凹線を巡らせ直下に刺突文。	回転ナデ Ⓐ胴中カキ目 ⓐ底ナデ	回転ナデ (工具痕)	暗オリーブ色 灰白色	石・長(1~2.5) ○	自然釉	
163	甕	口径(18.8) 残高 8.5	逆「ハ」字状に開く口頸部。口縁端部は下方に拡張し、頸部は文様を施さない。	Ⓐ回転ナデ ⓐカキ目 ⓑ平行叩き→カキ目	Ⓐ口~頸回転ナデ ⓐ同心円叩き	灰色	石・長(1~2.5) ○	自然釉	
164	甕	口径 22.2 残高 37.7	外反しながら開く口頸部。口縁部と底部は焼け歪みを生じる。尖り気味の底部。	回転ナデ Ⓐ体平行叩き→カキ目 ⓐ底平行叩き	回転ナデ Ⓐ体~底 同心円叩き	暗灰色 灰色	石・長(1~4) △	自然釉	41
165	器台	口径 33.4 底径 27.2 器高 35.9	坏部は口縁が外に屈曲し、のびる。坏底外方にタタキ目を残す。脚は「ハ」字状に開く。	回転ナデ Ⓐ坏カキ目、格子目叩き ⓐ脚柱カキ目	回転ナデ ナデ	暗緑灰色	石・長(1~2.5) ○		41
166	円筒 埴輪	底径 11.8 残高 19.9	基底部より外反しながら立ち上がり、胴部タガ間に扁平な円形のスカシを施す。	Ⓐハケ(8本/cm) ⓐヨコナデ ⓑナデ	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 明褐色	石・長(0.5~3) チャート ○		44

遺物観察表

大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
167	円筒埴輪	口径(23.8) 残高 12.5	口縁部は外反し、胴部に断面台形状のタガを持つ。口縁からタガを一段介した2段目に円形のスカシ。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(8~9本/cm)	マメツ	浅黄橙色 黄橙色	石・長(0.5~2) 石粒 △		
168	円筒埴輪	口径(23.8) 残高 11.6	外反する口縁部。胴部に断面台形状と思われるタガを持つ。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(7~8本/cm)	ハケ→ヨコナデ (7~8本/cm)	浅黄橙色 黄橙色	石・長(0.5~2) △		
169	円筒埴輪	口径(24.0) 残高 11.7	胴部はやや外傾し、口縁部で外反する。外面口縁部下位に弓形のヘラ記号を施す。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(8~9本/cm)	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(7本/cm)ナデ	橙褐色	石・長(1~3) ◎		44
170	円筒埴輪	残高 9.4	胴部に断面扁平な台形状のタガを持ち、上位に円形のスカシを施す。	㊧ハケ(7~8本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(細粒~1.5) ○		
171	円筒埴輪	残高 13.2	胴部に断面台形状のタガを持つ。上段のタガの突出度は低く、下段のタガ直下に円形のスカシ。	㊧ハケ(14~16本/cm) ㊦ヨコナデ→ヨコハケ	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色	石・長(0.5~2) ○		44
172	円筒埴輪	残高 4.5	胴部に断面台形状のタガを持ち、下位に円形のスカシを施す。	㊧ハケ(7~8本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ (指頭痕)	橙色	石・長(細粒~1.5) ○		
173	円筒埴輪	残高 8.7	胴部にタガを持ち、断面は台形状を呈する。	㊧ハケ(8~9本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ	橙褐色	石・長(0.5~2) ○		
174	円筒埴輪	残高 8.6	胴部に断面台形状のタガを持ち、上位に円形のスカシを施す。	㊧ハケ(7本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ (指頭痕)	橙色 明黄褐色	石・長(0.5~1.5) ○		
175	円筒埴輪	残高 13.0	胴部はやや外反気味で器壁は厚く断面台形状のタガを持つ。	㊧ハケ(8本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ	黄橙色	石・長(0.5~3) ○		
176	円筒埴輪	残高 11.0	胴部はやや外反し、突出度の低いタガを持つ。	㊧ハケ(8本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ	橙褐色	石・長(1) ○		
177	円筒埴輪	残高 6.6	胴部に「M」字状の突出度の低いタガを持つ。	㊧ハケ(16~18本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ	橙褐色	石・長(1~2) ○		44
178	円筒埴輪	残高 8.3	胴部に断面台形状のタガを持つ。	㊧ハケ(7本/cm) ㊦ヨコナデ	ハケメ (工具痕) (指頭痕)	橙色	石・長(0.5~2.5) ○		
179	円筒埴輪	底径(12.6) 残高 14.2	胴部はやや外反気味で、タガの断面は台形状を呈し、基底部は丸みを帯びる。	㊧ハケ(8本/cm)ナデ ㊦ヨコナデ ㊦ナデ	ナデ	橙褐色	石・長(細粒~2.5) ◎		
180	円筒埴輪	底径(13.0) 残高 12.5	基底部より外反する胴部は、断面台形状のタガを持つ。	㊧マメツ ㊦ヨコナデ ㊦ナデ	㊧マメツ ㊦ナデ	黄橙色	石・長(細粒~2.5) ○		
181	円筒埴輪	底径(15.0) 残高 15.3	基底部より直立気味にたちあがる胴部は断面台形状のタガを持つ。	㊧ハケ(7本/cm) ㊦ヨコナデ ㊦ハケ(7本/cm)ナデ	ナデ	明赤褐色	石・長(1~2) ○		
182	朝顔形埴輪	口径(41.3) 残高 4.1	大きく外反する口縁部。口縁端部は浅い凹面をなす。	ヨコナデ ハケ(6本/cm)	ヨコナデ ナデ	橙褐色	石・長(1~4) ◎		
183	朝顔形埴輪	口径(39.4) 残高 3.9	口縁部は大きく外反し、口縁端部は浅い凹面をなす。	ヨコナデ ハケ(6本/cm)	ヨコナデ ナデ	橙褐色	石・長(細粒~2) ◎		
184	蓋形埴輪	残長 4.8	立ち飾り。	ハケ(6本/cm) マメツ		橙色	石・長(細粒~1.5) ○		
185	蓋形埴輪	残長 6.9	立ち飾り。	ハケ(7本/cm) マメツ		橙色	石・長(細粒~2) ○		

大峰ヶ台遺跡 9 次調査 4 B 区

大池東 4 号墳 墳丘・周溝出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
186	蓋形埴輪	残長 5.2	立ち飾り。	ナデ		橙褐色	石・長(細粒~2) ○		
187	蓋形埴輪	残長 4.8	立ち飾り。	ハケ(7本/cm) マメツ		橙色	石・長(0.5~2) ○		45
188	蓋形埴輪	残長 5.1	立ち飾り。	ハケ(7本/cm) マメツ		橙色	石・長(1) ○		
189	蓋形埴輪	残長 6.4	立ち飾り。	ハケ(7~8本/cm)		橙色	石・長(1~2) ○		
190	蓋形埴輪	残長 5.6	立ち飾り。	ハケ(7~8本/cm)		橙色	石・長(細粒~2) ○		
191	蓋形埴輪	残長 4.0	立ち飾り。	ハケ(6~7本/cm) マメツ		橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
192	蓋形埴輪	残長 6.0	立ち飾り。	ハケ マメツ		橙色	石・長(0.5~2) ○		
193	蓋形埴輪	残長 9.6	立ち飾り。	ハケ(6本/cm)		橙色	石・長(0.5~2) ◎		45
194	蓋形埴輪	残長 6.3	立ち飾り。	ハケ(6本/cm) マメツ		橙色	石・長(1~4) ○		
195	蓋形埴輪	残長 3.6	立ち飾り。	ハケ(7~8本/cm) ハクリ		橙色	石・長(0.5~2) ○		
196	蓋形埴輪	残長 7.8	立ち飾り。	ハケ(6~7本/cm) ハクリ		橙色	石・長(1~2) ○		
197	蓋形埴輪	残長 8.8	立ち飾り。	ハケ(7~8本/cm) マメツ		橙色	石・長(0.5~2) ○		
198	蓋形埴輪	口径(10.8) 残高 6.4	笠部上端と軸受接合部。	ハケ(6~7本/cm) ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	橙褐色	石・長(細粒~1.5) 石粒(黒) ◎		45
199	蓋形埴輪	笠部径 44.0 残高 3.8	笠部は「ハ」字状に開き、端部は水平に外方へのびる。	ハケ(6~8本/cm) ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2) ○		45
200	楕形埴輪	残長 5.2	2条の沈線。	ハケ(5~6本/cm) ナデ		にぶい橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
201	楕形埴輪	残長 4.8	2条の沈線と鋸歯文。	ハケ(6本/cm) ナデ		橙褐色	石・長(1~2.5) ○		
202	楕形埴輪	残長 8.3	縁取りの2条の沈線。	ハケ(8~9本/cm) ナデ		にぶい橙色	石・長(0.5~1) ◎		
203	楕形埴輪	残長 6.0	鋸歯文。	ハケ(6~7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~3) ○		
204	人物埴輪	残長 4.4 残幅 4.9	鬘。袋状で中空。	ハケ(5~6本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~4) ○		48

遺物観察表

大池東4号墳墳丘・周溝出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
205	人物埴輪	残長 4.4 残幅 8.0	顔。	ナデ	ナデ (指頭痕)	橙色	石・長(1~3) ○		48
206	人物埴輪	残長 6.0 残幅 2.8	顔。	ナデ	ナデ (指頭痕)	橙色	石・長(0.5~2) ○		48
207	人物埴輪	残長 16.0	腕。湾曲する。	ナデ (指頭痕)		橙色	石・長(1~4) ◎		
208	人物埴輪	残長 6.3	手。	ナデ		橙色	石・長(1~2) ○		
209	人物埴輪	残長 2.8	指。	ナデ		橙色	石・長(細粒~1.5) 赤色土粒 ○		48
210	人物埴輪	残長 6.7	飾り。	ナデ		橙色	石・長(1~3) ○		48
211	人物埴輪	残長 5.2		ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~4) ○		
212	人物埴輪	残長 6.7	外面に何かを模した粘土を貼り付ける。	ハケ(6本/cm) ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~3) ○		48
213	人物埴輪	残長 8.9	肩部。	ナデ	ナデ 指押え	橙色	石・長(細粒~3) 石粒 ○		48
214	人物埴輪	残長 3.2	外面はボタン状で、接合部は突出する。	ハケ(8~9本cm) ナデ		浅黄橙色	石・長(1~3) ○		
215	人物埴輪	底径(12.0) 残高 10.6	基底部。	ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~3) ◎		
216	人物埴輪	底径(10.0) 残高 6.0	基底部。	ナデ	ナデ 指押え	橙色	石・長(1~2) 赤色土粒 ○	黒斑	
217	不明	残長 9.1 残幅 5.6	縦方向の鱗がつく。	ハケ ナデ		橙色	石・長(1~1.5) 石粒(茶色) ○		
218	不明	残長 8.9	2条の沈線の間に沈線をわたす。	ハケ(6~8本cm) ナデ		橙色	石・長(細粒~2) ◎		47
219	不明	残長 9.0	円筒部との接合部。	ハケ(7~8本cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ◎		47

表28 大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
220	円筒埴輪	口径(25.5) 残高 18.3	口縁部はやや外反する。タガの断面は台形状を呈する。口縁からタガを一段介した2段目に円形のスカシ。	㊦(籾)ヨコナデ ㊧ハケ(7~8本/cm)	㊨上ハケ(8本/cm) →ナデ ㊨下ナデ	明赤褐色	石・長(0.5~2) ○		
221	円筒埴輪	口径(24.2) 残高 18.6	口縁部はやや直立気味で胴部は断面台形状のタガを持つ。口縁からタガを一段介した2段目に円形のスカシ。	㊦(籾)ヨコナデ ㊨ハケ(7本/cm)	㊨上ハケ(7本/cm) ㊨下ナデ (工具痕)	黄橙褐色	石・長(0.5~2) △		

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4 B 区

大池東 4 号墳 墳丘・周溝 外出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
222	円筒 埴輪	口径(20.4) 残高 14.0	口縁部はやや外反し胴部は断面台形状のタガを持つ。口縁からタガを一段介した2段目に円形のスカシ。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(8~9本/cm)	㊦ヨコナデ ㊨上ハケ(6~7本/cm) ㊩下ナデ(指頭痕)	橙色	石・長(細粒~3) ○		
223	円筒 埴輪	口径(24.0) 残高 6.4	やや外反する口縁部。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(5~7本/cm)	㊦ヨコナデ ㊨ハケ(6本/cm)	橙色	石・長(細粒~3) ○		
224	円筒 埴輪	残高 7.0	断面三角形のタガを持つ胴部。器壁は厚い。	㊧ハケ(7本/cm) ㊦ヨコナデ	ナデ	橙色	石・長(1~3) ○		
225	円筒 埴輪	残高 8.4	胴部は断面台形状のタガを持ち、タガ上位に円形のスカシを施す。	㊧ハケ(7~8本/cm) ナデ ㊦ヨコナデ	ナデ (一部ハケ痕)	橙色 橙褐色	石・長(1~2) ○		
226	朝顔形 埴輪	口径(36.8) 残高 3.7	口縁部は大きく外反し、口縁端部は先端をつまみ出しながら丁寧にヨコナデされている。	ヨコナデ ハケ(6~7本/cm)	ヨコナデ ナデ	橙褐色	石・長(細粒~2) 赤色土粒 ◎		
227	蓋形 埴輪	残長 15.2	2条の縁取りの沈線に2条の沈線をわたす。	ハケ(5~7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~4) ○		45
228	蓋形 埴輪	残長 15.0	2条の縁取りの沈線に2条の沈線をわたす。	ハケ(6本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ○		
229	蓋形 埴輪	残長 15.2	2条の縁取りの沈線に2条の沈線をわたす。	ハケ(7本/cm) ナデ		橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
230	蓋形 埴輪	残長 12.0	「ハ」字状に外方へのびる。	ハケ(7本/cm) ナデ		橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
231	蓋形 埴輪	残長 13.6	2条の縁取りの沈線。	ハケ(6~7本/cm) ナデ		橙色	石・長(0.5~2) ◎		44
232	蓋形 埴輪	残長 10.8	2条の縁取りの沈線。	ハケ(7~9本/cm) ナデ マメツ		浅黄橙色	石・長(1~3) ○		45
233	蓋形 埴輪	残長 6.3	鱗。	ハケ(6~7本/cm) ナデ マメツ		黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~4) ○		45
234	蓋形 埴輪	残高 6.3	鱗。	ハケ(8~9本/cm) 一部ナデ	ナデ	橙色	石・長(0.5~2) 石粒 ◎		
235	楕形 埴輪	残長 14.8		ハケ(8本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~4) ○		46
236	楕形 埴輪	残長 8.4	鋸歯文。	ハケ(8本/cm) ナデ		橙褐色	石・長(1~4) ◎		46
237	楕形 埴輪	残長 4.4	2条の縁取りの沈線。	マメツ		橙色	石・長(0.5~2) △		
238	楕形 埴輪	残長 5.2	鋸歯文。	ハケ(7~8本/cm) ナデ (指頭痕)		にぶい橙色	石・長(1~2) ○		46
239	楕形 埴輪	残長 3.8	2条の縁取りの沈線。	ハケ(7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) △		

遺物観察表

大池東4号墳墳丘・周溝外出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
240	楯形埴輪	残長 4.8	2条の縁取りの沈線。	ハケ(7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~3) △		46
241	人物埴輪	残長 4.0	鬢。袋状で中空。	ハケ ナデ		橙色	石・長(1~3) △		48
242	人物埴輪	残長 8.0	鬢。	ハケ(7~8本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ○		48
243	人物埴輪	残長 4.1	顎部。	ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~2.5) ○		48
244	人物埴輪	残長 6.2	額部。	ナデ	ナデ (指頭痕)	橙色	石・長(0.5~2) ○		48
245	人物埴輪	残長 18.0	腕。	ナデ		橙色	石・長(0.5~2) 石粒 ◎		49
246	人物埴輪	残長 12.0	腕。	ナデ		橙色	石・長(1~3) 赤色土粒 ◎		49
247	人物埴輪	残長 11.7	腕。	ナデ		橙色	石・長(1~5) 赤色土粒 ◎		49
248	人物埴輪	残長 9.2	服装を表わす胴部。沈線で割り付けを行なったのち粘土帯を貼付する。	ハケ(7~8本/cm) ナデ (指頭痕)		橙色	石・長(0.5~2.5) ○		48
249	人物埴輪	残長 8.8	板状。鬢か。	ナデ (指頭痕)		橙色	石・長(1~3) 赤色土粒 ○		
250	人物埴輪	残長 5.9	胴部。	ハケ(7~8本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ○		48
251	人物埴輪	残長 3.8	脚部と円筒の接合部。	ハケ(7~8本/cm)	ナデ	橙色	石・長(細粒) ○		
252	人物埴輪	残長 8.7	胴部。	ハケ(16~22本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~3) ○		
253	人物埴輪	残長 7.2	板状。鬢か。	ナデ		橙色	石・長(1~4) ○		48
254	不明	残長 4.3	先尖りの棒状。	ナデ		橙色	石・長(1~3) ○		48
255	不明	残長 10.8	鱗がつく。	ハケ(6~7本/cm) ナデ (指頭痕)		橙色	石・長(細粒 ~2)○		
256	不明	残長 9.2	接合部。	ハケ(6~7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2.5) 石粒(黒茶) ○		47
257	不明	残長 8.8	板状。	ハケ(6~7本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~3) ○		47

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4B区

大池東 4号墳墳丘・周溝外出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
258	不明	残長 8.9	4条の弧状の沈線を施し、中2条の沈線の間に、沈線をわたす。	ハケ(7~8本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ○		47
259	不明	残長 9.5	4条の弧状の沈線を施し、中2条の沈線の間に、沈線をわたす。	ナデ (一部ハケ痕)		橙色	石・長(1~2) 赤色土粒 ○		47
260	不明	残長 11.6	板状の胴部に粘土帯を貼り付ける。	ハケ(7~8本/cm) ナデ		橙色	石・長(1~2) ◎		47
261	蓋形 埴輪	残長 11.2	縁取りの2条の沈線を施し、中に2条1組の弧状の沈線を施す。	ハケ(7~8本/cm) ナデ		橙色	石・長(0.5~2) ○		47

表29 大池東 4号墳上石積遺構出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
262	不明	完形	凝灰岩	4.7	4.3	1.2	17.635		

表30 大池東 4号墳上石積遺構出土遺物観察表 銭貨

番号	銭名	初鑄年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内縁厚(mm)	重量(g)	備考	図版
263	寛永通寶	1697年以降	22.0	6.50	1.0	0.90	1.718		

第7章

— 4 C 区の調査 —

第7章 4C区の調査

1. 調査の経緯

4C区は、大峰ヶ台丘陵の西側、4A区の南側に位置する。調査は、中央部にあるわずかな盛り上がりの部分を古墳と想定し、尾根上に幅1mのトレンチを掘り、土層の確認を行った。土層観察では版築状の土盛りを確認した。また、トレンチからは、鉄製品、赤色顔料付着の土、周溝と思われる落ち込み部を検出した。さらに、石室をもたない古墳であることが判明した。古墳名は、字名より大池東5号墳とし、本格的な調査を4工程に分け開始した。

①墳形の調査 地形測量を行い、調査区は39×63mの範囲に設定する。つづいて、表土剥ぎを行い、盛土の遺存範囲を確認する。最後に周溝埋土を掘り下げ、墳形を確認する。

②主体部の調査 墳頂部を精査し、墓壙を検出する。墓壙を掘ると、南北両小口に石積を検出した。墓壙と思っていた所は、実は墓壙ではなく落ち込んだ土のラインであることが確認できた。墓壙を確定するために再度精査を行った。その結果、落ち込みラインの外側で墓壙を検出した。つづいて、墓壙を掘り下げると鉄器・玉・赤色顔料が出土した。赤色顔料は、南側部が北側部より濃い色をしていた。最後に写真撮影と測量を行い、取り上げを行う。赤色顔料は、サンプリングを行い、残りも全て取り上げた。

③主体部・墳丘の構築方法 主軸に合わせて十字にトレンチを掘り、土層確認を行い、主体部と墳丘の構築に関する調査を行う。

④地形の調査 墳丘を撤去し、地形測量と写真撮影を行う。調査対象地全体の測量を航空測量にて行い調査を終了する。

2. 遺構と遺物

(1) 大池東5号墳

1) 規模・構造

墳形は方墳で墳丘規模は、東西12.80m、南北13.00mである。盛土の残存高は、主体部下の地山からは110cmを測る。盛土は東西の裾部から積み上げ、盛土上面を少しずつ平坦に近づけながら構築している。墳丘の構築方法は大きく5段階に分けられる。第1段階は、尾根を平坦にカットし、地山整形後に盛土を行う。第2段階は、硬い褐色土を全面に敷く。その上に黒色土を敷き、黒色土の上面には、黄色土を主体にし、礫を含む土層と褐色土とを積み上げる。第3段階は、東西の裾部を主体部の高さに近づけるために盛土を積み上げる。東側は低いため、積みが厚く、南北主軸下では16cmを測る。第4段階は、主体部を中心として東と西に積み上げが行われる。この段階では盛土がほぼ水平に積み上げられ、南北主軸下では40cmを測る。第5段階は、主体部に向かって面を作るように外側を高くしながら積み上げを行う。

周溝は、尾根に直交する形で南側と北側で検出した。規模は幅4.6m、深さ0.6mを測る。埋土は黄褐色土である。周溝内からは土師器片が少量出土した。

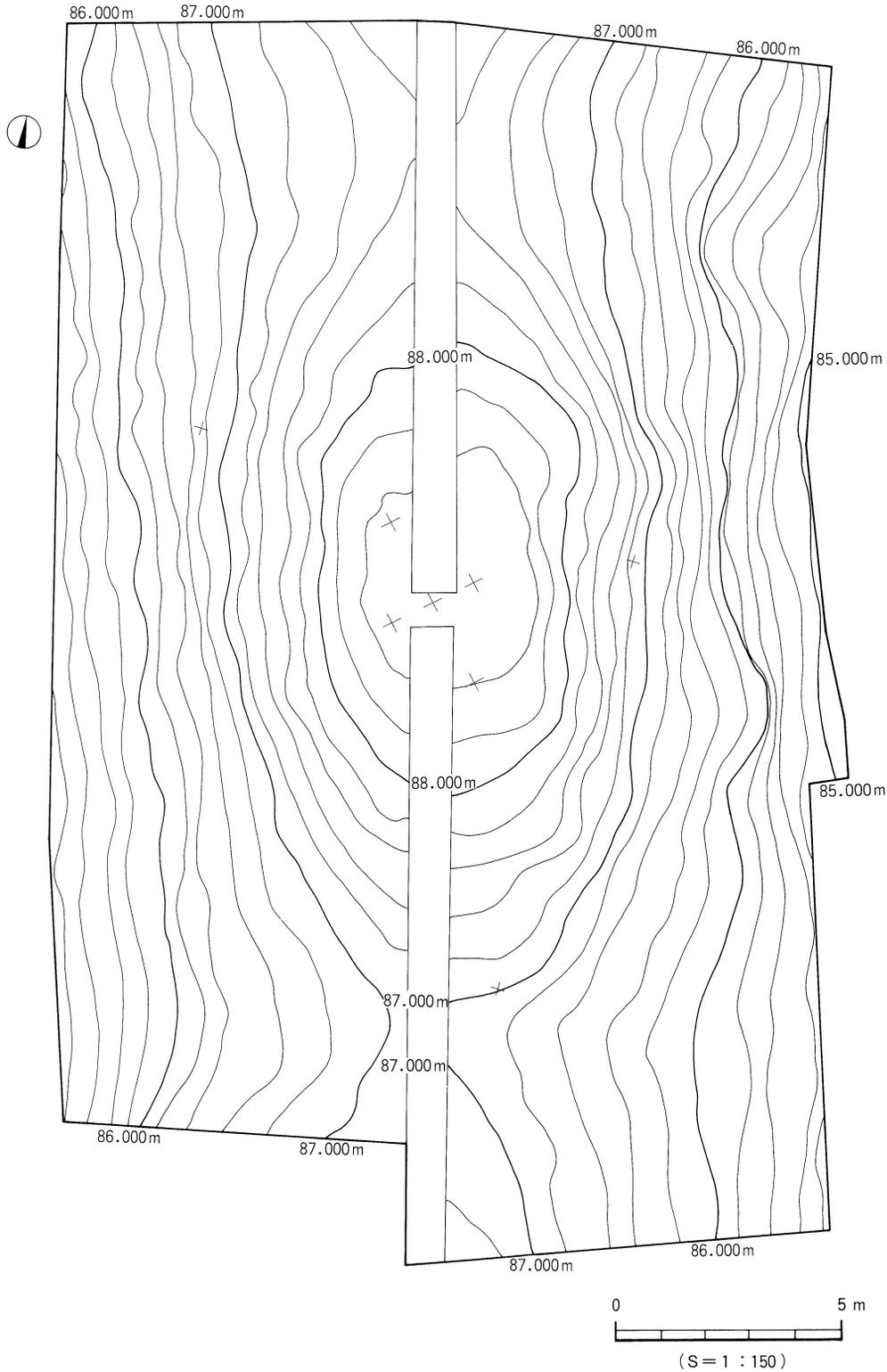
2) 主体部 (第102・103図)

墓壙の平面形態は隅丸長方形である。規模は、長軸4.7m、短軸1.4m、深さ0.6mを測る。断面形態は舟底状である。墓壙は、墳丘を掘り込んで作られる。墓壙の基底はまず舟底状に掘り、つづい

大峰ヶ台遺跡 9次調査 4C区

て床面を平坦にするために荒い礫混じりの土を敷く。主体部の南北両小口からは10~50cmの石を検出した。石材は北側小口には大きめの石材用い、平坦な面が内側に向くように配置している。南側小口には礫が南東部分に多く配置されていた。主体部床面で赤色顔料を検出した範囲は長さ2.75m、幅0.75m、厚さ3~5cmである。

出土遺物は鉄製品とガラス小玉が出土している。鉄製品は剣・鏃・鈍、ガラス小玉8点がある。鉄製品とガラス小玉は、出土地点が中央部から北側である。



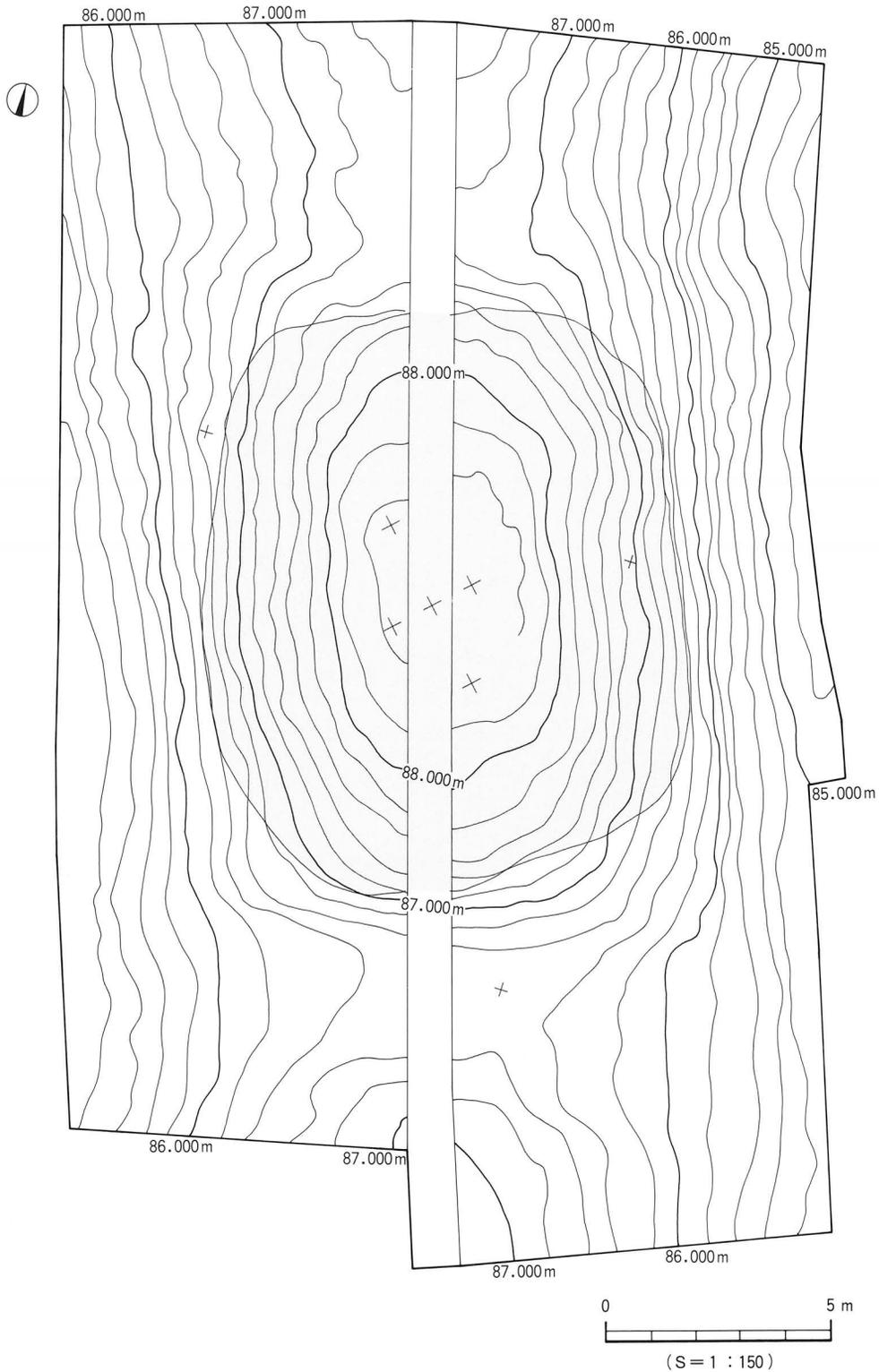
第98図 大池東5号墳調査前地形測量図

遺構と遺物

出土遺物 (第104図、図版54・55)

金属製品 (264~268)

264は剣で湾曲している。刃部の一部と基部を欠く。錆のため鏨は不明瞭である。265は鉞で湾曲している。先端部と基部の一部を欠く。先端部は薄く断面は三日月形である。266は刀子である。棟と刃部が明瞭に認識でき緩やかな関部(なで関部)をもつ。267は刀子で湾曲している。棟と刃部が明瞭である。関部も明瞭である。268は不明品である。穿孔があり関部と思われる段が片方に残る。

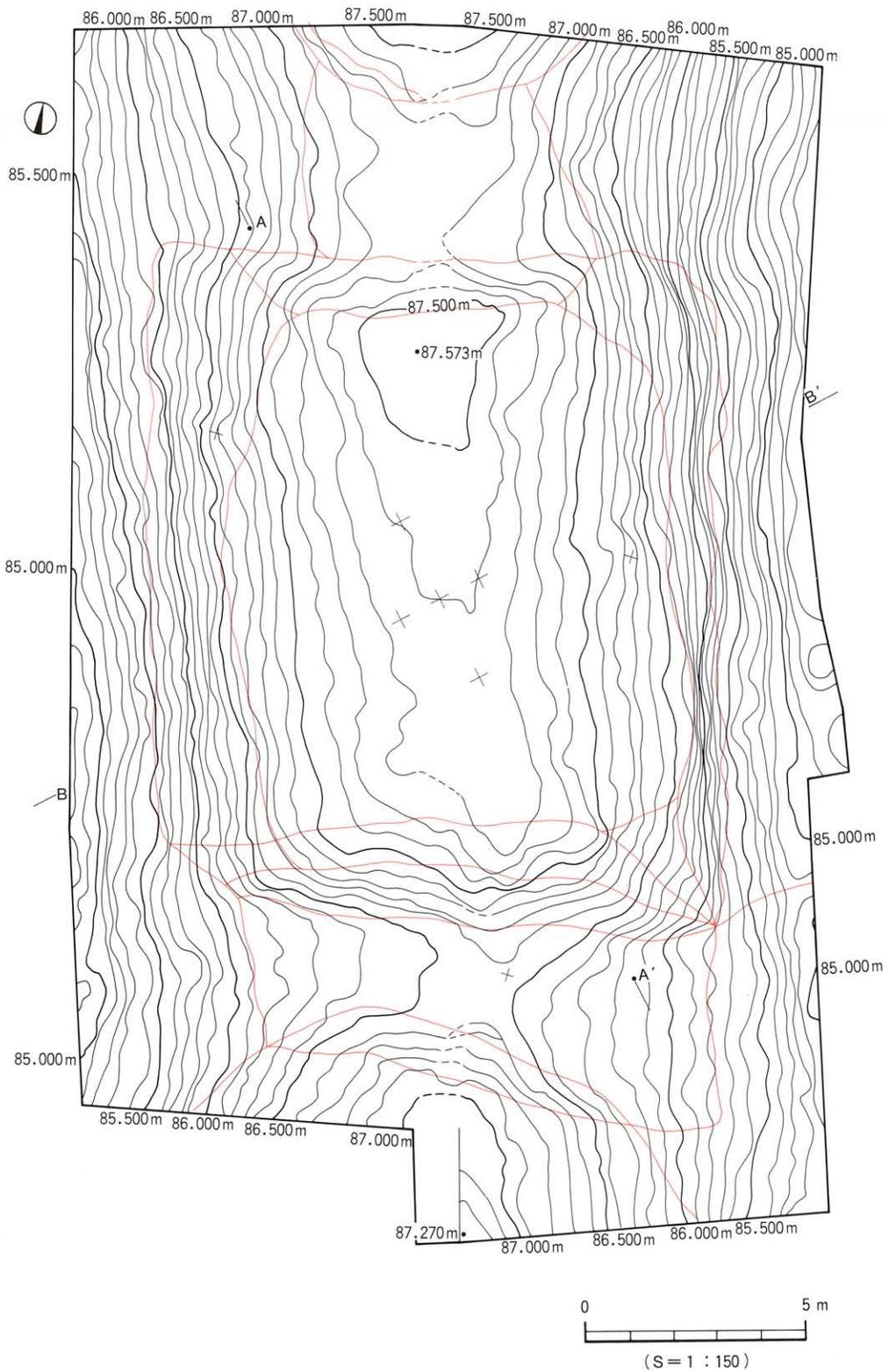


第99図 大池東5号墳盛土測量図

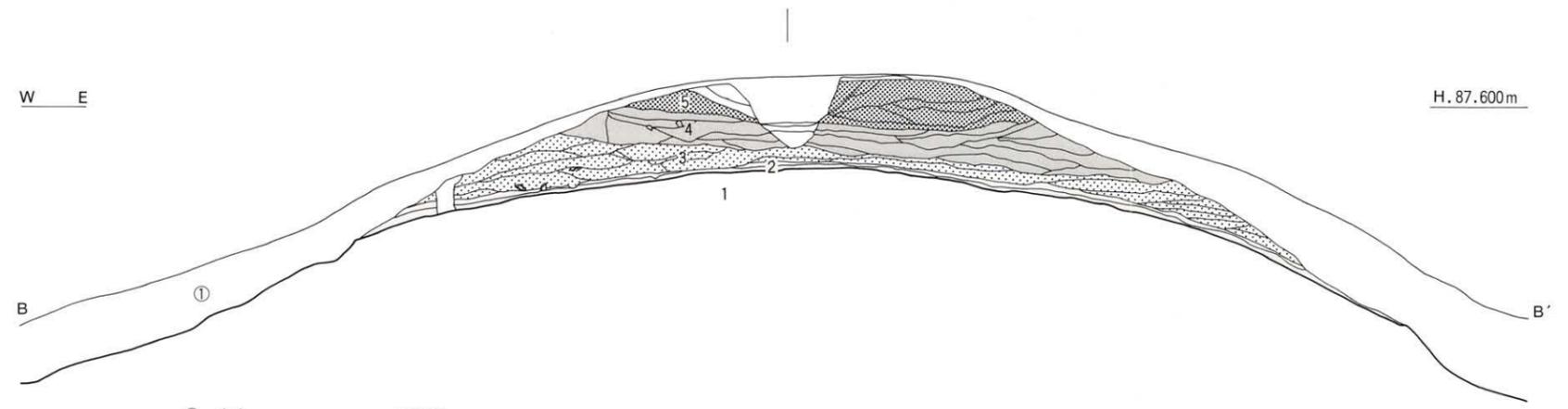
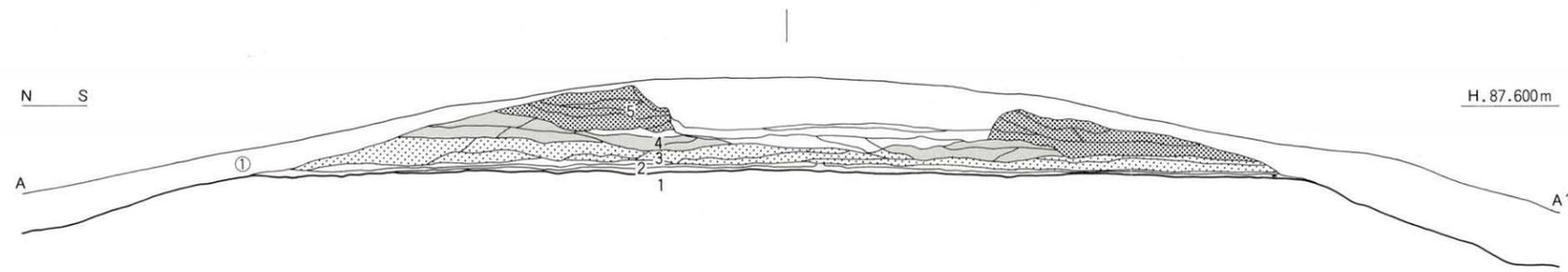
大峰ヶ台遺跡 9次調査 4C区

装飾品 (269~276)

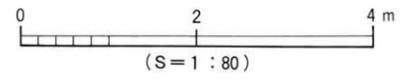
269~276はガラス玉である。法量は長さ0.35~0.6cm、幅0.35~0.55cm、孔径0.15~0.25cmを測る。
色調は269~275が青緑色で276が青色である。



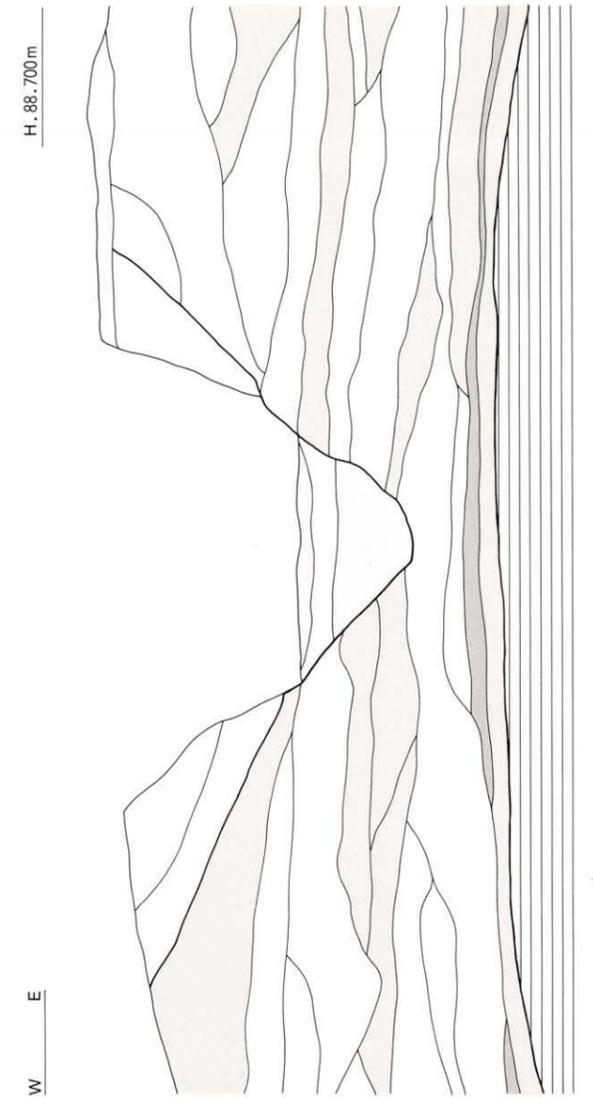
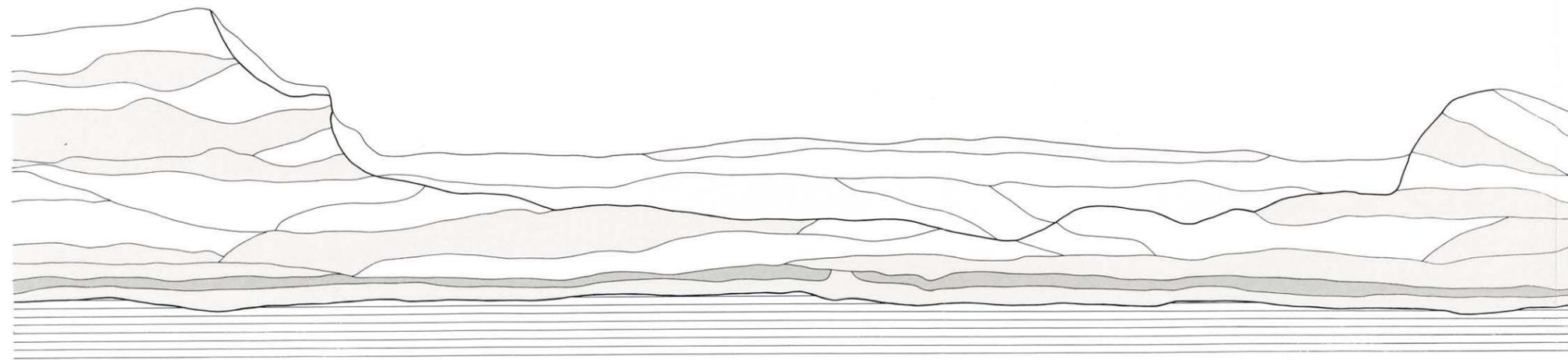
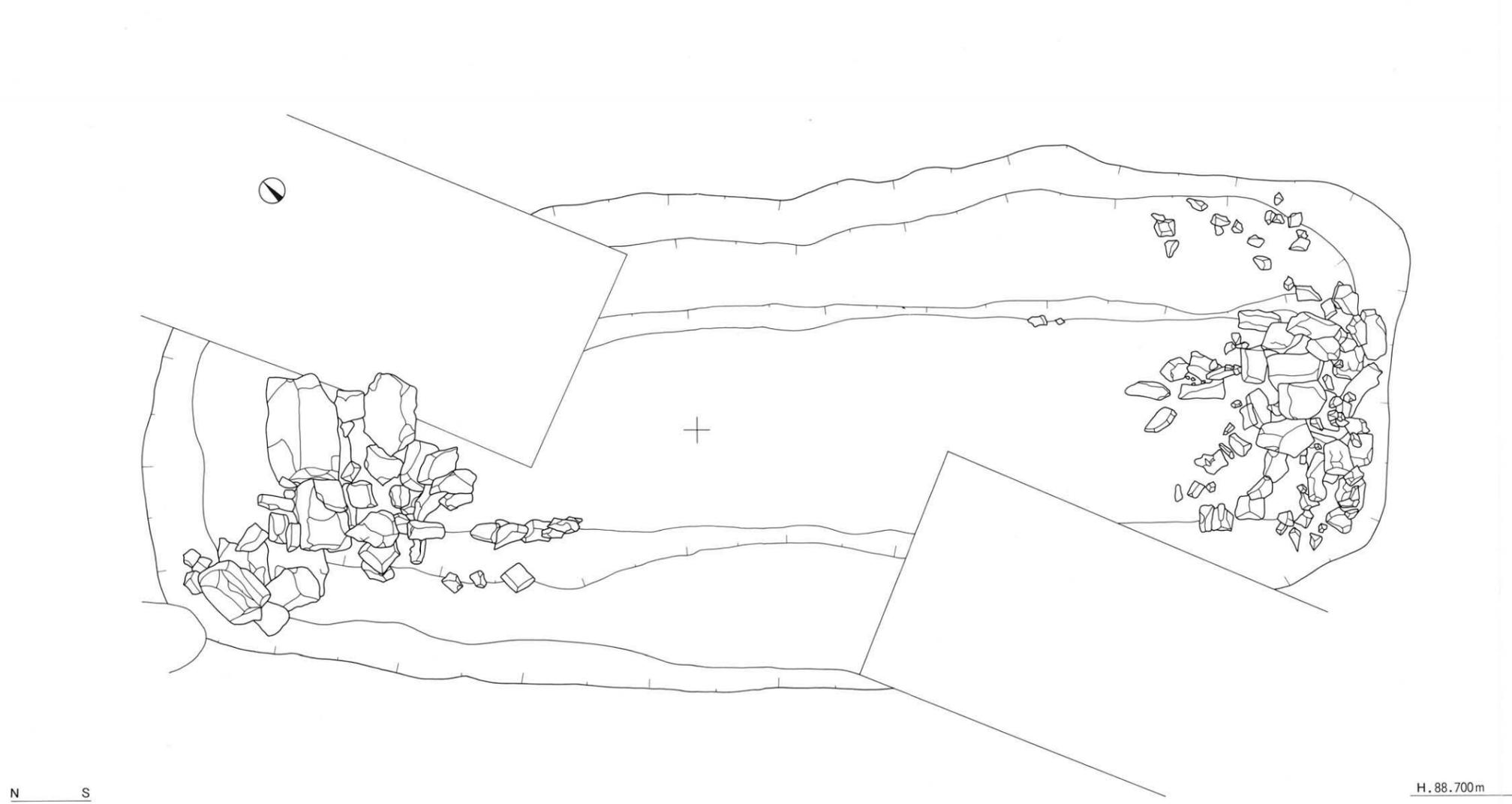
第100図 大池東5号墳調査後地形測量図



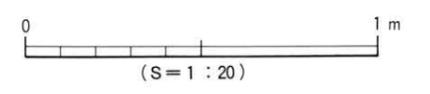
- ① 表土
- 赤色顔料
- 1 段階
- 2 段階
- 3 段階
- 4 段階
- 5 段階



第101図 大池東5号墳墳丘土層図

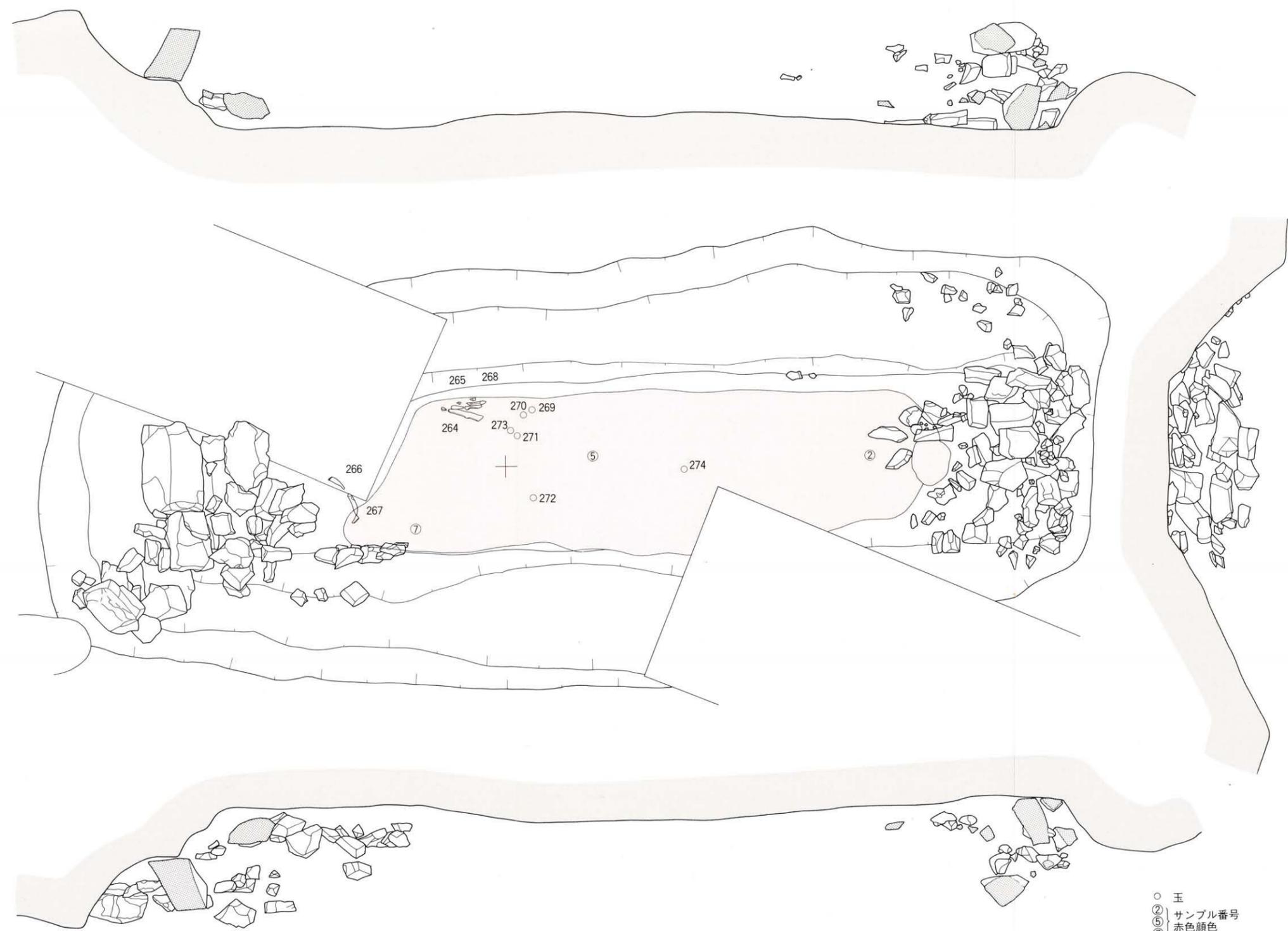


- 赤色顔料
- 排水
- 褐色系
- 黒色土
- 白は黄色系



第102図 大池東5号墳主体部測量図(1)

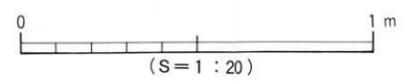
H. 88.700m



H. 88.700m

H. 88.700m

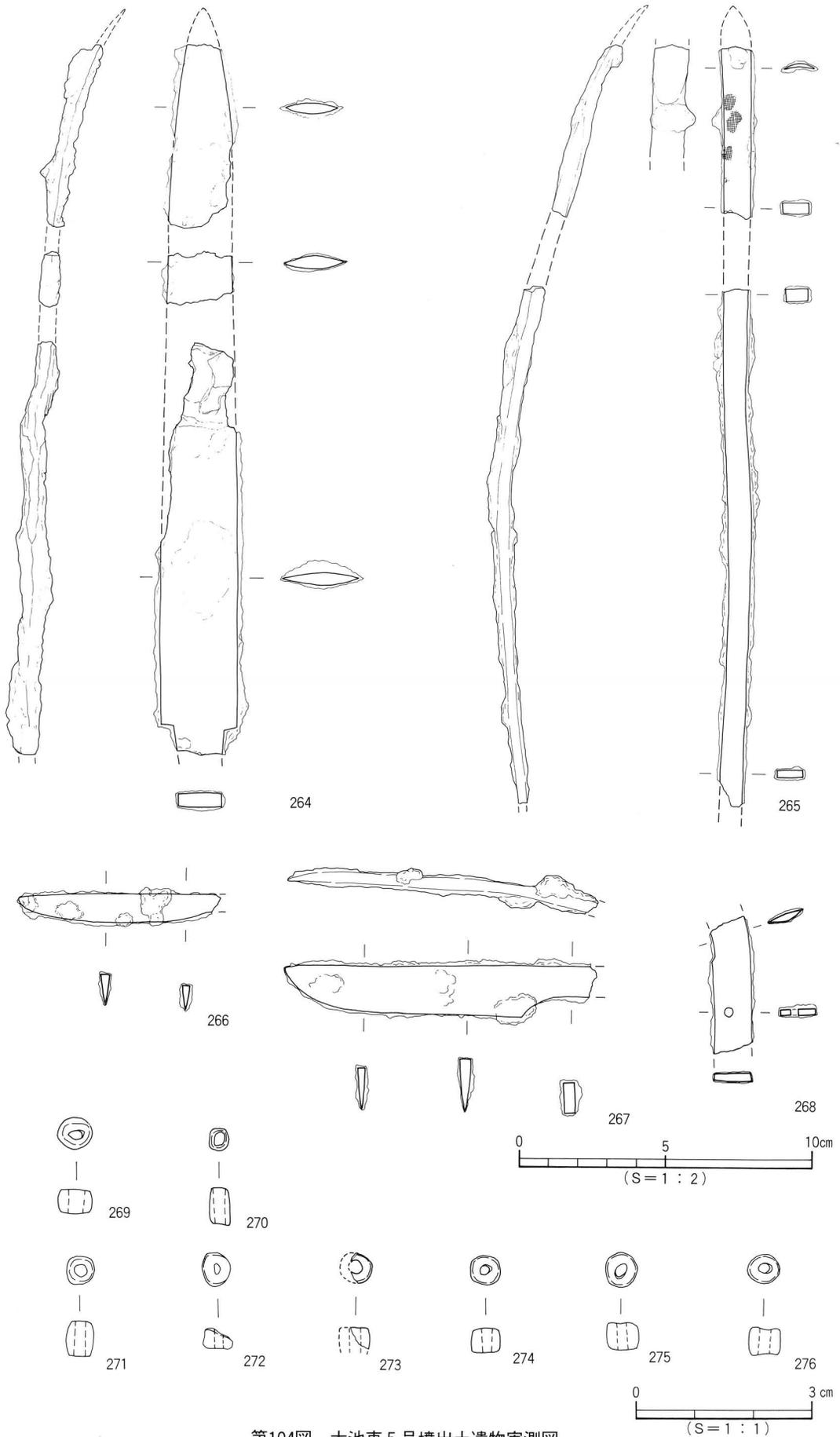
- 玉
- ② サンプル番号
- ⑤ 赤色顔色
- ⑦



H. 88.700m

第103図 大池東5号墳主体部測量図(2)

遺構と遺物



第104図 大池東5号墳出土遺物実測図

3. 小 結

今回の調査では、古墳時代前期の古墳1基を確認した。調査では墳丘及び主体部の構築方法を解明することを主眼とした。墳丘調査では、地山を整形し、褐色土と黒色土を全面に敷き、盛土は裾部から順次、盛土上面を平坦に近づけながら構築していくことを確認できた。

また、墳丘上面では、主体部西側で1㎡四方、厚さ5cmの粘土層を検出した。粘土層は、木棺を覆う土層の上面にある。よって、主体部内に進入する水をふせぐ為のものと考えられる。

墓壙は、墳丘を盛った後に掘削を行う。基底は平坦にするため、2層の土を敷いている。下層は大きめの礫混じり、上層は小さい礫混じりの土で構成されていた。これは、主体部内の水分を抜くための排水施設と考えられる。

また、主体部床面からは赤色顔料が出土している。分析を行った結果であった。埋葬施設は、木棺の痕跡は確認できなかったが、床面が水平であり、釘は検出されていないため組合式の木棺と考えられる。

大池東5号墳では、墳丘構築後に墓壙が掘られ、墓壙の基底部に粗い礫混じり土を敷き排水効果を高める施設が存在していることを確認したことは、今後、古墳の研究を行う上で一つの資料となるものである。

表31 大池東5号墳主体部出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
264	剣	刃部の一部と基部を欠く。3片。	鉄製	13.8+1.8+6.1	2.6	0.5	77.752	湾曲あり。サジのため、錆は不明瞭。	54
265	鈍	先端部と基部の一部を欠く。2片。	鉄製	17.4+5.8	0.9	0.4	32.045	湾曲あり。先端部で急に薄くなり、断面は三日月形。繊維質が付着。長さが長いことから前期古墳に伴うものと思われる。	54
266	刀子	基部を欠く。	鉄製	6.8	1.0	0.3	6.486	棟と刃部が明瞭に識別できるゆるやかな関部(なで関)をもつ。	55
267	刀子	基部の一部を欠く。	鉄製	10.5	1.8	0.4	22.239	湾曲あり。棟と刃部が、明瞭。明瞭な関部をもつ。	55
268	不明	刃部と基部の一部を欠く。	鉄製	4.6	1.3	0.3	6.697	穿孔あり(目釘穴か?)。関部らしき段差が、片方に残る。	54

表32 大池東5号墳主体部出土遺物観察表 装飾品

番号	器 種	残 存	材 質 色	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
269	玉	完形	ガラス青緑色	0.40	0.55	0.25	0.139		
270	玉	完形	ガラス青色	0.60	0.35	0.20	0.094		
271	玉	完形	ガラス青緑色	0.60	0.45	0.20	0.141		
272	玉	完形	ガラス青緑色	0.35	0.50	0.15	0.108		
273	玉	約1/2	ガラス青緑色	0.35	(0.50)	0.22	0.082		
274	玉	完形	ガラス青緑色	0.40	0.50	0.15	0.153		
275	玉	完形	ガラス青緑色	0.45	0.55	0.20	0.181		
276	玉	完形	ガラス青色	0.45	0.55	0.20	0.150		

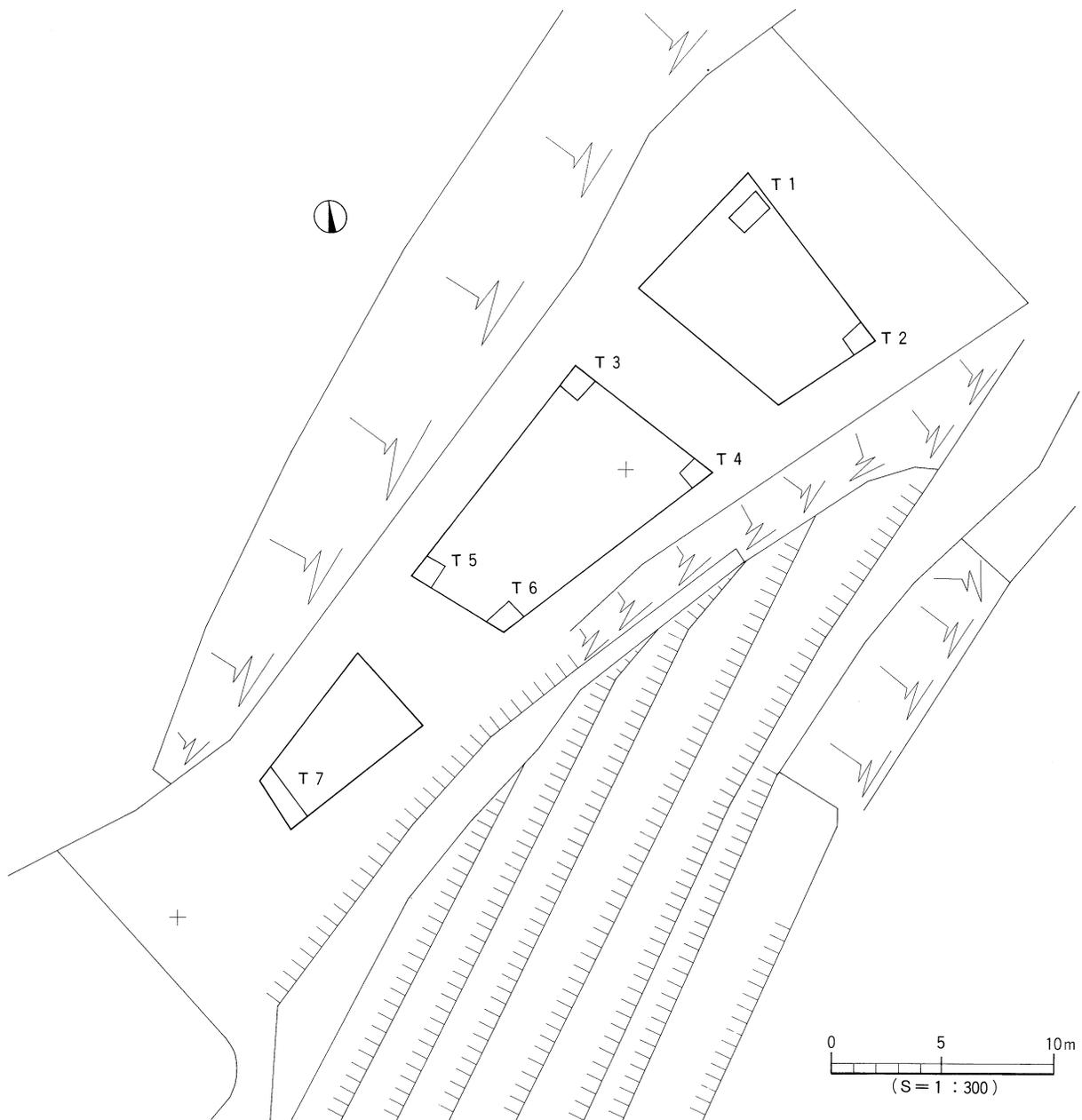
第8章

— 6区の調査 —

第8章 6区の調査

1. 調査の経緯

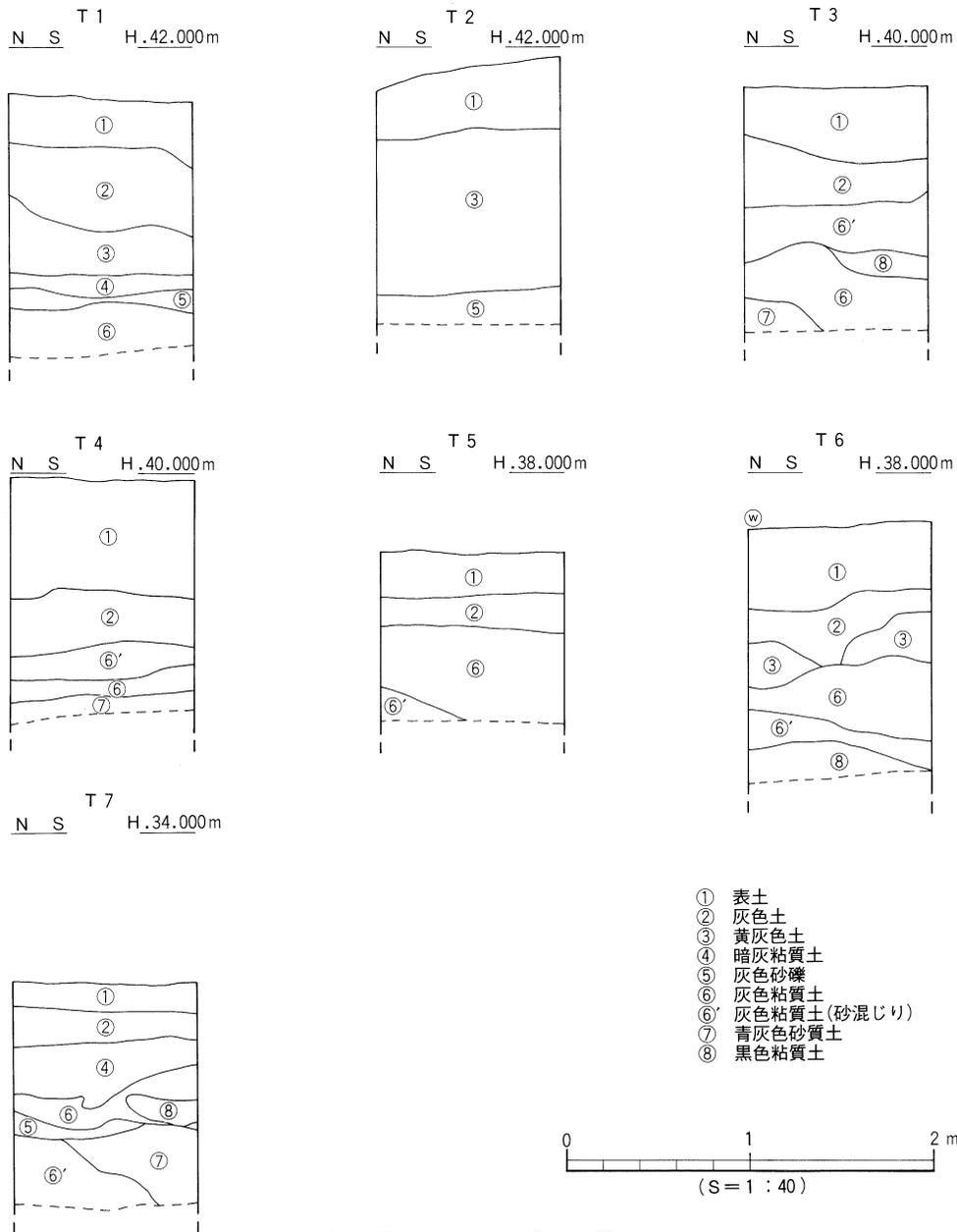
調査地は、大峰ヶ台西丘陵の北側裾部の1区と4B区の北側に位置する。調査区は急斜面と緩斜面があり、緩斜面を3区画に分けし調査区を設定した。調査前は果樹園であったため、水路が調査区を横切る。調査は、表土剥ぎを行い遺構検出を行うが遺構は検出されなかった。このため調査区の隅7ヶ所を深掘りし土層により遺構確認調査を行ったが遺構検出には至らなかった。



第105図 トレンチ位置図

2. 層位 (第106図)

土層は9層に分別できる。第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層黄灰色土、第Ⅳ層暗灰粘質土、第Ⅴ層灰色砂礫、第Ⅵ①層灰色粘質土、第Ⅵ②層灰色粘質土 (砂混じり)、第Ⅶ層青灰色砂質土、第Ⅷ層黒色粘質土である。



第106図 トレンチ土層柱状図

3. 小 結

本調査では、遺構は検出されなかった。土層の堆積状況より整地が行われており果樹園開墾以前の地形は谷部であったと考えられる。また、表採より須恵器を1点検出しており調査区上部には遺構の存在を示す資料である。

第9章 自然科学分析

1. 大池東古墳における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

〔1〕試料

調査地点は、1号墳、3号墳、5号墳の3地点である。試料は、1号墳で6点、3号墳で6点、5号墳で3点の計15点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

〔2〕分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1g に対して直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g 添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

〔3〕分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表33～36に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、シバ属

〔イネ科—タケ亜科〕

機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（お

もにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 1号墳(表34)

墳丘盛土(試料1~6)について分析を行った。その結果、地山直上の黒色土(試料6)ではネザサ節型が約24万個/gと極めて多量に検出され、メダケ節型、棒状珪酸体も多量に検出された。また、ウシクサ族型、クマザサ属型、ブナ科(シイ属)、クスノキ科なども検出された。盛土中の黒褐色土(試料3)や暗黄色土(試料1、2)でもおおむね同様の結果であり、ネザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出された。

2) 5号墳(表35)

墳丘盛土下部(試料14~16)について分析を行った。その結果、黒色サンプル2(試料15)ではネザサ節型が約18万個/gと極めて多量に検出され、棒状珪酸体も多量に検出された。また、ウシクサ族型、メダケ節型、ブナ科(シイ属)、クスノキ科なども検出された。その他の試料でも同様の分類群が検出されたが、密度は試料15と比較して大幅に低くなっている。

3) 3号墳(表36)

周溝内SK1から出土した土器(No.139、143、144、145)内土壌、SK1の埋土(試料7)、周溝埋土(試料10)について分析を行った。その結果、全体的にネザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族型、メダケ節型、棒状珪酸体、ブナ科(シイ属)なども検出された。また、周溝埋土(試料10)を除く各試料からはイネが検出された。イネの密度はいずれも1,000個/g前後と低い値である。

〔4〕考察

1号墳の地山直上の黒色土および5号墳の墳丘盛土下部の黒色サンプルの堆積当時は、ネザサ節が繁茂してメダケ節(もしくはヤダケ属)なども見られるタケ亜科主体のイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科の照葉樹林が分布していたものと推定される。1号墳の盛土中の黒褐色土や暗黄色土についても、おおむね同様の状況であったものと考えられる。なお、植物珪酸体密度が極めて高いことから、ネザサ節などの茎葉が燃料など何らかの目的で集められていた可能性も考えられる。

3号墳の周溝内SK1の埋没当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で土坑や土器内にイネの植物珪酸体が混入したものと考えられる。当時はネザサ節を主体としてメダケ節(もしくはヤダケ属)なども見られるイネ科植生であったと考えられ、周辺にはシイ属などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

〔文献〕

杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, P.70-83.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, P.15-29.

植物珪酸体分析

表33 大峰ヶ台遺跡9次調査における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群/試料	大池東1号墳						大池東5号墳				大池東3号墳					
	1	2	3	4	5	6	14	15	16	1	4	5	6	7	10	
イネ科																
イネ																
キビ族型																
ジュズダマ属						7										
ススキ属型																
ウシタマシ族型	8	28	53	23	8	15		7		30	7	7	14	14	7	
シバ属																
タケ亜科																
メダケ節型	23	35	90	23	23	314				45	65	7	120	40	50	
ネザサ節型	714	838	1259	75	206	2378				204	348	183	190	161	265	
クマザサ属型	30	35	15	8	15	36					15		14	13		
ミヤコザサ節型																
未分類等	120	253	392	151	283	161				15	7	35	77	7	7	
その他のイネ科																
表皮毛起源		42		8	8	7				8	15		7	13		
棒状珪酸体	203	725	897	415	566	693				83	80	85	155	47	29	
基部起源																
未分類等																
樹木起源	421	782	807	483	619	722				468	457	289	492	369	394	
ゾナ科 (シイ属)																
クヌキ科	38	106	68	60	31	22				23	123	49	42	27	36	
その他	38	35	75	53	107	29				8	7					
(海綿骨針)	15	7	68	15	38	7				45	36	14	49	27	7	
植物珪酸体総数	1609	2887	3754	1290	1904	4392				935	1175	698	1202	764	816	
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)																
イネ			0.28							0.22	0.21	0.41	0.41	0.20		
ススキ属型															0.09	
メダケ節型	0.26	0.41	1.05	0.26	0.27	3.64				0.53	0.76	0.08	1.39	0.47	0.58	
ネザサ節型	3.43	4.02	6.04	0.36	0.99	11.42				0.98	1.67	0.88	0.91	0.77	1.27	
クマザサ属型	0.23	0.26	0.11	0.06	0.11	0.27					0.11		0.11	0.10		
ミヤコザサ節型			0.02													
タケ亜科の比率 (%)																
メダケ節型	7	9	15	39	19	24				35	30	9	58	35	31	
ネザサ節型	88	86	84	53	72	74				65	66	91	38	58	69	
クマザサ属型	6	6	2	8	8	2					4		4	8		
ミヤコザサ節型			0													

自然科学分析

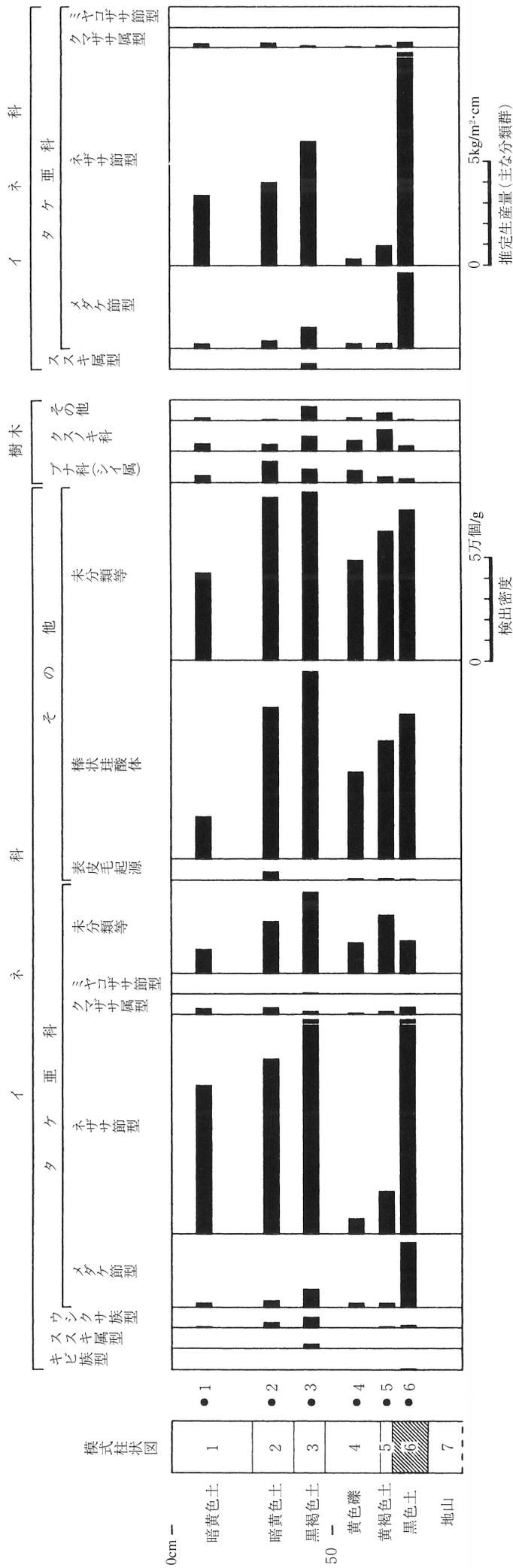


表34 大池東1号墳 東西主軸東側における植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析

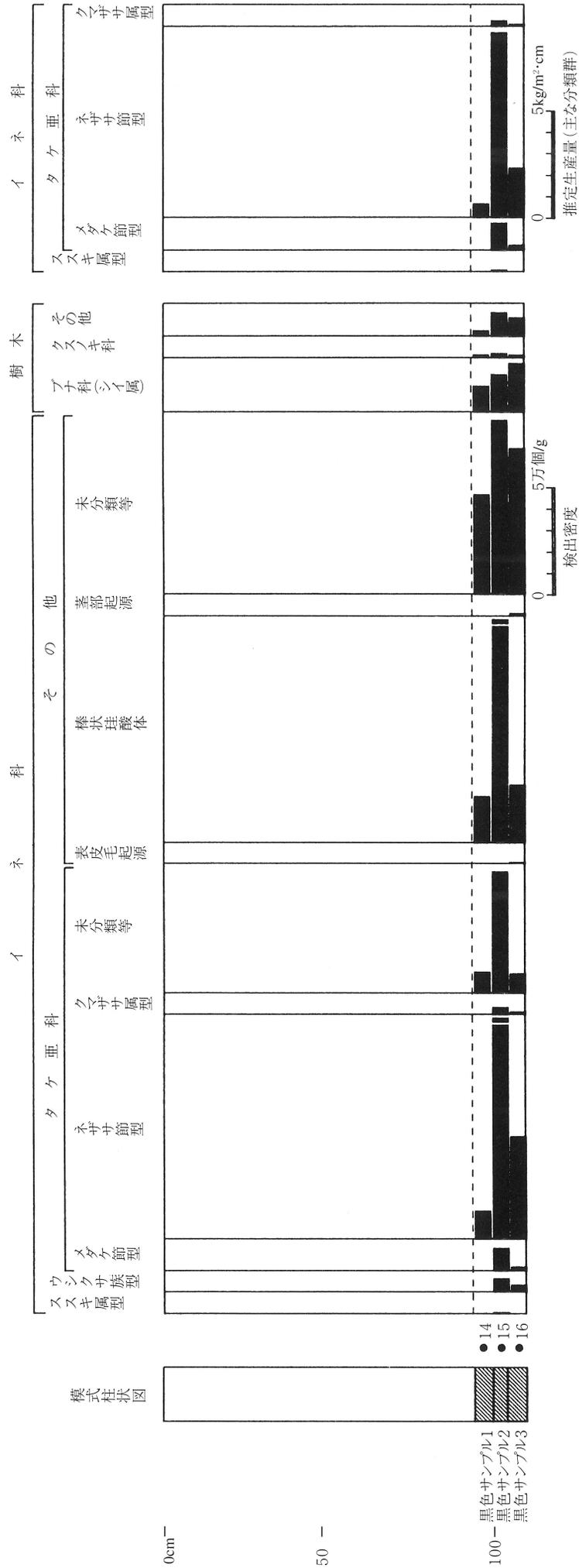
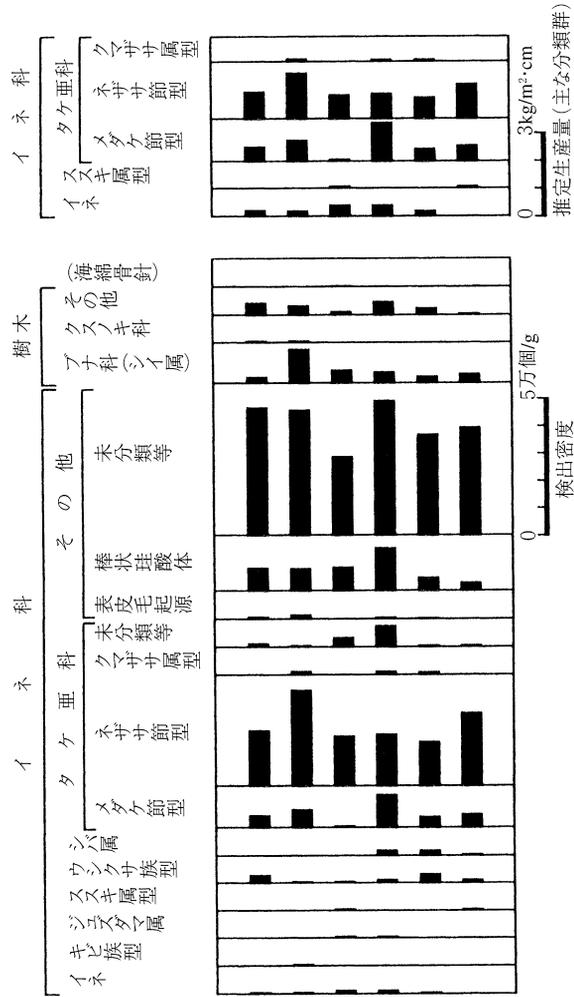


表35 大池東5号墳 東西主軸南壁における植物珪酸体分析結果



- 1 高坏内(土器No.139)
- 4 高坏蓋内(土器No.143)
- 5 高坏内(土器No.144)
- 6 高坏内(土器No.145)
- 7 土杭SK1内埋土
- 10 周溝埋土

表36 大池東3号墳 周溝内SK1における植物珪酸体分析結果

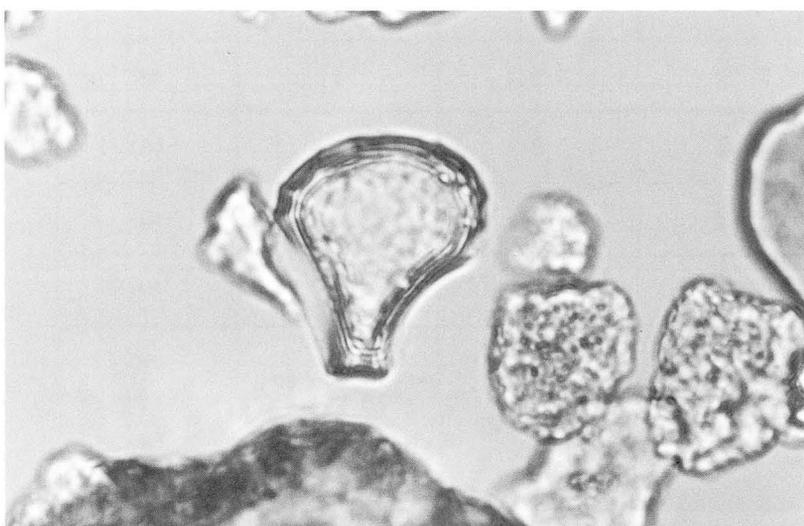
植物珪酸体分析

表37 植物珪酸体の顕微鏡写真

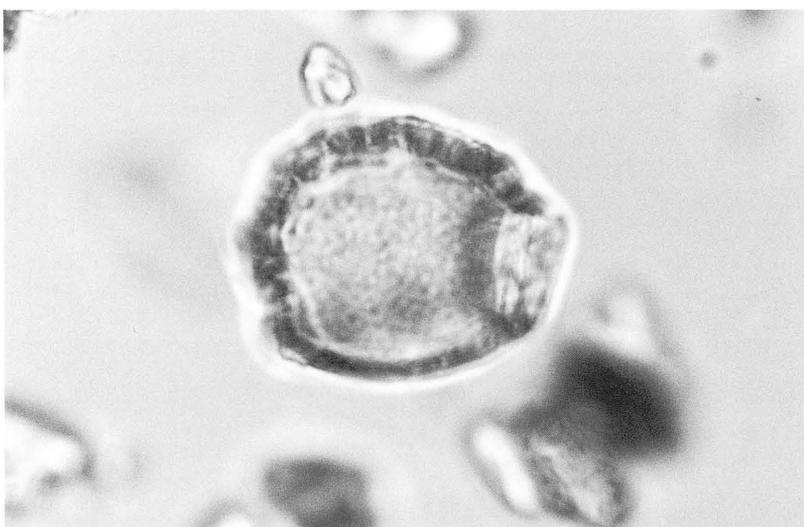
No.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イ ネ	3号墳	6	400
2	イ ネ	3号墳	5	400
3	ジュズダマ属	3号墳	5	400
4	ウシクサ族型	1号墳	3	400
5	シ バ 属	3号墳	6	400
6	メダケ節型	3号墳	4	400
7	ネザサ節型	1号墳	1	400
8	ネザサ節型	1号墳	2	400
9	クマザサ属型	1号墳	2	400
10	ミヤコザサ節型	1号墳	3	400
11	ブナ科(シイ属)	5号墳	14	400
12	クスノキ科	1号墳	1	400



1. イネ



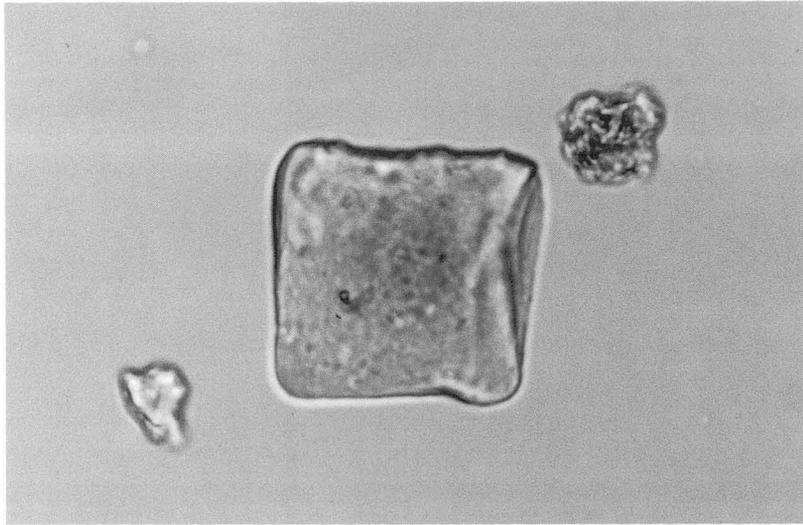
2. イネ



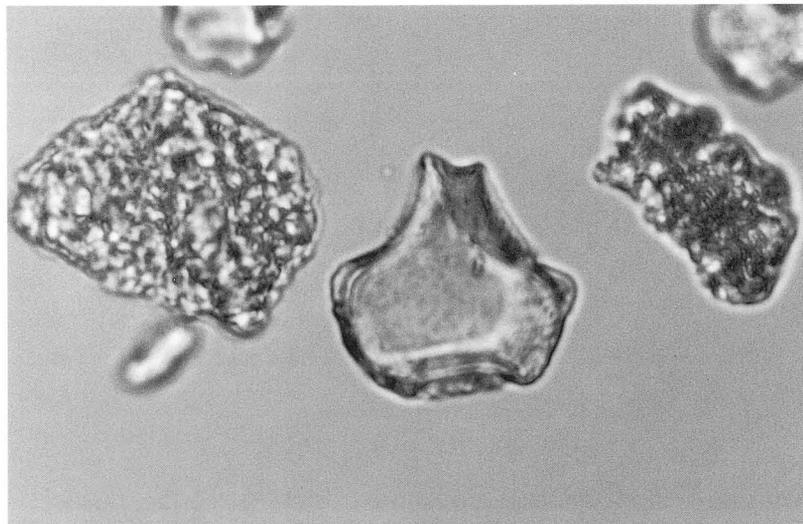
3. ジュズダマ属

第107図 植物珪酸体の顕微鏡写真(1)

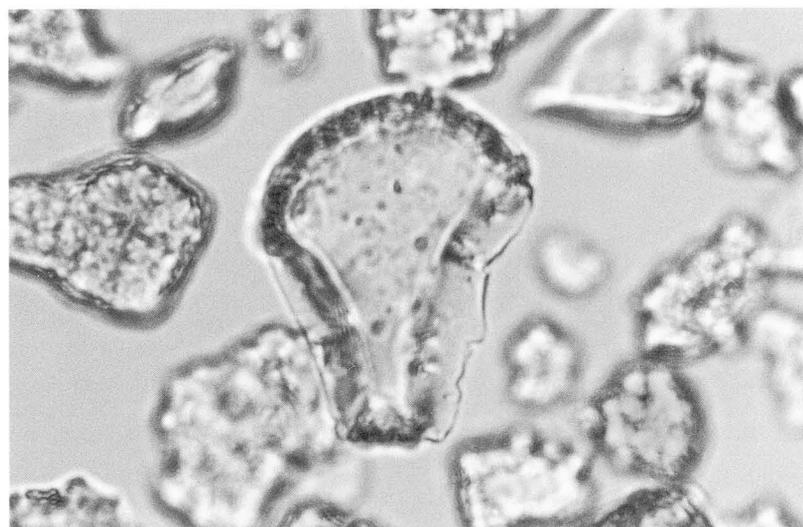
植物珪酸体分析



4. ウシクサ族型

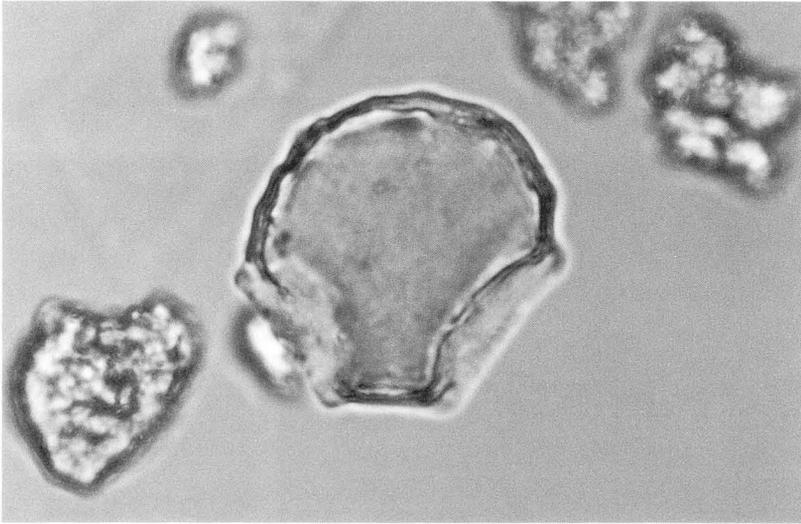


5. シバ属

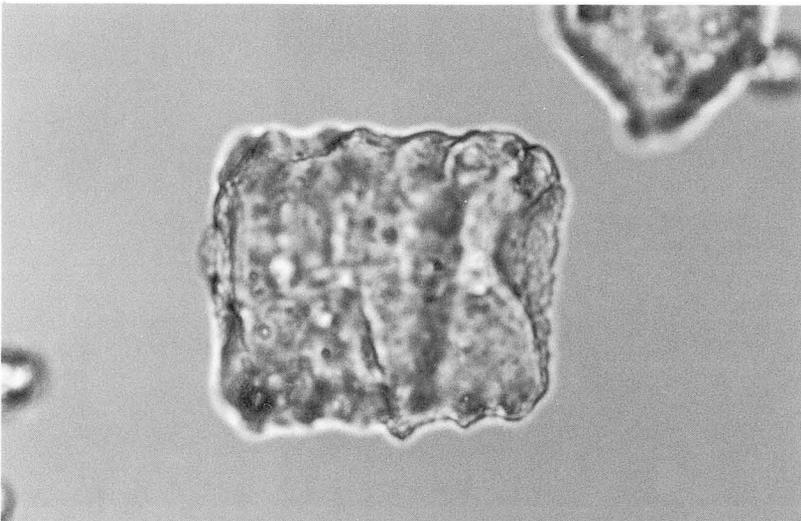


6. メダケ節型

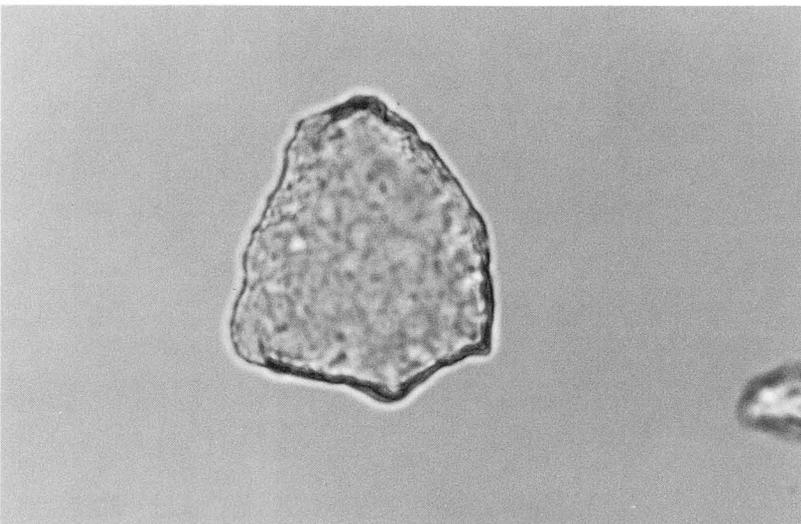
第108図 植物珪酸体の顕微鏡写真(2)



7. ネザサ節型



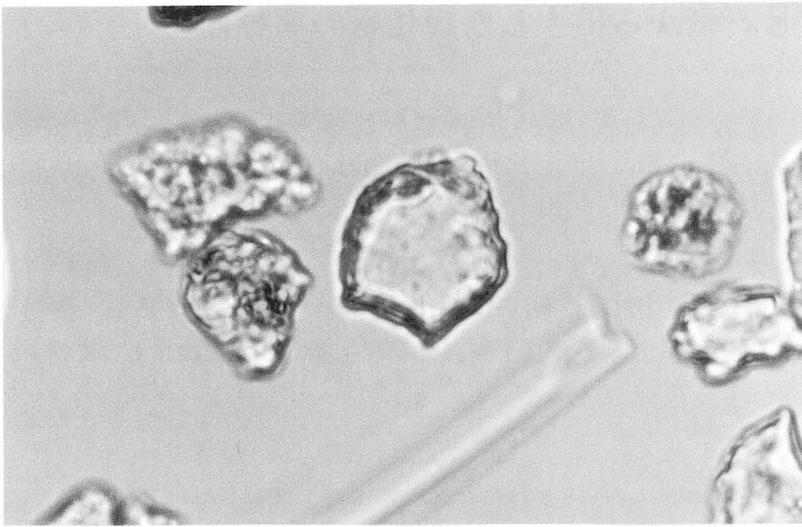
8. ネザサ節型



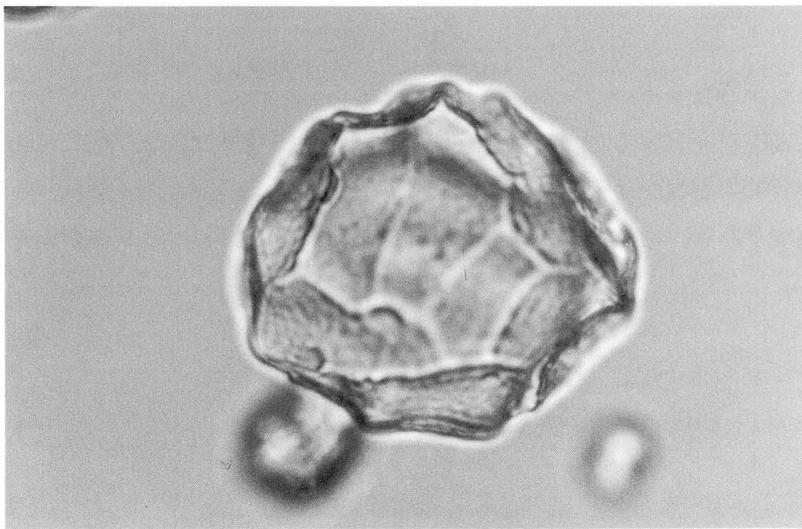
9. クマザサ属型

第109図 植物珪酸体の顕微鏡写真(3)

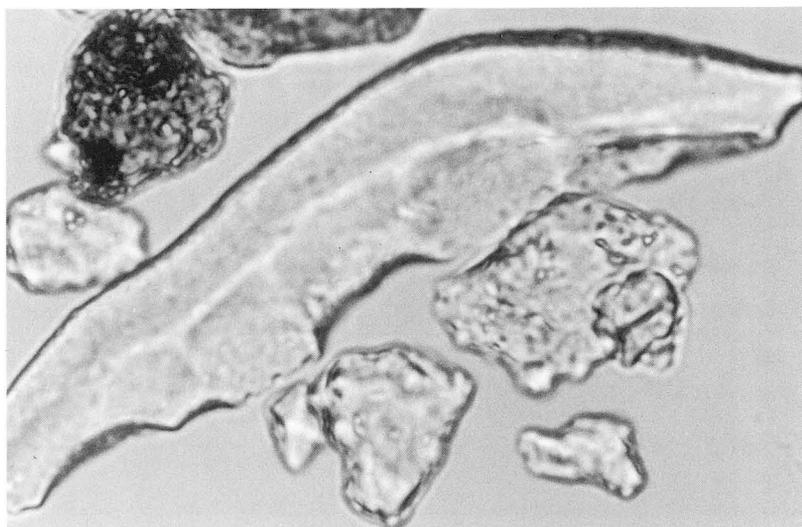
植物珪酸体分析



10. ミヤコザサ節型



11. ブナ科 (シイ属)



12. クスノキ科

第110図 植物珪酸体の顕微鏡写真(4)

2. 大池東1号墳2号石室から出土した炭化材の樹種同定

〔1〕試料

試料は、大池東1号墳の2号石室から出土した炭化材（試料No.11）である。

〔2〕方法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

〔3〕結果

分析の結果、試料No.11は針葉樹 conifer と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

針葉樹 conifer

横断面：仮道管と放射柔細胞が存在する。

放射断面：仮道管と放射柔細胞が存在するが、放射柔細胞の分野壁孔の型及び数は不明瞭である。

接線断面：仮道管と単列の放射柔細胞が存在する。

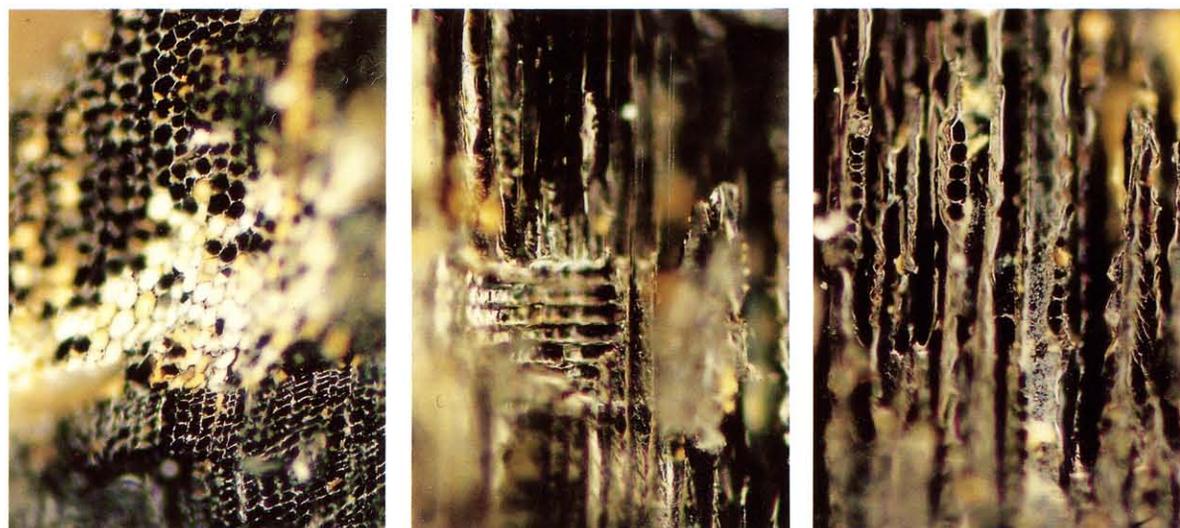
以上の形質より針葉樹に同定される。本試料は非常に小片であり、広範囲における観察が困難なため、針葉樹の同定にとどめた。

〔文献〕

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，P.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，P.49-100.

第111図 大池東1号墳2号石室出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ————— :0.2mm 放射断面 ————— :0.1mm 接線断面 ————— :0.1mm
No.11（2号石室木棺） 針葉樹

3. 大池東1号墳における放射性炭素年代測定結果

〔1〕 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.11	1号墳2号石室内	炭化材 (針葉樹)	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法

〔2〕 測定結果

試料名	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代 交点 (1 σ)	測定No. (Beta-)
No.11	1760 \pm 50	-25.3	1760 \pm 50	AD260 (AD235~370)	108061

1) 14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。14Cの半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比(13C/12C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正14C年代値

$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正14C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ は補正14C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ 値が表記される場合もある。

4. 大池東1、2号墳出土耳環の保存処理および自然科学的調査 元興寺文化財研究所

〔1〕はじめに

（財）松山市埋蔵文化財センターより平成7年度受託事業として大池東1号墳出土の耳環11点、2号墳出土耳環3点、合計14点をお預かりし、保存処理および自然科学的調査を実施した。その結果について報告する。

大池東1号墳は大峰ヶ台丘陵の西側斜面に築造された横穴式石室を有する円墳である。遺物としては耳環のほかに須恵器、土師器、鉄器、玉類が出土しており、7世紀前半に比定される。耳環No.1～9は石室内、No.10は埋土内、No.11は墳丘盛土内よりそれぞれ出土している。またその後の調査で、隣接する2号墳より耳環3点が出土した。

〔2〕保存処理について

金属製遺物は土中に埋まっている間に腐食が進行し、発掘時には錆の塊と化している。発掘によって新しい環境下に置かれるとさらに錆が進行する。耳環の場合、表面に金や銀等の装飾が施されているが、これらを被うように芯材から発生した緑青が付着している。あるいは錆の進行が著しく、遺物本来の形状をとどめていないものもある。このような状態では、遺物の観察が不可能である。保存処理は、化学的見地および考古学的見地より上記のような状態の遺物を本来の形状に復原する事を目的としている。

保存処理は(1)～(8)の工程に従って進めた。以下それぞれの工程ごとに記す。

(1) 保存処理前の調査

保存処理を実施する前に、処理前の状態の記録写真撮影およびX線写真撮影を行い、腐食の状態等を確認した。法量および肉眼観察による結果は表38に記す。金属の成分分析および細部の顕微鏡写真撮影は第1次クリーニング終了後に行った。

(2) クリーニング

エチルアルコールとイオン交換水の混合液とやわらかい筆を用いて表面に付着している土や軟らかい錆を除去した。硬い錆は無理に除去せず樹脂含浸後に行った。

(3) 破片の接合

シアノアクリレート系瞬間接着剤（商品名：Three Bond No.1781）を用いて破片や表面層の箔を接合した。

(4) 防錆処置

ベンゾトリアゾール（1%アルコール溶液）の中に遺物を浸漬し、さらに減圧して錆の進行を抑える処置をとった。

(5) 樹脂含浸（遺物の強化）

腐食により脆弱化した遺物にアクリル樹脂（商品名：Vフロンー液マイルド25%溶液）を減圧下で合計3回含浸し、遺物本体の強化を図った。

(6) 樹脂塗布

含浸に用いたアクリル樹脂を遺物表面に塗布して外気との遮断を図った。樹脂塗布は合計3回行った。

耳環分析

(7) 復原

樹脂塗布が終了した後、錆により亀裂を生じている箇所や脆弱な部分にペースト状のエポキシ樹脂（商品名：アラルダイトSV-426）を充填し、充分硬化させた後に精密グラインダー（商品名：ミニター）を用いて形状を整えた。さらにアクリル絵の具を用いて周囲の色調に合わせて彩色を施した。

(8) 保存処理後の調査

上記(2)～(7)の保存処理が完了した後、遺物および保存処理の点検を行うと共に保存処理後の写真撮影を行った。

〔3〕自然科学的調査について

今回の調査には、エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコー電子工業(株)製：SEA-5200以下、XRFと記す）および実体顕微鏡（株オリンパス製：SZH-IILD）を用いた。XRFは遺物（試料）の微小領域にX線を照射し、試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する分析方法で、非破壊で調査できるため文化財調査に広く用いられている。分析条件は、大気条件下：管電圧50KVとし、あわせて簡易定量もおこなった。

〔4〕分析箇所および結果について

まず総体的な耳環の残存状況について記す。残存状態の良好な耳環は、部分的に表面層が変色、剥落しているが錆による崩壊や膨張は認められず、製作当時の状態をよくとどめていた。残存状態の悪いものは、表面層が剥落して芯部のみが残存していたり、欠損により本来の形状が把握できない状態であった。

〈1号墳出土耳環（No.1～11）〉

No. 1：やや大振りの耳環である。大部分の表面層は剥落しており内部の芯が露呈している。接面（耳環と耳が接する部分。小口面）も表面層が剥落し芯のみが残存している。表面層からはAg（銀）、Cu（銅）が、また微量であるがAs（砒素）が検出された。Fe（鉄）は土壌成分に由来するものと考えられる。芯部からはCuが検出された。Cuの純度は非常に高い。

No. 2：中空（芯部の無いもの）の耳環で、部分的に表面層が欠損しており内部および断面が観察できる。断面観察よりこの耳環は、筒状の本体の上に表面層を構成する薄い板をかぶせて製作されたものと考えられる。筒状の本体からは純度の高いCuが検出された。また表面層は分析値より銀板であると推定される。表面層が剥離して裏面が露呈している箇所からはAg、Cu、Hgが検出され、Hgの検出量が他の部分に比して高い。Hgが板と本体を接合する接着剤として用いられた可能性もある。また埋納環境に起因するものと考えられるが、裏表で表面層の色調が違っている。片面は金色～暗灰色を呈し、高純度のAgが検出された。また微量成分としてAu（金）、Cu、Fe、Hg、Asが検出された。もう一方の面についても同様の傾向が窺えたが、Au、Hgの検出量が若干低かった。

No. 3：中実の耳環で白みの強い金色を呈する。部分的に表面層が欠損し、芯部が露呈している。接面は表面層を構成する板の端を直角に折り曲げ、芯部を被うようにたたみこんで仕上げている。表面層からはAg、Au、Cu等が、芯部からはCu、Agの他にAsが検出された。Asの検出量が他に比してひじょうに高いが何に起因するものであるかは不明である。

No. 4：No. 3と同じく中実の耳環である。部分的に表面層が欠損している。表面層は金色を呈し、Ag、

Au 等が検出され、検出量より金銀合金であると推定される。芯部は純度の高い銅を用いている。

No. 5 : No. 3、4と同じく、中実で金色を呈する耳環である。接面の仕上げはNo. 3と同様である。表面層より Ag, Au 等が検出された。芯部からは純度の高い Cu が検出された。検出量、法量等から、No. 4 と対になると考えられる。

No. 6 : 銀色（部分的に金色が散見できる）を呈する中実の耳環である。部分的に表面層が剥離していたため、この部分は本体とは別に分析を行った。表面層および剥離した表面層の破片からは非常に純度の高い Ag が検出された。金色を呈する部分についても銀色部分と同じく、Ag の検出量が高かった。芯部は非常に純度の高い銅を用いている。剥離した表面層の断面等の観察より、銅芯の上に銀板をかぶせる方法で製作されている。

No. 7 : 表面層はほとんど欠損しており芯部が露呈している。ごくわずかであるが鍍の下に表面層が残存しており、Ag, Cu, Fe, Au, Hg, As 等が検出された。Fe, Au, Hg, As の検出量は微量である。芯部からは Cu, As が検出され、As の検出量が非常に高い（上記 6 元素の合計を 100 とした場合で 15 ~ 20% 程度）。

No. 8 : 銀色を呈する大振りの耳環で、部分的に表面層が欠損したり芯部より浮き上がっている。表面層および表面層の裏側（芯部より浮き上がった部分）では Ag, Au, Cu 等が検出された。芯部と中間層（芯部と表面の間の層）では Cu, As が検出され、この耳環においても As の検出量が高い（前出の方法で 6 ~ 19%）。No. 7 と分析値が近似していることから、対になる可能性がある。またこの耳環は、芯に銀板をかぶせて製作したと推定される。

No. 9 : 表面層の約 2/3 が欠損しており、表面が剥落し細くなった芯部が残存している。表面層からは Ag, Au, Cu が検出された。また芯部は非常に純度の高い銅を使用している。

No. 10 : 残存状況は比較的良好である。表面層は黒褐色の中に金色が散見できる。黒褐色部分は Ag の検出量が高く、金色を呈する部分では Au, Ag, Hg が検出された。芯部では Cu の検出量が高かった。分析値より、この耳環は銅芯に銀板をかぶせ、さらに鍍金を施して製作したものと考えられる。

No. 11 : 今回分析を行った耳環中で最も大きく重い。残存状況は良好であるが、表面層が欠損している。Ag, Au, Hg が検出され、水銀アマルガムによる鍍金が施されていると考えられる。

〈2号墳出土耳環 (No.12~14)〉

No. 12 : やや大振りの中空耳環である。一部で表面層が欠損し内部および断面が観察できる。表面層は暗紫色を呈し、クレーター状に腐食しているが、内部および断面で金属質の光沢を有する部分もある。表面層からは Ag, Hg が検出された。断面は 2 層に分かれており、上層では Ag, Hg が検出された。Hg の検出量がやや高く、表面層に近い値を示した。下層は Ag の純度が非常に高い。これらから推定して、この耳環は表面層に鍍銀を施している可能性がある。

No. 13 : 銀色を呈する耳環で、部分的に表面層が欠損している。表面層と芯部の間に中間層を有する。接面はNo. 3と同じ方法で仕上げている。表面層からは Ag, Au, Hg が検出され、製作当時は鍍金が施されていた可能性がある。芯部は銅芯で As の検出量が高い (No. 7、8と同じ方法で約 13% を測る)。

No. 14 : No. 13と同じく銀色を呈する耳環で、中間層を有する。表面層が欠損したり芯部から浮き上がっている部分が多い。芯部で As の検出量が高く、形状、分析値より推定してNo. 13と対になると考えられる。

耳環分析

表38 蛍光X線分析表(1)

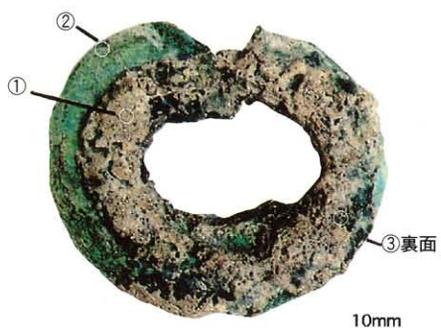
No	報告書遺物No	縦径(mm)	横径(mm)	芯径(mm)	重量(g)	備考
1	27	—	—	9.7	16.7	
2	31	15.0	16.7	7.5	4.0	中空
3	33	11.6	13.1	6.1	4.9	
4	34	12.0	13.1	6.9	5.0	
5	35	12.0	13.0	6.6	5.6	
6	32	13.5	15.5	5.8	6.6	
7	28	—	—	—	6.0	表面層が剥落
8	29	18.5	20.7	7.3	11.3	
9	30	—	—	6.0	3.8	
10	36	15.1	18.6	6.4	8.2	
11	79	21.5	25.0	8.8	24.7	
12	95	21.0	22.0	8.0	4.8	中空
13	96	—	21.0	8.0	15.6	
14	97	19.0	22.0	7.9	12.8	

自然科学分析

表39 荧光X線分析表(2)

No.	Au	Ag	Cu	Fe	Hg	As
1-1	—	***	**	*	—	—
1-1	—	**	***	*	—	—
1-2	—	*	***	**	—	—
1-3	—	*	***	**	—	—
2-1	*	***	*	—	—	—
2-2	*	***	**	—	—	—
2-3	*	***	**	—	*	—
2-4	*	**	***	—	—	—
2-4'	—	**	***	—	—	*
2-5	*	***	*	**	*	*
3-1	**	***	*	—	—	—
3-2	*	*	***	*	—	**
3-3	**	**	***	—	*	—
4-1	**	***	**	—	*	—
4-2	**	*	***	—	—	—
4-3	**	*	***	—	—	—
4-4	*	**	***	—	—	—
5-1	**	***	**	—	*	—
5-2	*	**	***	—	—	—
6-1	*	***	*	—	—	—
6-2	—	*	***	—	—	—
6-3	*	***	**	—	—	—
6-4	**	***	*	—	—	—
7-1	*	***	**	*	*	—
7-2	*	*	***	*	—	**
7-3	*	*	***	—	—	**
8-1	**	***	**	—	*	—
8-2	—	***	**	—	*	—
8-3	*	**	***	*	—	**
8-4	*	*	***	*	—	**
8-5	**	***	*	*	*	—
9-1	*	***	*	—	*	—
9-2	*	***	**	—	—	—
9-3	—	—	***	*	—	—
10-1	*	***	**	*	—	—
10-2	**	**	—	—	*	—
10-3	*	**	***	*	—	—
11-1	*	***	**	—	—	—
11-1'	**	***	*	—	*	—
11-2	—	**	***	*	—	—
12-1	—	***	*	—	**	—
12-2	—	***	—	*	**	—
12-3	—	***	—	*	**	—
12-4	*	***	**	—	**	—
13-1	**	***	*	**	*	*
13-2	**	***	**	*	*	—
13-3	—	*	***	—	*	**
14-1	**	***	**	—	*	—
14-2	**	***	**	*	—	—
14-3'	—	*	***	*	—	**
14-4	*	**	***	*	—	**

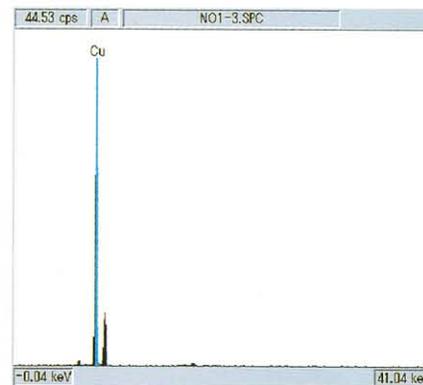
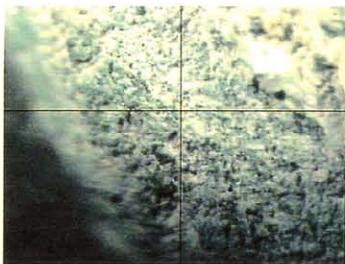
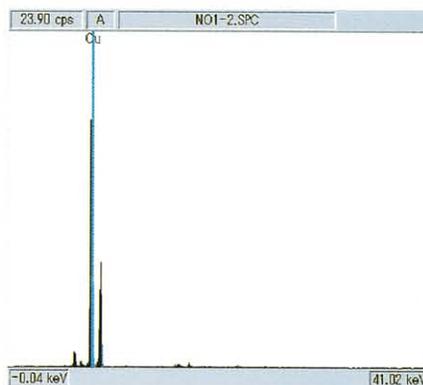
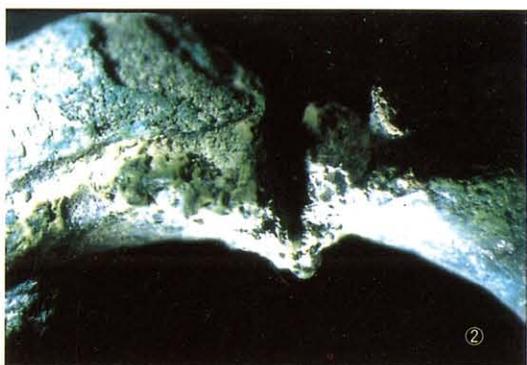
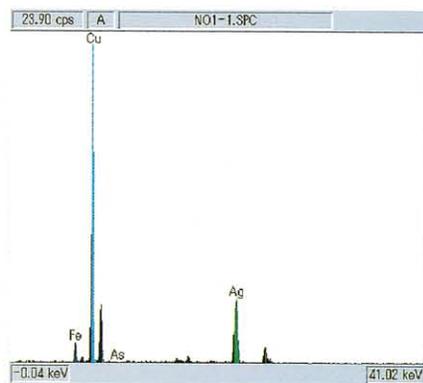
耳環分析



処理前 1

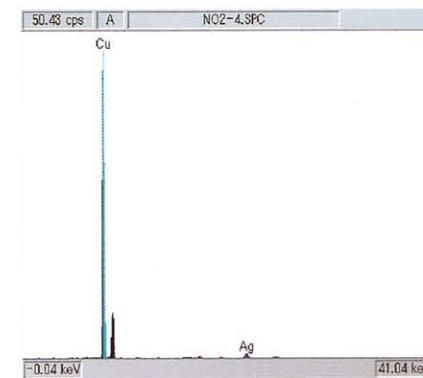
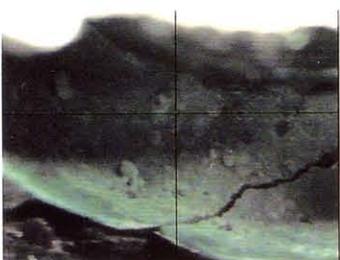
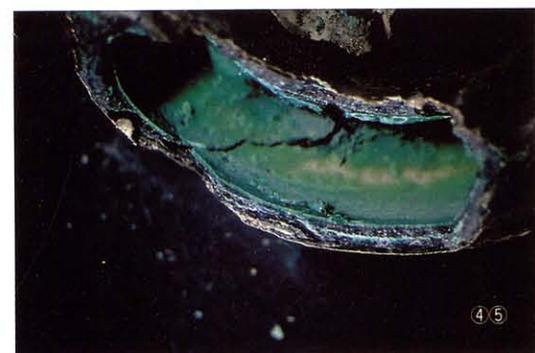
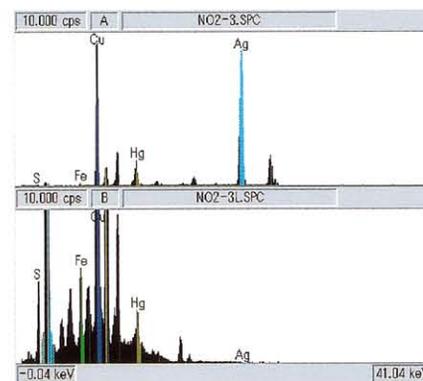
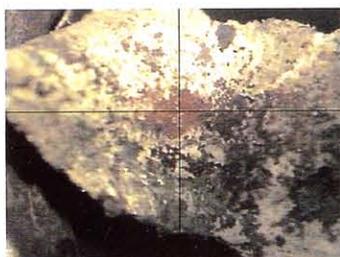
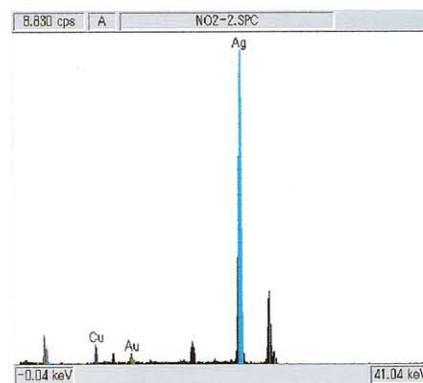
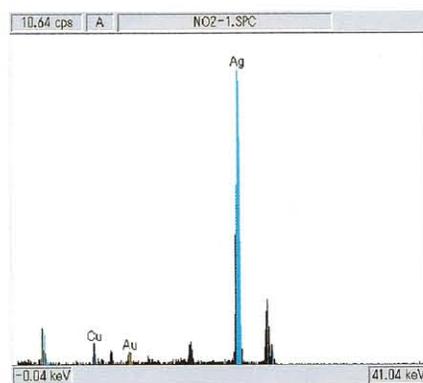
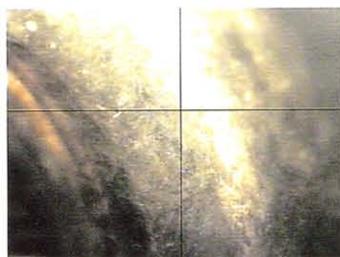
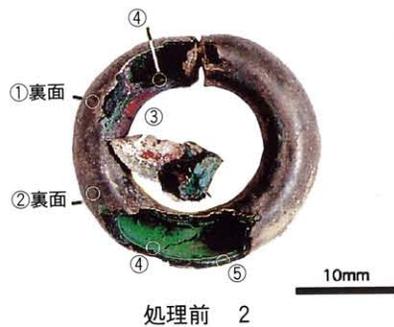


処理後 1



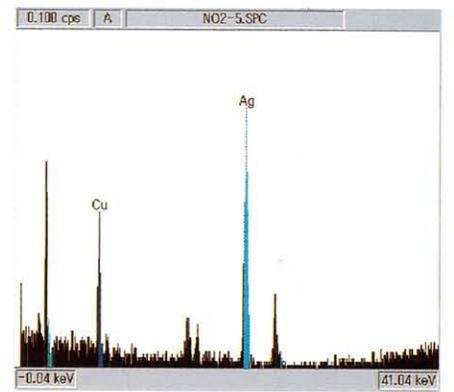
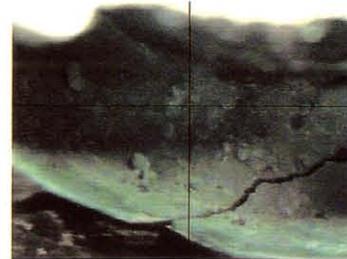
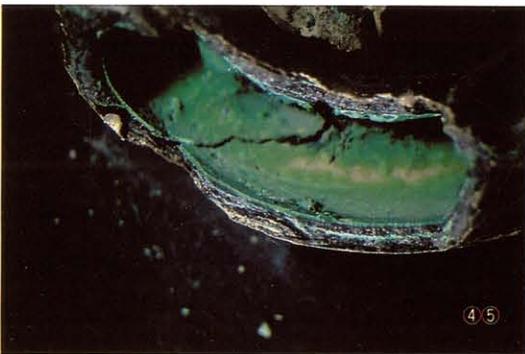
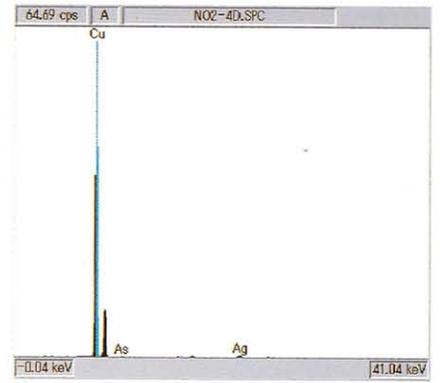
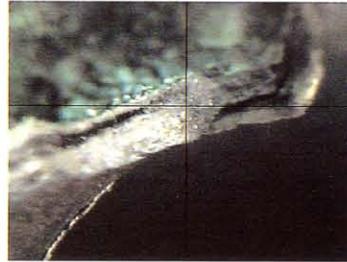
第112図 耳環顕微鏡写真 (1)

自然科学分析

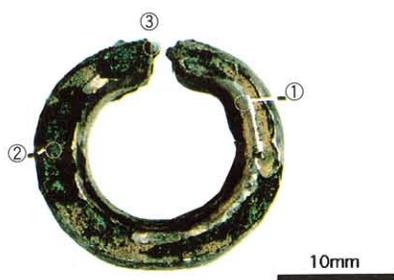


第113图 耳環顕微鏡写真(2)

耳環分析



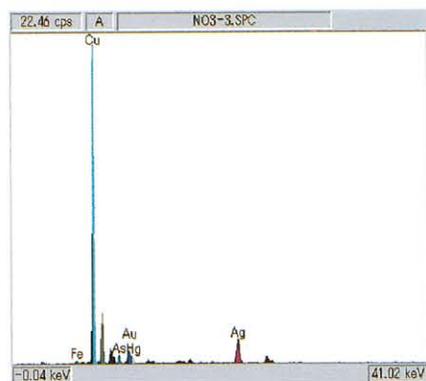
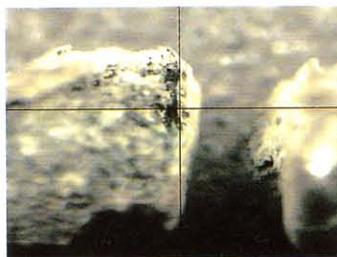
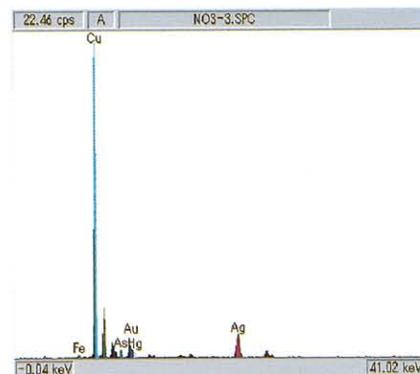
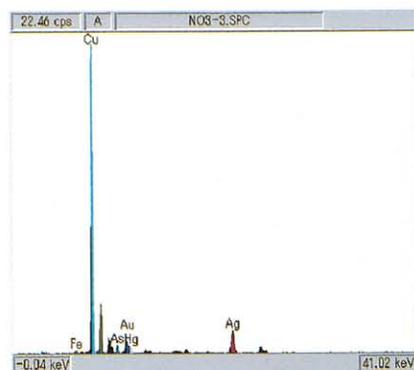
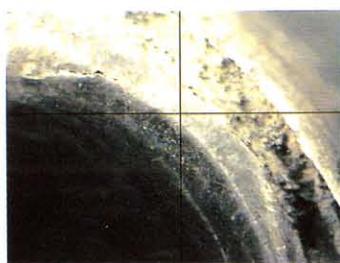
第114図 耳環顕微鏡写真(3)



处理前 3



处理後 3



第115图 耳環顕微鏡写真 (4)

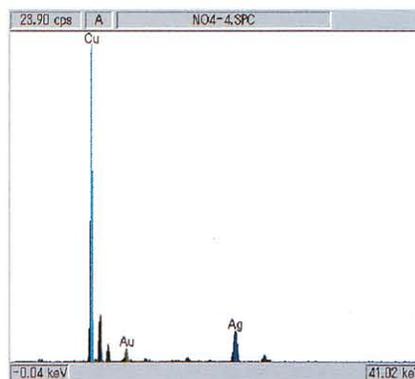
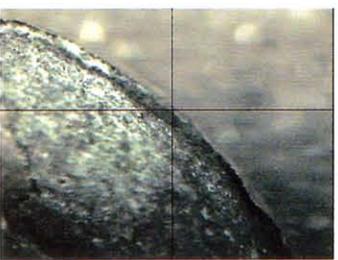
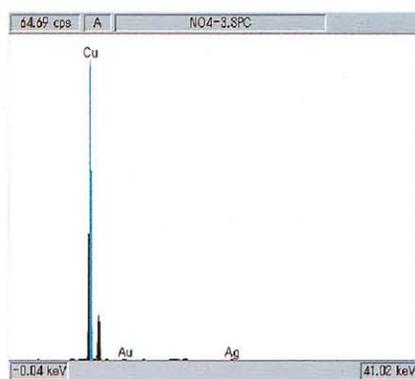
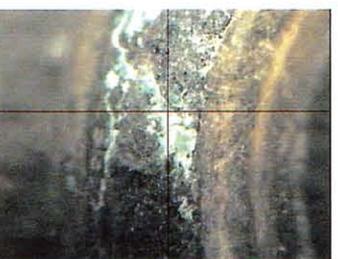
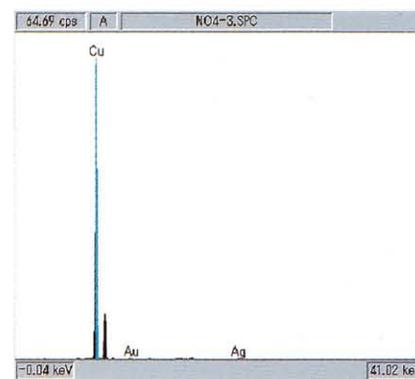
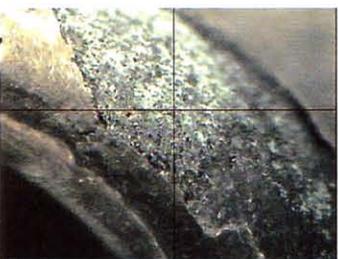
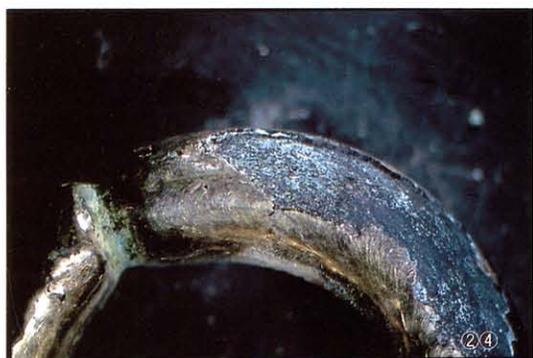
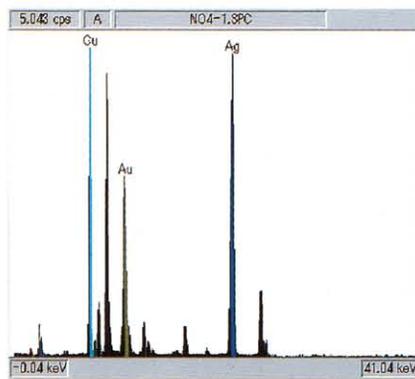
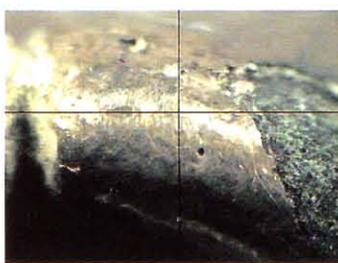
耳環分析



处理前 4



处理后 4



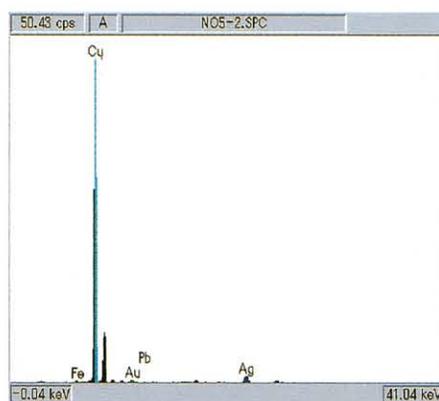
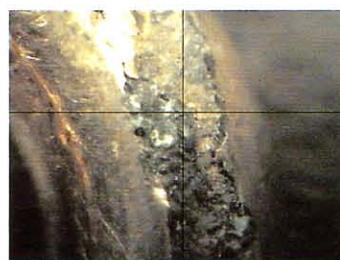
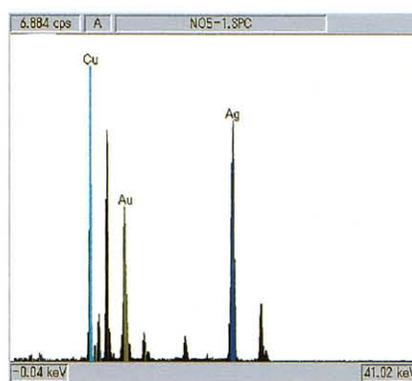
第116图 耳環顕微鏡写真(5)



处理前 5



处理後 5



第117图 耳環顕微鏡写真(6)

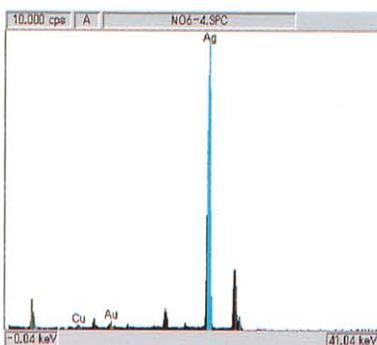
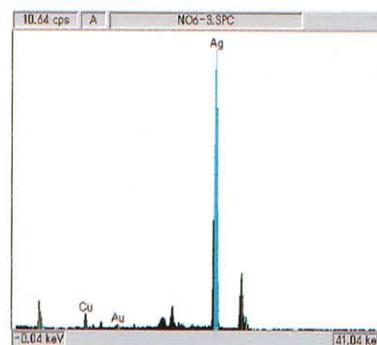
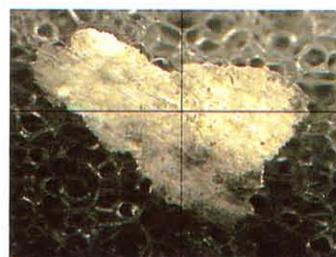
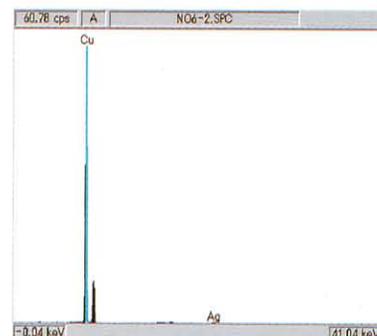
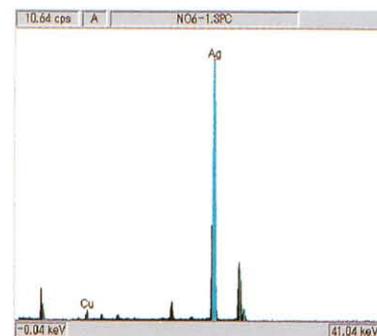
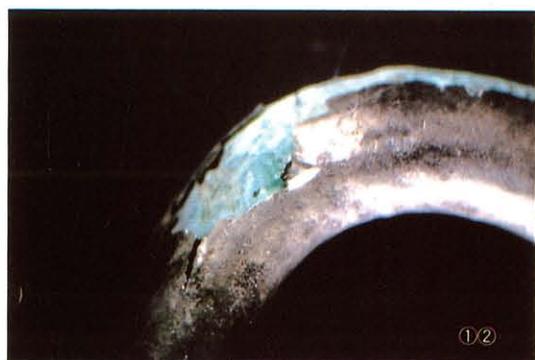
耳環分析



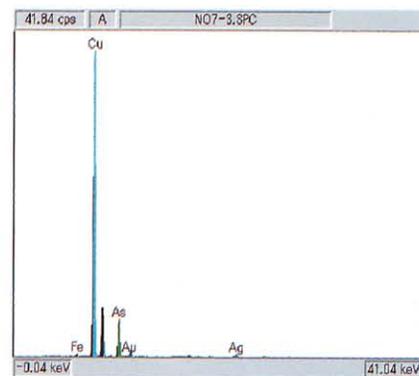
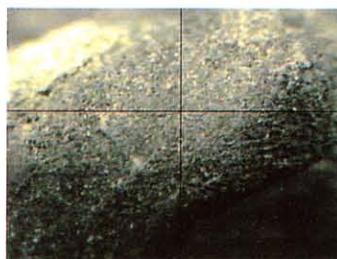
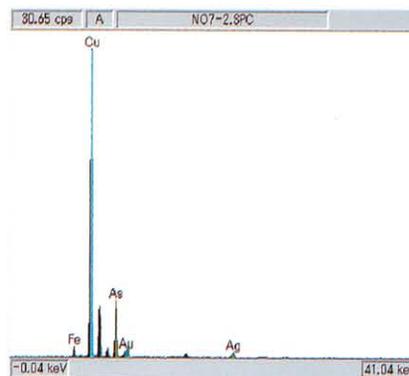
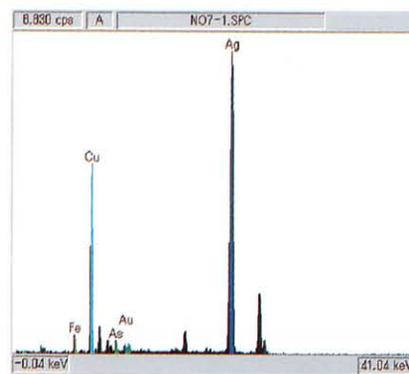
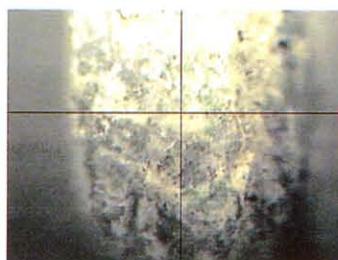
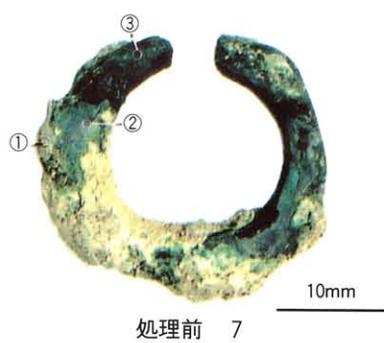
処理前 6



処理後 6

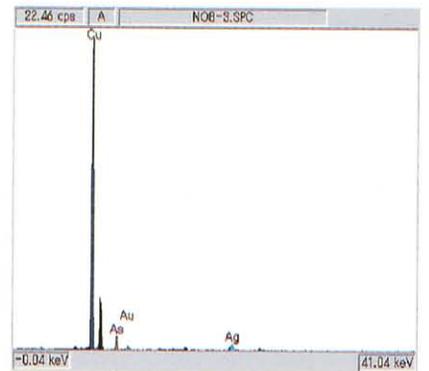
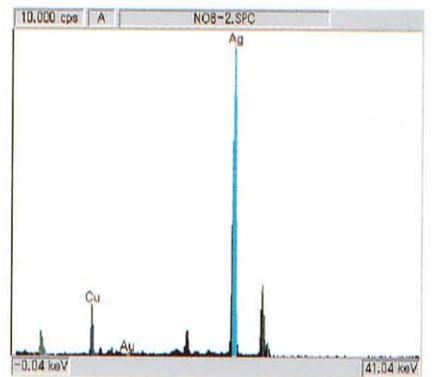
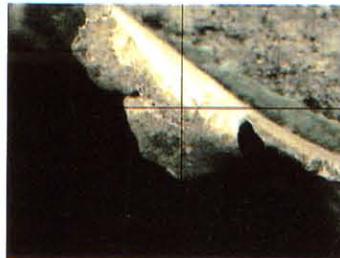
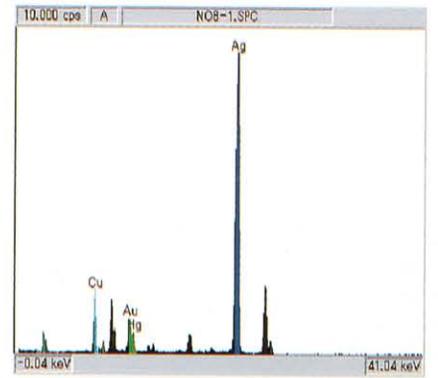
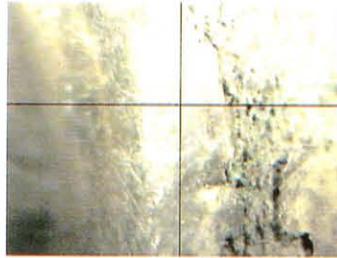
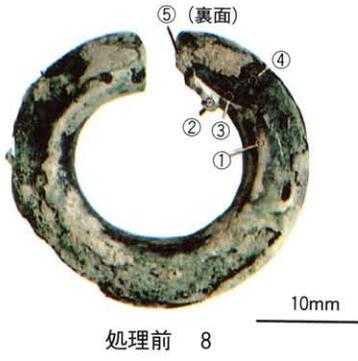


第118図 耳環顕微鏡写真 (7)



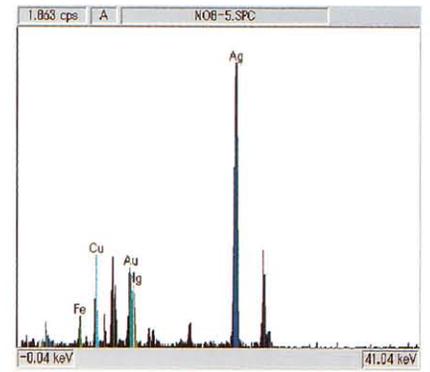
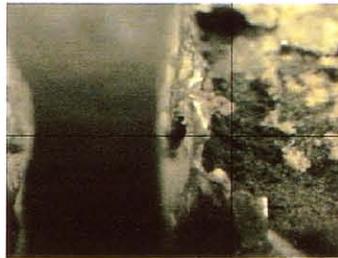
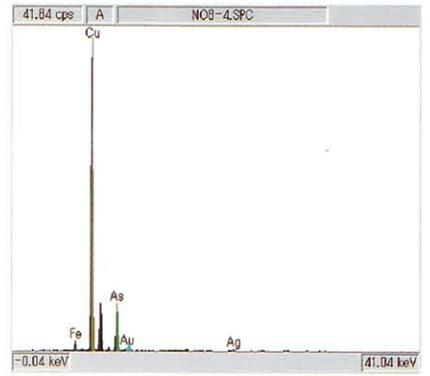
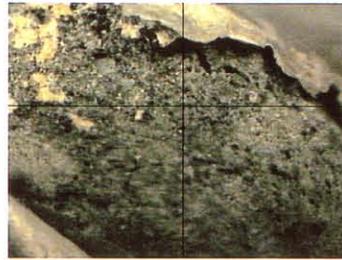
第119图 耳環顕微鏡写真 (8)

耳環分析



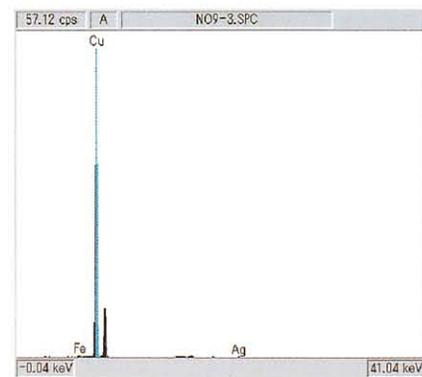
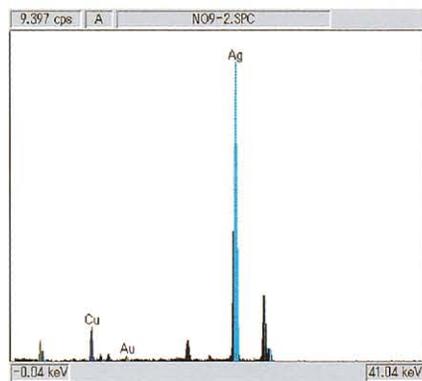
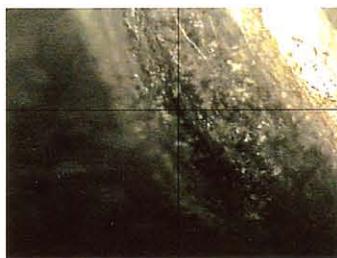
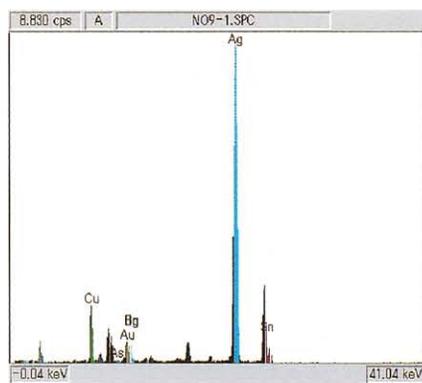
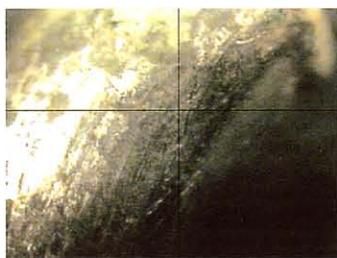
第120図 耳環顕微鏡写真 (9)

自然科学分析

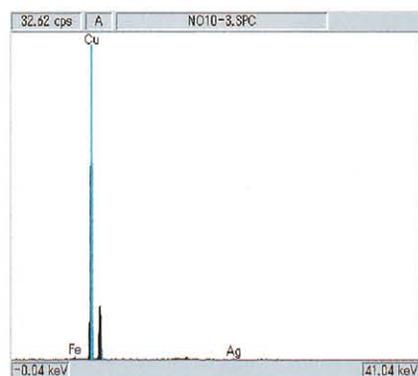
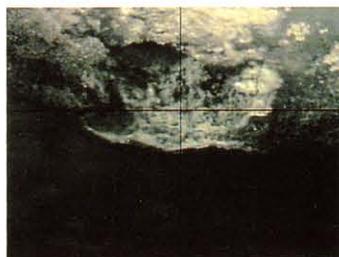
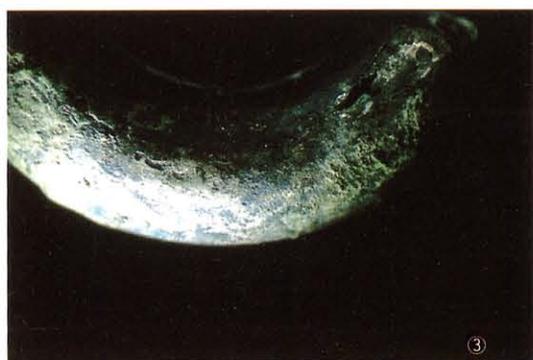
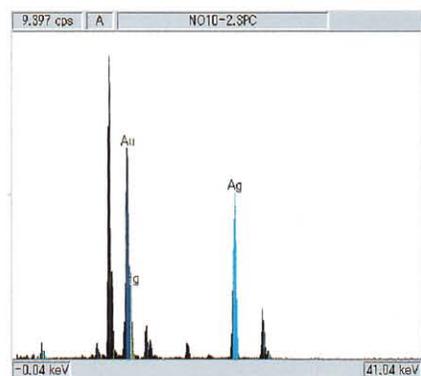
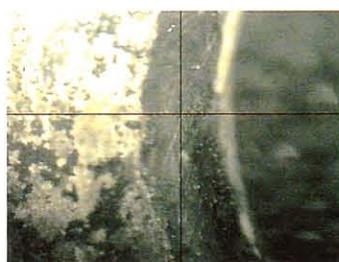
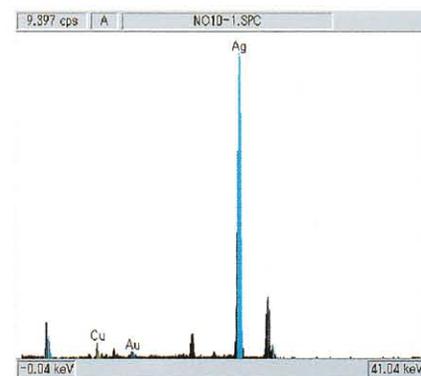


第121图 耳環頭微鏡写真 (10)

耳環分析

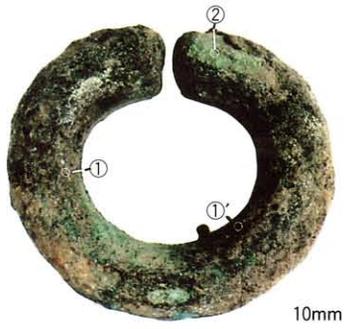


第122図 耳環顕微鏡写真 (11)



第123图 耳環顕微鏡写真 (12)

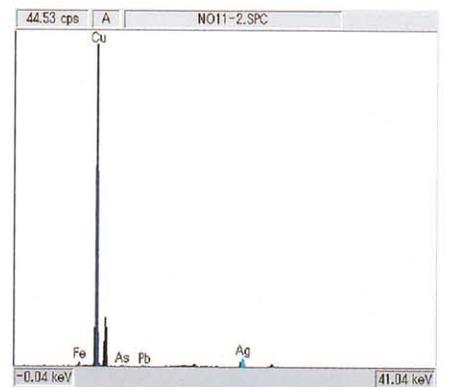
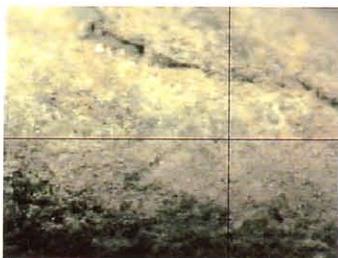
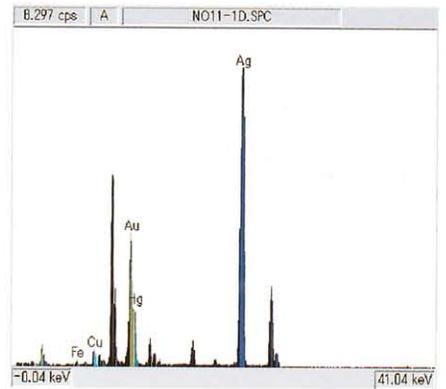
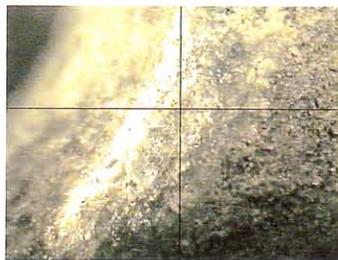
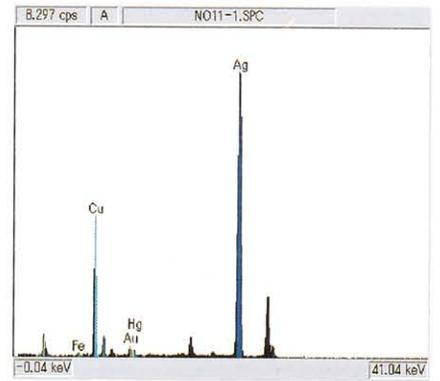
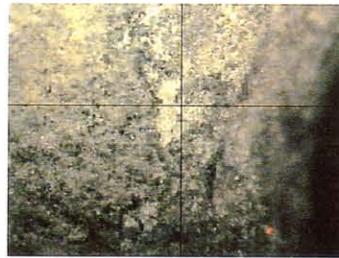
耳環分析



処理前 11



処理後 11



第124図 耳環顕微鏡写真 (13)

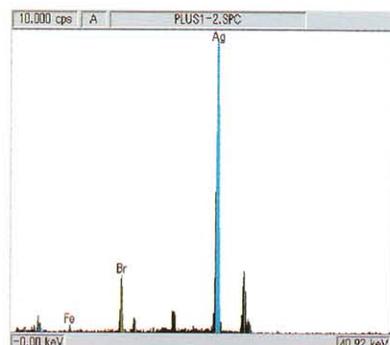
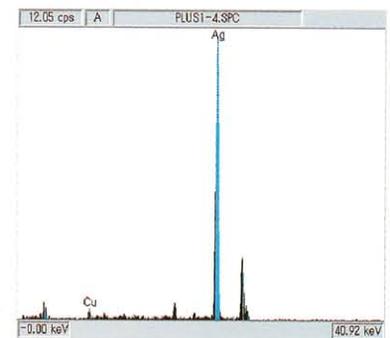
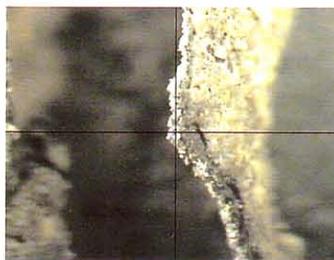
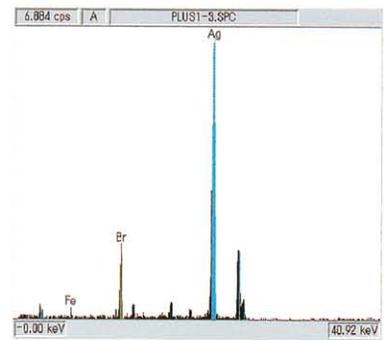
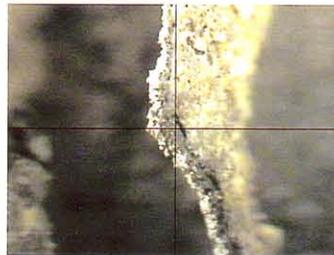
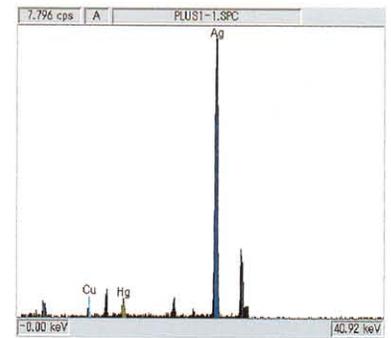
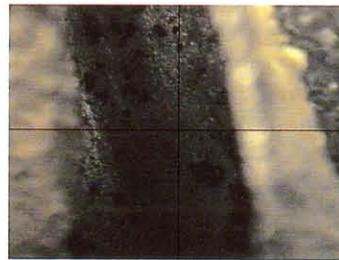
自然科学分析



处理前 12

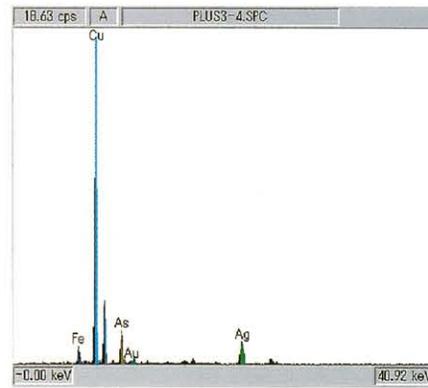
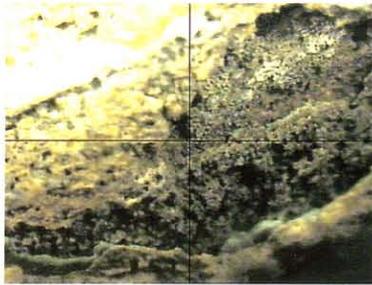
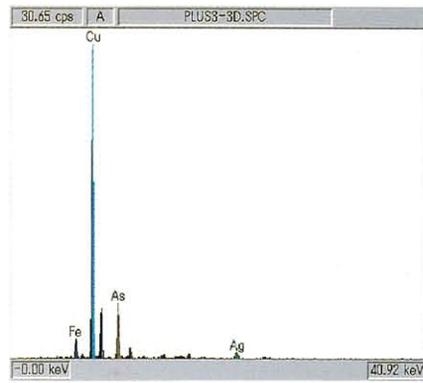
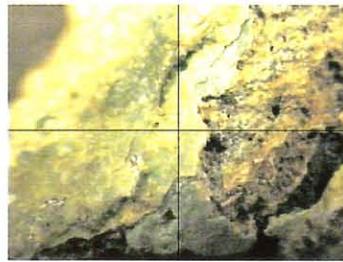


处理后 12

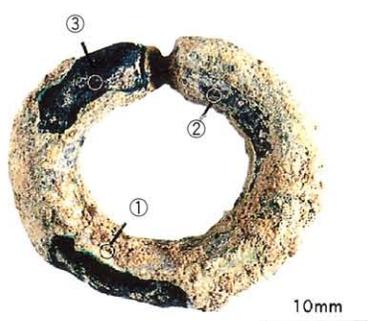


第125图 耳環顕微鏡写真 (14)

耳環分析



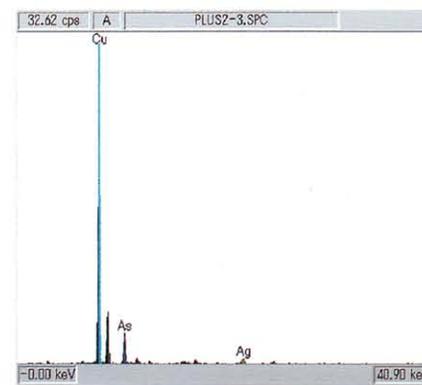
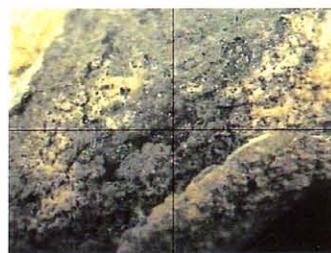
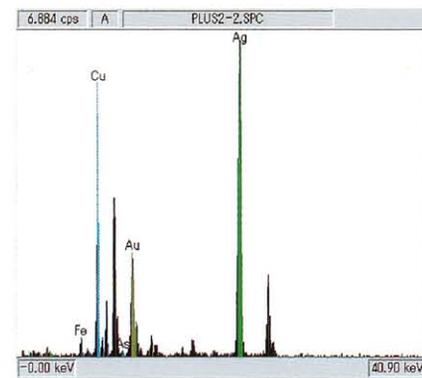
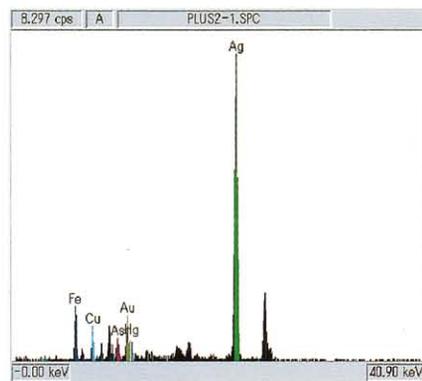
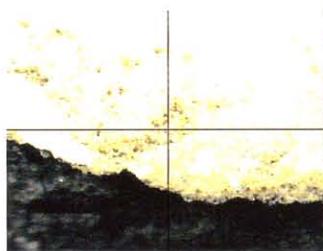
第126図 耳環頭微鏡写真 (15)



处理前 13

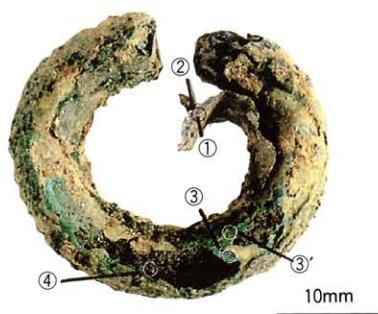


处理后 13



第127图 耳環顕微鏡写真 (16)

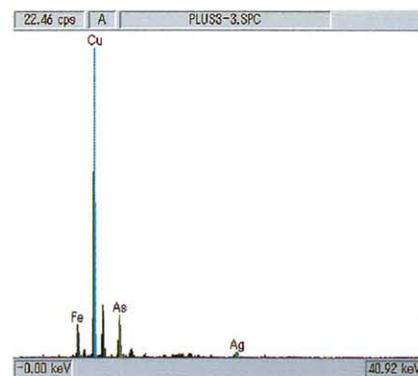
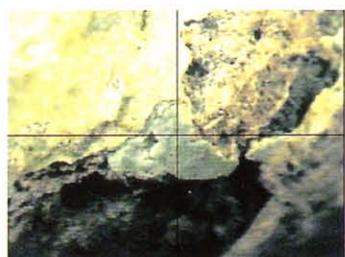
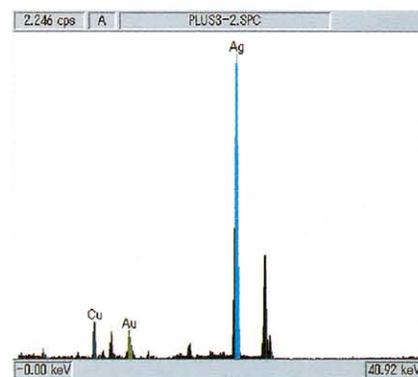
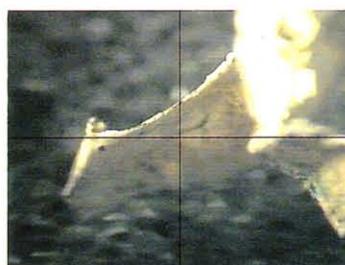
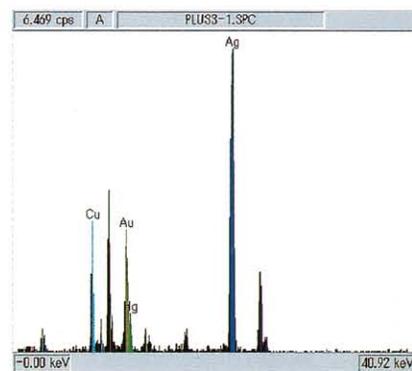
耳環分析



処理前 14



処理後 14



第128図 耳環顕微鏡写真 (17)

5. 大池東5号墳出土の赤色顔料

本 田 光 子

〔1〕はじめに

愛媛県松山市南江戸所在大池東5号古墳の主体部内出土赤色物及び周溝内土器に付着の赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察および蛍光X線分析を行った。

墳墓出土例に関する知見に寄れば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

調査結果は表40に示した通りであり、赤色物は朱であった。

〔2〕試料

依頼を受けた資料は主体部床面に残存した赤色物の混じった土と、周溝内から出土した土器の内面に付着残存した赤色物である。実体顕微鏡下で各資料を観察し、No 1～4については赤色に見える部分を出来る限り調整（混入土砂等の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を採り検鏡用に、残りを研和して蛍光X線分析に供した。赤色物の量は少量であり、赤色物だけからなる小塊も少ない。そのため、X線分析試料には土砂がかなり含まれている。No 5の土器片については、そのままの状態、実体顕微鏡による観察と蛍光X線分析を行い、検鏡用に針先に付く程度の量の赤色物を採った。

試料の一覧と分析結果を表40に示す。

〔3〕顕微鏡観察

顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。

三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢・透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる。ベンガラ粒子は、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観を持ち一様でないが、出土ベンガラには透明な管状（パイプ）粒子を含む例がある。

今回の試料には、赤色顔料としては全試料に朱粒子を認め、ベンガラ粒子は認められなかった。

〔4〕蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。

堀場製作所（株）製 MESA-500を用い、15 kV-440 μA : 50秒、50 kV-20 μA : 50秒、真空の条件で行った。

主成分元素としては、No 1～5に水銀、硫黄、鉄が検出された。他には珪素が検出されたが、鉛は検出されなかった。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有

赤 色 顔 料

無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂や土器胎土部分に由来すると考えられるので表中では省略した。但し、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

〔5〕 結 果

検鏡で朱、蛍光X線分析で水銀と微量の鉄が検出されたものを朱とした。蛍光X線分析で鉄、水銀が検出されたものは、二元素の蛍光X線強度と検鏡結果（ベンガラの有無）から、朱だけのものと朱とベンガラの両者からなるものとの区別を行うが、今回の試料では、ベンガラは確認できず、蛍光X線強度からもベンガラが含有されている可能性は低い。

表40 試料一覧と分析結果

No	試料採取位置	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の種類
		ベンガラ	朱	鉄	水銀	
1	主体部	—	+	+	+	朱
2	主体部No 2	—	+	+	+	朱
3	主体部No 5	—	+	+	+	朱
4	主体部No 7	—	+	+	+	朱
5	周溝内土器	—	+	+	+	朱

〔6〕 考 察

以上の結果から大池東5号墳の主体部床面出土赤色物および、土器内面の赤色物はすべて朱であった。

弥生時代から古墳時代の墳墓出土赤色顔料の種類と使われ方は、床面から朱だけが出土するもの、朱とベンガラの両方が出土するもの、ベンガラだけが出土するものの3種類がある。前期古墳では頭胸部を中心とする遺骸には朱を、埋葬施設内面にはベンガラを用いる「朱とベンガラの使い分け」が最も典型的な在り方である。

大池東5号墳では、朱だけが検出され、例えば木棺の両小口の石材には赤色物は認められていない。木棺自体は腐朽しているため、今回検出された赤色顔料が木棺内面に塗布されていたのかどうかの判断は困難かもしれないが、赤色顔料の残存状況に濃淡が認められる事からも遺骸そのものに施されていたものと考えられる。特に赤色が強い部分が頭胸部と推定される。使用されていた赤色顔料は朱だけであるが、これは、木棺という埋葬施設の構造にも起因するかもしれない。ベンガラは石室、石棺の壁面に塗布されるもので、現在までの分析報告では、木棺にベンガラを塗布した例はないようである。周溝内出土の土器内面に朱が残存しているが、今回の分析では、主体部出土朱と、この土器内朱が同一物であるかどうかは不明である。この土器が、朱の貯蔵容器である「朱壺」であるか、何らかの儀礼に用いられた「内面朱付着土器」であるのか、これもまた、今回の分析では不明である。

大池東5号墳での赤色顔料の在り方は、古墳時代の赤色顔料、赤色顔料を用いた葬送儀礼を考える上で、非常に貴重な資料であり、今後も検討を重ねたい。

第10章 ま と め

本調査では、古墳を1区から1基（大池東1号墳）、4A区から1基（客谷10号墳）、4B区から3基（大池東2・3・4号墳）、4C区から1基（大池東5号墳）の計6基を検出した。

ここでは、古墳の構築方法、出土遺物、時期と変遷について考える。以下、調査成果を項目別に記述する。

1. 墳丘の構築方法

墳形は大池東1号墳～4号墳が円形、5号墳は方形であり、客谷10号墳は削平を受け墳形が確定できなかった。主体部施設は大池東1・2号墳と客谷10号墳は横穴式石室、大池東3・4・5号墳は木棺直葬であった。また、墳丘の構築方法が調査できたのは5基（大池東1～5号墳）で、その構築方法は地山整形の差により二つに分けられる。一つは地山整形を行うもので（1・2・5号墳）、もう一つは地山整形を行わない（3・4号墳）ものである。

1) 地山整形を行う古墳

1号墳・2号墳は、傾斜地に立地するため、初めに地山をL字状にカットし、一旦平坦面を作る。次に墓壙を掘り、墳丘基底部には黒色の堅い土を敷く。つづいて、墳丘の外側から内にむかって盛土を積み上げる。（墓壙基底部の高さまで盛土をする。）

5号墳は尾根上に立地するため、初めに尾根線をカットし平坦面を作る。次に黒色の硬い土を盛り、順次裾部から盛土を行い築造面を水平にする。その後に墓壙を掘る。1号墳・5号墳の地山直上の黒色土からは、科学分析により植物珪酸体密度が極めて高い数値を示しており、ネザサ節などの茎葉を敷いたと考えられる。一方、基底部の構築方法は詳細に調査されておらず、今後の調査によって検証しなければいけない。

2) 地山整形を行わない古墳

3号墳・4号墳は緩やかな尾根上に立地する。当時の表土の上に盛土を行い構築するもので、旧表土が黒色層として残る。

このように本調査では、二つの構築方法を検出するにいたった。構築方法の違いは、時期的なものか、地形的なものかは今後の調査で解明したい。

2. 遺 物

古墳6基からは須恵器、土師器、埴輪、鉄器、耳環、ガラス玉が出土した。

5号墳では主体部から鉄剣、鉄鏃、鈍、ガラス玉と土師器片が周溝から出土した。周溝出土の土師器片の内面には赤色顔料の付着がみられる。赤色顔料は科学的分析の結果、水銀朱であった。

3号墳、4号墳の周溝からは須恵器、土師器、埴輪、鉄刀、鋤先が出土している。埴輪は、円筒埴輪以外に松山平野では出土例の少ない朝顔形埴輪、楕円形埴輪、人物埴輪が出土し、埴輪研究を行う上での貴重な資料である。また、4号墳からは太刀が2点出土しているが、一墳丘から2点もの太刀が出土した例は平野でも類がない。なお、3号墳周溝内土坑出土の高坏内と土坑内埋土を科学的分析を行い、イネの珪酸体を検出したが分析方法に問題があった。

2号墳からは須恵器、土師器、鉄鏃、小刀、刀子、鏝、鏝金具、耳環が出土している。このうち、刃先が曲がっている刀子と、鏝・鏝金具は出土が少なく興味深い。

ま と め

1号墳からは須恵器、土師器、鉄剣、鉄鏃、耳環、材質の異なる玉が出土している。1号墳からは完形品の須恵器や耳環10点が数多く出土しており、遺存景より未盗掘の可能性が高く、埋葬時の土器と鉄器の組合わせを現わした良好な資料である。また、耳環は非破壊での元素の同定分析を行い、元素の検出量と製作方法から一対になる耳環の検証が可能となってきた。

2号石室から出土した炭化材の年代測定からは、AD260年の結果が得られた。しかし古墳築造年代とは掛離れている。これは、資料が大木の中心部分であればこのような結果になり、炭化材と古墳の年代は必しも同一ではない。

3. 時期と変遷

本調査で検出した古墳の時期は、出土した遺物からすると、大池東1号墳は6世紀末～7世紀初頭、2号墳は6世紀後半、3号墳は6世紀初頭、4号墳は5世紀末～6世紀初頭となり、5号墳は土器の出土がないため主体部構造から前期古墳と考える。

そして、古墳の時期と立地との関係を見ると、最も古い古墳時代前期の大池東5号墳は、丘陵部の一番高い位置にあり、次の5世紀末～6世紀初頭の大池東3・4号墳は、5号墳より下った支丘陵上に立地している。つづく6世紀後半の大池東2号墳は、4号墳より下った斜面にあり、6世紀末～7世紀初頭の大池東1号墳は、3・4号墳よりもやや下った丘陵裾部の斜面に立地しているのである。

よって、大池東1号墳から5号墳はその位置より同一集団（系列）の墳墓とみてよく、さらに古墳は同一丘陵の高所から順次低所にむけて築造されていったものと推測できる。

3号墳の土器内と土坑内埋土からは、イネの植物珪酸体が検出された。

4. 位置付け

ここでは大峰ヶ台遺跡1次～9次で検出した古墳を概観し、本調査で確認した6基の古墳について位置付けを行いたい。

大峰ヶ台ではこれまでに本格に調査された古墳は、前期から終末期までの17基である。墳形には円墳13基、楕円墳2基、方墳1基、前方後円墳1基があり、主体部には横穴式石室10基、竪穴式小石室3基、木棺4基、不明2基がある。

前期古墳は、朝日谷2号墳と本調査大池東5号墳の2基があり、いずれも丘陵尾根上に立地している。朝日谷2号墳は前方後円墳でA・B、二つの主体部をもつ。主体部には赤色顔料が検出され、出土遺物には鏡2面、銅鏃、鉄鏃、剣等、多数の副葬品がある。

一方、大池東5号墳は方墳で、主体部からは赤色顔料を検出している。出土遺物には鉄剣、鉄鏃、鈍、ガラス玉がある。

中期古墳は、大池東3・4号墳の2基である。両墳は丘陵中腹の尾根上にあり、墳形は円墳である。主体部は木棺直葬と考えられる。周溝からは多数の埴輪が出土している。

後期古墳は、14基がある。立地は朝日谷1号墳が尾根中腹、客谷9号・10号墳は谷部、他は丘陵裾部に位置する。墳形は円墳で、主体部は横穴式石室である。

上記の17基の内、朝日谷1号・2号以外の15基は大峰ヶ台西丘陵にある。大峰ヶ台西丘陵には、大池東古墳群と客谷古墳群があり、丘陵裾部と頂上北側で調査が行われている。調査結果、前期古墳は頂上部、中期古墳は中腹部、後期古墳は裾部に構築する事が、明らかになってきた。今後調査が行われていない頂上部南側の調査が進めば、より一層時期と立地の関係は明確になるであろう。

大峰ヶ台遺跡9次調査

表41 大峰ヶ台丘陵の発掘調査古墳一覧表

遺跡名	遺構名	立地	標高 m	時期	墳		周溝	主体部	玄室及び木棺				羨道		墓道 検出数 本	出土 主 体 部		遺 物		開口 方向	備 考		
					墳形	規模 m			規模 m	敷石	玉石	趾床	仕切	袖		規模 m	須惠器 本	須惠器・土師器・鉄器・玉	須惠器			須惠器・埴輪・土師器	
大峰ヶ台9次	大地東1号墳	斜面裾	27	終末	円	22	○	横穴石室	4.8×1.8	○	○	○	○	2.3	2	刀子・耳環・玉	須惠器	埴輪	南	小石室・排水溝			
	大地東2号墳	斜面	35	末	円		○	横穴石室	2.2×1.9	○	○	○			0	太刀・刀子・耳環			南	土坑			
	大地東3号墳	丘陵中腹	52.5	5後	円	11	○	木棺?							0	太刀		須惠器・埴輪・土師器		土坑			
	大地東4号墳	丘陵中腹	52.5	5後	円	13	○	木棺?							0								
	大地東5号墳	丘陵頂上	88.5	前期	方	13	○	木棺	4.7×1.4						0	鉄剣・鉄鏃・玉	土師器片	土師器片				赤色顔料・排水施設?	
	客谷10号墳	斜面	70.8	後期前				竪穴小石室	1.4×1.3						0								
	客谷1号墳	斜面裾	35.2	後期	円	15	○								0				須惠器				
	客谷2号墳	斜面裾	34.6	後期	円	11	○	横穴石室	3.1×1.1	○	○				0	玉			須惠器		南西		
	客谷3号墳	斜面裾	31.8	後期	円	3.6	○	竪穴小石室	1.2×0.6	○					0	須惠器							
	客谷4号墳A	斜面裾	34.8	後期	楕円	16	○	横穴石室	3.5×1.3	○					0	須惠器・土師器・鉄器・耳環・玉			須惠器		南東		
客谷4号墳B	斜面裾	34.8	後期	楕円	16	○	竪穴小石室	0.8×0.3		○				0	須惠器・鉄器			須惠器					
客谷5号墳	斜面裾	35.8	後期	円	12	○								0				須惠器					
客谷6号墳A	斜面裾	31.6	後期	円	11	○	横穴石室	2.5×1.0						0	鉄器・玉			須惠器・土師器		西			
客谷6号墳B			後期	円			横穴石室	(2.3)×(1.0)						0	須惠器・鉄器・玉					西			
客谷7号墳	斜面裾	33	後期	円	7	○	竪穴小石室	1.4×0.8						0	須惠器								
客谷8号墳	谷部	65	6後葉	円	径17	○	横穴石室	3.9×1.9	○	○	○		2.0×1.4	0	須惠器・鉄器・耳環・玉			須惠器		南西	N33° E		
客谷9号墳A	谷部	70	6後葉	円	径15	○	横穴石室	3.0×1.8	○	○	○		1.7×0.9	0	須惠器・鉄器・耳環・玉			須惠器		南	N2° W・骨		
客谷9号墳B			6後葉	円			横穴石室	2.7×1.2	○	○	○		1.1×1.1	0	須惠器・土師器・玉					南	N2° E		
大峰ヶ台7次	期日谷1号墳	尾根	62	6後葉~	楕円	長径7 短径5	横穴石室	2.5×1.1	○	○	○		2.0×0.8	0	須惠器・土師器・鉄器・玉						南	棺台・N60° E・骨	
	期日谷2号墳	尾根	69.6	前期	楕円	全長25.5 後門16.4	木棺	4.4×0.82						0	鏡・銅・鉄鏃・鉄器・玉	土師器							

※ 開口方向…石室については開口、竪穴小石室及び木棺は頭位をします。
※ 客谷9・10号は本報告では客谷B地区1・2号と報告されている。

写 真 图 版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、調査担当者及び大西朋子が行い、大峰ヶ台遺跡9次調査は高所作業車・建築用やぐらを用いた。

使用機材：

カメラ トヨフィールド45A レンズ スーパーアングュロン 90mm他
アサヒペンタックス67 ペンタックス67 55mm他
ニコンニューFM2 ズームニッコール 28～85mm他
フィルム プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュー45G レンズ ジンマーS240mm
ストロボ コメット/CA-32 2灯・CB2400 (バンク使用)
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム プラスXパン

3. 白黒写真の現像・焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

使用機材：

引伸機 ラッキー450MD レンズ エル・ニッコール135mm
ラッキー90MS エル・ニッコール50mm
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC
フィルム現像剤 コダックD-76・HC110

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1～8

[大西 朋子]

1 区 の 調 査



1. 1区調査前1 (南西より)



2. 1区調査前2 (西より)



1. 大池東1号墳調査前（北西より）



2. 大池東1号墳表土剥状況（南西より）

1 区 の 調 査



1. 大池東1号墳1号石室完掘状況(南より)



2. 大池東1号墳東側盛土状況(南より)



1. 大池東1号墳西側盛土状況 (南西より)

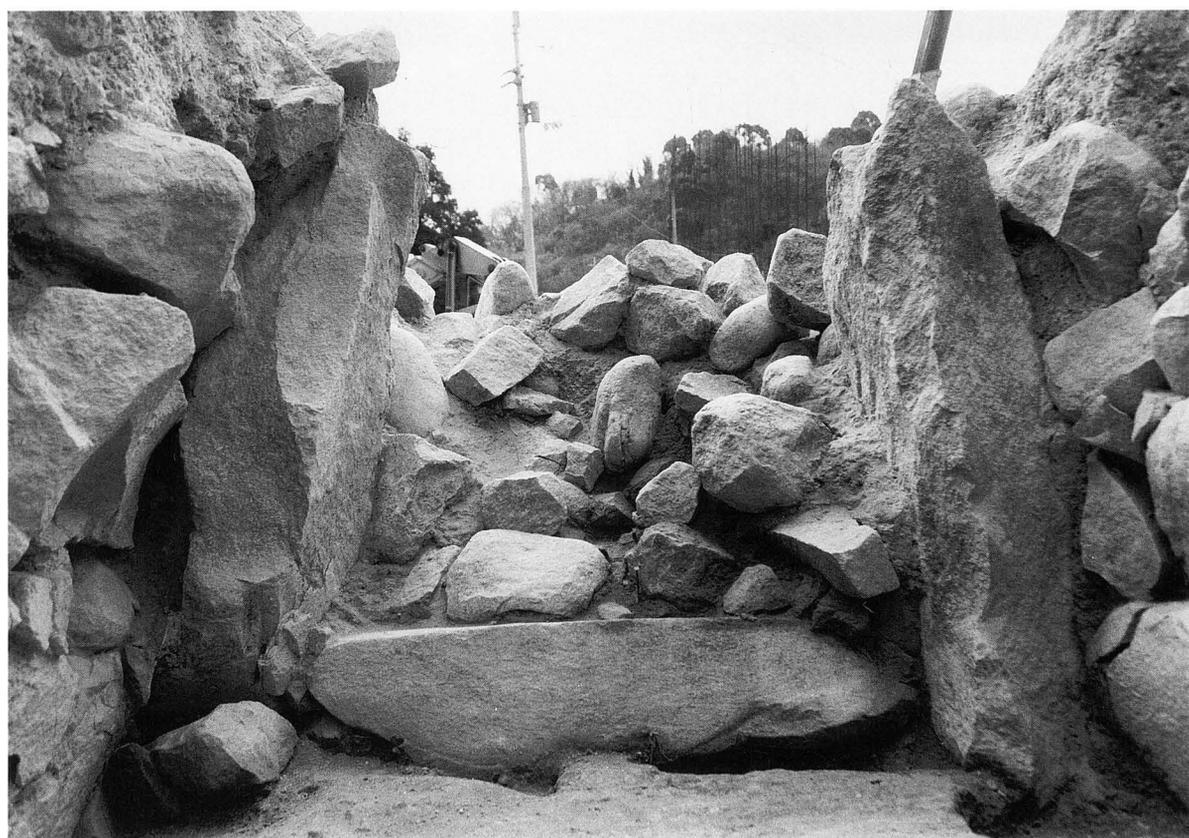


2. 大池東1号墳1号石室墓道検出状況 (南より)

1 区 の 調 査



1. 大池東1号墳1号石室閉塞石1 (南上より)



2. 大池東1号墳1号石室閉塞石2 (玄室より)



1. 大池東1号墳1号石室排水溝1 (南より)



1. 大池東1号墳1号石室排水溝2 (南上より)



1. 大池東1号墳1号石室遺物出土状況1 (南より)



2. 大池東1号墳1号石室遺物出土状況2 (北より)

1 区 の 調 査



1. 大池東1号墳1号石室奥壁状況(南より)



2. 大池東1号墳2号石室完掘状況(南より)